

---

# とある魔術のなのは

六甲水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術のなのは

### 【Nコード】

N9244N

### 【作者名】

六甲水

### 【あらすじ】

ある日、上条当麻とインデックスが謎の空間に巻き込まれ、そこは見知らぬ土地だった。そして、出会う一人の少女…なのはとあるのコラボです

プロローグ(前書き)

六甲水「やちやった」

当麻「やっちゃたって」

## プロローグ

### プロローグ

それは、一人の少年が何かのために戦う少女たちとの出会いの物語  
上条当麻は、嘆いていた。今日も何もいい事がなかったと…

当麻「だあああ、不幸だ。だけど、これ以上不幸なことは起きない  
な、うん」

インデックス「分からないよ、当麻の不幸は底なしだから」

当麻「るせえ、」

だが、そのインデックスの予感が当たった。不意に現れた魔法陣に  
当麻とインデックスは飲み込まれてしまった。

フェイトとアルフは驚いていた。少し前に大きな音がして、ジュエ  
ルシードと思い駆けつけてみると、そこには一人の少年が倒れてい  
た。

フェイト「どうしよう、大丈夫かな？」

アルフ「管理局の奴じゃないみたいだから、一応保護してやるっ」

### フェイトの部屋

当麻「ん、ここは…」

当麻は目覚めるとそこは見られない場所だった。見るからに高級そうな部屋だった。窓から見える景色を見ると学園都市とはかけ離れた景色だった。

当麻「確か、変な空間に巻き込まれて…インデックスは？くそ、一体ここは…」

当麻は考え込んでいると、部屋の奥から物音がし、気になって向かってみるとちょうどよく、風呂場から上がって着替え中の金髪の少女がいた。少女は当麻を見て、しばらく見つめ合っていた。そして、少女の顔がダンダンと真っ赤になり、

当麻「あゝ、えっと、これはいわゆる事故でして、」

フェイト「きゃあああああああああああ」

いきなり、黒い斧を取り出して、雷を食らった当麻は再び眠りについた。

それから数分後

フェイト「えっと、ごめんなさい。つい、魔法撃っちゃって、」

金髪の少女は、真っ赤にしながら当麻に喋りかけた。

当麻「いや、俺もやられて当然だったし、てか、君はえっと、」

フェイト「あ、自己紹介まだでしたね。私はフェイト・テストロッ

サ。今いないけど使い魔のアルフと一緒にすんでいます」

当麻「俺は、上条当麻、ここは学園都市だよな？」

当麻の何気ない質問に、フェイトは首を傾げた

当麻「じゃあ、ここは、学園都市とは別の…はあ、何つう不幸だ。」

フェイト「あの、当麻はもしかして、別の世界から来たんですか？」

当麻「まあ、多分な。えっと、フェイトは魔法使いだっけ？」

フェイト「はい、少し、捜し物していて、母さんが必要だって…」

当麻「捜し物が、よし、元の世界に帰る手がかりになるかもしれないから手伝わせてくれ」

フェイト「え、でも危険だよ」

当麻「安心しろ。危険なことは一杯やってきたから。あと、何か小さいシスターも探してるんだ。そいつも探さないよ」

フェイト「分かった、」

## プロローグ（後書き）

六甲水「早速当麻の不幸が発動ですね」

## 第1話 出会う二人（前書き）

六甲水「はい、今回はフェイトとなのはが出会うところまでです」

フェイト「それと当麻の幻想殺しの説明だね」



## 第1話 出会う二人

### 第1話 出会う二人

当麻は、しばらくフェイトの家で世話になることになって、ソファで眠っていた。

フェイト「あの、当麻、朝ですよ。」

フェイトと隣にアルフと言う使い魔がいた。アルフは昨日帰ってきたとき、軽く自己紹介をして何故か気に入られている。

アルフ「まあ、昨日寝るの遅かったし、無理に起こす必要ないんじゃないの?。」

フェイト「だめだよ。ちゃんと起こしてあげなきゃ、当麻、ご飯できてるよ。」

当麻「うーん、何だよインデックス、さっきご飯食べたばかりだろ。」

寝ぼけた当麻は、フェイトのお尻に触れ、再び魔法を食らった。

当麻「ぎゃあああああああああああああああああああ」

当麻「いくら、起こすからって魔法使って起こさないでくれ。」

フェイト「えっと、ごめんなさい。」

フェイトは真つ赤になって謝っていた。当麻はフェイトのお尻に触ったことを知らなかった。アルフはふつと気がついた。

アルフ「ねえ、当麻の右手、何で汚れてないの？」

当麻の体は右手以外は真つ黒に焦げていた。フェイトも確かにと疑問を浮かべていた。当麻は頭を掻きながら…

当麻「俺の右手は幻想殺しつつて、どんな異能の力も消しちゃうんだ」

フェイト「消しちゃうって、魔法も、」

当麻「ああ、つつても右手だけで他は普通の人間だ」

フェイト「そうなんだ。ほら、ご飯たべよう」

そう言つて、出されたのはインスタントラーメンだった。フェイトは美味しそうに食べていたが、当麻は

当麻「お前、いつもインスタントか？」

フェイト「うん、おいしいよ」

当麻「お前、何歳だっけ？」

フェイト「え、九歳だけど」

当麻「はあ、成長期の女の子がインスタントばっかだと、成長しな

いぞ。アルフも、ドッグフード食べるな。何か可哀想に見えてきた」  
そう言っつて、当麻は台所の冷蔵庫を見ると空っぽだった。

当麻「はあ、今日、買い物に行くか。フェイトこれからの予定は？」

フェイト「え、とりあえず、捜し物を…」

当麻「分かった。俺はちつと、行けそうにないから、頑張っつて探してこい」

その頃、インデックスは…

栗色の女の子、高町なのはと一緒に友達の家に行った。少し前に、なのはの家の前で気絶していたインデックスを保護して、こちらでも居候となつていた。

インデックス「へえ、大きな家だね」

なのは「うん、すずかちゃんの家はお金持ちだから…そういえば、上条さんどこにいるんだらうね」

インデックス「当麻も、こつちの世界にいますとおもっただけど…」

すずか「あれ、なのはちゃん、その人がなのはちゃんの家ホームステイしているインデックスさんだっけ」

インデックス「うん、インデックスです。偽名とかじゃないから」

アリサ「？」

ユーノ（なのは、魔力反応、多分ジュエルシードだよ。）

なのは（わかった、）

ユーノはとっさに茂みの中に隠れ、なのははユーノを追いかけた。インデックスはバクバクとケーキを食べていた。

なのは「ユーノ君、魔力反応は？」

ユーノ「近いよ、あれだ。」

なのは達が見たのは、大きくなった猫だった。

なのは「ねえ、あれはなに？」

ユーノ「た、多分大きくなりたいという夢が叶ってあんな感じに」

なのは「可哀相だけど、早くジュエルシード回収しちゃう。」

なのはが、レイジングハートを構えたとき、金髪の少女が現れた。

なのは「え、魔道士」

ユーノ「一体」

フェイト「ジュエルシード、それに私と同じ魔道士」

## 第1話 出会う二人（後書き）

六甲水「というか、当麻は変態だね。フェイトの裸を見るわ、おしりを触るわ」

当麻「裸はしょうがないとして、おしりを触ったのは覚えが無いぞ」

六甲水「次回は、初バトルと当麻のりょうりについてだ」

## 第2話 最初の邂逅（前書き）

六甲水「第2話ですね」

なのは「あゝ、私の出番はあるの?」

六甲水「まああるけど、比較的当麻とフェイトが中心かな」

## 第2話 最初の邂逅

### 第2話 最初の邂逅

ユーノ「まさか、僕同じ世界から来た魔道士!？」

フェイトを見てユーノは驚いた。

なのは「じゃあ、狙いはジュエルシード」

フェイトは木の上に着地した。

なのは達は木の上に立ってるフェイトを見つめた。

フェイトの持つバルディッシュが鎌のような形になる。

フェイト「申し訳ないけど、頂いていきます」

フェイトはバルディッシュを構えて、なのはに襲い掛かる。

ユーノ「なのは!」

ユーノが叫ぶ。

バルディッシュの刃がなのはに迫る。なのは障壁を出して防ごうとしたが、間に合わず、攻撃を食らい地面に倒れてしまった。

フェイト「…ごめんね、」

フェイトは大きくなった猫に魔砲を当て、ジュエルシードを回収した。フツと、倒れたなのはの方を見ると、そこには白い小さなシスターがいた。

インデックス「なのは、大丈夫？」

ユーノ「インデックス、なんでここに」

いきなり、草むらから現れたインデックスは、倒れたなのはとユーノの元に駆け寄った。

インデックス「魔力感じて、こっちに来ただけど、なのは大丈夫」

なのは「う、うん、何とか、」

フェイトはその光景を空の上で見ている。

フェイト（あの人、もしかして、当麻が言ってた小さいシスターさん？あとで当麻に教えてあげよう）

夕方、フェイトは自分の家で当麻の帰りをアルフと一緒に待っていると、当麻が大きな買い物袋を抱えて、帰ってきた。

当麻「うへへ、疲れた」

フェイト「おかえり当麻。何か一杯買ってきたみたいだけど…」

買い物袋のなかは、食材に日用品などがたくさん入っていた。

当麻「一応、俺の日用品とか買ってきたんだよ。いつまでおんなじ格好だと嫌だし」

フェイト「そうだね、いつまでここに居るか分からないし、そうい



えば、当麻が言っていたシスターさんがいたよ」

当麻は驚き、フェイトの肩をつかんだ。フェイトは急に肩を掴まれビククリしていた。

当麻「マジか、アイツどうしてた？」

フェイト「その、捜し物している時に、同じ魔道師の娘と一緒にいたんだけど、声を掛けづらかった。」

当麻「そうか、まあ、フェイトと同じ魔道師と一緒にいるからとりあえず大丈夫だろ。」

当麻は安堵した表情して、台所に入っていた。

フェイト「あの、当麻はその娘のところ行かなくていいの？」

当麻「ん、ああ、まだフェイトの捜し物を一緒に探すって約束果たしてないし、それにお前ほっとくと栄養に悪いものばかり食べそっうだからな、」

フェイト「何だか当麻、私のお兄さんっぽい」

当麻「ほら、あんま変な事言っでないで、作るの手伝え」

フェイト「う、うん、」

数分後、当麻達はリビングで食事を取っていた。

アルフ「当麻、お前料理出来たんだな」

アルフは驚い風に言った。フェイトも予想していたよりも美味しくってビックリしていた。

当麻「ん、まあ、一人暮らしたたから家事ぐらいはできるけど、フェイトは？」

当麻の質問に少し戸惑いながら答えた。

フェイト「えっと、あまり、」

当麻「じゃあ、今度教えてやるよ。」

アルフ「じゃあ、私、味見するよ」

アルフは嬉しそうに当麻とフェイトに抱きついてきた。当麻は少し焦り、フェイトは少し嬉しそうだった。

## 第2話 最初の邂逅（後書き）

六甲水「いやあ、当麻はフェイトのお兄ちゃんだね」

当麻「というか、設定的にはフェイトはあまり料理ができないんじゃないかと、それなりに出来るんじゃないのか？」

六甲水「細かいことは気にしない」

### 第3話温泉旅行（前書き）

六甲水「今回は温泉での話です」

当麻「頼むから温泉に飛び込んでしまつ話はやめてくれ」

### 第3話温泉旅行

#### 第3話 温泉旅行

当麻とフェイトとアルフは、海鳴温泉に来ていた。何故ここに来て  
いるかと言うとこの近くにジュエルシードの反応があったらしいか  
らである。当麻はいつもの制服ではなく、先日買ったTシャツと  
ズボンを穿いていた。

当麻「それにしても、温泉か。結構久しぶりかも」

フェイト「そうなんだ。」

当麻「俺、入ってきちまうから、フェイトは部屋で待ってる。あと  
出来ればアルフを慰めてやれ。」

フェイト「分かった。やっぱりショックだったんだろっね」

当麻「ああ、」

それは、部屋を取るために、受付の人に

受付「あら、お嬢ちゃん、お兄さんとお母さんといっしょに来たの  
？」

と言われてしまい、アルフが凄いショックを受けてしまった。

フェイト「でも、やっぱり、他の人から見たら家族に見えるのかな  
？」

当麻「うーん、そうなんじゃないの？」

フェイト何だか、悲しそうだった。きつと、フェイトは母親とはあんまり上手く行ってないのだろうと思った。今度、フェイトに頼んでフェイトの母親に会ってみよう。そう思い、当麻は浴場に向かった。

インデックス「わあ、温泉だよ、温泉だよ、私初めて」

女湯のほうでは、なのは達もいた。ユーノは一人落ち着かなかった。

ユーノ（あの、なのは、やっぱり、僕士郎さんと一緒の方に…）

なのは（ええ〜、一緒に入ろうよ）

ユーノ（いや、ほら、だって、）

ふいに、ユーノがアリサに掴まれた。

アリサ「さーて、ユーノ、ピカピカにしてあげるからね」

ユーノ「きゅ、きゅ、きゅ〜」

なのは「ユーノ君どうしたんだろう？」

男湯の方では、当麻と士郎達が出会っていた。

士郎「おや、君も家族旅行かい？」

当麻「あ、はい、そんな所です。」

恭弥「俺たちも家族旅行で来てるんだ。俺は高町恭弥」

士郎「高町士郎だ。」

当麻「上条当麻です。」

何だかんだで仲良くなっていた。

### 第3話温泉旅行（後書き）

六甲水「まあ、土郎達と仲良くなったけど、話に関係ないです」

当麻「じゃあ、何で」

六甲水「えっ、なんとなくかな」



## 第4話ぶつかるとの思い（前書き）

六甲水「当麻となのはの初対面です」

## 第4話 ぶつかる思い

### 第4話 ぶつかる思い

当麻が風呂に上がり、泊まっている部屋に戻ろうとしていると、アルフがフェイトと同じぐらいの少女達と喋っていた。見た感じアルフがいじめているように見えた。当麻は頭を掻きながら近づいた。

当麻「おい、いい年して小学生いじめてるんじゃないよ」

アルフ「な、当麻、こ、これは違うんだよ。」

当麻「悪いな、こいつに変なこと言われなかったか？」

なのは「い、いえ、特には、」

当麻「ほら、行くぞ、」

そう言っつて、アルフの服をつかみ、引きずりながら部屋に戻ろうとするとなのはに呼び止められた。

なのは「あの、名前教えてください」

当麻「上条当麻だけど…」

なのは「わたし、高町なのはって言います。」

当麻「あ、ああ、それじゃあ」

立ち去る当麻の後ろ姿を見つめ、なのは呟いた。

なのは「上条当麻さんか…もしかして」

部屋に戻った当麻は、アルフを正座させて説教をしていた。ちなみにフェイトは散歩中だった。

当麻「お前、いくら、受付の人にフェイトのお母さんに見られて、自分がすごく老けてるんじゃないのかって落ち込んでいても、知らない人に八つ当たりしてるんじゃないよ」

アルフ「いや、アレは違うんだよ。」

当麻「ちがうって、泣きそうだったぞ。弱い者いじめしてんじゃないえ」

アルフ「いや、話し聞いてよ。あの子は、前言ってたジュエルシード集めてる魔道師なんだよ」

当麻「マジか、」

当麻は驚いていた、フェイトとそう変わらない少女がフェイトと同じ魔道師だったなんて…あれ？その魔道師がここにいるってことは…

当麻「インデックスもここにいるのかよ。ちっと、探してくる」

そう言って、部屋を飛び出した当麻。アルフは一人部屋に残された。

インデックス「え、当麻がここにいるの？」

なのはとユーノとインデックスは、旅館の広場で当麻にあったことを話していた。

なのは「うん、さつき変な女の人に絡まれてたところを助けてもらったんだけど、黒髪でツンツン頭の人だよな」

インデックス「うん、そだよ。私会ってくる。」

なのは「あ、インデックスさん」

アルフは一人、部屋に残されていて、昼寝をしようと思っていると、いきなり、白い修道服の少女が入ってきた。

インデックス「とうま、当麻はどこ？」

アルフ「あ、おい、いきなり、入ってくるな。」

インデックス「ねえ、当麻どこにいるの？」

アルフ「当麻、あいつは今散歩でいないよ」

インデックス「どこに、行ったか知ってるの？」

アルフ「多分、ここらへん散歩してるから、探せばいるよ。ほら、出てった。」

アルフは、インデックスを追い出し、昼寝しようとするど、フッと

ある事を思い出した。当麻が探している少女のことを…

アルフ「やば、もしかしてあいつ、当麻が探してる奴じゃ…」

当麻は、インデックスを探しているうちに、近くの森の中に入ってしまった。

当麻「まさか、こんな所にいる訳ないか。早く部屋に…あれ？」

フツと木上を見ると、フェイトが木上に立っていた。

当麻「おい、フェイト、そんな所登ってる落ちるぞ。」

当麻に気がついたフェイトは、木上から降り、当麻の隣に来た。

当麻「なんか、見つけたのか？」

フェイト「うん、ジュエルシードを見つけたの。私行ってくる」

当麻「あ、俺も行く。」

フェイト「え、でも、危ないよ。ここは私とアルフで…」

当麻「一回、ジュエルシードつうのを見てみたいんだよ。それにお前があつた魔道師の娘も来そうだからな、インデックスも一緒にいるかも知れないし」

フェイト「…分かった。でも、当麻は離れていて」

アルフ「当麻、」

当麻「ん、どうした？」

アルフ「あなたの知り合いがあんたが部屋を出てきて数分してから来たんだけど、直ぐにどっか行っちゃた。」

当麻「うわ、すれ違いかよ。はあしょうがないか」

フェイト「アルフ、ジュエルシード見つけたから行くよ」

アルフ「おう、」

アルフが返事をする、フェイトはバリアジャケットに着替え、アルフは狼になった。

当麻「うお、お前、そんな姿になれるのかよ」

アルフ「あれ？知らなかったけ。まあいいや。当麻は私の背中に乗って」

フェイトたちは、旅館とはそう遠くない場所にある川に来ていた。

当麻「そういえば、ジュエルシードってどんなのだ？」

フェイト「あれだよ、」

そう言って、フェイトが指さしたところには、川の中で淡く光石があった。フェイトとアルフは封印の準備をしていた。当麻は、少し

離れた場所での様子を見ていた。本当は近くで見えていたかったが、当麻の幻想殺しの所為で封印が上手く行かなくなってしまうと思い、離れていた。

封印作業が問題なく終わった時。

なのは「あ…あれって!」

なのはとユーノがやってきた。

アルフ「あらあら。やっぱり来ちゃったか」

アルフが白々しく言った。

なのはは、少し離れたところにいる当麻に気がついた。

なのは「あの、上条さんですよね。」

当麻「ん、ああ、そうだけど、」

なのは「インデックスさんが心配してます。早く会ってあげてください」

その言葉を聞いて、少しフェイトは悲しそうにしていた。そんなフェイトを見て当麻は…

当麻「なあ、インデックスには悪いけど、今はこいつを一人にしたくないんだ。あとで謝っておいてくれ」

なのは「え、そんな、」

アルフ「断られちゃったよつだから、どうするんだい？このジュエルシードは渡さないよ」

なのははフェイトと向き合った。

なのは「あ…あの…」

なのはが口を開いた。

なのは「話し合いで何とかできないかな？」

フェイトも、なのはを真つ直ぐに見つめる。

フェイト「…私達はジュエルシードを集めなきゃいけない。それは貴女も同じ事。だったら私達はジュエルシードを求めて争う敵同士って事になるね」

なのは「だから！そんな勝手に決めない為に話し合いって必要なんだと思うー！」

フェイトの言葉に、なのはは声を大きくして言った。

フェイトは目を閉じた。

フェイト「言葉だけじゃ…何も変わらない…伝わらない！」

そう言ってフェイトは目を開く。バルディッシュを構えてフェイトは、なのはの背後に回った。

なのは「くっ！」



RH「Flier fin」

なのはは足から翼の様なものを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした。

なのは「けど、だからって!」

フェイト「賭けて。それぞれのジュエルシードを一つずつ」

フェイトも、なのはを追って空を飛ぶ。

ユーノ「なのは!」

アルフ「あなたの相手はあたしだよ!」

なのはを助けようとするユーノにアルフが襲い掛かった。

当麻はなのはとフェイトの戦いを見ていた。

当麻「まさか、あんな子たちがこんな戦いしてるなんて…」

不意に草むらから、音がしてみると、そこからインデックスが現れた。

インデックス「あー、当麻、何でこんな所にいるの?」

当麻「お前こそ、今、あいつら戦ってて危ないぞ。」

インデックス「分かってるけど、あの二人、ジュエルシールドって言うのめぐって戦ってるんだよね。」

当麻「そういえば、ジュエルシールドって何なんだ？ただフェイトが探しているぐらいしか知らなくて、」

インデックス「私、一緒にいるあの大きな犬に襲われてるユーノつて子から聞いたんだけど、何か願いを叶えることが出来るらしいよ。でもとても危険だって」

当麻「…あとで、フェイトに見せてもらうか。」

フェイトと、なのはの空中戦。

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開される。

BD「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる。

RH「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた。

二つの閃光が火花を散らせて激しくぶつかり合う。

なのは「レイジングハート！お願い！！」

RH「All right」

なのはの言葉にレイジングハートが応える。桜色の閃光が更に勢い

を増して金色の閃光を押ししていく。

フェイト「!!」

金色の閃光は桜色の閃光に掻き消された。フェイトは少し表情を強張らせた。

地上で見ていたユーノは驚いた。

ユーノ「なのは…強い!」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった。

アルフ「でも…甘いね」

アルフは勝負の結末を読んだ。

ユーノ「なのは!!」

ユーノが叫ぶ。

なのは「あっ!?!」

なのはの砲撃はフェイトには当たらなかった。

なのはの上空からフェイトは、鎌に変形したバルディッシュを振り下ろす。

なのは「!!」

鎌の刃は、なのはの首筋に当てられた。

勝負は決した。

RH「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシールドが一つ出てきた。

なのは「レイジングハート…何を!？」

フェイト「きつと主人思いの良い子なんだよ」

フェイトはジュエルシールドを受け取ると、地上に着地した。

フェイト「当麻を連れて帰るよ」

アルフ「さっすが、あたしのご主人様」

なのは「待つて!」

なのはも地上に降りる。なのはの声にフェイトは足を止めた。

フェイト「できればもう、私達の前に現れないで。今度会ったら、きつと加減なんて出来ない」

振り向かずに、なのはにそう言った。

なのは「名前…あなたの名前は!？」

フェイト「フェイト。フェイト・テストロツサ」

なのは「わ…私は」

なのはが名前を言おうとして、フェイトは当麻の場所に飛んでいった。

アルフ「ばいばい」

アルフもフェイトに続いた。

フェイト「当麻、」

フェイトは当麻の所に駆け寄るが、隣のインデックスに気がついた。

フェイト「その子が当麻が探してた人か。よかったね。会えて、」

フェイトは少し悲しそうに笑った。アルフも心配そうに見ていた。

フェイト「あとは、その子と一緒に帰るだけだね。少し寂しいけどさよならだね」

当麻はフェイトの頭を軽く小突いた。そして、インデックスの方を向き

当麻「インデックス悪いけど、しばらくあのはって娘の所にいる。俺はまだこいつに料理教えてないんだよ」

フェイト「え、でも、いいの?」

当麻「それに、こいつのこと少しほっとけなくて」

インデックスは、ため息を付いて、呆れた顔で

インデックス「もう、しょうがないな。でも、あんまり無茶しちゃうだめだよ」

フェイト「え、え、」

当麻「ほら、帰るんだろ」

フェイト「う、うん、」

フェイトは戸惑いながら、当麻の手を掴み旅館に戻った。インデックスもフェイトたちを見送り、なのは達のところへ駆け寄った。

#### 第4話ぶつかるとの思い（後書き）

インデックス「ようやく合流できたのに、また別れちゃった」

六甲水「まだ合流するのは早いですから、」

なのは「次の話は市街戦の奴かな？」

六甲水「当麻の幻想殺しが発動するかも」

第5話 譲れない思い（前書き）

六甲水「当麻の幻想殺し発動回です」

当麻「やっと活躍か」

フェイト「それになのはと三回目の戦いだね」



## 第5話 譲れない思い

第5話 譲れない思い

夕方。

アルフは尻尾を揺らしながら、おいしそうにドッグフードを食べている。

アルフ「ん？こっちの世界の食事もなかなか悪くないよね？」

満足したアルフは席を立つ。

アルフ「さて、ウチの姫様はっ」と

ドッグフードを一箱持ってフェイトの部屋に向かう。  
部屋に入ると、バリアジャケットを着たフェイトがベッドで横になってる。

アルフ「ああ。また食べてない」

台の上には、あまり手を出していない食事が置かれてあった。

アルフ「食べないと、当麻に怒られるよ」

フェイト「大丈夫、少し食べたから……」

アルフ「まあそうみたいだけど……」

フェイトはゆっくりと体を起こした。

その時に見えたフェイトの背中にある無数の傷跡を見て、アルフは顔を悲痛に歪ませた。

アルフ「ねえ、当麻に言わなくていいの？」

フェイト「……………うん、当麻には余計な心配を掛けたくないから」

アルフ「でも、当麻なら、あの人からフェイト守ってくれるよ」

フェイト「大丈夫、母さんは私の為って言ってたから、今はジュエルシードを探そう。位置は特定出来るから、当麻が帰ってきたら行こう。当麻買い物だっけ？」

アルフ「う…うん……けどフェイト…あんまり無理しないでね」

フェイト「大丈夫だよ。私、強いから」

フェイトは微笑みながらアルフに言った。

マンションの近くの公園

当麻は一人、ブランコに座って、電話を掛けていた。

インデックス「は、はい、インデックスです。当麻？どうしたの？」

当麻「ああ、お前さ、一緒にいる魔道師の人にジュエルシード見せてもらったか？」

インデックス「う、うん、どういうものか知りたくって」

当麻「お前、前にジュエルシードは危険なものだって言ってたよな。」

インデックス「う、うん、願いを変な風に叶えちゃうんだって」

当麻「……魔術側のお前から見て、ジュエルシードのことはどう思う?」

しばらく、インデックスは黙り込み、返してきた。

インデックス「あれは、もっと危険なものかもしれない。見た目は綺麗でも中身は魔道書と同じようなものかもしれない。」

当麻「分かった。今はまだジュエルシードを右手で壊そうと思っていないけど、フェイトの母親にあってからするわ。何で集めるのか?」

インデックス「分かった。なのにも危険な物だと言っておくよ。」

当麻「分かった。また後でな」

当麻は電話を切り、買い物袋を持ってフェイトの部屋に戻った。

フェイト達はビルの屋上に立って下を見渡していた。

当麻「まさか、街中から探すのか?」

フェイト「ちょっと乱暴だけど、辺りに魔力流を打ち込んで強制的に発動させるよ」

フェイトが始めようとすると、

アルフ「ああ、ちょっと待った。それあたしがやる」

自分がやると言ってアルフが前に出る。

フェイト「大丈夫？結構疲れるよ」

アルフ「あたしを一体誰の使い魔だと思いで？任せてよ」

フェイト「うん。それじゃあお願いね」

フェイトはアルフに任せた。当麻は黙ってみていた。ただ表情は陰しかった。

アルフ「…それじゃあいくよ!」

アルフが構える。

アルフ「はああああ!」

アルフの足下にオレンジ色の魔法陣が展開される。それにジュエルシードが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟く。

なのは達も同じく街でジュエルシードを探していた。

なのは「こ…これは!？」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く。

ユーノ「こんな街中で強制発動!？」

空を見上げてユーノは叫んだ。

ユーノ「く…!広域結界!間に合え!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された。

空は暗くなり、ゴロゴロと雷が鳴る。その時、街中に一本の青い光が立った。

フェイト「見つけた!」

アルフ「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった。

フェイト「早く片付けよ。バルディッシュ」

BD「Sealing form setup」

フェイトがバルディッシュを構える。

なのは達も別の場所でジュエルシードの光を確認した。なのははレ

イジングハートを構える。  
なのは「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される。

フェイト「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される。

なのは「封！」

フェイト「印！」

二人のデバイスから閃光が放たれた。閃光を受けたジュエルシードは光を失い、宙にたたずんだ。

なのは達は急いでジュエルシードのある場所に向かった。ユーノも走る。

当麻「インデックスもいるのか？」

アルフ「うん、いるみたいだよ」

当麻「たく、あいつは、魔術関係があると直ぐにひよこひよこ行くんだから」

当麻は頭を掻きながら言った。フェイトは少し、悲しそうにしていた。

フェイト「当麻、本当に無理して付き合わなくていいんだよ。これは私たちの問題だから、えっ」

当麻はまたフェイトの頭を小突いた。そして、当麻の方を見ると怒っている顔をしていた。

当麻「フェイト、俺は、巻き込まれた以上とことん付き合うぜ。いくらお前が嫌がっても、誰かに付き合うのはやめろって言われても、俺は最後まで付き合う。地獄の底までな」

フェイト「当麻、分かった。アルフ、私はあの子を、アルフはあの使い魔を…」

アルフ「はいよ、当麻、乗りな」

当麻「おう、」

当麻を背中に乗せてアルフはフェイトと一緒にジュエルシールドへ向かう。

なのは達はジュエルシールドの前に着く。そこへユーノもやってきた。

ユーノ「やった！なのは、早く確保を！」

アルフ「そうはさせるかい！」

空からアルフが襲い掛かるユーノが障壁を張って防御する。当麻はアルフの背中から飛び降りた。ユーノはアルフを引き付けて、なのはから離れる。

インデックス「とうま、」

当麻「このバカインデックス。危険な所に一緒にきやがって」

インデックス「え、だって、」

当麻「なのははジュエルシードのことなんか言ってたか？」

インデックス「やっぱり、最後までやりたいって、当麻の方は？」

当麻「アイツの場合は母親が関係してるから、まずはそっちだな。」

なのははフェイトと対峙する。

なのは（目的がある同士だから、ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない…）

なのはは真っ直ぐにフェイトを見つめる。

なのは（だけど知りたいんだ！）

なのは一歩前が出る。

なのは「この間は自己紹介できなかったけど…私、なのは！高町なのは！私立聖祥大付属小学校三年生！」

なのははフェイトに自己紹介した。  
だが、

BD「Scythe form」

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた。



なのは「!！」

なのはもレイジングハートを構える。

なのは（どうしてそんなに寂しい眼をしてるのか…）

フェイトがバルディッシュを振り上げて襲い掛かる。

RH「Filler fin」

なのはは足に翼を展開させて空を飛んだ。

フェイトは、なのはの後ろに回る。

RH「Flash move」

足に展開した翼が羽ばたき、なのははフェイトの後ろに回った。

RH「Divine shooter」

レイジングハートから桜色の閃光が放たれる。

BD「Defencer」

フェイトは金色の障壁を張って閃光を防ぐ。

なのは「フェイトちゃん！」

フェイト「!！」

突然、名前を呼ばれてフェイトは驚いた。

なのは「話し合いだけじゃ…言葉だけじゃ何も変わらないって言うてたけど…話さないと、言葉にしないと伝わらない事だってきつとあるよ!」

フェイト「……………」

フェイトは何も答えない。

なのは「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ!」

声に出して必死に自分の想いをフェイトに伝える。

なのは「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから。最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけど、ジュエルシードの力で街の人や大切な人に危険が降り懸かったら嫌だから!」

フェイト「……………」

フェイトは黙って、なのはの話を聞く。

なのは「これが…私の理由!」

フェイト「…私は……………」

なのはの想いに戸惑いながらフェイトが答えようとした時、

アルフ「フェイト! 答えなくていい!」

アルフがそれを止めた。

なのは「！」

アルフ「優しくしてくれる人達の所で、ヌクヌクと甘ったれて過してきたガキンちゃんに何も教えなくていい！！」

当麻（やっぱり、アイツの家族に何かあるんだ）

アルフ「あたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフの言葉でフェイトは我に帰り、ジュエルシードの方へ向かった。

なのはもジュエルシードへ向かう。

そしてジュエルシードの前で、二人の持つデバイスがぶつかり合った。互いのデバイスにヒビが入る。

その瞬間、ジュエルシードから強烈な光が放たれた。

アルフ「フェイト！」

ユーノ「なのは！」

アルフとユーノが叫んだ。

フェイトと、なのははジュエルシードから離れた。

フェイトは傷ついたバルディッシュを見た。

フェイト「大丈夫？戻ってバルディッシュ」

BD「Yes, sir」

バルディツシュは小さな三角系になり、フェイトの手の甲の手袋に戻った。

フェイトは目の前に佇んでるジュエルシールド目掛けて走った。

アルフ「フェイト！ダメだ危ない！！」

アルフの制止も聞かず、フェイトはジュエルシールドを掴み取る。するとジュエルシールドから強い光が放たれる。

フェイト「く…！！」

フェイトはその場に座り込み、魔法陣を展開させる。

フェイト「止まれ」

光が激しさを増す。

フェイト「止まれ…止まれ！」

手袋が破れて血が吹き出る。

当麻「あの、バカ、」

インデックス「あ、当麻」

当麻急いでフェイトのところへ駆け寄った。

フェイト「来ないで、当麻」

当麻「悪いけど、これ以上、見ていられねえ。ジュエルシールドを破壊するからな」

ユーノ「破壊だって、魔力のない人が近づいたら怪我をするのに」

なのは「フェイトちゃん、当麻さん」

当麻はフェイトが必死に掴んでいる両手ごと、右手で触れた。ジュエルシールドはだんだんと暴走が収まった。

フェイト「当麻…」

フェイトは心配した顔で当麻を見た。当麻笑いながら謝ってきた

当麻「わりい、ジュエルシールド一個壊しちゃった」

アルフ「当麻、フェイト、怪我は？」

フェイト「アルフ、少し、手が痛いだけ」

アルフ「今日は、帰ろう。それも持って帰って、」

アルフは、少し穏やかな目でなのは達を見つめて、フェイトと当麻を連れて姿を消した。

ユーノ「上条さんは一体何者なんだ？」

インデックス「当麻は、当麻だよ」

第5話 譲れない思い（後書き）

六甲水「幻想殺し発動」

当麻「これからどうなるんだ話は？」

フェイト「ジュエルシード破壊しちゃったし」

六甲水「次回はフェイトママとの邂逅です」

第6話 隠された秘密（前書き）

六甲水「当麻がプレミアムママとの初対面」

## 第6話 隠された秘密

第6話 隠された秘密、

フェイトは部屋に戻る直ぐに眠りについてしまった。アルフはフェイトをベットに寝かせると、ベランダで景色を眺めている当麻に近づいた。

当麻「フェイトは？」

アルフ「部屋で寝てるよ、疲れたんだろうね。当麻もお疲れさん」

当麻「悪いな、捜し物一つ壊しちゃって、」

アルフ「大丈夫だよ。フェイトの両手ごしからだったから、ちょっと、ヒビが入って魔力が少し無くなったただだから、ただ驚いたのその後だよ」

帰る途中、見る見るうちにフェイトのバリアジャケットが消えて、裸になってしまい、当麻は顔をバルディッシュで殴られた。

当麻「まさか、バリアジャケットも破れるなんてな、まだ殴られたところが痛むよ。」

アルフ「当麻、ありがとうね、フェイトのこと、」

当麻「ん、ああ、あいつ、無茶ばっかするからな。まあ俺も人の事言えないけど、」



アルフ「…明日、フェイトの親御さんところ行くんだけど、当麻も来るかい？」

当麻「ああ、少し、聞きたいことがあってな。俺は寝るよおやすみ」

アルフ「ああ、おやすみ」

翌日

当麻達はマンションの屋上にいた。

フェイト「当麻、準備いい？」

当麻「ああ、それより、右手で無効化にならないよな」

フェイト「多分大丈夫だと思うよ、魔法陣に触らなければ…」

当麻「そうか、」

これから母親に、これまでの報告とジュエルシードを渡しに行く。  
フェイトは喫茶店で買ったケーキが入った箱を持っている。母親へのお土産だろう。

フェイト「じゃあ行くよ」

当麻「おお」

フェイト「次元転移。次元座標。 8 7 6 C 4 4 1 9 ……」

フェイトが呟くと魔法陣の光が強くなっていく。

フェイト「開け、誘いへの扉。時の庭園、テストロッサの主の所へ！」

魔法陣が強い光を発し、三人を包み込んだ。

高次空間内『時の庭園』。

光が止み、三人は時の庭園に到着した。当麻は少し、顔色が悪くなっていた。

フェイト「当麻大丈夫？」

アルフ「たく、一体どうしたんだい？」

フェイト「多分、急に違う空間からこっちに来ちゃったから、酔っちゃたんだと思う。当麻はここで待ってて、」

当麻「あ、ああ、」

アルフ「ゆっくり休んでな」

しばらくして、体調が戻り、当麻はフェイトたちを探していた。フェイトの母親にあって、ジュエルシードを集める理由を聞くために当麻はここに来たのが一番の理由だった。しばらく、歩いていると扉の脇で頭を抱えてうずくまってる。

当麻「何やってんだアイツ？」

首を傾げた。同時にある事に気がついた。

フェイトがいない。

当麻（一人で母親に報告してんのか？）

そう思いながら当麻はアルフに近寄った。

当麻「おい。こんなトコで何やってんだ？」

アルフに声をかけた。当麻の声に反応したのか、アルフの耳がピクンと動いた。ゆっくりと顔を上げて当麻を見た。

アルフ「当麻…」

アルフは立ち上がり、涙目になって当麻に抱き付いた。

アルフ「当麻っ！！」

当麻「おわっ！？おいアルフ！何だよ急に！？」

当麻は慌てながらアルフに尋ねた。

アルフ「当麻…お願いだよ…フェイトを…フェイトを…助けて…」

当麻「！」

泣きながら懇願するアルフに当麻は目を細めた。

その時、扉の中から何か音が聞こえてきた。

当麻「これは、何の音だ？」

当麻は扉を睨んだ。

アルフ「フェイトが…フェイトが……」

当麻はアルフに残るように言って、扉を開き、部屋の中に入ると、当麻は目を見開いた。バリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷ができたフェイトが倒れていた。

当麻「フェイト……！」

当麻は駆け寄ってフェイトを抱き起こした。

当麻「フェイト！おい！しっかりしろ！」

フェイト「…あ………当麻………？」

フェイトはうつすらと目を開けて銀時を見た。

プレシア「いきなり扉を開けて入ってきて…貴方、一体何者？」

前から声が聞こえた。当麻は顔を上げて声の主を見た。そこには、まるで虫けらを見るような眼で見てくる黒髪の女が立っていた。

当麻「あんたが、フェイトの母親か。」

プレシア「ええ、そうよ、私はプレシア。大魔導師プレシア・テスタロッサよ。あの娘の母親よ。あなたは？」

当麻「上条当麻、」

当麻はフェイトを抱きかかえてアルフを呼んだ。アルフは扉の外から当麻に駆け寄ってきた。

アルフ「フェイト、」

当麻「フェイトを連れて傷の手当をしろ」

そう言って、当麻はアルフにフェイトに預けた。

アルフ「う、うん、当麻は？」

当麻「俺は、こいつと話がある。」

アルフ「当麻、気をつけて」

アルフはフェイトを抱えて部屋を出た。部屋には当麻とプレシアの二人つきりになった。

当麻「あんた、フェイトに何であんなことをしたんだよ。あれじゃあ、虐待じゃねえか」

プレシア「何故？あの子は、この大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ。それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから睨しっけをしただけよ」

プレシアの言葉に当麻は怒りを燃やした。

当麻「…フェイトがどれだけ頑張ったか…どれだけ辛い思いをした

か、わかってんのか？」

怒気を含んだ視線をプレシアに向ける。

プレシア「さあ？そんなのは私の知った事じゃないわ」

当麻「テメエ！！」

プレシア「目障りだわ。いい加減消えなさい」

プレシアから紫色の雷が当麻に向かって放たれた。当麻は立っている位置で、右手で雷を打ち消した。

プレシア「！、あなた何者？」

当麻「ただの学生だよ。」

プレシアは再び、当麻に雷を放ったが、また右手で打ち消された。当麻はプレシアに向かって走ってきたが、プレシアは当麻の前に雷を落とし、止まった当麻を鞭で叩き、壁に激突しそうだったが、当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ。

プレシア「！！」

プレシアは焦りの色を浮かべた。

当麻「つう、ここは、隠し通路か？」

少し狭い通路の先に何かを見つけた。

当麻「なっ!?!」

ソレを見て当麻は驚愕した。

通路の先にはガラス張りのケースのような物があり、その中に一人の少女が裸で入っていた。

当麻「…フェイト…!?!」

当麻は驚いた。ガラス張りのケースの中にフェイトそっくりの少女が入っていた。当麻はケースに近づこうとすると、

プレシア「アリシアに近寄らないで!?!」

当麻「!」

プレシアの怒声と共に雷が当麻を襲った。

当麻「ぐあああああ」

急な攻撃に反応出来ず、雷をくらってしまった。

プレシアも通路に入ってくる。

当麻「おい、こいつは、何なんだ?何でフェイトにそっくり、いや、フェイトがもう一人いるんだよ」

プレシア「フェイトがもう一人?ふん。笑わせないで」

当麻の言葉にプレシアは鼻で笑った。

プレシア「私の可愛い『アリシア』を、あんな人形と一緒にしないでほしいわ」

当麻「人形だと…?」

プレシアの言葉に、当麻は目を細めた。

プレシア「フェイト・テストロツサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。”フェイト”の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

当麻「な…!？」

当麻は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

プレシア「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

当麻は黙って聞いている。

プレシア「アリシアはもつと素直で明るくて、いい子だった…いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた。

プレシア「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ!」

プレシアの目がカッと見開かれた。



プレシア「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かって、娘のアリシアを蘇らせるのよ!!」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った。

当麻は、ある少女たちを思い出していた。それは実験のために生まれて、ただ実験のために生命を奪われる少女たちのことを、実験を止めるため、立ち上がった少女のことを。今は、ただ日常を歩んでいる少女たちの事

当麻は右手を強く握りしめた。そして、プレシアをぶん殴った。殴られたプレシアは唇から血を流した。

当麻「ふざけんな、フェイトが出来損ないだと、捨てるだと、お前はただ、娘が死んだ事実から逃げているだけだ。」

プレシア「黙れ」

当麻の言葉がプレシアの心に突き刺さる。

当麻「お前は自分のためにアリシアやフェイトの魂を弄んでるんだ。そんな奴に『母親』なんて胸を張って言えるのかよ。」

プレシア「黙りなさいって言うてるのよ」

プレシアから、巨大な雷が当麻に向かって放たれた。

当麻「ぐあああああああ」

雷は当麻に直撃した。

プレシア（防がなかった）

当麻は、服が焦げ、煙が出てる。肌にも火傷を負っていた。

当麻「フェイトは、フェイトはな、一生懸命あんたのために戦ってるんだ。なのに出来損ないなんて言うなよ、捨てるなんて言うなよ。あいつはあんたの都合で生きてるんじゃないんだよ」

プレシア「ぐう、その減らず口を………」

杖を掲げようとしてプレシアの動きが止まった。突然プレシアは手で口を抑えて、その場に膝をついて咳込んだ。

当麻「おいっ！どうした!？」

プレシアの異変に当麻が駆け寄る。床にはプレシアの血が付着していた。

当麻「あんた…まさか病に……」

プレシアは杖を立てて立ち上がった。

プレシア「…ふふ。大魔導師でも…不治の病は治せないのよ……」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべた。

プレシア「…私を殺すなら今がチャンスよ」

目の前の当麻を睨みつける。

当麻「そんなことするか、そんなことしたらフェイトに泣かれちゃう。」

プレシア「……………」

プレシアは顔を俯かせた。

プレシア「ねえ、上条、あなたは本当に何者？」

当麻「言ったら、ただの学生だよ。」

プレシア「そう、私は……………間違っていたの……………？間違っていたとしたらどうすればいいの？」

当麻「さあな、でも、フェイトの母親も、アリシアの母親も、世界中であんただけなんだよ。」

プレシア「！！」

当麻「じゃあな、」

当麻は通路を出て、フェイトのところに向かった。一人残されたプレシアはケースの中で眠ってるアリシアを見つめた。

プレシア「アリシア……………私は自分のために……………貴女を弄んでいたの……………」

近寄ってケースに触れる。

プレシア「私は…どうすれば……」

プレシアは力無く床に座った。その時、プレシアの口から一人の少女の名前が出た。

プレシア「フェイト……」

当麻は思いつめていた。どこの世界にも命を弄ぶ奴がいることに。

当麻「フェイトの奴大丈夫かな？」

フェイトとアルフがいる部屋に入ると、アルフが驚いていた。

アルフ「当麻、大丈夫かい？何か凄い傷だらけだけど」

当麻「ああ、転んだんだよ」

アルフ「いや、明らかにあの女の雷食らった感じがするけど、」

当麻「俺は、大丈夫だから、フェイトは？」

アルフ「今は落ち着いてる」

当麻は椅子に座って、眠っているフェイトを見つめた。

フェイト「ん……」

フェイトが目を覚ました。

アルフ「フェイト！」

アルフが目に涙を浮かべる。

フェイト「…アルフ……当麻…」

フェイトは二人を見て小さく呟いた。

当麻「調子はどうだ？」

フェイト「私は大丈夫だけど、当麻、傷だらけだね」

当麻「ちょっと、そこで転んだ」

第6話 隠された秘密（後書き）

六甲水「とりあえず、当麻の初バトルだね」

当麻「というか、俺、フェイトを裸にしすぎじゃね」

六甲水「それが当麻のクオリティだよ」

## 第7話 向き合う二人（前書き）

六甲水「フエイトのこの秘密を知った当麻はどうするのか」

## 第7話 向き合う二人

### 第7話 向き合う二人

当麻達は海が見える公園にいた。フェイトと当麻の傷も癒え、バルデッシュも回復していた。当麻はあの日以来、ずっと思い悩んでいた。プレシアのこと、アリシアのこと、フェイトのことを、

フェイト「もうすぐ、発動するジュエルシードが近くにある。」

アルフ「当麻は、私の背中に乗ってな」

当麻「ああ、」

なのは達も同じ公園に来ていた。なのはの持つレイジングハートも無事回復していた。

なのは「ここに、ジュエルシードがあるんだよね」

ユーノ「うん、きっとあの子も来ているはずだよ。インデックスさんは僕の近くにいて」

インデックス「うん、」

なのは「あ、あれ、」

なのはが指を刺した場所には、巨大な木の化物が暴れていた。安心したことになのは達以外は人はだれもいなかった。



フェイト「あの子たちもいるみたいだね。いくよ、アルフ」

当麻「あ、待て、フェイト」

当麻がフェイトのことを呼んだ。

フェイト「何？」

当麻「あの化物の相手は俺がやるから、お前は封印だけやってくれ」

フェイト「え、でも、危ないよ」

当麻「大丈夫、たまには子供らしく頼ってくれよ。」

フェイト「う、うん、」

ユーノ「あの人、魔法も無いのに無茶だ。」

なのは「止めなきゃ」

焦るなのは達を見てインデックスは…

インデックス「大丈夫だよ。当麻なら」

なのは「大丈夫って、」

呆れた顔でインデックスは当麻の方を見ていた。

インデックス「当麻の無茶は今に始まったことじゃないから」

木の化物「ゴオオオオオオオオオオオオ」

木の化物は当麻を見て、叫んでいた。

当麻「さてと、あんまりフェイトに負担を掛けたくないんだ。お前は黙ってブツ殺されてろ。」

当麻は木の化物に向かって走った。木の化物は当麻に向かって木の根を振り上げた。

当麻「そんなの効くか。」

振り下ろされた木の幹を当麻は右手で軽く触れ、木の幹が動かなくなった。

ユーノ「まただ、あの人、魔法を無力化した。ただ触れただけなのに」

木の化物は焦り、障壁を出したが当麻は右手を使って、障壁を破り、木の化物をぶん殴った。

アルフ「やった、あいつ、やったよ」

木は元の姿に戻り、ジュエルシードが浮かび上がった。

当麻「フェイト、早く封印を」

フェイト「あ、はい」

フェイトはバルディツシュを構えた。なのはもレイジングハートを構える。

なのは「ジュエルシード、シリアル7!」

フェイト「封印!」

ジュエルシードに光が降り注いだ。

光が収まり、空中にジュエルシードが佇む。フェイトとなのははジュエルシード挟むように対峙する。

フェイト「…ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

なのは「うん。この間みたいになったら、レイジングハートも、フェイトちゃんのバルディツシュも可哀相だしね」

なのはの言葉にフェイトは少し戸惑った。

フェイト「…だけど、譲れないから」

フェイトはバルディツシュを鎌の形状に変えた。

なのは「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構える。

当麻「あいつら、まさか、ジュエルシードの前で戦うのかよ。やめる前とおんなじ事になるぞ」

当麻が止めようとしたが、二人の耳には届いていない。フェイトと、

なのは同時に動いてデバイスを振り下ろす。だが二人のデバイスが当たる直前、

クロノ「ストップだ！」

二人の間に青い魔法陣が展開され、そこから現れた黒いバリアジャケットを羽織った少年がデバイスを受け止めた。

なのは&フェイト「?!?!?」

突然の乱入者に二人は驚いた。

クロノ「ここでの戦闘は危険すぎる！」

地上にいる当麻達も呆然と見上げている。

クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

第7話 向き合う二人（後書き）

六甲水「ついに管理局のくそ……クロノが登場」

クロノ「おい、今クソガキっていいそうになったよな」

当麻「気のせいだろ」

第8話 集まる人々（前書き）

六甲水「とあるシリーズのある二人が登場」

## 第8話 集まる人々

### 第8話 集まる人々

クロノ「二人とも、まずは武器を引くんだ」

クロノに言われてフェイトと、なのはは一旦デバイスを引いた。ジユエルシードを空中に残して、三人は地上に降りた。当麻はとりあえず、インデックスの元に駆け寄った。

当麻「管理局？何だ警察みたいなものか？」

ユーノ「あ、ああ、そんな感じだよ」

フェイトと、なのはの間に立ってるクロノは交互に二人を見た。

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノが言いかけた時、突如空からオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

クロノ「はっ！」

クロノは青い魔法陣を展開して魔力弾を防いだ。全員、空を見上げた。アルフが空中に佇んでいた。

アルフ「フェイト！当麻！撤退するよ！離れて……！」

フェイトは戸惑いながらも空中にあるジュエルシールド目掛けて飛んだ。なのはとクロノは後ろに跳んで魔力弾を避けた。当麻達も離れる。魔力弾は地面に当たり、土煙が立ち込めた。フェイトはジュエルシールドに手を伸ばす。その時、クロノは青い魔力弾をフェイトに向かつて放った。

当麻「フェイト」

魔力弾はフェイトに直撃してしまい、フェイトは地面に落ちて行く。

アルフは地面に激突するギリギリのところまで、受け止めた。だが、今度はフェイトたちにバインドが掛けられた。だが、当麻がバインドに触れ、フェイトたちを逃がした。

当麻「アルフ、早く行け」

アルフ「当麻、」

クロノ「お前、邪魔をするなら相応の対応をとらせてもらっ」

当麻「悪いが、邪魔をさせてもらっぜ。対応に遅れた管理局さん」

クロノ「きさま、」

クロノは当麻に向かって、魔力弾を放つが当麻の右手で防がれ、左手でクロノの顔を殴った。

アルフ「な、やっぱりすごいよ、当麻の奴」

当麻「早く逃げろ。」



アルフ「でも、当麻は」

当麻「俺のことはいいから」

そう言っつて、アルフは一目散にフェイトを背負って逃げた。

クロノ「くう、何という人だ。魔法を無力化するなんて」

土御門「それがかみやんの能力ぜよ。」

森の奥から聞き覚えのある声が出たと思ったら、そこにはサングラ  
スをかけた金髪の少年と髪の毛を二つに縛った少女がいた。

当麻「おま、土御門、それに白井まで」

黒子「あら、どこかで見たと思ったら、お姉さまを付けねらう殿方  
じゃありませんの」

土御門「いやあく、モニターで見たことある顔だと思ったら、まさ  
かかみやんだったなんて、」

クロノ「とりあえず、アースラに戻って話しを聞かせてもらっつから  
な、」

鼻を抑えているクロノ、

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』。  
緑色の長髪の女性がモニターを眺めていた。

リンディ「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの確保も終了。よしとしましょう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディ・ハラオウン。時空管理局提督”アースラ”艦長である。

当麻達はアースラに連れてこられた。先頭に立ってるクロノが、なのは達に振り返った。

クロノ「ああ。もうバリアジャケットとデバイスを解除しても平気だよ」

なのは「あつ、そうですね」

なのははバリアジャケットを解除して、レイジングハートを待機状態にした。クロノは視線をユーノに向けた。

クロノ「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないかな？」

ユーノ「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

なのは「え？」

なのはは首を傾げた。当麻達も首を傾げた。

ユーノの体が光輝く。光の中でユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わった。見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年の姿だ。

なのは「えっ!?!」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた。インデックス達もだ。ただ当麻は特に驚く様子はなかった。

ユーノ「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた。なのはは、驚きながらユーノを指差している。

なのは「ふええええ!!?」

アースラに、なのはの声が響いた。

ユーノ「な…なのは？」

ユーノは首を傾げた。

なのは「ユーノ君って…ユーノ君って…！人間だったの」

クロノ「どうやら、君たちの間で、見解の相違があったみたいだね」

ユーノ「えっと…なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

なのは「ち…違う違う！最初からフェレットだったよ?!」

なのはは、首を横に振りながら答えた。言われてユーノは記憶を辿った。額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする。

ユーノ「ああっ！」

そして思い出した。

ユーノ「そ…そういえば、この姿まだ見せてなかった」

なのは「だ…だよね？ビックリした?!」

なのは大きく息を吐いた。

するとある疑問がインデックスから言われた。

インデックス「あれ？ユーノって、温泉行ったときに一緒になのはと入ってなかった？」

ユーノ「あっ」

インデックスに言われて、ユーノは声を上げた。

なのは「……!!」

思い出した、なのはは顔を赤くして俯かせた。

ユーノ「いや…違うんだ、なのは！あれは……」

ユーノが、なのはに説明しようとした時、

土御門「おい、」

土御門が指を鳴らしながら、ユーノを睨んでいた。

土御門「何だお前、フェレットになれるからって、女湯に忍び込んでたのか。」

ユーノ「いや、これは、白井さん、白い目で見ないでください。」

黒子「やっぱり、殿方は最低ですわね」

当麻「ユーノ、」

当麻は笑顔でユーノの肩を掴んだ。

ユーノ「上条さん、上条さんは分かってくれますよね」

当麻「ああ、よく分かった。俺がするべきことは…お前をぶん殴ることだ」

ユーノ「ええええええええー」

その後、当麻と土御門にランチにされるユーノをなのはが必死に止めること、二分後、一行はようやく艦長のいる部屋にたどり着いた。ユーノは言うど服はボロボロで、顔や腕、足には青あざが出来ていた。

クロノ「艦長。来てもらいました」

中に入って、当麻達は少し驚いた。部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていた。

何この妙な和風空間？と当麻達は思った。畳の上には、艦長のリンデイが正座していた。

リンディ「ようこそ。まあ皆さんとりあえず座って楽にしてくださいね」

リンディがユーノを見ると心配そうに

リンディ「えっと、君は何かあったのかな？」

戸惑いながらリンディは尋ねた。

ユーノ「…いえ、何もありません」

力なくユーノが答えた。とりあえず、当麻達は畳の上に座った。

リンディ「どうぞ、」

当麻達の前に、お茶と羊羹を出された。当麻達はお礼をしつかり言う。

リンディ「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した。

リンディ「まあそうだったの。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った。

ユーノ「…それで僕が回収しよう」と…」

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど同時に無謀でもある!」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまふ。

なのは「あの、『ロストロギア』って何なんですか?」

なのはがリンディ達に尋ねた。

当麻達はリンディ達から『ロストロギア』について話を聞いた。

次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には、他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になる。

話を聞いた、なのは達は自分達がとんでもなく危険な物に関わっていた事を理解した。

ふと、なのははリンディを見た。

リンディはお茶の中に角砂糖を入れていた。

なのは「あっ!」

お茶に角砂糖を入れるという行為に、なのはは驚いた。しかもリンディは何の躊躇いもなく、角砂糖を入れたお茶を飲んだ。

当麻「あの、甘くないんですか?」

当麻はリンディに向かって質問をした。

リンディ「あら、おいしいわよ。」

当麻「そ、そうですか、所で土御門、何で俺たちはこの世界にいるんだ？」

当麻はこの世界に来た理由と土御門達がいる理由についてずっと知りたかった。

土御門「実はと言うとな、アレは、学園都市に侵入した魔術師が使った魔術で、俺とこの白井もその魔術に巻き込まれたんだよ。多分かみやん達もな。」

黒子「全く、迷惑な話ですわ。何故か侵入者を追ってたら、変なことに巻き込まれて」

当麻「なあ、俺たちは帰れるのか？」

土御門「大丈夫、今その魔術解読して、アースラのメンバーで次元転送の装置を作ってるぜ。」

当麻「そうか、つつても、その装置が完成しても俺はまだ帰らないぜ」

クロノ「何でだい、ジュエルシードについては僕たちが受け持つことになる。もう君たちには…」

当麻「アイツに地獄まで付き合っただけでやるって言っただけだからな。それにまだ始まったばかりだから」



黒子「そうですね、やらずに後悔したくありませんし、」

土御門「こっちの魔法つうのも興味があるからな、とことん付き合  
うぜ」

なのは「あの、私も手伝いしたいです。」

ユ一ノ「僕もお願いします」

リンディ「全く、しょうが無い子たちね。いいわ、あなた方の乗艦  
を許可します」

クロノ「艦長、本気ですか」

リンディ「だって、断ってもジュエルシードに関わってくるわ彼ら  
は…」

クロノ「ですが、あの上条という人の力は常軌を逸脱してます。魔  
法を打ち消すなんて」

リンディ「あら、意外といい戦力になるかもしれないわよ」

## 第8話 集まる人々（後書き）

六甲水「土御門と黒子がまさかの登場です」

黒子「所で、お姉さまは出ませんか？」

六甲水「美琴はしばらく出ません。今は当麻とインデックスと土御門と黒子が活躍ですね」

土御門「それにしても、ユーノは淫獣だね」

ユーノ「好きで見たわけじゃない」

六甲水「次回はなのはとの会話が中心だね」

第9話 一人の意味（前書き）

六甲水「今回はバトルなしです。」

フェイト「私の出番は？」

六甲水「少しだけありますよ。」

## 第9話 一人の意味

### 第9話 一人の意味

#### アースラの食堂

当麻と土御門は、ここで真剣な顔で話してあっていた。

土御門「だからかみちゃん、俺はそれだけは譲れないんだ」

当麻「いや、それはないからな、」

その様子をなのは達は見ていた。

なのは「あの、何の話をしてるんですか？」

なのはが当麻達に話しかけると、

土御門「かみちゃん、普通に考えて金髪の少女には犬耳やろ、」

当麻「違う、フェイトには狐耳だ。いい加減分かれよ」

その言葉を聞いて、なのは達は一斉にズッコケた。クロノは怒りながら当麻に掴みかかった。

クロノ「君たちは一体何の話をしてるんだ！」

当麻「なんだよ、人の趣味の話に文句があるのか」

土御門「そや、どうせクロノは王道のメイド好きなんだろ。この王道野郎」

クロノ「人の好みを勝手に捏造するな」

当麻と土御門とクロノは食堂で取っ組み合いが始まった。なのはとユーノは苦笑いしながらその光景を見て、黒子は呆れた顔で見ている。インデックスは気にせず、食事を食べていた。

しばらくして、取っ組み合いが終わり、クロノが当麻を見て、言った。

クロノ「上条さん、君に二つ聞きたい」

当麻は頬杖を掻きながら、クロノを見た。

当麻「何だよ」

クロノ「まずは、君の右手は一体何なんだ。魔法を無力化して、それも完全にだ。」

その質問を聞いて、ユーノも興味を持った。以前、暴走したジューエルシードを当麻が触れた瞬間、暴走を止めたのだ。

当麻「何というか、俺の右手は異能の力を全て消しちまうんだよ。俺は幻想殺しと呼んでるけどな」

クロノとユーノは驚いた。まさか全ての異能を消してしまうなんて…

クロノ「それが、たとえば、魔法の力で動いているものでもか？」

当麻「ああ、そして、俺にとって不幸の元凶だ」

なのは「不幸の元凶って何ですか？」

インデックス「当麻の幻想殺しは幸運を消しちゃって、いつも不幸な目にあってるんだよ。」

当麻「元々、この世界に来たのも不幸だったからな。」

なのは達はその話を聞いて、どう反応すればいいのか迷った。笑うべきなのか？励ますべきなの？

クロノ「えっと、もう一つだ。君といた少女は何でジュエルシードを集めるんだ？」

クロノの質問に当麻は頭を掻きながら、答えた。

当麻「確か、誰かに頼まれて集めてたな。」

クロノ「それは誰だ？」

当麻「さあ、さすがに教えてくれなかった。」

クロノ「本当にか？」

当麻「何だよ、俺にとってフェイトは、ただの協力者だよ」

当麻は真剣な顔つきでクロノに質問を返した。クロノはため息をつき、

クロノ「分かった。君にはこれ以上、聞き出せないな。僕は少し調べ物をしに行ってくるよ」

そう言つて、席をたち、食堂を出て行つた。当麻はフツと、フェイトたちのことが気になった。

当麻（アイツら、しっかり召し食ってるかな？）

フェイトたちはマンションの自分の部屋でベットに座っていた。

フェイト（当麻、どこに行つたんだらう？）

管理局に襲われた後、暫くして、フェイトが目覚めて元の場所に戻つて当麻のことを探したが見つからなかった。

フェイト（きつと当麻は、探してた人の所に行つて元の世界に戻つたんだよ。うん、きつと、そう。良かった、当麻はもう私たちの問題に巻き込まれなくて…嬉しいのに、何で、何で、）

フェイトの頬には涙が流れていた。それはいくら拭いても涙が溢れしてきた。

フェイト（何で、こんなに胸が苦しいの、当麻、会いたいよ）

アルフは、扉の隙間からフェイトの様子を見ていた。

アルフ「フェイト、当麻、一体どこ行つたんだらう」

それから数日後、当麻達はジュエルシード集めを手伝っていた。その結果集まったのは三つで、フェイトたちに先に集められたのは二つで、計五つ集まったことになる。ジュエルシードは残り六つ、だが、その六つがなかなか集まらなかった。

当麻達はまたアースラの食堂に集まっていた。

当麻「残りのジュエルシードが見つからないな。」

ユーノ「そうですね、ここまで探しても見つからないと、地上以外の所にあるしか…」

土御門「そういや、かみやん、」

当麻「何だよ」

土御門「あの金髪っ子、フェイトだっけ？艦長さんに保護頼まないのにかや〜」

当麻もそれを考えていた。だがフェイトには母親がいる、今のフェイトには母親のプレシアを裏切ることが出来ないはずだ。

当麻「ちよつと、問題があつてな。今フェイトたちを管理局に保護しても何も解決はしないんだ。」

それを言った当麻の表情は少し険しかった。

当麻「それに、アイツは一人で全部背負って、無茶するんだよ。」

インデックス「当麻も人の事言えないよ。いつも無茶ばかりして」



インデックスは少し怒った顔で言った。

黒子「いわゆる似たもの同士ですわね」

当麻「ああ、そうだよ。悪かったな。ん…なのはどうした？何か暗いけど」

フツと、なのはを見ると少し表情が暗かった。

なのは「私もね、小さい頃はよく一人だったんだ」

当麻「…そうなんだ」

当麻は真剣な表情で話を聞いた。周りの人も一緒に静かに聞いた。

なのは「私が小さい頃に、お父さんが仕事で大怪我しちゃって…しばらくベッドから動けなかった事があるの」

なのは話を続ける。

なのは「喫茶店も始めたばかりで、まだ人気はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

当麻「……………」

なのは話を、当麻は黙って聞いている。話をしている時の、なのは顔は少し寂しい表情をしていた。

なのは「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で…………だから私、割

と最近まで家にいる事が多かったの」

そう言っつて、なのはは笑顔を作った。

なのは「上条さん」

当麻「ん？」

なのは「一人ぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんだ」

当麻「……………」

当麻は黙っつて、なのはの答を待つ。

なのは「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分こにできる事だと思っつんです」

なのはが答を言う。答を聞いた当麻は、静かに目を閉じた。

当麻にはある日から記憶がない。もし、あの日インデックスが病室に現れなかつたら自分は一人ぼっちだっつたんだと思っつ。きっと、インデックスを救つたことで当麻は一人ぼっちではなかつたんだと思っつ。

それに、今まで救つてきた人々も一人でずつと戦つてきたのだ。

当麻「そっつだな、」

そっつ言っつて当麻は微笑んだ。

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴った。

## 第9話 一人の意味（後書き）

六甲水「当麻もある意味では、なのは達と同じ境遇なんですね」

当麻「そつえば、俺の記憶関係はやるのか？」

六甲水「できたらやるよ。次は海上での竜巻相手です」

第10話 それが誰であろうと、ただ救いたただけ（前書き）

六甲水「フェイトとなのは初の共同作業回」

インデックス「何か、結婚式みたいな言い方だね」

## 第10話 それが誰であろうと、ただ救いたいだけ

第10話 それが誰であろうと、ただ救いたいだけ

曇天の海。

海上には巨大な金色の魔法陣が展開されていた。

フェイト「アルタス、クルタス、エイギアス…」

魔法陣の上には、呪文を唱えてるフェイトがいた。魔法陣から少し離れた場所には、狼形態のアルフが心配そうにフェイトを見つめていた。

アルフ（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違っていないけど…）

アルフの表情が険しくなる。

フェイト「はああああ!!」

呪文を唱え終えたフェイトが、海に向かって巨大な雷を放った。海から六つのジュエルシードの光の柱が現れる。

フェイト「見つけた…残り六つ！」

フェイトの呼吸が荒くなる。

アルフ（これだけの魔力を打ち込んで、さらに全てを封印するなんて…いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えてる！）

フェイトの心配をしながら、アルフは数日前まで自分達と一緒にいた、黒髪の男を思い浮かべた。

アルフ（当麻……あんたなら…フェイトを上手く抑えられたのかな？）

アルフが考えていると、

フェイト「アルフ！」

フェイトがアルフに声をかけた。

フェイト「空間結界とサポートお願い！」

アルフ「あ…ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた。

アルフ（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！当麻は体を張ってフェイトを護ったじゃないか！だったら！）

アルフは決意を固めた眼をする。

アルフ（あたしも全力でフェイトを護るんだ！！）

フェイト達の前で、ジュエルシードの光は巨大な竜巻になった。

フェイト「いくよバルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ。

緊急事態のアラームを聞いて、当麻達はブリッジに入った。当麻達は映像を見るとそこには、ジュエルシードの力に必死に戦っているフェイトの姿だった。

当麻「フェイト」

なのは「フェイトちゃん」

当麻となのはは、フェイトの名を叫んだ。

リンディ「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分と言った。

クロノの「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った。その言葉に、当麻は眉を<sup>ひそ</sup>顰めた。

クロノ「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

なのは「あの…私急いで現場に行きます！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした時、

クロノ「その必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」



クロノがそれを止めた。

なのは「!？」

クロノの言葉に、なのはは驚いた顔をして動きを止めた。周りにいるインデックスも驚いていた。当麻や土御門や黒子は、表情を険しくした。

クロノ「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい。」

なのは「でも…」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った。

クロノ「今のうちに捕獲の準備を」

エイミー「了解」

クロノの指示を受けたエイミーが準備をする。

リンディ「私達は、常に最善の選択をしなきゃいけないの。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた。

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた。

画面を見上げていた当麻が口を開いた。

当麻「最善の選択？最低の選択の間違いだろ」

クロノ「何だと!？」

クロノは、振り返って当麻を睨んだ。

当麻「俺は色んな奴と戦ってきた。人の命をただの道具だと思っている奴もいたが、あんたらもそいつと同じくらい腐ってるな」

クロノ「貴様…！口を慎め!!」

クロノは当麻に向かって叫んだ。直後当麻はクロノに掴みかかった。

当麻「目の前で苦しんでいる奴らを救おうとしないで、世界を管理するなんて大層な事言ってるんじゃないねえ」

当麻の怒りはブリッジに響き渡った。その声に局員全員がたじろいだ。

インデックス「当麻の言うとおりだよ。世界を救う前に、目の前で必死に戦ってる少女を救ったらどうなの？」

クロノ「君たちは…」

当麻達の言葉にクロノは齒を食いしばった。

クロノ「土御門さん、白井さん」

クロノは、土御門と黒子の方を向いて叫んだ

クロノ「あなた達も、組織の人間なら分かってるはずです」

土御門は静かにサングラスを取った。

土御門「確かに何を優先すべきことは分かっている。」

土御門の言葉を聞いて、クロノは笑みを浮かべた。しかし、続けて土御門が言った言葉は、クロノにとって意外なものだった。

土御門「まずは、必死に戦ってるあの少女を救うのが先だぜ。」

クロノ「な…！」

続いて黒子が言った。

黒子「残念ながら、私もやるべき事は、まずは彼女を救うことだと思えますわ。それがどんなに悪い人でも」

インデックスもさらに言った。

インデックス「私の知り合いに、こう言った人がいるよ。『救われぬものに救いの手を』って、あなた達は救われない人に救いの手を差し伸ばささないの？」

クロノは表情をどんどん険しくした。

クロノ「貴方達は、事の重大さがわかって……！！！」

リンディ「クロノ！」

リンディがクロノを制した。

クロノ「か…艦長!？」

クロノは戸惑いながら、リンディに顔を向けた。

なのは「リンディさん!」

なのはの声がブリッジに響いた。

なのは「私…フェイトちゃんを助けたいです!」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはが言った。その瞳には、強い決意が宿っていた。

リンディ「……………わかりました。行動を許可します」

クロノ「艦長!？」

リンディの言葉に、クロノは驚いた。

なのは「ありがとうございます!」

ユーノ「急ごう、なのは!」

リンディにお礼を言って、なのははユーノと一緒に転送装置に向かった。

その時、

当麻「なのは」

当麻が、なのはを呼び止めた。

なのは「は、はい」

なのはは、足を止めて当麻を見た。

当麻「悪いが今回、俺は力になれねえ。空飛べねーからな」

そう言つて当麻は、なのはに顔を向けた。

当麻「フェイトを頼んだぞ」

なのは「はい！」

当麻の言葉に、なのはは力強い声で返事をした。

ユーノ「なのは！早く！」

なのは「うん！」

なのはが、走り出した時、

当麻「それから、なのは」

再び当麻が、なのはを呼び止めた。

当麻「一つ、アイツらに伝えてほしい事がある」

なのは「え？」

なのはは、首を傾げた。

荒れ狂う海上で、フェイトはバルディッシュを構えて竜巻に突っ込もうとする。もう何度弾かれたかわからない。バルディッシュの魔力の刃も失った。それでもジュエルシードを封印しようとした時。フェイト「！！」

バリアジャケットを着て、レイジングハートを持った、なのはが現れた。

アルフ「フェイトの邪魔するなアア！！」

なのはに気付いたアルフが、噛み付こうとする。間にユーノが入り、魔法陣を展開してアルフを止めた。

ユーノ「待つてくれ！僕達は戦いにきたんじゃない！」

アルフ「えっ！？」

アルフが驚きの声を上げる。

ユーノ「今はジュエルシードの封印を！」

叫んで、ユーノは巨大な緑色の魔法陣を展開した。魔法陣から緑色の鎖を放ち、竜巻に巻きつけて動きを抑える。

なのは「フェイトちゃん！」

なのはは、フェイトの隣に移動した。

なのは「二人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る。桜色の魔力は、バルディッシュの黄色い玉に入っていた。

「Power charge」

バルディッシュに魔力の刃が戻る。

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた。

なのはは、頷いて応える。ユーノが必死に竜巻を抑える。途中からアルフもオレンジ色の鎖を放って、一緒に竜巻を抑える。

なのは「ユーノ君とアルフさんが止めてる今のうちに！」

隣にいるフェイトに顔を向ける。

なのは「二人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える。

なのは「デイバインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された。フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する。

なのは「せーの！」

なのはが合図する。

フェイト「サンダー……」

なのは「デイバイン……」

二人ともデバイスを構える。

フェイト「レイジー……！」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた。

なのは「バスター……！」

桜色の閃光が竜巻に直撃した。金色の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ。

アースラのブリッジ。

エイミー「ジュエルシールド、六個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのエイミーが報告する。



クロノ「な…なんてデタラメな…！」

クロノが驚く。

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた。

土御門「こりゃあ、すげえな」

画面を見て、土御門は呟いた。

インデックス「やった、なのはやったよ」

インデックスは嬉しそうに飛び跳ねていた。隣にいる当麻は小さく微笑んだ。

海上。

フェイトと、なのはの前に六つのジュエルシードが現れた。嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む。

なのは「えっと…半分こ…で良いよね？」

フェイト「……………」

フェイトは無言で頷いた。半分ずつジュエルシードを回収し、全てのジュエルシードを封印した。

回収を終えたフェイトは、アルフを連れて、その場から立ち去ろうとした。

なのは「待ってフェイトちゃん！」

なのはは、フェイトを呼び止めた。フェイトは振り返らずに止まった。

なのは「上条さんが、フェイトちゃんとアルフさんに伝えてほしいって」

フェイト「えっ!?!」

思わずフェイトは振り返った。隣にいるアルフも少し驚いた顔をした。

なのは「また無茶したら、二人ともご飯抜きだ」って

フェイト「……………!!」

フェイトは、目を見開いて一瞬肩を震わせた。アルフも驚いている。それからフェイトは、アルフを連れて姿を消した。

なのは「フェイトちゃん……」

フェイト達が去った後に、なのはは小さく呟いた。

マンションに向かうフェイトの眼には涙が溢れていた。それは悲しいのではなく、嬉し涙だった。

フェイト（当麻……………当麻はどこにいても、私たちのこと心配してくれているんだ）

フェイトは胸に手を当てた。

フヘイト(ありがとう)当麻(…)

第10話 それが誰であろうと、ただ救いたいだけ（後書き）

六甲水「遠くにいても気持ちはずながるんだね」

フェイト「当麻は優しいから」

雪那「というか、当麻に惚れてるどっかの中学生とか、どっかの巫女さんとか、どっかのおしほりっ子とかは出るのか？」

フェイト「誰？」

六甲水「ここから、別の作品のキャラが登場しないでください」

雪那「いや、暇で。」

六甲水「そのうち何人か学園都市メンバーのキャラは出すから」

## 第11話 始まるために（前書き）

六甲水「今回はプレシアの事と最後のなのはとフェイトの戦いが始まる直前です」

インデックス「ついに始まるラストバトル」

小雪「楽しみだね」

六甲水「だから、別の作品のキャラが出てこないでください」

## 第11話 始まるために

第11話 始まるために

アースラ会議室

学園都市組となのは、ユーノ、クロノ、リンディが集まっていた。

クロノ「まったく。勝手にジュエルシールドを半分ずつ分けて…」

壁に寄り掛かりながら、クロノがため息をついた。

なのは「す…すみません」

なのはが謝る。

当麻「何もしようとしなかった奴が、文句言う資格があんのか？」

クロノ「何!？」

当麻の言葉に、クロノは食ってかかる。

リンディ「やめなさいクロノ」

クロノ「…はい」

リンディに言われて、クロノは渋々下がった。

土御門「で?今回の事件について、何かわかったのか?」

クロノ「ああ。エイミィ映像を」

クロノはテーブルに歩み寄った。

エイミィ「はいはい」

スピーカーからエイミィの声が聞こえた。

エイミィの声の後、テーブルの中心に映像が映し出された。

映し出されたのはプレシアだった。

リンディ「あら」

当麻「！」

映像を見て、リンディは少し驚き、当麻は表情を険しくした。

黒子「一体誰ですか？」

クロノ「僕らと同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロツサだ」

映像を見ながらクロノが説明する。

クロノ「専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な大魔導師だったが、違法研究と事故によって放逐された人物です」

なのは「テストロツサって…」

名前を聞いて、なのはが呟いた。

クロノ「あのフェイトという少女はおそらく」

リンディ「プレシアの娘…ね」

リンディが険しい表情で呟いた。なのはは、プレシアの映像を見つめる。

なのは「この人が、フェイトちゃんのお母さん…」

土御門「つまり、この女が今回の黒幕ってことか…」

土御門が腕を組んで言う。

クロノ「プレシア・テストロツサは、違法な素材を使った実験を行い失敗。中規模次元震を起こした事で中央を追放され、それからしばらくの内に行方不明となる。今わかってる事はこれくらいです」

クロノが説明を終える。

リンディ「ご苦労様。貴方達は一休みした方がいいわね」

なのは達に顔を向けて、リンディが言った。

なのは「あ…でも…」

リンディ「特になのはさんは、長く学校休みっぱなしにするのはよくないでしょう」



優しく微笑みながらリンディが言う。

リンディ「一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せた方がいいでしょう」

そう言っつてリンディは席を立った。

リンディ「当麻さん達も、その間は自由に休んでいてください」

インデックス「やった、当麻、どこか行こうよ」

休みと聞いてインデックスははしゃいでいた。

当麻は険しい表情で、ジッとプレシアの映像を見つめた。

プレシア……  
当麻

時の庭園。

フェイトとアルフは、プレシアにこれまでの事を報告しにきた。プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋の中心に立ってる。

フェイト「…ジュエルシードを、全ては回収できませんでした…」

怯えながらフェイトが報告する。

プレシア「…回収したジュエルシードの数は…全部で九つ……」

プレシアは、宙に佇む九つのジュエルシードを見つめた。

フェイト「…ごめんなさい、母さん……」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った。

プレシア「……………残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

フェイト「え…？あ…はい……………」

フェイトは、少し呆然とした顔で返事をした。いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った。

プレシア「何をボーツとしているの？早く行きなさい」

フェイト「…はい……………」

言われてフェイトは部屋を出た。扉の前で待つたアルフは、プレシアの折檻がなかった事を不思議に思いながら、フェイトの後を歩いた。二人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった。

プレシア「ゴホッ…！ゴホッ…！」

プレシアは口を押さえて咳込んだ。自分の手は赤く染まり、床には血の池ができています。

プレシア「……………私には…もう時間がないわ……………」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた。

プレシア「こんな私といっても…フェイトは幸せにはなれない……………」

自分の死を覚悟しながら、プレシアはフェイトの幸せを考えた。

当麻はフェイト達が使っているマンションの部屋にいた。部屋の中に、フェイト達の姿はなかった。

当麻「やっぱ、いないか」

頭を掻きながら部屋を見渡した。

当麻「まあ向こうは管理局と一緒にいる俺とは会いたくねーと思うてるだろうな」

言いながら当麻は、部屋を出ようとした。扉を開けて、一度振り返って誰もいない部屋を見た。

当麻「…またな」

小さく呟いて、当麻は部屋を出て扉を閉めた。

時刻は夕刻。当麻は、高町家を目指していた。

なのは「あっ、上条さん」

歩いていると、なのはと出会った。

当麻「なのは、どうした？」

なのは「心配になって、迎えに来ました。」

無邪気な笑顔で、なのはが答えた。

当麻「そうか、悪いな」

なのは「いいえ」

二人は並んで歩いた。なのはは、隣を歩く当麻を見上げた。

なのは「あの、上条さん」

当麻「何だ？」

なのは「上条さんは…フェイトちゃんとは、どんな関係なんですか？」

当麻を見上げながら、なのはが尋ねた。当麻は腕を組んで考えた。

当麻「何と言つか保護者代理かな」

なのは「保護者代理…ですか？」

当麻「ああ、てか、何でそんな事聞いたんだ？」

今度は当麻が尋ねた。

なのは「えっと、フェイトちゃんの事心配してる当麻さんが、何だかフェイトちゃんのお兄さんに見えたので…」

少し恥ずかしそうに答えるなのは。

当麻「あゝ、それフェイトにも言われたな。そんなに兄妹に見えるか？」

なのは「はい、少しだけ」

当麻となのはは他愛のない話で家に向かって歩いた。

当麻「なのは」

なのは「何ですか？」

呼ばれてなのはは当麻のことを見上げた。

当麻「多分、近いうちにフェイトがまた来るかもしれないんだ。俺は別の世界の住人だ。俺がアイツの支えにはなれないかもしれないけど、なのはならアイツの事、多分一番知ってあげられるかもしれない。だから頼めるか？」

なのは「はい、だって、まだ始まってすらないんですから」

なのはは力強い瞳で当麻を見ていた。当麻は軽く微笑んで、言った。

当麻「そうだな、これはまだ長い長いプロローグだったかもな」

二日後海鳴臨海公園。

時間はAM5:55。

当麻、土御門、黒子、なのは、ユーノは待っていた。なのはは小さ

く深呼吸をした。

なのは「ここなら…いいよ」

なのは「出てきて、フェイトちゃん！」

姿の見えないフェイトに向かって、なのはが叫んだ。朝の冷たい風が、頬に当たる。風に当たって林がざわつく。なのはと当麻は後ろを振り向いた。バルディッシュを持ったフェイトが立っていた。隣には狼形態のアルフがいる。

フェイト「当麻…」

当麻を見つめながらフェイトは呟いた。

当麻「フェイト、安心しろ。俺たちは絶対に手を出さない」

なのははバリアジャケットを着て、レイジングハートを持つ。

なのは「ただ捨てればいってわけじゃないよね？」

片手にレイジングハートを持って、なのはは言葉を繋げる。

なのは「逃げればいってわけでもない」

真っ直ぐにフェイトを見つめる。

なのは「きつかけはジュエルシールド…だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエルシールドを！」

RH「Put out」

なのはの周囲にジュエルシードが現れる。

BD「Put out」

フェイトの周囲にも九つのジュエルシードが出る。

なのは「それからだよ。全部それから」

両手でレイジングハートを構える。フェイトも下段にバルディッシュを構える。

なのは「私達の全てはまだ始まってすらいない…」

当麻とユーノ、アルフが黙って見守る。

なのは「だから、本当の自分を始めるために…」

対峙する二人の魔導師。

なのは「始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

第11話 始まるために（後書き）

六甲水「ついに始まる。始まりの戦い」

土御門「所でプレシアの病気についてはやるのか？」

六甲水「大丈夫です。やりますよ。」



## 第12話 海上での決戦（前書き）

六甲水「ついになのはの極大消滅魔法が発動」

当麻「メドローアか？」

なのは「私、そんな呪文使えません」

## 第12話 海上での決戦

### 第12話 海上での決戦

アースラ。

エイミー「戦闘開始みたいだね」

なのはとフェイトの戦いの様子を、画面で見ながらエイミーが言った。隣にはクロノが立っている。

クロノ「ああ」

クロノとエイミーは、ただ戦いの様子を見守っているだけではない。なのはが戦闘で時間を稼いでる内に、こちらで帰還先追跡をしておくという作戦だ。

クロノ「頼りにしてるんだから、逃がさないでよ」

エイミー「おう！任せとけ！」

エイミーが親指を立てて返事をした。

公園の上空で、激しくぶつかり合う二人の魔導師。

「Photon Lancer」

フェイトの前に複数の金色の魔力弾が現れる。

「Divine Shooter」

なのはも、複数の桜色の魔力弾を出す。

フェイト「ファイア!!」

なのは「シユート!!」

金色の魔力弾と桜色の魔力弾が、同時に発射される。

なのはは、上下左右に飛んで金色の魔力弾を避ける。

フェイトは、追跡してくる桜色の魔力弾を障壁で防ぐ。

フェイト「!!」

フェイトが気付いた時には、なのははもう次の攻撃体勢に入っていた。

なのは「シユート!!」

再び桜色の魔力弾を、フェイトに向かって放つ。

「Scythe For」

バルディッシュを鎌の形に変形させ、自身に迫る桜色の魔力弾を切り裂く。

なのは（フェイトちゃん…やっぱり強い!）

振り下ろされるバルディッシュを避けながら、なのはは思った。

なのは（でも…負けられない！）

距離を取って、再び桜色の魔力弾を放つ。

なのは（フェイトちゃんの為にも…私を信じてくれてる当麻さんの想いに応える為にも…）

揺るがない決意を胸に、なのははレイジングハートを強く握り締めた。

なのは（絶対に負けない！！）

フェイト（最初は、ただ魔力が強いだけの素人だったのに…）

フェイトは自身に迫る桜色の魔力弾を、バルディッシュで切り裂く。

フェイト（…強い！）

フェイトもバルディッシュを強く握り締める。

フェイト（でも…負けられない！）

フェイトは空中で静止した。

フェイト（母さんの為にも…絶対に負けられない！！）

両手でバルディッシュを掴んで、前に構える。フェイトの足下に、巨大な金色の魔法陣が展開された。

当麻「アイツ、大技使うのか？」

当麻達は、地上で観戦していた。

アルフ「マズイ！フェイトは本気であの子を潰す気だ！」

アルフが焦った声で言う。

当麻「っーことは…アレがフェイトの切り札ってヤツか…」

焦るアルフの隣で、当麻が冷静に言う。

空中にいるフェイトの周囲に複数の…いや、無数の魔力弾が佇む。

なのはがレイジングハートを構えようとした時、

なのは「あっ！！！」

なのはの両手両足を、金色の魔法陣が拘束した。

フェイト「ライティングバインド」

フェイトが小さく呟いた。

ユーノ「なのは！今サポートを！」

ユーノが魔法陣を展開しようとした時、

当麻「やめろ、ユーノ」

当麻がそれを制した。

当麻「余計な事はすんな」

ユーノ「余計な事!？」

アルフ「でも当麻…フェイトのアレは本当にマズイんだよ!」

アルフが戸惑いながら言う。

当麻「これはアイツらの決闘だ。そいつを邪魔する事は俺が許さねえ」

今の当麻の言葉には、凄みが加わっていた。アルフとユーノは何も言い返せず、黙って二人の様子を見守った。

なのは（上条さん…ありがとう）

三人の様子を見ていたなのはは、心の中で当麻に礼を言った。

フェイト「アルカス、クルタス、エイギアス…」

その間にもフェイトは、呪文を唱え続けていた。

フェイト「疾風なりし天神よ、今導きの元に撃ちかけ。バリエル・ザリエル・ブラウゼル」

呪文を唱え終える。

フェイト「フォトンランサー・ファランクスシフト」

手を空に掲げ、バインドで拘束されてるなのはを睨み、

フェイト「打ち砕け！ファイア！！」

手をなのはに向けて振り下ろしたのを合図に、無数の魔力弾がなのはに襲い掛かる。無数の魔力弾がなのはに降り注ぎ、爆発する。

ユーノ「なのはは！」

アルフ「フェイト！」

ユーノとアルフが叫んだ。やがて魔力弾を撃ち終える。フェイトは残った魔力を集めて、魔力弾を作る。なのはのいる所に煙が立ち込める。フェイトは魔力弾を片手に、立ち込める煙を見つめる。やがて煙が晴れてくる。

なのは「撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」

煙の中から、ほぼ無傷のなのはが姿を現した。障壁を張って、あの魔力弾の雨を防ぎきったのだ。

当麻「…マジでか？」

流石の当麻も、この時は驚きを隠せず少し顔を引きつらせた。

なのは「今度は…こっちの番だよ」

レイジングハートを突き出すように構える。

なのは「受けてみて…ディバインバスターのバリエーション！」

前方に巨大な魔法陣を展開する。

「Starlight Breaker」

桜色の魔力がなのはの前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成された。

なのは「これが私の全力全開！」

レイジングハートを振り上げた。

なのは「スターライト・ブレイカー!!!」

なのはがレイジングハートを振り下ろすと、巨大な桜色の閃光がフェイトに向かって放たれた。

フェイト「はあ!!!」

フェイトは、片手に持つてる魔力弾を桜色の閃光目掛けて放った。

フェイトの魔力弾は、桜色の閃光に掻き消された。

フェイト「!!!」

驚いたフェイトだが、すぐに障壁を張って防御する。だが、障壁は桜色の閃光の前に簡単に破れてしまう。フェイトは、成す術もなく閃光の中に飲み込まれた。

やがて閃光が収まり、二人の姿が見えてきた。



ユーノ「なのは!」

アルフ「フェイト!!」

なのはは、空中で息を切らし、フェイトはバルディッシュを手放して海に落ちていく。

なのは「フェイトちゃん!」

海に落ちる前に、なのははフェイトを抱き抱え、バルディッシュも掴んだ。フェイトを抱えて、なのはは当麻達の元へ飛んでいった。

フェイト「ん…」

当麻達の元へ着いたところで、フェイトが目を覚ました。

アルフ「フェイト!」

なのは「あつ、フェイトちゃん気がついた?」

アルフとなのはが声をかけた。

フェイト「……………私…負けたんだね……………」

フェイトの表情が暗くなった。

当麻「フェイト」

当麻が声をかけた。フェイトは、当麻に顔を向けた。

当麻「よくやったよお前は。最後まで諦めずに戦ったんだ。恥じる事なんて何もねーぜ」

そう言つて当麻は微笑んだ。

フェイト「当麻……」

当麻の言葉に、フェイトは目に涙を浮かべる。

アルフ「あんた……本当にいい奴だねえ当麻あ……」

当麻の隣にいるアルフは泣いていた。

当麻「何でお前が泣いてんだよ」

と当麻。

「Put out」

バルディッシュからジュエルシードが出てきた。

その瞬間。

フェイト「アアアアアア……」

空が曇り、黒い雲から巨大な紫色の雷がフェイトに降り注いだ。

当麻「フェイト……」

なのは「フェイトちゃん……」

当麻となのはが叫ぶ。

九つのジュエルシードは、雲に出来た歪みの中に消えていった。よろけるフェイトを当麻が抱き抱える。

当麻「プレシァアアアアア!!!」

雲の歪みに向かって、当麻は怒りの叫び声を上げた。

アースラでは、プレシァの居場所を突き止めようとしていた。エイミィが座標を割り出した。リンディが立ち上がる。

リンディ「武装局員、転送ボードから出動！任務は、プレシァ・テスタロッサの身柄確保！」

時の庭園。プレシァ・テスタロッサの部屋。プレシァは、手で口を押さえて咳込んでいた。

プレシァ「ハア…ハア…次元魔法は…もう体が耐えられないわね…」

顔を苦痛で歪ませる。

プレシァ「それに…今のでこの場所も掴まれた…」

プレシァは、隣に映し出されてるフェイトの姿を見つめた。

プレシァ「フェイト…よくここまで戦ったわね……」

フェイトを見つめながら、プレシアは優しく微笑んだ。

プレシア「こんな母さんの為に……今まで、よく頑張ったわね……」

愛おしそうにフェイトを見つめる。

プレシア「当麻……アルフ……フェイトをお願い……」

プレシアは、二人にフェイトの事を託した。

プレシア「さあ……全てを終わらせましょう」

管理局の武装局員が、時の庭園に到着した。

当麻達はその様子をブリッジで見ていた。フェイトは当麻となのはの間で見っていた。局員がフェイトに拘束具をつけようとしたが、

黒子「あら、その子にそんな重たいものを着けた瞬間、外に放り出しますわよ」

と黒子が脅していた。

局員「総員、玉座の間へ進入。目標発見」

時の庭園では、武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた。

局員「プレシア・テストロッサ。時空管理法違反の容疑で逮捕します」

局員「速やかに武装を解除してください」

局員の言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる。局員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る。プレシアは後ろに回った局員を睨みつけた。

当麻「あれ？もしかして、あれって、やばいこのままだと…」

当麻は焦っていた。その様子をフェイトとなのはが見ていた。

フェイト「当麻？」

なのは「上条さん？」

局員が隠し通路を見つけてしまう。そして、アレを見つけてしまう。

当麻「しまった！映すんじゃねエエ！！」

当麻が慌てて叫んだ。だが、もう遅かった。

「！！！？」

映し出された映像に、当麻以外の全員が絶句した。ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された。

なのは「……………」

フェイト「……………」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった。

土御門「おい、かみゃん、あれは一体どういう事だ？」

動揺しながら土御門は、当麻に尋ねた。だが当麻は、土御門には答えず、歯を食いしばっていた。

局員がアリシアの亡骸が入ったケースに近づいた時、

局員「ぐわあああ！！！」

ケースの前に現れたプレシアに弾き飛ばされた。

プレシア「私のアリシアに近づかないで！！！」

局員を睨みながら叫んだ。

局員「う…撃てう！！！」

局員は武器を構えて、閃光を放った。だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された。

プレシア「うるさいわ…！！！」

プレシアは、手を前に突き出した。

リンディ「危ない、防いで！！！」

リンディが叫ぶが、

局員「ぐわああああ!!」

玉座の間に沢山の雷が落ち、局員達は悲鳴を上げた。雷を受けた局員達は、その場に倒れた。

リンデイ「いけない!局員達を送還して!」

リンデイの指示で、局員達はアースラに転送された。局員達は怪我を負ったものの、死者は一人もいなかった。その事に、当麻は疑問に思った。

当麻「おかしいぜ」

インデックス「え?」

当麻の呟きに、インデックスが反応した。

当麻「俺、二回くらいあの雷喰らったけど、あそこまで威力は弱くなかった」

インデックス「どういう事?仮にも大魔導師って名乗ってたんだよね」

当麻「手加減しているのか?もしかして、」

プレシアを見て、当麻は考え始めた。

フェイト「アリ…シア?」

フェイトは目を見開いて、映像に映る自分と瓜二つの少女を見つめ

た。プレシアはゆっくりとアリシアに近寄った。

プレシア「もうダメね…時間がないわ…たった九つのジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかわからないけど……」

プレシアは後ろを振り返った。

プレシア「…フェイト。そこにいるんでしょ？」

フェイト「…」

プレシアに名前を呼ばれて、フェイトは体を小さく震わせた。

プレシア「貴女はね…アリシアの代わりにしようと…私が造ったアリシアのクローンなのよ……」

フェイト「!?!」

驚愕の事実にも、フェイトは信じられないと言った表情をする。

エイミー「…プレシアは最初の事故の時に、実の娘のアリシア・テスタロッサを亡くしているの。”フェイト”と言う名は、当時の彼女の研究につけられてた開発コードです」

エイミーが険しい表情でみんなに話した。

プレシア「よく調べたわね……」

プレシアは、ゆっくりと体をこちらに向けた。



プレシア「フェイト。正直に言うわ……私ね…貴女を造りだした時から、貴女を好きになれなかったの……」

表情を暗くしながらプレシアは語る。フェイトは体をビクツと震わせた。

プレシア「何故、貴女を嫌っていたのか……ある人のお陰でようやくわかったわ。私は貴女を『アリシアの代わり』としてしか見てこなかった……」

ブリッジにいる全員が黙ってプレシアの話を聞いていた。

プレシア「…でもそれは間違い。アリシアの記憶をあげても貴女はアリシアじゃないし、アリシアの代わりでもない…貴女は『フェイト』だもの……」

プレシアは遠い目をしながら話を続ける。

プレシア「フェイト…貴女を『フェイト』という、私の娘として見た時に……私の気持ちは大きく変わったわ……」

フェイトはジッとプレシアを見つめる。

プレシア「ごめんなさいフェイト…今更謝っても許されないのは、わかってるわ……でも…これだけは貴女に伝えておきたいの……」

そこでプレシアは優しく微笑んだ。

プレシア「フェイト…貴女の事が大好きよ」

第12話 海上での決戦（後書き）

六甲水「ついに明かされたアリシアとフェイトの秘密。」

なのは「どっなるの?」

**第13話 ただ悲しませたくない（前書き）**

六甲水「それぞれの思いについての回です。」

黒子「果たしてどうなることだか」

### 第13話 ただ悲しませたくない

第13話 ただ悲しませたくない

プレシア「フェイト…貴女の事が大好きよ」

優しく微笑みながら、プレシアは娘に自分の想いを伝えた。

フェイト「……！！」

プレシアの言葉を聞いて、フェイトは体を大きく揺らした。目からは大粒の涙が零れ、その場に泣き崩れた。

プレシア「アルフ。貴女もいるんでしょ？」

プレシアは、今度はアルフに声をかけた。

プレシア「こんな私が頼めた義理じゃないけど……これからもフェイトをお願い……」

アルフ「プレシア……」

その時、緊急事態のアラームが鳴った。

エイミー「大変！屋敷内に魔力反応多数！」

クロノ「何だ！？何が起こってる！？」

クロノが動揺する。屋敷の床から、様々な形をした無数の傀儡兵が

現れる。

エイミィ「庭園敷地内に魔力反応！しかも50、80と数を増やしていきます！！」

リンディ「プレシア・テストロッサ！一体何をするつもり！？」

プレシアは、アリシアの入ってるケースを固定装置から取り外した。

プレシア「それから、当麻くん、」

当麻「！」

当麻は画面を見上げた。

プレシア「最後に叱ってくれてありがとう。フェイトのことお願いね」

次の瞬間、九つのジュエルシールドが強い光を発した。

局員「次元震です！中規模以上！！」

リンディ「振動防御！ディストーション・シールドを！」

リンディが局員に指示を出す。

エイミィ「ジュエルシールド九個発動！次元震、更に強くなります！」

リンディ「転送可の距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動！」

エイミー「了解！」

指示を受けた局員が動く。

クロノ「規模は更に拡大！このままでは『次元断層』が！！」

『次元断層』とは、いくつもの並行世界を壊滅させる程の災害。当麻は拳を握り締め、手から血が滲み出していた。

局員「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで、あと三十分足らずです！」

局員が焦った声で、報告する。

エイミー「あの庭園の駆動炉も、ジュエルシードと同型のロストロギアです！それを発動させて、足りない出力を補っています！！」

エイミーが説明した。リンディは、顔を険しくした。

当麻「クロノ、お前今からあそこに行くのか？」

クロノ「ああ、このまま放っておくことが出来ない。」

当麻「俺もいく、アイツの幻想は間違っている。俺はそれをぶち殺<sup>わ</sup>したい。」

土御門「かみちゃん、俺もいくぜ。乗りかかった船だぜ、最後までやらないとな」

黒子「私も行きますわ。戦力は多い方がいいですし、」

当麻は右手を握り締め、土御門は笑みを浮かべて、黒子は足についている装備を着けていた。

なのは「あの、私も行きます。フェイトちゃんのお母さん助けたいです。」

ユ一ノ「僕も、駆動炉のエンジンを封印出来るはずだ。」

当麻は、泣き崩れたフェイトの所に行き、頭を撫でた。

当麻「フェイト、お前はここで泣いていていいのか？お前はここで黙ってプレシアが遠くへ行く姿を見て、これから先、ずっと後悔するの？折角、愛してくれるのに、愛してくれる人を無くしちゃうんだぞ。いいのかよ、お前はそれで」

当麻は声を荒らげてフェイトに言った。フェイトは俯きながら言った

フェイト「よくないよ、やっと、始まるのに、始まらずに終わりたくない。だから私は母さんを救いに行く。アルフ、お願い」

アルフ「ああ、」

バリアジャケットに着替え、フェイトは力強い瞳でなのは達を見つめた。

クロノ「これで行くメンバーが決まったな。皆行こう」

第13話 ただ悲しませたくない（後書き）

六甲水「いざ最終決戦へ」

インデックス「所で、私の出番ないよ。」

六甲水「インデックスは戦力外ですから」

インデックス「ひどい」

六甲水「大丈夫。無印終わったら次はASですから、割りと重要な役ですよ」



**第14話始まるための戦い（前書き）**

六甲水「当麻が偉いことに」

当麻「何が起きるんだよ」

## 第14話始まるための戦い

第14話 始まるための戦い

当麻達は、時の庭園に転送された。直後、土御門の顔色が悪かった。

土御門「うう、気分悪い」

黒子「あら、どうしたんですの？」

アルフ「多分転送したときに酔ったんじゃない…」

なのはとフェイトは心配そうに見ていた。

ユーノ「でも、当麻さんや白井さんは何で平気なんですか？」

当麻「前に、来たときあるから、慣れたのかも」

黒子「私は、瞬間移動テレポート1の能力ですので、多分平気みたいですよ」

と当麻達は土御門を見て笑っていた。土御門はまだ気分が悪くなっていた。

クロノ「君たちは、騒いでいるうちに来たぞ。」

クロノが指を指したところには、様々の形の鎧を着た、傀儡兵がわんさかと現れた。

なのは「い…いっぱいいるね。」

なのはは、緊張した表情でレイジングハートを両手で構える。

クロノ「まだ入口だ。中にはもつという」

クロノは、前方の敵を見据える。

当麻「なあ、あれも魔力で操ってるのか？」

ユート「た、多分魔力が動力になっているかもしれない。」

当麻「じゃあ、俺の右手が効くな。よしフェイト達は下がってる。

ここは俺たちがやる」

フェイト「え、でも、」

もう一度、敵の方を向いた。いくら当麻でもこの数相手にするのは無理がありすぎる。

フェイト「当麻一人じゃ無理だよ」

当麻「誰が一人でやるつつたよ。俺たちがやるって言ったんだよ。」

土御門「さーて、モノを壊すのは得意だぜ」

黒子「これぐらいの数、以前スキルアウトの抗争を止めた時の方がまだ多かったですわ」

鋭い目で、前方の敵を見据えた。その瞬間、傀儡兵が襲いかかった。

当麻は、傀儡兵の顔を思いつきりぶん殴った。その瞬間、ガラスが割れるような音がし、傀儡兵はその場で倒れ込んだ。

黒子の方に向かっていった傀儡兵だが、黒子は鼻で笑った。

黒子「そのような武器をレディに向けないでくれないでほしいですわ」

傀儡兵が持っている武器に触れ、傀儡兵の体の中にその武器を移動させ、傀儡兵は爆発した。

土御門「やれやれ、あんまりこれはやりたくないんだけどな、」

と言いながら、魔術を唱え、固まっていた傀儡兵に黒の式をぶつけ、一斉に傀儡兵は爆発した。と同時に土御門の体から血が吹き出した。

ユーノ「土御門さん、」

土御門「いやあ、能力者は魔術が使えなくてな、かみやん、少し休むわ」

当麻「ユーノ、回復魔法でもかけてやってくれ」

ユーノ「わかりました。」

そう言って、ユーノは回復魔法をかけ始めた。そして、数分後傀儡兵が全滅していた。

フェイト「す、すごい、アレだけの数をたった三人で」

クロノ「彼らは本当に人間なのか？」

土御門「いやあ、休んでいる間に綺麗になったな」

黒子「まあ、殆どは私のおかげですけどね」

当麻「まで、俺のお陰でもあるぞ」

なのは「あの、上条さん、手から凄い血が」

そう言っつて、なのはは心配そうに当麻の右手を見ていた。

当麻「めっちゃくちや固かったぞあれ、」

クロノ「しゃべってる時間はないぞ。早く中に入ろう。」

フェイト「でも、当麻の治療が、」

当麻「いや、俺なら大丈夫だよ。ユーノ治療も効かなそうだし、手に何か巻いとけばいいし」

なのは「それじゃあ、これ使ってください」

そう言っつて、なのははハンカチを当麻の右手に巻いてあげた。その様子をフェイトが見て、少し怒っているように見えた。

中に入って走り続ける。

床には所々、穴が空いていて空間が歪んでいる。

クロノ「その穴『虚数空間』だから気をつけて！」

クロノがみんなに叫んで注意した。

黒子「虚数空間？」

黒子が首を傾げた。

クロノ「あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間だ。落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がってはこれない」

クロノの言葉を聞いて、なのはは冷汗を流した。

当麻「なあ、俺の右手でも打ち消せそうだけど、」

クロノ「まあ、君の力なら出来そうだけど、消した瞬間、空間が割れるかもしれないから」

土御門「ようするに絶対に落ちるなよってことぜよ。特に、かみやんは気を付けるように、いつもの不幸でいきなり足元が崩れたりしたら洒落にならからな」

当麻「頼むから不安になるようなこと言わないでくれ。」

前にある扉を開けると、部屋には、入り口以上に沢山の傀儡兵がいた。クロノは上に続く階段を見つけた。

クロノが上に続く階段を見つけた。

クロノ「ここから二手に別れよう」

クロノがみんなに提案した。

土御門「よし。そんなじゃ公平に『ジャンケン』で分けるとすつか」  
クロノ「え？」

土御門の案にクロノは顔をしかめた。

「土御門さん！こんな時にジャンケンなんて…」

土御門「ジャンケン！」

クロノの異議をスルーして、ジャンケンを始める土御門。他のみんなも、戸惑いながらも手を構える。

土御門「ポン！」

当麻「結局、このメンバーかよ。」

フェイト「でも当麻がいるお陰で私あんまり負担かからないよ」

アルフ「いや、なのは達の方が負担がかかるだろうに」

土御門「まあまあ、あっちには白井の奴がいるから安心だにや〜」

当麻とアルフは地上に立っている傀儡兵を倒していた。空にいるのはフェイトとクロノが何とかしてくれていた。土御門は、遠いところで様子を見ていた。

当麻「てか、お前は働け」

土御門「いやあ、魔術使ったら血管が」

当麻「素手で戦ってくれ。てか、お前ある程度自己修復出来るだろ。」

土御門「フェイトちゃん、怪我したら治して」

土御門の間に、フェイトは困っていた。

当麻「てめえ、フェイトに触れてみるぶん殴ってやる」

土御門「うるさい、どうせ、一緒に寝てたりしてたんだろ、この口リコンめが」

当麻「してない。てか、シスコンには言われたくないわ」

喧嘩しながら、襲ってくる傀儡兵を倒していく二人を見て、フェイトは苦笑いをして、アルフとクロノは呆れていた。

最上階、なのはとユーノと黒子は駆動炉のところに行った。駆動炉の前には傀儡兵が大量にいた。

ユーノ「防御は僕が、なのは、封印の方を」

なのは「うん、いつも通りだね」



ユーノ「え？」

なのはの言葉に、ユーノは振り返った。

なのは「ユーノ君、いつも私と一緒にいてくれて、守ってくれたよね？」

ユーノに笑顔を向けながら、なのはが言う。

なのは「だから戦えるんだよ。背中がいつも暖かいから！」

そう言っただけなのはは、レイジングハートを構えた。

黒子「はいそこ、惚気ずに目の前の敵に集中を……」

黒子はイライラしながらなのは達を注意した。なのは達は真っ赤になっていた。

なのは「あ、ご、ごめんなさい。行きます」

黒子「あ、私もお姉さまとあんな感じになりたいですわ。」

アースラ。

リンディが席を立った。

リンディ「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して、次元震の進行を抑えます」

当麻達はプレシアの部屋を目指しながら走っていると、大型の傀儡兵が壁を壊し現れた。

クロノ「でかい、」

フェイト「それにあの障壁は固いよ。」

土御門「それにアレは核が動く限り、動き続けるみたいだぜ。いくらかみやんでもキツイぜ」

当麻「だったら、フェイト、一緒に行こうぜ」

フェイト「え、」

当麻「俺がああの障壁を壊す。お前はあの核を壊せ。いいか？」

当麻はフェイトのことを見つめた。フェイトは力強く頷いた。大型の傀儡兵は当麻達に襲いかかってきたが、クロノは土御門の手を掴み、当麻は傀儡兵の障壁に向かっていった。

当麻「うおおおおお、そんなもので俺たちを倒せると思ってるんじゃないねえー」

右手で障壁を打ち破り、その瞬間、フェイトが、傀儡兵の核を魔法で破壊し、傀儡兵は爆発した。

クロノ「まったく、本当に君たちの能力は凄すぎるよ」

アルフ「フェイトー、当麻ー、怪我ない？」

フェイト「私は大丈夫だけど、当麻の右手がさつきより凄い血が出てるの」

当麻の右手は、皮膚が剥けて、血がドバドバと出ていた。さつきなのはに巻いてもらったハンカチはもう血で真っ赤になっていた。

クロノ「大丈夫なのか、あとは僕たちが何とかするけど、」

当麻「大丈夫、大丈夫、これぐらい、いつもの怪我には入らない」

土御門「そうそう、かみゃんは一回腕ごと切り落とされたからな」

当麻と土御門は笑っていたが、他の三人は苦笑いをしていた。

時の庭園 最下層

プレシアは、アリシアの入ってるケースの隣に立っている。

プレシア「誰か乗り込んできたみたいね…」

上を見ながら、プレシアは呟いた。

プレシア（恐らく管理局の執務官…）

プレシアは短く笑った。

プレシア「でも無駄よ。私を捕まえても…私はもう長くはない……」

悲しい表情を浮かべながら、プレシアはアリシアを見つめた。

プレシア「アリシア…ごめんなさい。こんな事になってしまって…」

庭園が激しく揺れる。

プレシア「フェイト…貴女だけでも幸せになって……」

プレシアがそう言った直後、背後から爆音が聞こえた。

プレシア「!」

慌ててプレシアは、振り返った。

プレシア「きたわね」

執務官が来たと思い、プレシアは杖を構えた。だが、

当麻「ここが、最下層か。」

聞こえた声にプレシアは驚いた。そこにいたのはバルディッシュを持ったフェイトと右手が血だらけになっていた当麻がいた。

フェイト「母さん、」

プレシア「フェイト」

## 第14話始まるための戦い（後書き）

六甲水「というか、当麻の右手は万能すぎですね」

当麻「それでもかなり痛いけどな」

フェイト「あっちではなのはとユーノがラブラブだね」

六甲水「まあ、当麻がフェイトに手を出したら、今の時代捕まりますよ」

第15話 心からの願い（前書き）

六甲水「とあるの2期始まるね」

フェイト「話的には……原作の13刊までだよね」

六甲水「ついに五和が登場です。」

フェイト「こっちには出るの？」

六甲水「まだ出す予定がないです」

## 第15話 心からの願い

第15話 心からの願い

最下層。

フェイトは当麻達と共に、プレシアの前に降り立った。

プレシア「フェイト……どうして来たの……？」

プレシアは驚いた顔で、目の前にいるフェイトを見つめた。

フェイト「母さん……」

フェイトは、ゆっくりとプレシアに歩み寄る。

プレシア「貴女……何しにきたの……？」

目を細めてフェイトを睨む。その目にフェイトは足を止めてしまつ。

フェイト「私は……」

真っ直ぐにプレシアを見つめる。

フェイト「母さんを助けにきました」

プレシア「……！」

フェイトの言葉に目を見開く。体がかすかに震えた。

フェイト「母さん。私は、母さんに笑ってほしかった…」

自分の想いをプレシアに伝える。

フェイト「母さんは…さっき私に笑ってくれた…けど、私が見たかった母さんの笑顔は…あんな悲しそうな笑顔じゃない！」

声が大きくなり、最下層にフェイトの声が響く。プレシアと当麻達は、黙ってフェイトの話聞く。

フェイト「母さんには…楽しそうに…嬉しそうに笑ってほしいの…心からの、本当の笑顔になってほしいの！」

母に伝える娘の想い。フェイトの言葉が、プレシアの心を揺り動かす。この娘は、こんな私をまだ『母さん』と呼んでくれる。こんな私の為に、危険を覚悟してここまで来た。杖を握るプレシアの手が震える。

フェイト「だから、母さん…」

そっと、プレシアに手を伸ばす。

フェイト「一緒に帰ろう」

優しく微笑む。フェイトの言葉に、笑顔に、プレシアは目を見開き涙が出そうになる。フェイトは手を伸ばしたまま、プレシアの答を待つ。

プレシア「……………」



プレシアは顔を俯いて、迷いを振り払おうとする。

プレシア「フェイト…」

顔を上げてフェイトを見る。

プレシア「ごめんなさい」

フェイト「…」

プレシアは杖を掲げる。

杖から紫色の雷が放たれ、フェイトに襲いかかったが、当麻がそれを防いだ。

当麻「プレシア、お前はまた逃げてんのかよ。」

プレシア「え、」

プレシアは杖を下げた。当麻はプレシアに掴みかかった。

当麻「やっと、やっと、始まるんだぜ。これからさきずっと、フェイトの成長を見守れるんだぜ。親子らしいことが出来るんだ。なのに、何でお前は逃げるんだ。」

プレシア「わ、私ではフェイトを幸せに…」

当麻「お前が嫌でもなフェイトはどうなんだ？」

プレシアはフェイトの方を見た。フェイトは涙をこぼしながらプレ

シアを見ていた。

フェイト「わたしは、母さんと幸せに暮らしていきたい。」

プレシア「フェイト……」

二人は抱きついた。当麻とアルフは笑ってみていた。土御門とクロノはアリシアのケースを持ち運ぶ準備をしていた。

土御門「これで、一件落着だにや」

クロノ「だが、プレシアにはまだ裁判がある。しばらくは幸せの家族になれない」

その時、プレシアとフェイトのいる場所が崩れた。当麻は手を伸ばして、フェイトを何とか救出したが、プレシアは虚数空間に墮ちていく、

フェイト「母さん、いやああああああ」

当麻「プレシアああああああー」

当麻は虚数空間に墮ちていくプレシアを追って、飛び降りた。

フェイト「当麻、とうまああああああー」

土御門「く、ここも崩れる。早く逃げるぜよ。」

クロノ「アルフ、フェイトを連れていけ、」

アルフ「あ、ああ、行こうフェイト」

フェイト「う、う、うん」

第15話 心からの願い（後書き）

当麻「おい、虚数空間に落ちたぞ。作者」

六甲水「あえて落としてみた」

当麻「お前な。マジで助かるのか？」

六甲水「まあ、意外と重要なシーンですから」

第16話 一刻の帰還（前書き）

六甲水「免許を持っているブラックジャック登場」

当麻「どんなのだ」

## 第16話 一刻の帰還

### 第16話 一刻の帰還

アースラ ブリッジ

なのは達は当麻とプレシアが虚数空間に落ちたことを聞いた。

なのは「そんな、上条さんが…」

クロノ「虚数空間だ、きつと助かるはずはない。彼の力でも…」

黒子「冷静ですわね。」

クロノ「いやでも冷静になるさ。」

アルフ「フェイト…」

フェイトは瞳に力が無く、ただ呆然としていた。なのははこの時ど  
う声を掛けるか迷っていた。その時、インデックスがフェイトに近  
づいて言った。

インデックス「大丈夫だよ、当麻はきつと無事だよ。」

フェイト「え、」

アルフ「インデックス」

インデックス「当麻はいつも無茶してるけど、ちゃんと帰ってくる

もん。だから今回もきつと、大丈夫」

その言葉を聞いて、土御門も笑顔で言った。

土御門「そうだな、かみやんはきつと戻ってくる。」

フェイトは崩れていく時の庭園を見た。

フェイト（当麻、母さん）

プレシア「ん、ここは、」

プレシアが目覚めた場所は白い部屋だった。よく見てみるとここは病室らしい。そこにカエルの顔をした医者がやってきた。

冥土帰し「おや、目覚めたかな？」

プレシア「あなたは…」

冥土帰し「驚いたよ。いきなり病院の前に現れたんだから、そうそう僕はここの医者だ。そして、ここは学園都市の病院だよ」

プレシア「学園都市？そうだわ、彼は？あのツンツン頭の」

その間に冥土帰しは笑顔で答えた。

冥土帰し「彼なら、隣の部屋で寝ているよ。右手がボロボロでね、治療をしてあげたよ。あと君は病気だね。」

プレシア「そうよ、私は不治の病にかかってるわ。もう長くは…」

プレシアが言ったことに医者は不思議そうな顔をしていた

冥土帰し「いや、君の病気だけど、不治の病ではないよ。」

プレシア「え、」

プレシアは驚いた。回復魔法も効かず、どんな治療法もワクチンも無いはずなのに…これは不治の病ではなかったなんて…

冥土帰し「内科は専門外だけど、君の病気は何年か前にワクチンが開発されていてね。投与した結果、治るよ」

治ると聞いて、プレシアの眼から涙がこぼれた。フェイトと一緒に幸せに暮らせる。ただそれだけが頭の中に入った。

冥土帰し「これ、君の薬だ。毎日飲むように、」

そう言つて、薬を受け取ったプレシア、するとだんだんと体が透けていった。

プレシア「こ、これは、」

冥土帰し「どうやら、君たちがいきなり現れる前に何かの原因でこちらの世界に来たみたいだね。」

プレシア「あなた、私達が別の世界から来たことを…」

冥土帰し「古い知り合いに昔、聞かされたんだよ。別の世界がある



ことを…」

プレシア「あの、ありがとうございます。これで私は…あの子と一緒に始められる。」

冥土帰し「そうかい、またどこかで…」

プレシアと隣で眠り続けている当麻は一瞬で消えた。部屋に残されたのは冥土帰しだけだった。

アースラ フェイトの部屋

黒子たちの要望でフェイトは一般の居室にいた。

フェイト「母さん、当麻、」

フェイトはきつと二人が戻ってきてくれることを信じていた。アルフ達はしばらく一人にした方がいいと思い、食堂にいた。その時だった。まばゆい光がフェイトの部屋を照らした。

フェイト「な、なんなの？」

光が止むと、そこにはプレシアと当麻がいた。

プレシア「う、ここは、元の場所に戻ったの？」

当麻「ん、あれ？ここ、アースラ？あれ？」

フェイト「か、かあさん？」

プレシア「え、フェイト」

プレシアを見て、フェイトは泣きながらプレシアに抱きついた。プレシアも泣いていた。当麻は何があったのか分からなかったが、二人の姿を見て、微笑んだ。

当麻達が帰ってきてから二日後、クロノとリンディと土御門と当麻とプレシアが司令室にいた。

クロノ「それで、何で君たちが虚数空間に落ちて無事なんだ？」

プレシア「分からないわ？あの時、虚数空間に落ちたと思って、起きたら知らない病室にいたのよ。」

土御門はプレシアが持っていた薬の袋を見た。

土御門「こりゃあ、学園都市の処方箋だにゃ、一体どこで」

プレシア「そういえば、あのお医者さん、ここは学園都市の病院だって言ってたわ。」

土御門「医者？どんなのだ？」

プレシア「えっと、なんというか、カエルみたいな」

土御門はプレシアの話を聞いて、驚いた。学園都市でカエルみたいな医者は一人しかいない。

土御門「冥土帰しか、それならかみやんの治療も完璧すぎるのも頷

ける」

クロノ「冥土帰しとは一体誰なんです？」

クロノの質問に土御門は険しい顔をして言った。

土御門「俺たちの世界では、凄い腕前の医者だ。あの人に助けられない人はいないからな。でも、何で二人は学園都市に……」

当麻「あの〜、多分だけど、」

当麻は気まずそうな感じで手を上げた。

リンディ「あら、なにかしら」

当麻「多分なんだけど、俺、プレシアを追って、虚数空間に飛び込んだ時に、右手で虚数空間を触ったからだと思っただけど、」

土御門「なるほどな、虚数空間に触って、空間が一時的に学園都市に繋がっちゃうって、学園都市に来たと、不幸中の幸いっつう奴だな」

土御門は笑いながら言ったが、リンディとプレシアは当麻の右手の力に驚きを隠せなかった。クロノは驚きつつも呑気に笑っている土御門を見て、呆れていた。

クロノ「全く、君たちは、あと、プレシア・テストロッサ、君には次元断層を起こした罪がある。多分、もう二度と牢屋から出れないと思う」

険しい表情でクロノが言った。リンディも険しい表情をしていた。

当麻と土御門は黙って話を聞いていた

プレシア「そうね、フェイトには？」

リンディ「あの子は、一応重要参考人になってるけど、罪は軽いわ」

プレシア「そう、リンディさん、お願いが……」

プレシアが何か言おうとした瞬間、当麻と土御門が同時に立ち上がった。

土御門「おっと、ここらでプレシアの弁護させてもらうぜ」

急に言われて、クロノとリンディとプレシアは何が何なのか分からなかった。

クロノ「な、べ、弁護って」

土御門「まずは、プレシアが次元断層を起こしたことなんだけど、ありゃあ、事故だ」

クロノ「な、何だって、でも、あれはプレシアが起こしたんじゃない……」

クロノの間に当麻が申し訳なさそうに答えた。

当麻「実はさ、ジュエルシード一つ、右手で触って壊れてるんだよ。多分それが暴走して起きたんじゃないのか？」

リンディ「あら、そんな報告受けてないわよ。」

当麻「言いづらかったんだよ。あの後、フェイトに確かめてもらったけど異常なかったみたいだから」

クロノ「それに、ロストロギア認定されているのを集めよう…」

土御門「それだったら、なのは達もロストロギア認定されているのを集めてたじゃないか。あいつらは犯罪にならないのに、プレシア達が罪になるのは少しおかしいぜ」

リンディ「それじゃあ、局員に向かって攻撃をしたのは？」

当麻「あれは、無断侵入した局員が悪い。勝手に人の家漁って、そりゃあ、攻撃したくなるわ。プレシアの行動は自己防衛のためだ」

クロノ「だけど、次元断層が…」

リンディ「ふふ、いいわ、報告書書きなおすわ。」

クロノ「艦長、でも、」

リンディ「ジュエルシードが壊れていて、そのジュエルシードが原因で暴走したのだから、誰も悪くないわ。対応が遅れた私たちの方が悪いみたいだし、」

プレシア「じゃあ、」

リンディ「ええ、罪が軽くなるわ。しばらく管理局の保護の中になるけど、フェイトさん達と一緒に暮らせるわ。」

プレシア「ありがとうございます」

プレシアは涙を流しながらお礼を言い、クロノはまだ納得していない感じだった。

当麻「とりあえず、一件落着だな」

土御門「そうだな、装置もあと少し完成みたいだし、もうすぐ帰れるな」

第16話 一刻の帰還（後書き）

六甲水「まさかのプレシアの病気が治ります。」

ユート「というか、どれだけ凄いですか学園都市の技術は」

六甲水「まあ、医術関係は冥土帰しが最強ですから」

クロノ「次で無印は終了か？」

六甲水「はい、次で無印は終わり。ちょっと番外編を入れますね」

第17話 また会う日まで（前書き）

六甲水「当麻達が学園都市に帰りますね」

フェイト「ちょっと寂しいかも」

六甲水「いやいや、フェイトにはなのはという妻がいますよ。」

フェイト「え？」

アルフ「というか、カップリングネタかよ。というか、フェイトは夫か」

六甲水「どちらも妻ですけどね」



## 第17話 また会う日まで

第17話 また会う日まで

アースラ 食堂

学園都市メンバーは食堂に集まっていた。

当麻「装置つてあとどれぐらいで完成するんだ？」

土御門「そうだにゃ〜、明日辺りには完成するな、」

当麻「そうか…あいつとお別れか…」

その言葉に、土御門が反応した。

土御門「なんや、かみやん。まさか、フェイトのこと好きなのか？」

おまわりさーん、ここに幼女好きの少年がいますよー」

インデックス「とうま…そんな趣味があるんだ…」

黒子「最低ですわね。女たらしでロリコンなんて…」

当麻「待て、何で俺がフェイトのこと気にしたらロリコン扱いするんだよ。」

土御門「でも、一緒にいたとき何かしたんだろ？」

当麻「よし、少し話しあおうか。」

その後、当麻と土御門の軽い喧嘩が始まったが、あとでやってきたフェイトとなのはに止められた。

当麻とフェイトとなのはは一緒にアースラのキッチンにいた。理由は…

当麻「それじゃあ、約束通り料理教えるか」

フェイト「うん、」

なのは「でも、上条さんが料理出来るなんて驚きました。」

当麻「まあ、一人暮らししてたし、それにインデックス自体料理出来ないからな。基本料理は俺が作ってるんだ。なのはは？」

なのは「私はよく手伝ってましたから、」

フェイト「私、あんまり出来なくて…一応基本は知ってるんだけど…」

フェイトは恥ずかしそうに言った。

なのは「にやはは、大丈夫だよ。私も教えてあげるから、」

フェイト「本当？」

フェイトは顔を真赤にしていた。なのははニコニコと笑っていた。当麻はそんな二人を見て…

当麻「フェイト、よかったな、友達ができて」

フェイト「え、でも、私たちまだ友達じゃないよ」

当麻「そうなのか？」

当麻はなのはの方を見た。

なのは「ねえ、フェイトちゃん。友達になる」

なのはは真剣な表情でフェイトの方を向いて言った。

フェイト「でも、私、友達出来た事ないから…どうすれば、友達になれるか…」

なのは「簡単だよ。名前を呼べばいいの」

フェイト「名前？」

なのは「うん。君とか貴女とかじゃなくて、その人の名前を呼んであげて。全部そこから始まっていくから」

優しく微笑んでるのはを、フェイトは見つめる。

フェイト「……なのは…は」

目の前にいる少女の名前を呼ぶ。

なのは「うん」

なのはは頷く。

フェイト「なのはは……」

もう一度名前を呼ぶ。

なのは「うん」

なのはは頷く。

なのは「もう私とフェイトちゃんは友達だよ」

笑顔でなのはが言う。フェイトは少し照れた顔をする。それからフェイトは優しく微笑んだ。

フェイト「ありがとう、なのは」

ハッキリと、なのはの名前を呼んだ。それを聞いたなのはは、嬉しそうに笑顔で頷いた。

なのは「うん！」

それから二人は笑顔で互いの手を握った。互いが離れないように強く。

当麻「よかったな、フェイト。」

当麻は二人を見て、微笑んだ。

当麻「じゃあ、始めるか」

次の日

学園都市メンバーが帰る日だった。見送りにはなのはとフェイトとプレシアとアルフとアースラメンバーがいた。

リンディ「もうお別れね。」

土御門「そうだにや、けつこう迷惑かけちまったな」

土御門は笑いながらいった。

クロノ「全くだ、君たちの所為で色々大変だったんだぞ」

黒子「あら、でも事件は解決したんですからいいじゃない。」

クロノ「まあ、そうなんだけどな、」

なのは「インデックスさん、またあそびにきてください」

インデックス「うん、またこっちの世界に行ってみたい」

フェイト「当麻、次は何時会えるの？」

フェイトは俯きながら言った。当麻は困った顔をしていた。

当麻「分からない。土御門が言うには、またこっちに行けるのは暫く無理なんだ。」

土御門「早くても二週間や、それにここであつちでは時間の流れが違ふみたいだからな、こつちの時間では大体冬ぐらいになるな」

フェイト「そうなんだ……」

当麻「フェイト、別に永遠のお別れじゃないんだ。しばらく会えないけど、また会える」

フェイト「当麻……」

フェイトは当麻に抱きついた。当麻そんなフェイトに頭を撫でた。

土御門「かみやん、そろそろ」

当麻「ああ、みんなまたな」

当麻達の体はダンダンと消えて行き、完全に消えた。フェイトはずっと泣いていた。

フェイト「とう……当麻……」

なのは「フェイトちゃん、」

リンディ「フェイトさん、これ、土御門さんが……」

リンディが持っていたのは無線機だった。

フェイト「これは？」

リンディ「これで、あつちの世界と連絡が取れるわ。寂しくなった

らかけてあげなさい」

フェイト「はい、」

学園都市

当麻「帰ってきたな」

当麻達は久しぶりの学園都市に戻ってきた。

土御門「さてと、俺は報告しに行ってくるぜ。あと装置の調整も任せとけ」

そう言っつて、土御門はフラッとどこかへ行った。

黒子「私は、これから報告と説教されに行ってきますわ。またどこかで」

そう言っつて、黒子はどこかへテレポートした。

インデックス「とうま、おなかすいた」

当麻「そうだな、久しぶりに外食でもするか」

インデックス「うん、」

無印終了





第17話 また会う日まで（後書き）

六甲水「再び魔術と科学の世界に帰還。」

当麻「所で、俺達の時期的にはどこらへん何だ？」

六甲水「原作の12巻前辺りです。次は……番外編。その次に新シリーズです。」

**番外編 とある男たちと少女たちの会話（前書き）**

六甲水「番外編は、前書きとか後書きに登場したあるキャラが登場」

## 番外編 とある男たちと少女たちの会話

番外編 とある男たちと少女たちの会話

六甲水「番外の世界へようこそ。ゲストはとある魔術のなのはから当麻とフェイトとなのはと土御門です。さらにけいおん I Fストーリーから、雪那と小雪と梓が登場」

雪那「何でいきなり、番外編に登場なんだよ。作者」

六甲水「面白そうですから、それに意外と雪那と小雪はお気に入りに入りました、梓はけいおん！！で1・2位を争うぐらいの好きなキャラですから」

梓「そんな理由なんだ」

なのは「よろしくお願いします」

フェイト「よ、よろしくお願いします」

小雪「よろしくね。なのはちゃん。フェイトちゃん。上兄と土兄も」

土御門「礼儀正しい子だにや。まあ、舞夏に負けるけどな」

雪那「なあ、上条。こいつシスコンか？」

当麻「ああ、超が付くほどのシスコンだ」

土御門「うるさいぜ、ロリコン供」

当麻&雪那「誰がロリコンだあああああああ」

土御門「実際、小さな女の子に手を出してるんじゃない」

雪那「待ちやがれ、梓は同い年だ。確かに背は小さし、胸も小さいけど。ロリコンの定義には入らない。」

当麻「それに俺は小さい女の子に興味はない」

フェイト「なのは、ちょっと目を閉じてて」

なのは「えっ、」

梓「私の分もお願いできるかな？」

フェイト「いいよ。」

小雪「うわあ、二人とも笑顔なのに怖いよ」

なのは「ねえ、まだあけちゃ駄目？」

フェイト「少し寝ていてね。三人とも」

当麻&雪那&土御門「ぎゃあああああああああ」

六甲水「あそこのバカ三人は置いといて、今回のとある魔術のなのはシリーズに付いてですが、聞きたいことある人」

小雪「はい、何でこの二つのコラボを書いたの？」

六甲水「まあ、面白そうだからかな。意外と魔術と魔法のコラボとか面白そうだし、」

なのは「でも、基本は無印の話なんだね。Asの話はやるの？」

六甲水「やりますよ。多分Strikersまでやって、出来ればVividとかもやりたいですし、出したいキャラがいるので」

梓「そういえば、こつちの話もそうだけど、とある魔術のなのはは上げるの早いのは何で？」

六甲水「こつちはもともとストックが一杯ありますから、一杯上げることができる。けいおんは、頭の中にストックがありますから」

小雪「何時になったら梓姉と雪兄がくつつくの？」

六甲水「うーん、好感度はお互いに高いですけど、きっかけがないから二人とも告白できてないから」

梓「じゃあ、きっかけは考えてるの？」

六甲水「それは、考えてるけど、まだ時間かかります。」

なのは「そういえば、この話も一応恋愛なんだっけ」

六甲水「まあ、フェイトは当麻に惚れてますから、当麻はニブチンですけど」

当麻「誰がニブチンだ」

小雪「あつ、復活した」

雪那「それにしても、当麻はフェイトの裸見過ぎだ。」

梓「確かに、ユーノはしょうがないけど、」

当麻「不可抗力だ。」

六甲水「安心してください。雪那に梓。君たちも裸まではいかないけど、似た様な感じやるから」

雪那&梓「何をやらされるんだ」

土御門「そういえば、雪梓の話はメインだけど、憂霧の話もやるのか？」

六甲水「やりますよ。雪梓の話にちよつこと入れて、憂霧の話も別の方で……」

当麻「とりあえず、雪梓の話終わらせろよ。」

六甲水「じゃあ、今回はここまで、次はAsの話が始まります。お楽しみに。それと、前書きと後書きにけいおんIFストーリーのキヤラが出ますから」

**番外編 とある男たちと少女たちの会話（後書き）**

六甲水「以上、番外編でした」

第18話 再び戦いの世界へ(前書き)

六甲水「第2部スタート」



## 第18話 再び戦いの世界へ

### 第18話 再び戦いの世界へ

なのは達の世界。

6月4日。AM0:00。

海鳴市の中丘町。八神家で、ある魔導書が起動した。一人の少女の前で本は輝きを放ち、少女の中から小さな光の玉が出て、本に触れて強い光を放った。

光が収まると、少女の前に、見知らぬ四人の男女がいた。女性三人は黒いワンピースで、男性は黒いタンクトップとパンツ姿だった。

シグナム「『闇の書』の起動。確認しました」

ピンク色の髪でポニテールの女性が言った。

シャマル「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございませす」

次に金髪の女性が言う。

ザフィーラ「夜天の主の下に集いし雲」

白い髪で獣の耳と尻尾を付けた逞しい肉体の男性が言う。

ヴィータ「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みにした女の子が言った。

四人とも片手と膝を床につけ、頭を下げて主の命令を待った。しかし、いつまで経っても命令が来ない。焦れた赤い三つ編みの女の子が、少女に近寄ってみた。

ヴィータ（ねえ。ちょっとちょっと）

女の子は念話で仲間と話し掛けた。

シャマル（ヴィータちゃん、静かに）

金髪の女性が、赤い三つ編みの女の子『ヴィータ』に注意する。

ヴィータ（でもさあ）

シグナム（黙っている。主の前で無礼は許されん）

ポニテールの女性もヴィータを注意する。

ヴィータ（無礼ってかさあコイツ…）

ヴィータは倒れてる少女の顔を覗き込んだ。

ヴィータ（気絶してるように見えんだけど）

シャマル「ええっ!?!」

気絶した少女の名は、八神はやて。

両親を早くに亡くして、一人暮らしをしている足が不自由な少女だ。

突然、目の前に得体の知れない人達が現れて、ビックリして気絶してしまったのである。

守護騎士達は慌てて、はやてに駆け寄った。

学園都市 学校の屋上

当麻と土御門は屋上で無線機を使って話していた。

当麻「へえ、囑託の魔術師か。やっぱりそっちの方目指すんだな」  
フェイト「うん、やっぱり、迷惑かけちゃったから、その罪滅しと恩返しかな。」

当麻「そうか、そういえば、プレシアの容態は？」

フェイト「大丈夫だよ。たまに土御門さんが装置使って薬送ってくれるから、今では御飯作ってくれるんだ。」

フェイトは嬉しそうに話していた。当麻もフェイトの嬉しそうな声を聞いて、微笑んだ。

アルフ「ねえ、当麻、いつになったらこっちに来てくれるんだ？」

今度はアルフの声が聞こえた。

当麻「もう装置自体は安定してるけど、俺と土御門が補習あって、何時になるか…」

アルフ「当麻って意外と馬鹿なんだね」

当麻「ちげえよ、能力関係で引っかかてんだ。」

フエイト『もう、アルフ、当麻からかつちゃダメだよ。』

当麻達は平和そうに過ごしていた。

八神家。

はやて「そっか。この子が闇の書ってもんなんやね」

車椅子に座り、手に闇の書を持ちながらはやてが言った。

シグナム「はい」

ポニテールの女性が答える。

はやて「物心つく頃には棚にあったんよ。綺麗な本やから、大事にはしてたんやけど……」

言いながら車椅子を動かして、棚の前に移動する。

シヤマル「覚醒の時と眠ってる間に、闇の書のを聞きませんでしたか？」

金髪の女性が尋ねた。

はやて「私、魔法使いとちゃうから、漠然とやったけど……あ、あった」

答えながら、はやては探し物を見つけた。

はやて「わかった事が一つある。闇の書の主として守護騎士みんな

の衣食住、キツチリ面倒見なアカンゆうことや」

シグナム「え？」

はやての言葉に、ポニテールの女性がポカンとなる。

はやて「幸い住むトコはあるし、料理は得意や。みんなのお洋服、買<sub>い</sub>うてくるからサイズ測らせてな」

そう言つてはやては、手に持つてるメジャーを伸ばした。はやての少しズレた考えに、守護騎士達は呆然とする。

はやて「ほんならまず…えつと……」

ポニテールの女性を見つめながら、はやてが悩む。

シグナム「私はベルカの騎士ヴォルケンリッターが将。『剣の騎士』

シグナムと申します」

ポニテールの女性、シグナムが自己紹介した。

ヴィータ「私は『鉄槌の騎士』ヴィータ」

赤い三つ編みの女の子、ヴィータも自己紹介した。

シャマル「私は『湖の騎士』シャマルです」

金髪の女性、シャマルがヴィータに続いて自己紹介した。

ザフィーラ「『盾の守護獣』ザフィーラ」

最後に獣の耳と尻尾がある男性、ザフィーラが名乗った。

はやて「ほんなら、シグナムからサイズ測ろうか」

笑顔ではやてが言う。はやての、これまでの主とずいぶん違った接し方にシグナム達は戸惑ったが、悪い気はしなかった。

時は流れ。12月1日。

時空管理局艦船アースラ内。

エイミィ「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

リンディィ「ん？予定は順調ね」

砂糖とミルクの入ったお茶を飲みながら、リンディィ・ハラオウンは頷いた。

エイミィ「やっと私達も一休みできますね」

リンディィ「そうねえ」

エイミィ「レティ提督の方は大変みたいですけど…」

リンディィ「一級搜索指定のロストログアで、搜索担当班は大変みたいね」

リンディィはため息をついた。

アースラの戦闘訓練室。

フェイト・テストロッサとアルフ、クロノ・ハラオウンの三人が戦闘訓練を終えた。

アルフ「はあ、疲れたあ」

背伸びをしながらアルフが訓練室を出た。その後ろをフェイトとクロノが歩く。

フェイト「アルフ、クロノ。お疲れ様」

アルフ「フェイトもお疲れ」

クロノ「ああ、お疲れ」

三人は汗をタオルで拭きながら廊下を歩いた。

クロノ「じゃあ僕はシャワーを浴びてくるよ」

フェイト「うん」

フェイト達と分かれて、クロノはシャワー室へ向かった。

プレシア「フェイト、アルフ」

廊下の向こうから、プレシア・テストロッサが二人に声をかけた。

フェイト「母さん」

二人はプレシアに駆け寄った。

プレシア「二人ともお疲れ様。おやつ作ったんだけど、食べる？」

フェイト「うん！」

アルフ「わーい！」

二人は喜びながら、プレシアと一緒に部屋に向かった。部屋に入ったら三人は、おやつを食べながら話をしていた。

プレシア「上条くん、何だって？」

フェイト「補習があつて、来るのが遅れるって」

アルフ「まったく、当麻は、右手の力がすごいのに、頭が悪いなんて…」

フェイト「アルフ、当麻の右手は特殊で、能力関係が上手くいかないだけだよ。」

フェイトは少し苦笑いしながら言った

プレシア「そうね、前、リンディさんから聞いたけど、右手の所為で幸運も消しちゃってるみたいなのよ」

アルフ「だから、不幸な目にあつてるのか」

アルフとプレシアは笑っていたが、フェイトは少し寂しそうにして



た。

フェイト（当麻、待ってるからね）

12月2日。

海鳴市の市街地。

高町なのはは、謎の襲撃者に襲われていた。襲撃者はヴィータ。赤いドレスのような恰好で、手にはハンマーのような物を持っている。なのはもバリアジャケットを着て、レイジングハートを構える。ヴィータは鉄球を上に向けて、なのはに向かった鉄球をハンマーで打った。障壁を張ってなのはは、鉄球を防いだ。同時に二つの桜色の魔力弾を出した。

ヴィータ「どらああああ!!」

ハンマーを振り下ろしながら、ヴィータがなのはに迫る。なのはは横に飛んで、ハンマーをかわした。

なのは「いきなり襲い掛かれる覚えはないんだけど…!!」

空中で止まって、ヴィータに向き直る。

なのは「どこの子!? 一体なんでこんな事するの!?!」

大きな声でヴィータに理由を尋ねる。ヴィータは黙って指の間に、新たな鉄球を出す。

なのは「教えてくれなきゃ、わからないってばア!!」

そうやってなのはは、先ほど出した二つの魔力弾『デイベインシューター』を操作して、ヴィータの背中目掛けて放った。ヴィータは一発目を避けて、二発目を障壁で防いだ。

ヴィータ「このやるおおおお!!」

ヴィータは怒りながらハンマーを振り上げて、なのはに襲い掛かる。振り下ろされるハンマーを、なのはは後ろに飛んでかわした。レイジングハートをシューティングモードにして、距離をとる。

なのは「話を!」

レイジングハートを構える。

なのは「聞いてっばア!!」

ヴィータに向かってデイベインバスターを放つ。デイベインバスターはヴィータの左側を掠った。その時に、ヴィータがかぶっていた帽子が落ちてしまった。落ちていく帽子を見ながらヴィータは怒り、なのはを怒りの形相で睨んだ。睨まれたなのはは、少したじろいだ。ヴィータは、足下に赤い魔法陣を展開する。

ヴィータ「グラーファイゼン!カートリッジロード!!」

ヴィータが叫んだ後、ハンマーがガシャンと撃鉄を打った音を立てて、ハンマーの形が変わった。

なのは「え...え?!?」

ハンマーの形が変わって、なのはが驚く。ハンマーは片方の先の部分  
が尖って、もう片方の面は噴射口みたいだった。

ヴィータ「ラケーテン！」

片方の面がジェット噴射して、ヴィータは回転する。回転の勢いを  
使って、なのはに襲い掛かる。なのははすぐに障壁を展開するが、  
簡単に破られ、レイジングハートに直撃してしまう。

ヴィータ「ハンマー……！」

ヴィータはハンマーを振り抜き、なのははビルに向かって吹き飛ば  
される。

なのは「ああああ……！」

窓ガラスを破って、ビルの中に突っ込んだ。埃や煙が立ち込める中、  
なのはは咳をしながら立ち上がった。

ヴィータ「でええええい……！」

ハンマーを構えたヴィータが、突っ込んでくる。再び障壁を張って  
防ぐ。

ヴィータ「ぶち抜けエエエ……！」

GA「了解」

ヴィータの叫びに、持っているハンマーが応えると、障壁は破られ  
た。バリアジャケットも破壊され、なのはは後ろに吹き飛び、壁に

叩きつけられる。ヴィータがなのはに近づく。なのはは、なんとか傷ついたレイジングハートをヴィータに向ける。なのはの前でヴィータはハンマーを振り上げる。

なのは（こんなので…終わり？嫌だ……ユーノ君…クロノ君…上条さん…フェイトちゃん…！）

なのはは固く目を閉じた。直後、金属同士がぶつかる音が前で響いた。なのはは、ゆっくりと目を開けて恐る恐る前を見た。そこには黒いマントを羽織って、自分を護っているフェイトの姿があった。

ユーノ「ごめんなのは、遅くなった」

横から声をかけられて、なのはは見た。

なのは「ユーノ、君…」

隣にいたのは、ユーノ・スクライアだった。

ヴィータ「く…！仲間か！？」

ヴィータはフェイトから距離をとった。

フェイト「友達だ」

## 第18話 再び戦いの世界へ（後書き）

六甲水「現れた新たな敵と、救援に駆けつけたフェイト達、そして、  
当麻たちは」

第19話 最高の援軍（前書き）

六甲水「当麻たちがついに、」

## 第19話 最高の援軍

### 第19話 最高の援軍

バルディッシュを鎌に変形させ、構えながらフェイトが答えた。

フェイト「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

ヴィータ「なんだテメエ？管理局の魔導師か？」

ハンマーを構えながらヴィータが睨む。

フェイト「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ」

一歩前に踏み出す。

フェイト「抵抗しなければ、弁護の機会がキミにはある。同意する  
なら武装を解除して」

バルディッシュを構えながら、一応武装の解除を促す。

ヴィータ「誰がするかよ！」

ヴィータはビルの外へ出た。

フェイト「ユーノ、なのはをお願い！」

ユーノ「うん！」

すぐにフェイトは、ヴィータの後を追った。残ったユーノは、なのはに回復の魔法をかける。

空中でヴィータとフェイトが対峙する。

フェイト「バルディッシュ」

フェイトは、バルディッシュの金色の魔力の刃をヴィータに向かって放った。ヴィータも四つの鉄球をフェイトに向かって打ち放った。ヴィータは障壁を張って魔力の刃を防いだ。フェイトは鉄球をかわすが、追尾型の鉄球はフェイトを追い続ける。その時、アルフがヴィータに拳を放った。ヴィータがアルフに意識を向けた瞬間、フェイトは上に避けて鉄球同士がぶつかった。フェイトとヴィータがデバイスで打ち合う。十数回打ち合って、フェイトが一旦離れる。その直後、アルフがバインドでヴィータの動きを止めた。

ヴィータ「く…！」

ヴィータが歯を食いしぼる。

フェイト「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えてくださいよ」

ヴィータにバルディッシュを向けながら言った。その時、突如フェイトの前に剣を持ったシグナムが現れた。剣を横薙ぎに振り、フェイトはバルディッシュで防ぐが後ろに飛ばされる。

ヴィータ「シグナム」

ヴィータが呟いた。



ザフィーラ「おおおお!!」

別方向からザフィーラがやってきて、アルフに蹴りを放った。

アルフ「ああっ!!」

アルフは腕で防御するが、吹き飛ばされてしまう。

シグナム「レヴァンティン。カートリッジロード」

シグナムの持つ剣が撃鉄を起こす。直後、剣が炎に包まれた。

シグナム「紫電一閃!!」

フェイトに向かって剣を振り下ろす。バルディッシュで剣撃を防ごうとする。バルディッシュは真つ二つに斬れてしまった。シグナムが再び剣を振り下ろす。フェイトは障壁を張って防御する。フェイトはビルの屋上に叩きつけられた。

アルフ「フェイト!!」

アルフがフェイトの元へ行こうとする。が、ザフィーラが行く手を阻む。

アースラ内。

結界によって、画面に現地の様子が映らない。局員達が結界の解析を急ぐ。

クロノ「術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃない」

エイミー「そうなんだよ」

砂嵐の画面を見つめながら、クロノは表情を険しくし、エイミーは焦りの表情を浮かべる。

二人の後ろで、プレシアが心配そうに画面を見つめてる。現地の子がわからなくて、プレシアの不安は大きくなる一方だった。

プレシア「フェイト…アルフ…」

プレシアは意を決して、走りだした。

プレシア（私はまだ自由に動くことができない、けど、あの人達なら）

プレシアが向かった先にあったのは、転送装置だった。

シグナムはヴィータの前に浮かんだ。

シグナム「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

ヴィータ「うっせーよ。こっから逆転するところだったんだ！」

シグナム「そうか。それは邪魔したな」

そう言っただけでシグナムは、ヴィータにかかっているバインドを破壊した。

シグナム「だが、あまり無茶はするな。無茶をして怪我でもしたら、我らが主が心配する」

ヴィータ「わーってるよ！」

ヴィータはそっぽを向いてしまう。

シグナム「ほら。落とし物だ」

シグナムはヴィータの頭に、先ほど落ちた帽子をかぶせた。ちなみに破損はシグナムが直してある。

ヴィータ「…ありがとう。シグナム」

ヴィータは俯きながら礼を言った。ユーノも加わって、状況は三対三になった。シグナムは、フェイトが落ちた屋上に降り立つ。倒れてるフェイトに近づいた。

フェイト「く…！」

フェイトは、目の前に立つシグナムを見た。

シグナム「じつとしている。抵抗しなければ、命までは取らない」

そう言っつて剣を上に掲げる。

フェイト「だ…誰が…！」

足に力を入れて立ち上がろうとする。

シグナム「いい気迫だ。だが…残念だがここまでだ」

シグナムは剣を振り下ろす。フェイトは目を閉じた。頭に浮かんだ

のは一人の男。

フェイト（当麻！）

とても強く、誰かのために戦うことを教えてくれた人。

直後、ひとつの影がフェイトとシグナムの間に現れた。

シグナム「何、」

フェイト「え、」

そして、その影はシグナムの剣を右手で弾き、左手でシグナムを殴った。

シグナム「くっ」

そこには、学生服を着たツンツン頭の少年がいた。フェイトは目を見開いて驚いた。フェイトはこの少年を知っている。

当麻「よお、」

男はフェイトに振り返った。

当麻「久しぶりだな。フェイト」

フェイトの顔は自然に笑顔になった。

フェイト「遅いよ、当麻」

当麻は笑顔で答えた。

当麻「でも、間に合ったる」

シグナム「貴様、何者だ」

当麻はシグナムを睨みつけながら、言った。

当麻「下校中の学生だ」

空中でアルフとザフィーラが戦っていた。

アルフ「ちっ！」

ザフィーラの攻撃に押され、アルフは防戦一方だった。その時、ザフィーラの真上に巨大な石が落とされた。

ザフィーラ「ぐうっ、」

突然現れたので、防御が間に合わず、近くのビルの屋上に落とされた。

アルフ「突然、何が…」

アルフが驚いていると、

黒子「あらあら、この程度の事を気付けないなんて、ダメですわね」

黒子がザフィーラが落ちた屋上に立っていた。

アルフ「黒子、あんたなんで、」

黒子「私だけではないですよ、フェイトさんの近くにあの殿方がいますわ」

ザフィーラ「くっ、貴様、一体何者だ。」

ザフィーラが起き上がり、アルフは黒子の隣に降りた。

黒子「ジャツチメントですの。」

そう言つて、腕章を見せた。

ユーノもヴィータの攻撃に押されていた。

ヴィータ「ぶっ潰せエエー!!」

ヴィータがハンマーを振り上げた直後、

神崎「そこまでだ」

上空から声が聞こえた。

ヴィータ「えっ!?!」

ヴィータは上を見た。上空から七本のワイヤーがヴィータに降りかかった。

神崎「七閃」

ヴィータは障壁で攻撃を防いだが、衝撃が大きく、近くの屋上に降りた。

ヴィータ「何だ、お前は、」

神崎は、屋上に着地し、ヴィータと対峙した。

神崎「必要悪の教会、ネセサリウスの所属の魔術師、そして天草式十字凄教の女教皇の神崎火織。」

なのはは屋上で皆を見ていた。

なのは「上条さん、白井さん」

当麻達の姿を見て、明るい表情になった。すると、屋上のドアが開き、そこにはアロハシャツでサングラスをかけた少年がいた。

土御門「おおー、なのはちゃん、久しぶり」

なのは「土御門さん、お久しぶりです」

土御門「それにしても、偉いことになってるな。でも、俺たちが来たからもう安心だにや〜」

なのは「はい、」

土御門の言葉に、なのはは笑顔で頷いた。

ザフィーラは黒子に向かって拳を連打した。

ザフィーラ「うおおおおおお」

だが、黒子は当たる直前に、テレポートしてよけ続けている。

黒子「あらあら、がめつい男は嫌われますわよ」

ザフィーラ「くっ、ちょこまかと逃げるな」

黒子はザフィーラの拳に触れ、テレポートを使い、地面に強制的に倒された。黒子は太ももに着けた鉄の棒をザフィーラの服に突き刺さった。

ザフィーラ「ぐう、この程度の拘束、直ぐに…」

アルフ「おっと、そう簡単に外させない。」

さらにザフィーラをバインドで締め上げた。

ザフィーラ「たかが中学生の少女に負けるとは、女、名前は？」

黒子「白井黒子ですわ。あとでゆっくり話を聞かせてもらいますわ。駄犬さん」

ザフィーラ「だ、駄犬…」



ヴィータ「シュワルベフリーゲン」

四つの鉄球を出し、神崎に向かって放ったが、神崎は刀で鉄球を弾いた。

ヴィータ「何、」

神崎「子供を斬る気はないが、これ以上抵抗するようなら本気で相手してやる」

ヴィータ「お前、まだ本気じゃなかったのか？」

ヴィータは冷や汗をかいた。今の攻撃は本気の方でやったはずなのに、簡単に防いだ。さらにまだ本気を出していないということとは、シグナムと同等、それかそれ以上の力を持っていると言うことになる。

ヴィータ「へっ、これでもあんたより年上だ。それにあんま舐めると、痛い目に合うぞ」

神崎「そうか、ならこちらも本気で相手しよう」

当麻「フェイトは下がってる。バルディッシュがそんな状態じゃ戦えないだろ」

真つ二つに折られたバルディッシュを見て、悲しい顔をした。

当麻「そう悲しい顔するな、こいつ片付けて、早く治してもらおう」

ぜ」

フェイト「うん、でも、気をつけて、あの人強いよ」

フェイトと当麻はシグナムの方を見るとシグナムはレヴァンティンを構えていた。

シグナム「少年、名前は？」

当麻「上条当麻だ。あんたは？」

シグナム「剣の騎士、シグナムだ。お前は武器も無しに私に挑むのか？」

当麻「変に強力な武器とか持つと、使えないからな。」

シグナム「なるほど、確かにそうだな。なら容赦はしない。レヴァンティン」

RV「YES」

カートリッジをロードし、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

シグナム「紫電一閃」

炎の刀身で当麻に斬りかかったシグナム、当麻は回避出来ず、攻撃を喰らい、煙が立ち込めた。

フェイト「当麻！」

シグナム「……さすがに丸腰相手に斬りかかるとは、いい気持ちにならないな。もし、彼が生きていたら済まないと言っておいて……」

当麻「勝手に死んだことにするな」

煙が晴れると、そこには無傷の当麻がいた。

フェイト「当麻」

シグナム「何、直撃して無傷だと」

シグナムは驚いた。さらにレヴァンティンを見ると、刀身にヒビが入っていた。

シグナム「どうやって、レヴァンティンにヒビを……まさか、最初の時に既に入っていたというのか」

そのまま、レヴァンティンは元のサイズに戻ってしまった

当麻「やっぱり、魔法関係のものだから、俺の右手は有効だな」

そう言つて、焦っているシグナムを左手で顔面をぶん殴つた。

シグナム「ぐう、」

シグナムは殴られた衝撃で、地面に倒れた。

当麻「はあ、マジでビビつた。何でいきなり剣から炎がでるんだよ」

フェイトは後ろから当麻に抱きついた。

当麻「ふえ、フェイトさん、いきなり何ですか？」

フェイト「よかった。無事で……」

その時、近くの屋上で回復していたなのはの悲鳴が聞こえた。

第19話 最高の援軍（後書き）

六甲水「当麻が入れば、ほとんどの事件は解決できるね」

当麻「だけど、シグナム相手とか、無理だぞ」

第20話 再会の喜び（前書き）

六甲水「最初の戦闘は終わりますね。」

黒子「所で、お姉さまは？」

六甲水「ちゃんと出ますよ。」

## 第20話 再会の喜び

### 第20話 再会の喜び

屋上

なのはの胸のところ、何者かの手が伸びていた。

なのは「あ、ああ、あ、」

土御門「ちっ、誰だ？どこにいる？」

当麻「シグナム、何だあれは？」

当麻はシグナムに掴みかかった。フェイトはなのはの方を見て、心配そうに見ていた。

シグナム「大丈夫だ。あれは、魔力を蒐集している。命に別状はない。信じてくれ」

シグナムは力強く答えた。

当麻「…分かった。」

シグナムは一瞬で空に飛び立った。当麻とフェイトはシグナムの姿が消えるまで見つめていた。気づくと他の二人もいなくなっていた。

時空管理局本部

シグナム達と戦いを終え、当麻達はなのはの手当のため、時空管理局本部にいた。フェイトと当麻はなのはの様子を見に医務室に向かっていた。

フェイト「それにしても、どうして当麻達が…」

当麻「ん、ああ、実は、プレシアがこっちの世界まで来て、土御門に知らせてきたんだ、その時、俺も一緒にいてさ、直ぐに転送装置に入ったんだよ。そしたら、白井も通りかかって、」

フェイト「そうなんだ。そういえば、あの刀持った人は？」

当麻「あいつは、神崎。インデックスの同僚みたいなもんで、俺たちの世界で20人しかいない聖人つうやつなんだよ。すごい強いぜ」

医務室にたどり着き、入るとそこには目を覚ましたなのはに、神崎と黒子とインデックスがいた。

神崎「あなたがフェイト・テストロッサですか、インデックスや上条当麻から話を聞いてます」

そう言っつて、神崎はフェイトに向かって一礼をした。フェイトもつられて一礼した。

フェイト「えっと、神崎さんですよ。すごい人だっつて聞いてます」

インデックス「わあ、フェイト久しぶり。」



フェイト「インデックスさん、お久しぶりです。」

なのは「上条さん、危ないところをありがとうございます」

当麻「お前も、あんまり怪我なくて良かったな。」

そう言つて、当麻はなのはの頭を撫でたが、なのはの顔は暗かった。

なのは「私は大丈夫だったんですが、レイジングハートとバルディッシュが」

フェイトも暗くなった。

フェイト「あの人達、すごい強かったね。もしあそこに当麻達が来なかったら私たちどうなってたか…」

当麻「でも、俺たちが来たんだ。しばらくはゆっくり休んで、クロノたちとこれからの事を相談しようぜ」

当麻は笑顔で言った。フェイトとなのはは当麻の笑顔を見て、自然に笑顔になった。

黒子「そういえば、あのアロハシャツは？」

神崎「あの人は、クロノと言う人物と一緒にいるはずですが…」

フェイト「あれ？当麻、どうしたの考え込んで？」

フェイトの言葉につられ全員が当麻の方を見ると、確かに考え込んでいた。

当麻「なんか、二人ほど、忘れてるような…あ、」

黒子「そういえば、お姉さまとあの巫女さんは？」

第20話 再会の喜び（後書き）

六甲水「ついに電撃姫と吸血殺しの巫女さん登場」

美琴「ようやく私の出番ね」

姫神「私が来ても無意味なんじゃ」

六甲水「大丈夫ですよ。女性キャラが増えますから」

第21話 電撃姫と巫女さん（前書き）

六甲水「ついに、あのとある科学の主人公とある意味ではヒロイン  
だったキャラが登場」

## 第21話 電撃姫と巫女さん

第21話 電撃姫と巫女さん

リンカーコアを蒐集し、離脱したシグナム達は八神家へ向かっていった。

シャマル「シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラ、大丈夫？」

心配そうな表情で、シャマルが三人に聞いた。

シグナム「ああ、大丈夫だ」

ヴィータ「全然平気だよ！」

ザフィーラ「我も問題ない」

三人はシャマルに答えた。

ヴィータ「シャマルこそ大丈夫かよ？その怪我」

シャマルの左腕を見ながらヴィータが言った。シャマルの服は少しだけ焦げ付いていた。

シャマル「大丈夫よ、直撃は避けたわ。」

実は言うと、土御門に居場所を発見され、砲撃を撃たれた。だが、ギリギリのところまで直撃は避けていた。

ヴィータ「それにしても、あの途中から出てきた奴は一体なんなんだ？シグナム以上に厄介な相手だったぜ。」

シグナム「私が戦った相手も奇妙な力を持っていた。見る。」

そう言つて、シグナムはレヴァンティンを見せた。レヴァンティンは見事にヒビが入っていた。

ヴィータ「そいつ、すげえ、バカ力なのか？」

シグナム「いや、相手は何の力もないただの少年だったが、紫電一閃を喰らつて無傷だった。奴は一体」

シャマル「そういえば、何か家の中騒がしくない？」

シャマルの言葉を聞き、三人も八神家を見ると、確かに少し騒がしかった。

ヴィータ「すずかさん、来てるんだっけ？」

シャマル「いえ、今日は来ないはずだけど、」

ザフィーラ「とりあえず、見てみよう」

四人は家に入るとそこには、はやての他に制服を着た茶髪の少女と巫女装束の黒髪の少女がいた。

はやて「あ、みんな、おかえり。」

はやては帰ってきた四人を見て、笑顔で迎えたが、四人は他の二人を見て呆然としていた。

シャマル「はやてちゃん、その人達だれ？」

はやて「あ、この人達？何か家の前で倒れてたの見つけてな、何か困ってるから家に招いたんや」

茶髪の少女と黒髪の少女はシグナム達に気づき、挨拶した。

美琴「えっと、はじめまして、御坂美琴です。何かしばらくお世話になります」

姫神「…はじめまして、私は、姫神秋沙です。」

シグナム「あ、ああ、シグナムだ。」

シャマル「しゃ、シャマルです」

ヴィータ「ヴィータです。こっちは、ザフィーラ」

シグナム達も一緒に自己紹介をした。

はやて「それじゃあ、みんな帰ってきたことだし、ご飯にしようか」

こうして、八神家に二人ほど居候が増えたのだった。

## 翌日の早朝

美琴は何かの物音に目が覚めた。

美琴「誰か、トイレにいったのかしら。でも何か気になるから行ってみよう」

美琴は物音がした場所に向かうと、そこにはヴィータが古びた本を持って出ていこうとしていた。

美琴「こんな時間にお出かけ？」

ヴィータ「な、えつと、御坂」

美琴「年上を呼び捨てにするのは感心しないわね。で、こんな時間にザフィーラの散歩？」

ヴィータ「えつと、そんな所かな」

ヴィータは戸惑いながら言ったが、美琴は疑いの眼差しをやめなかった。

美琴「ふーん、散歩にそんな本必要かしら？」

ヴィータ「えつと、これは、その」

ヴィータはまるでおねしょしたことが母親にバレてしまったような感じだった。そこにシグナムが現れた。

シグナム「どうしたヴィータ？」

ヴィータ「シグナム、」



美琴「アンタたち何か隠し事してるでしょ？」

美琴は二人を睨みつけた。シグナムも力強く睨み返した。

シグナム「貴様には関係ないことだ。」

美琴「まあ、別にいいんだけどさ、アンタたちが何しようが、でも、」

美琴の体から、パチパチと音がした。見ると電気が渦巻いていた。

美琴「はやての笑顔を奪うようなことをしようとしてるんだったら、止めさせてもらおうわよ」

ヴィータ「違う、私たちははやての笑顔を守ろうと……」

美琴「どういふこと、」

シグナム「……今から話すことは主に黙っていてくれ」

シグナムは美琴に、自分たちがしようとしていることを話した。

美琴「なるほどね、呪いを開放するためにか……それしか方法は無いの?。」

ヴィータ「うん、はやてはこんな事知ったら悲しむけど、アタシたちにはこれしか方法がないんだ」

シグナム「いくら、主の客人だからと言って、止めるようなら容赦はしない」

シグナムとヴィータは険しい表情で美琴を見たが、美琴は平然とした顔でいた。

美琴「誰も、止めようとしないうわよ。ただ、もう一つ方法があるかもしれないの」

ヴィータ「なんだって、」

シグナム「それは一体何だ」

二人は驚きながら、美琴に詰め寄った。

美琴「えつと、私と姫神さん、違う世界から来たって、昨日説明したじゃない」

昨日の晩、はやてが寝たときに、シグナム達に違う世界の住人だと言っことを話していた。

美琴「実は、私の知り合いに、異能の力を消せる奴がいるのよ。そいつならきつと、」

シグナム「そんな奴が、そいつは一体……」

第21話 電撃姫と巫女さん（後書き）

姫神「結局、私はこれで出番は終わりなのね」

六甲水「いや、大丈夫ですから。ちゃんと出しますから」

第22話 出会いと再会（前書き）

六甲水「今回はグラムに会います」

## 第22話 出会いと再会

### 第22話 出会いと再会

#### 時空管理局本部医務室

なのは達と話しているとそこに土御門とクロノが入ってきた。

クロノ「上条となのはとフェイトちよつといいか？」

当麻「ん、クロノか、相変わらず憎たらしい顔しているな」

クロノ「うるさい、それでちよつといいか？」

当麻「俺はいいけど、なのはは大丈夫なのか？」

なのは「うん、ちよつとだるいけど、大丈夫だよ。」

クロノ「じゃあ、着いてきてくれ」

当麻たちはクロノの後を付いて行った。

当麻「それにしても、学園都市より技術が進んでるな。」

フェイト「そうなの？」

当麻「ああ、さすがに宇宙に行くなんてなかったからな。」

クロノ「だが、医療関係は進んでいるみたいだな。」

当麻「ん、まあ、そうなのかな？でもさすがにロボットとかいないみたいだな。」

なのは「ロボットとかいるの？」

当麻の話の聞くとなのは目をキラキラさせていた。

当麻「なのは、お前が想像しているのはきつと、ビルと同じ大きさのロボットだろうけど、学園都市にあるのはゴミ箱サイズのロボットだぞ。」

なのは「そうなんだ。でも見てみたい。」

クロノ「おい、着いたぞ。」

クロノはあきれた顔で言った。部屋に入るとそこには初老の男性が座っていた。

グレアム「ん、久しぶりだなクロノ。君たちがなのは君とフェイト君と上条君だね」

なのは「あ、初めまして、えつと、」

グレアム「ああ、私はギル・グレアムだ。君が魔法も無しでジューエルシード事件を解決した上条当麻くんだね。」

当麻「は、はあ、そんな俺が解決したんじゃない、なのはやフェイト、アースラメンバーが解決したんだし、俺はただ手伝っただけです。」

そう言っつて、当麻は恥ずかしそうに答えた。

グレアム「いや、君がいたお陰でプレシアさんやフェイトくんの問題が解決したんだ。私からもお礼をいいたい。」

そう言っつて、グレアムは立ち上がり、当麻に向かってお礼を言っつてきた。

当麻「あ、えつと、」

フェイト「グレアムさんはお母さんのこと知ってるんですか？」

グレアム「古い知人でね。私では彼女を救うことが出来なかった。あとでゆっくり話そうか。」

当麻となのはとフェイトは一緒に通路を歩いていた。

当麻「何つつか優しそうな人だったな」

フェイト「そうだね、お母さんの知り合いだつて言う事初めて知つたよ。」

なのは「でも、本当に上条さんがいたお陰でフェイトちゃんが本当の意味で解決出来たんだよ」

フェイト「うん、本当にありがとうね当麻」

フェイトは笑顔で当麻にお礼を言つた。当麻は恥ずかしそうに頭を

掻いていた。

数日後、今回の事件はアースラメンバーが受け持つことになった。アースラは整備中なので司令部はなのはの近所になった。

なのは「うわ?! 凄い近所だ」

フェイト「本当?」

なのは「うん。ほら、あそこが私の家」

なのはとフェイトは、ベランダから仲良く街を見ている。当麻と土御門は部屋の中で荷物を運んでいた。

当麻「おい、何で俺たちが引越しの手伝いをしてるんだよ」

クロノ「ちょうど手が空いているのは君たちだけなんだ。ほら、早く仕事仕事」

当麻「こいつムカつくな。」

フェイトとなのはが当麻達の方に近づいてきた。

なのは「クロノくん、あまり当麻さん達に重労働させないでよ」

フェイト「そうだよ。当麻少し手伝おうか?」

当麻「そういえば、フェイトとプレシアも一緒に住むのか?」

フェイト「うん、そうだよ。」



当麻「おい、土御門、クロノの奴。フェイトに『お兄ちゃん』って呼ばさせるつもりだぜ。一回シバこうぜ。」

土御門「なんだと、こいつ最低だ」

クロノ「何でそうなるんだよ。別に呼ばさせる気はない。」

三人がりビングで取っ組み合いをしていると、エイミイは、アルフとユーノを見つけた。

エイミイ「ユーノ君とアルフは、こっちではその姿なんだ」

アルフ「新形態子犬フォーム！」

ユーノ「なのはやフェイトの友達の前ではこっちの姿でないと……」

アルフは可愛い子犬姿で、ユーノは久々のフェレット姿になっていた。

フェイト「わぁアルフちっちゃい！どうしたの？」

プレシア「あら、本当ー！」

なのは「ユーノ君もフェレットモード久しぶり！」

フェイトとプレシアは子犬フォームのアルフに驚き、なのはは嬉しそうにフェレット姿のユーノに近寄る。

アルフ「可愛いだろ」

フェイト「うん！」

アルフがフェイトの頬を舐める。ユーノは、なのはに頬ずりされて苦笑している。するとユーノは当麻の同情した目線に気がつき、当麻の方に近づき、小声で話しかけてきた。

ユーノ「あの、上条さんなんて僕のことをそんな目で見ているんですか？」

当麻「なんか、お前も苦労してるんだなって思って」

ユーノ「え、まあ、何かこの姿だと僕の扱いが本当にペットみたいなんだよ。」

当麻「しょうがないよ。前、フェイトから聞いたけど一緒に風呂に入りそうになったり、ユーノの前で着替え始めようとしてたり、何と云うかこっちからしたら羨ましいんだけど、お前にとっては大変なんだな」

ユーノ「う、うん、」

クロノ「なのは、フェイト。友達だよ」

なのは&フェイト「はい！」

クロノの言葉に、フェイトとなのはは嬉しそうな笑顔になった。

すずか「こんにちは！」

アリサ「きたよ！」

玄関に行くと、アリサとすずかがいた。

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん」

フェイト「はじめまして…って言うのもちょっと変かな？」

すずか「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

フェイト「うん。でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

二人を見ながら、フェイトは嬉しそうに笑った。

すずか「うん！」

アリサ「私も！」

アリサとすずかも嬉しそうに笑う。当麻はその光景を見て、微笑んでいた

インデックス「二人とも久しぶり〜」

インデックスと神崎と黒子も部屋に入ってきた。

アリサ「インデックスさんも久しぶりです。」

すずか「あ、この人がインデックスさんのお兄さんですか？」

すずかは当麻に近づいてきた。

当麻「ん、ああ、何と言うかまあ、従兄弟みたいなもんで、こっちの人がインデックスの家族なんだよ」

アリサ「あ、こんにちは。」

神崎「こんにちは。」

当麻達はリンディがなのはの両親に挨拶に行くという事で、喫茶翠屋へきていた。

すずか「ユーノ君も久しぶりだね」

ユーノ「キューキュー」

アリサ「こっちの犬も可愛い！」

アルフ「アンツ」

外のテラスでなのは達は、アルフやユーノと一緒に談笑していた。当麻達はと言うと…

インデックス「このケーキ美味しいよ。当麻」

当麻「確かに美味しいな。学園都市には中々ないぞコレ」

士郎「それは今回作った新作なんですよ。そういえば、神崎さんは剣術をやるんですか？」

神崎「は、はい、」

士郎「でしたら、今度試合でもしませんか？」

神崎「私でよければ、いつでも」

リンディ「……そんな訳で、これから暫くご近所になります。よろしく願います」

桃子「こちらこそ願います」

リンディと桃子が挨拶をしてる。その時、店の扉が開かれて、フェイト達が入ってきた。フェイトは両手で小包を抱えていた。

フェイト「リンディていと…リンディさん」

リンディ「はい。なあに？」

フェイト「…あの…コレ…」

戸惑いながらフェイトは、小包の中を見た。中に入っていたのは白い制服だった。

当麻「制服？」

当麻がフェイトの方を見た。

リンディ「転校手続き取つといたから。週明けからなのはさんのクラスメイトね」

笑顔でリンデイが言った。

桃子「聖祥小学校ですか。あそこはいい学校ですよ。ね、なのは」

なのは「うん！」

桃子「良かったわねフェイトちゃん」

優しく微笑みながら、桃子が言った。

フェイト「あの…えと…はい、ありがとうございます…」

恥ずかしがりながらも、フェイトは嬉しそうに制服の入った小包を抱きしめた。

リンデイ「上条さんも手続きしときましたから」

当麻「へっ、なんの？」

当麻は嫌な予感がしていた。

そしてフェイトが、なのは達が通ってる小学校に転校する日。聖祥大付属小学校。なのはのクラスはざわついていた。

先生「さて皆さん。実は先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ」

フェイト「し、失礼します」

先生に呼ばれ、フェイトが教室の中に入ってきた。なのは達と同じ白い制服を着て、教卓の前に立った。

フェイト「あの…フェイト・テストロッサと言います。よろしくお願ひします」

恥ずかしがりながらも、フェイトは自己紹介をした。クラスの皆は拍手をして、フェイトを笑顔で迎え入れた。フェイトは嬉しそうに微笑んだ。

先生「もう一つ皆さんにお知らせがあります。実は今日からしばらくボランティアにきた学生さんを紹介しますね。」

他の生徒達はざわついていたが、なのはとフェイトは同じことを考えた。扉を開くとそこから学生服の当麻がやってきた。

当麻「どうも、今日からしばらくボランティアにきた上条当麻です。よろしく。」

なのはとフェイトは一緒に苦笑いをしていた。当麻がここにいる理由はデバイスを持っていない二人の護衛のためだった。

マンション

土御門「そういえば、闇の書って一体なんなんだ？」

留守番をしている土御門と神崎とインデックスと黒子が、クロノと一緒に調査の手伝いをしていた。

クロノ「闇の書は魔力蓄積型のロストロギア。魔導師の魔力の根源

であるリンカーコアを食って、全666ページを埋めるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

エイミー「本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する」

クロノが説明をして、エイミーが補足をした。

神崎「では、闇の書の破壊は不可能なのか？」

神崎が尋ねた。

クロノ「ああ。様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護騎士によって守られ、魔力を食って永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止させる事ができない危険な魔導書」

クロノが険しい表情で説明した。

神崎「なるほど、私たちがやることは完成する前に、闇の書の主の捕獲ですか。」

インデックス「でも、とうまの右手で破壊は出来るんじゃないの？」

クロノとエイミーはハッと気がついた。

クロノ「確かに、彼の力なら破壊が出来るはずだ。」

エイミー「だったら、まずはあの守護騎士達を捕まえて、主の居場所を吐かせるということになるね」



夕方

帰りでアリサやなのは達と別れたすずかは、一人で図書館にきていた。

すずか（あれがフェイトちゃん達が言ってた上条さんか。結構面白い人だったなあ）

当麻のことを思いながら、本を探していると隣の人にぶつかった。

すずか「あ、ごめんなさい」

ぶつかった人を見ると、その人は当麻だった。

当麻「ん、あれ？すずかだっけ？」

すずか「上条さん、どうしてこんな所に？」

当麻「ん、ちょっと暇つぶしに、」

当麻とすずかは近くの椅子に座った。

すずか「そういえば、上条さんとフェイトちゃんとのどういう関係何ですか？」

当麻「ん、何でそんな事聞くんだけ？」

当麻は頬杖をついて答えた。

すずか「この前上条さんとフェイトちゃんと仲良さそうに見えたから」

当麻「まあ何と云うか、ちょっと前に知りあって、それからかな」

すずか「へえ、上条さんに取ってフェイトちゃんってどういう風に思ってるんですか？」

当麻「ん、まあ、妹みたいなものかな？てか、すずか、何か嬉しそうだぞ」

すずか「気のせいですよ。」

すずかは笑顔で答えた。すると、遠くの方で車椅子の音がした。すずかは音のする方を見た。車椅子に乗ったはやてと、後ろで車椅子を引いてるシグナムと姫神が何故かいた。

すずか「はやてちゃん！」

すずかが、はやてを呼んだ。

はやて「あつ、すずかちゃん！」

はやてもすずかに気付いた。シグナムもすずかの方に顔を向けた。するとシグナムと姫神が当麻に気がついた。

シグナム「なっ!?!?」

姫神「あっ!?!?」

当麻「あ、お前ら」

当麻も二人に気がついた。はやても当麻に気がついた。

はやて「すずかちゃん、この人は？」

すずか「私の学校のボランティアさん」

シグナム（ボランティアって、こいつ、本当に何者なんだ？）

シグナムが考え込んでいると、姫神が当麻に近づいてきた。

姫神「あなたは、一体何してるの？」

当麻「おまえこそ、何でこんなところにいるんだよ。」

はやて「秋沙さん、お知り合い？」

姫神「そう、知り合い」

はやて「初めまして、八神はやてです。えっと、」

当麻「上条当麻だ。よろしく」

はやて「よろしく、当麻さん」

はやては当麻に向かって微笑んだ。

第22話 出会いと再会（後書き）

六甲水「よかったね。姫神さん。大好きな……」

姫神「ヴィータから借りたこのトンカチの威力試してみようかしら」

六甲水「すみません。だまります。」

第23話 心からの願い（前書き）

六甲水「姫神さんと当麻のラブラブシーンが」

シグナム「ないと思うぞ」

## 第23話 心からの願い

### 第23話 心からの願い

すずかとはやては公園のベンチに座って、楽しそうに座っていた。  
当麻達はその二人から少し離れたベンチの前にいた。

シグナム「まさか、またお前に会うとはな。」

当麻「シグナム、まさかはやてが闇の書の主なのか？」

シグナム「……………」

当麻の間にシグナムは黙っていた。すると姫神が口を開いた。

姫神「…そう、あの子があなたという闇の書の主よ」

シグナム「姫神、」

姫神「大丈夫、この人は信用出来る人だから」

当麻「闇の書って、完成させるとすげえ力が手に入るって聞いたけど、はやてのやつは何か力を欲しているようには見えないけどな」

シグナム「……闇の書を完成させなければ、主は死んでしまうからだ」

険しい表情でシグナムは答えた。

当麻「はやてが、死ぬ。どういうことだ。」

当麻は少し焦った。今あんなに元気に笑っているはやてが死ぬようには見えなかった。

姫神「はやてちゃんの足は病気じゃなくなって、闇の書の呪いなの。その呪いは日が経つに連れて体中を蝕んでいくの。それを止めるためには闇の書を完成させる必要があるの」

シグナム「そのために、我々は蒐集しているんだ。だから今は管理局員には黙っていてくれ」

シグナムは当麻に頭を下げた。今この場で当麻と戦うとはやてに被害が及ぶかもしれない。

当麻「頭を下げんなよ。今俺が管理局にはやての事を言っても、あいつは救われない。アイツを救うためにはあのやり方しか無い。それがはやてに悲しい思いをさせることになるけど、あいつの笑顔を永遠に見れなくなるのは嫌だ。」

シグナム「上条、」

当麻力強い瞳でシグナムに向かっていった。姫神は当麻に耳打ちをした。

姫神「あなたの右手でどうにかできないの？」

当麻「いや、呪いを打ち消しても、また再発するかもしれない。インデックスあたりに聞いてみるよ」

姫神「そう、」

当麻「てか、お前よくはずかしくないな」

姫神「あ、」

当麻と姫神は顔を真赤にしていた。するとはやてとすすかが近づいてきた。

すすか「上条さん、どうしたの顔真っ赤だけど、」

当麻「いや、何でもない。それでどうした？」

すすか「私、そろそろ帰ります。」

当麻「お、おあ、そうか」

シグナム「主はやて、我々も」

はやて「そやな、それじゃあ、当麻さん。またな」

そう言つて、はやてとシグナムと姫神は帰っていった。

当麻「はやてか、」

当麻はクロノたちのマンションに戻った。部屋に戻るとなのはとフエイトが一緒にいた。

フエイト「あ、当麻、おかえり。」



当麻「ああ、なのはも一緒だけど、どうしたんだ？」

当麻の間にフェイトとなのはは嬉しそうに言った。

なのは「レイジングハートとバルディッシュが戻ってきたの」

フェイト「新しい機能もついてるって」

当麻「おお、よかったな。インデックスは？」

フェイト「インデックスさんは、部屋で神崎さんと白井さんと一緒にいるよ。土御門さんはクロノと一緒に出かけてるよ」

インデックス「あ、とうま、おかえり」

神崎「上条当麻、帰っていたのか」

黒子「あら、遅かったようですが、どうしたのかしら？」

当麻「ちよつとな、インデックス聞きたいことが…」

突然、室内に緊急警報機が鳴り響いた。

エイミィ「至近距離で緊急事態発生！」

エイミィが皆に叫んだ。

神崎「例の守護騎士か？」

エイミィ「うん、みんなお願い出来る？」

なのは「はい、」

当麻「インデックスはここでおとなしくしてろ」

インデックス「う、うん」

エイミィ「皆お願いね」

当麻達は現場に向かった。

第23話 心からの願い（後書き）

六甲水「再びの戦闘へ」

**第24話 新たな力と新たな敵（前書き）**

六甲水「二度目の戦いです」

## 第24話 新たな力と新たな敵

### 第24話 新たな力と新たな敵

街の上空にヴィータとザフィーラ、それに二人を取り囲む十人の管理局の魔導師がいた。更に結界も張ってある。

ザフィーラ「管理局か」

ヴィータ「でもチャライよ、コイツら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーファイゼンを構える。すると魔導師達は、一斉にヴィータ達から離れた。

ヴィータ「え？」

魔導師達の行動に、ヴィータは訝しげる。

ザフィーラ「上だ！」

上を見てザフィーラが叫んだ。ヴィータも上を見た。上空に無数の青い魔力の刃があった。無数の刃の中心に、クロノがいた。

クロノ「ステインガーブレイド！エクスキュージョンシフト!!」

クロノは杖を振り下ろし、魔力の刃の雨がヴィータとザフィーラに降り懸かる。

ザフィーラ「ちっ！」

ザフィーラがヴィータの前で障壁を張る。障壁に無数の刃の雨がぶつかり、青色の爆発が起きた。

クロノ「…少しは通ったか？」

煙が晴れてきて、ザフィーラ達の姿が見えてきた。ザフィーラの左腕に、数本の刃が刺さっていた。

ヴィータ「ザフィーラ！」

ザフィーラ「気にするな。この程度でどうにかなる程…ヤワじゃない！！！」

ザフィーラは、腕に力を入れて刃を破壊した。

ヴィータ「上等！」

ヴィータは上空にいるクロノを睨んだ。クロノも杖を構える。その時、エイミーから通信が入った。

エイミー「クロノ君、現場に助っ人を転送したよ」

クロノ「え？」

クロノは視線をヴィータ達から外した。屋上を見ると、フェイトとなのは、当麻達がいた。

ヴィータ「あいつら、」

ザフィーラ「この前の奴らもいるな」

ヴィータとザフィーラは当麻達を見た。

なのは「レイジングハート！」

フェイト「バルディッシュ！」

なのは&フェイト「セーッとアップ！」

なのはとフェイトは、待機モードのデバイスを上に掲げた。

なのは「レイジングハート・エクセリオン！」

フェイト「バルディッシュ・アサルト！」

二人は自分のデバイスの新しい名前を叫んだ。二人の体が光に包まれ、新しいバリアジャケットを身につけ、生まれ変わったデバイスを手に持つ。

ヴィータ「あいつらのデバイス…！アレってまさか！？」

二人のデバイスを見て、ヴィータは驚いた。二人のデバイスに新たに付けられたのは、カートリッジシステムだった。

フェイト「私達はあなた達と戦いに来たわけじゃない。まずは話を聞かせて」

なのは「どうして闇の書を完成させようとしてるの？」

フェイトとなのはがヴィータ達に尋ねた。

ヴィータ「あのさあ、ベルカの諺にこういつのがあんだよ」

腕を組みながら、ヴィータが言った。隣にいるザフィーラが、ヴィータを見た。

ヴィータ「和平の使者なら槍は持たない」

それを聞いたなのはとフェイトは、顔を見合わせて首を傾げた。当麻達も、わからないと言う風に首を傾げた。

ヴィータ「話合いをしようつてのに、武器を持ってやって来る奴がいるか馬鹿つて意味だよ。バ？カ！」

なのは「なっ！？い、いきなり有無を言わず襲い掛かって来た子がそれを言う？」

ヴィータの言葉に、なのはが反論した。当麻達も頷く。

ザフィーラ「それにソレは諺ではなく、小話のオチだ」

ザフィーラがヴィータにツッコんだ。

ヴィータ「うっせー！いいんだよ細かい事は！」

ツッコまれてザフィーラに怒鳴る。

土御門「あいつ、俺たちより年上なのに馬鹿なんだにや〜」



当麻「土御門、お前、いつの間に」

土御門「さっきここに来たばっかだ。」

ヴィータ「何だ？あの変な金髪は？」

当麻「おい、あそこのチビツ子に変なやつって思われてるぞ」

ヴィータ「おい、その奴。誰がチビツ子だ。」

当麻「いやだって、どう見ても……」

ヴィータ「てめえ、ぶっ叩くぞ」

当麻とヴィータが怒鳴り合っていると、急にピンク色の雷が落ちた。そこにはシグナムがいた。

当麻「あいつ、派手に登場するな」

なのは「ユーノ君、クロノ君。手を出さないでね。私あの子と一対一だから！」

ヴィータを見ながら、なのはが言った。なのはの言った言葉が気に入らなかったのか、ヴィータはなのはを睨みつけた。

フェイト「当麻、私も」

シグナムを見つめながらフェイトは言った。

当麻「ああ、行ってこい」

フェイトは頷き、シグナムのところに向かった。

アルフ「じゃあ、私はあの野郎を相手するよ」

当麻「何だ？犬同士だからか？」

アルフ「殴るよ」

そして、それぞれの戦いが始まった。

ヴィータ「でええええい！！」

ヴィータがグラーファイゼンで、なのはに攻撃する。なのはは障壁を張って防御する。障壁は以前より硬く、グラーファイゼンの攻撃を防いだ。なのははアクセルシューターを使って、ヴィータを追い詰める。

フェイトとシグナムも激しい空中戦をしていた。バルディッシュとレヴァンティンが火花を散らせてぶつかり合う。フェイトが、複数の金色の魔力の槍『プラズマランサー』を放つ。それをシグナムは、レヴァンティンの炎で掻き消す。

空中でアルフとザフィーラは、互いに拳をぶつけ合って戦っていた。

ザフィーラ（状況はあまりよくないな。言われた通り空中で戦う事によって、あの少年たちとの戦闘は避けられた。だが魔導師達のデバイスが強化されていて、シグナム達も苦戦している）

ザフィーラは表情を険しくした。

当麻「あいつら、すげえな」

神崎「魔道師同士の戦いがアソコまでやるとは、」

美琴「あれが魔法か…初めて見たわ」

気がつくと屋上の扉の前に美琴と姫神がいた。

黒子「おねえさま」

黒子は美琴に気がつくと、抱きついた。

美琴「こら、離れなさい」

黒子「会いたかったですわー」

当麻「何しに来たんだよ。」

姫神「ちよっと、協力して欲しいことがあって、」

美琴「そうそう、今回だけはあの人達を見逃して欲しいのよ」

結界の外。

シャマルは屋上から様子を見ている。

シャマル（私の力じゃこの結界は破れない…）

シャマルは闇の書を使って、結界を破るか迷っていた。今日は、はやてちゃんとの大事な約束がある。ソレを護るためにも、一刻も早く結界を破って離脱しなければいけない。その時、背後に気配を感じた。

クロノ「搜索しているロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します」

シャマルの背後で、杖を突き付けて言ったのはクロノだった。その時、乱入者が現れた。突然現れた仮面を付けた男が、クロノを蹴り飛ばした。クロノは隣のビルの屋上まで飛ばされた。

クロノ「な…仲間!？」

クロノは仮面の男を睨みつけた。

シャマル「あ…貴方は？」

シャマルが仮面の男に尋ねた。

仮面の男「使え」

シャマル「え？」

仮面の男「闇の書を使って結界を破壊しろ」

シャマル「でもアレは…!」

シャマルは闇の書を使う事を戸惑った。

仮面の男「使用して減った頁はまた増やせばいい。仲間がやられてからでは遅かるう」

少し戸惑ったが、仮面の男の言葉でシャマルは、闇の書を使う事にした。

シャマル（みんな、闇の書で結界を破壊するわ！うまくかわして撤退を！）

シャマルが念話でシグナム達に伝えた。

シグナム「くっ、皆撤退の準備を」

当麻「大切な約束？」

美琴「そう、今日はすずかっ子来るんだけど、ほら、ここはやっぱりみんな一緒の方がいいじゃない」

土御門「でもなあ、アイツら一応悪役だしな」

当麻「そうだな、それに勝手に結界を破壊したら色々やばいからな。だからここは…」

美琴（シャマルさん、闇の書使うの待って）

シャマル「え、美琴ちゃん。どうしてここに？」

美琴（細かいことはいいから、今からアイツが破壊するから）

当麻と美琴は結界の壁の近くにいた。

当麻「食らえ、このやろう」

当麻は右手で美琴に殴りかかろうとしたが、美琴はあっさりと避けた。当麻の右手は結界に当たり、結界は見事に砕けた。

当麻「あ、やっちゃまった」

結界はヒビは入り、砕け散った。ヴィータ達は、結界が破壊された事を確認した。

ヴィータ「ヴォルケンリッター『鉄槌の騎士』ヴィータ。あんたの名は？」

なのは「なのは。高町なのは」

互いに名を名乗った。

ヴィータ「高町なぬ……な……えーい、呼びにくい！」

なのは「逆切れ!？」

ヴィータ「ともあれ勝負は預けた。次は殺すからな!ぜってーだ！」

そう言い残して、ヴィータは離脱した。

なのは「あ……えっと……ヴィータちゃん！」

ザフィーラ「悪いが我も離脱する。勝負はお預けだ」

アルフ「あっ！」

ザフィーラも離脱した。

アルフ「もう！当麻！何で結界を破ったんだい！？」

アルフは結界を破った当麻に怒った。

シグナム「すまん、テストロッサ。この勝負預ける」

フェイト「シグナム！」

シグナムもフェイトから離れた。フェイトは当麻の方に向かった

フェイト「当麻、何してるの？」

当麻「悪い、あいつらの仲間みたいな奴がいて、戦ってたんだけど、間違っつて結界壊しちゃったんだ」

第24話 新たな力と新たな敵（後書き）

六甲水「誤字とかあるかもしれませんがから」



第25話 闇の書について（前書き）

六甲水「今回は戦闘なしで、闇の書についてです」

## 第25話 闇の書について

### 第25話 闇の書について

#### 八神家

シグナム「なるほど、彼に協力してもらったのか」

美琴「そ、お陰で間に合ったでしょ」

シャマル「美琴ちゃん、秋沙ちゃん、ありがとうね」

姫神「私は何もしてない」

六人は扉を開けるとはやてとすずかりビングで待っていた。

はやて「おかえり〜、皆一緒やったんだね。」

シャマル「ええ、ばったり会ってね。すずかちゃんこんばんわ」

すずか「あ、お邪魔してます。」

その後、はやてとすずかとヴィータは一緒にお風呂に入っていた。  
シグナム庭に出て星を見ていた。

美琴「よかったわね。間に合って」

シグナム「御坂か、感謝する。主の大切な約束のためにあんなこと

を…」

美琴「別に、ただあの娘の悲しむ顔を見たくないだけだったのよ。そつえば、あのすずかつて子、優しいわね」

シグナム「やさしいとは？」

美琴「はやての足の事何か気にせずにああいうふうに接してるからさ」

シグナム「…そうだな。」

美琴「そつえば、闇の書一回見せてもらっていいかな？」

シグナム「いきなりどうしたんだ？」

美琴「ちょっと、こういうもの見てみたくなって、」

シグナム「ああ、いいだろう」

そつ言つて、シグナムは美琴に闇の書を渡した。

美琴（ふうん、意外と普通の…）

その時、美琴は驚いた。闇の書から微かに鼓動を感じた。

美琴「ねえ、闇の書つて、何か鼓動とか感じるの？」

シグナム「？いや特にそのような事はないが」

もう一回触ってみたが、鼓動が感じなくなった。

美琴（気のせいだったのかな？）

学園都市 窓の無いビル

そのビルの中に一人の人物がいた。銀色の髪で二十代から三十代くらいの男が巨大な水槽の中に逆さに入っていた。そして、その男の前にあるテレビから一人の女性が映し出されていた。

ローラ「どうやら、幻想殺しはあちらの世界に言ってるみたいですね」

アレスター「ああ、土御門が作り上げた次元を渡る装置を使ってあちら側に行っている。だが、あちら側にはあの魔道書があるはずだ」

ローラ「ええ、ちょうど五十年前にあの魔道書がこちら側に来た事があったわね。だけど、あの魔道書は災を生まなかった。あの魔道書には……」

アレスター「…禁書目録はあの魔道書について知っているのか？」

ローラ「いいえ、あの魔道書については記憶はしてないわ。あの娘の頭にあるのはどういうものかよ。」

アレスター「そうか、アレを止める方法は……」

アレスターは薄く笑い、ローラは静かに微笑んだ。

時空管理局本部

ユーノとクロノ、エイミーとインデックスは通路を歩いていた。

ユーノ「じゃあ、僕とインデックスさんとで闇の書について調べればいいんだね」

クロノ「ああ、これから会う二人は、その辺に顔がきくから」

そして四人は部屋に入った。部屋には猫の耳と尻尾を持った、二人の女性がいた。

クロノ「リーゼ。久しぶりだ。クロノだ」

クロノが挨拶した直後、

ロツテ「わああ！クロすけ、お久しぶりぶり?!」

いきなりロツテが、クロノの顔を胸の方に抱き寄せた。

クロノ「ロツテ！離せコラ！」

ロツテ「何だとコラ！久しぶりに会った師匠に冷たいじゃんかよ？」

クロノが抵抗するが、ロツテから逃げられない。

クロノ「アリア！これを何とかしてくれ!!」

アリアに手を伸ばして、クロノは助けを求めた。だが、

アリア「久しぶりなんだし、好きにさせてやればいいじゃない。それに、満更でもなさそうだし」

と、あっさり見捨てられた。

クロノ「そんな訳ないだ…」

ロツテ「ニヤァー!!」

クロノが言いかけた所で、ロツテがクロノを押し倒して何かいろいろうやっている。ユーノとインデックスは呆然とその様子を見つめて、エイミイはアリアと会話をしながら見ている。

インデックス「あの人は猫なの？」

エイミイ「そ、そんでもって、クロノの師匠さんだよ。」

インデックス「へえ〜、」

アリア「その人が別世界からきた人だっけ？よろしくね」

インデックス「うん、」

何とかロツテの抱擁から開放されたクロノがアリアに頼みごとをした。

クロノ「話しはグレアム提督から聞いてるはずだ。ユーノとインデックスの手伝いをして欲しい」

アリア「闇の書についてだっけ？いいよ。無限書庫での調べごとの協力任された」

無限書庫でユーノとインデックスは闇の書の情報を集めることになった。

その頃当麻は…

一人で図書館に着ていた。理由はもう一度はやてに会いたかったからだ。

当麻「はあ、そう毎日来てる訳ないか。フェイト達は何か携帯買っているし、付いていけばよかったな」

はやて「あれ？当麻さんやないの？」

後ろを振り向いてみるとそこには膝の上に数冊の本を載せたはやてとシヤマルと姫神がいた。

当麻「おお、はやて。昨日ぶりだな」

はやて「そやな、今日はどうしたん？」

当麻「ちょっと、暇つぶしに…お前は？」

はやて「私は本を返しに、私、足動かないから学校に通うのも難しくってな、だからこうやって図書館に本を借りに来てるんやよ。」

はやては笑顔で言った。当麻はそのはやての笑顔を見て思った。

当麻（強いヤツだな。）

シヤマル「あの、上条くん、少しいいですか？」

シヤマルが当麻に話しかけてきた。姫神は気をきかせてはやてと一緒に本を返しに行った。シヤマルははやてを見送ると、当麻の方を見た。

シヤマル「シグナムから聞いたんだけど、はやてちゃんの呪いをどうにか出来るって本当なの？」

当麻「ん、ああ、でもそれが出来なくなっただ。」

シヤマル「どういこと？」

当麻「この前の戦いの後にそういう事が詳しい奴に聞いたんだけど……」

昨日

当麻「はあ、解除ができない？」

当麻とインデックスはフェイト達の家のリビングで夜中話をしていった。

インデックス「うん、無理なんだよ。」

当麻は焦った。シグナムとはやての呪いのことを何とか出来るかもしれないと約束したばかりなのに……



当麻「いや、だって、闇咲の時だって何とか出来たじゃないか。」

闇咲 逢魔

8月31日に学園都市に現れ、当麻とインデックスを襲撃した魔術師。彼はとある女性の呪いを解くためにインデックスの魔道書を読み取ろうとしたが、当麻の活躍でそれを阻止し、その後一緒にその女性の所に向かい呪いを解いた。

インデックス「あれは、呪い自身を壊したけど、そのはやての呪いは、闇の書がある限り、何度壊しても復活しちゃうんだよ。はやての呪いを解くには闇の書を当麻の右手で破壊するか、闇の書を完成させるかだよ。」

当麻はインデックスの話聞いて、落ち込んだ。シグナム達に希望をもたせていながら、その希望を無くすことになるなんて…

当麻「くそ、どんだけ不幸なんだよ。」

図書館

シヤマル「そう、なんですか……」

当麻「今、闇の書を壊してはやての呪いを解いても、守護騎士達も消えちまって、はやては一人になっちまう。もうはやての笑顔が見れなくなっちまう。」

シヤマル「上条くん。ありがとうね。はやてちゃんのためじゃなくて私たちのことを考えてくれて……」

当麻「やっぱり、闇の書を完成させるしか無いんだな。それしかはやてを救えない。」

シャマル「ええ、今、シグナムとヴィータちゃんとザフィーラが別の世界で蒐集しているわ。今日の話、三人に伝えとくわね」

当麻「ああ、済まなかった」

当麻は弱々しい口調で言ったが、シャマルは笑顔で返してきた。

シャマル「ううん、上条くんが謝る必要はないわ。またね、」

そう言っつて、シャマルははやて達と合流して、図書館を去った。当麻は一人フェイトのマンションに帰ろうとしていると、携帯に電話がかかってきた。掛けてきたのは土御門だった。

当麻「どうした？何かあったのか？」

土御門『かみちゃん、フェイトがやられた。今すぐマンションに帰ってこい』

第25話 闇の書について（後書き）

六甲水「ある意味、当麻とはやてがラブラブだね」

当麻「うるさい」

六甲水「ミスターロリペドフィン」

第26話 砂漠での戦い（前書き）

六甲水「砂漠での死闘です」

## 第26話 砂漠での戦い

### 第26話 砂漠での戦い

当麻が図書館にいる頃、とある世界でシグナムが現れたと聞き、フエイトは向かっていた。

### 砂漠の世界

シグナムは巨大な蛇のような生物と戦っていた。

シグナム「少々厄介な相手だな」

シグナムがカートリッジをロードしようとした時、背後に巨大蛇の尻尾が出現した。

シグナム「はっ！」

シグナムは、巨大蛇の尻尾から現れた触手に捕まってしまう。

シグナム「く…しまった」

巨大蛇がシグナムを睨む。巨大蛇の触手がシグナムを締め付ける。

シグナム「ぐう…うわぁ！」

締め付けられ、シグナムが悲鳴を上げる。巨大蛇が、先端の尖った尻尾をシグナムに突き刺そうとする。

その時、数本の金色の魔力刃が巨大蛇に突き刺さり、シグナムを縛

る触手も切った。シグナムは上を見た。そこには、金色の魔法陣を展開してるフェイトがいた。

フェイト「ブレイク！」

フェイトの言葉と共に、魔力刃が爆発して巨大蛇を倒した。

ザフィーラは、爆発音がした方を見つめた。

アルフ「ご主人様が心配かい？」

ザフィーラは声がした方を見た。そこにいたのはアルフだった。

ザフィーラ「お前か」

ザフィーラとアルフが睨み合う。

ザフィーラ「シグナムは我らの将だが、主ではない」

睨み合ったまま、ザフィーラとアルフは構える。

フェイトにやられた巨大蛇は、砂の中に逃げていった。フェイトとシグナムが空中で対峙する。その時、

エイミィ「フェイトちゃん！助けてどうするの！捕まえるんだよ！」

エイミィが通信で怒った。

フェイト「あつ、ごめんなさい。つい…」

フェイトはエイミィに謝った。

シグナム「礼は言わんど、テストロッサ」

フェイト「お邪魔でしたか？」

シグナム「蒐集対象を潰されてしまった」

言いながらシグナムは、カートリッジをロードする。

フェイト「まあ、悪い人の邪魔が私の仕事ですし」

シグナム「そうか…悪人だったな、私は」

司令室では、ヴィータの姿を確認した。

エイミィ「本命はこっち。なのはちゃん！」

なのは「はい！」

エイミィの言葉に、なのはは頷いた。

別世界、

なのははヴィータと対峙していた。何とかヴィータの話の間ごととするが、ヴィータは話す気はないらしい。ヴィータは赤い魔力球を出した。グラーファイゼンで赤い魔力球を砕き、赤い閃光を放つ。

閃光で目くらましをして、ヴィータはなのはから離れた。転送魔法で離脱するためだ。だが、ここで予想外の事態が起きた。遠くにいるのはが、レイジングハートをヴィータに向けて魔力を溜めているのだ。

ヴィータ「まさか…！撃ってくるのか!？」

ヴィータは、なのはの射程距離を見誤ったようだ。なのはのレイジングハートから、桜色の閃光が放たれた。閃光は真っ直ぐにヴィータに迫る。閃光が当たり、爆発した。煙が晴れていく。煙の中から、障壁を張った仮面の男が姿を現した。

ヴィータ「あ…あなた…」

仮面の男の後ろにいるヴィータは戸惑っている。なのはも驚いている。仮面の男は、ヴィータに少し顔を向けた。

仮面の男「行け。闇の書を完成させるのだ」

フェイトとシグナムの激闘は続いていた。フェイトはスピードを活かした攻撃を繰り返し、シグナムは剣と鞘を巧みに操って攻撃を防ぎ、反撃する。両者は、一旦距離を離して動きを止めた。二人とも息が乱れている。

シグナム（流石に速いな……目で追えない攻撃が出てきた）

フェイト（今はスピードで翻弄してるけど、長くは続かない）

両者は、次の一撃で勝負を決めようとする。



シグナム「強いな、テストロッサ。それにバルディッシュも」

フェイト「シグナムとレヴァンティンも」

二人は、互いの強さを認め合う。シグナムはレヴァンティンと鞘を構える。フェイトもバルディッシュを構える。

フェイト（この人に勝ちたい。だから全力を尽くす！）

二人が動き出そうとした瞬間、ヤツが……仮面の男が現れた。仮面の男は、背後からフェイトのリンカーコアを取り出した。

フェイト「え……？」

フェイトは呆然となって、自らの体を貫いてる腕を見た。

シグナム「貴様……！」

シグナムが仮面の男に向かって叫ぶ。だが仮面の男はそんな事、気にも止めない。

仮面の男「さあ、奪え」

仮面の男が、フェイトのリンカーコアを差し出す。シグナムは、仮面の男を睨んだ。確かに、主はやてのためにもリンカーコアは必要だ。だが、こんな形で手に入れる事は望んでいない。

仮面の男「どうした？早く奪え」

仮面の男が、シグナムにリンカーコアを奪うよう促した時、

美琴「何してるのよ。」

仮面の男の周りに砂鉄の刃が刺さった。シグナムは声が出た方を見ると、そこには電気をパチパチと周りで流しながら、仁王立ちをした美琴がいた。仮面の男は急な攻撃に驚き、フェイトから離れた。倒れそうになったフェイトをシグナムは抱き抱えた。

シグナム「御坂、貴様今までどこに…」

美琴「とりあえず、勝負の邪魔しちゃ悪いと思って離れてただけど、どうもその男が気に食わなくてね。さあ、覚悟してもらおうわよ。」

そう言つて、美琴はポケットからコインを取り出した。そして、コインを弾き、レールガンを放った。仮面の男は驚き、何とかその攻撃を避けた。

仮面の男（くっ、気を付けるのは幻想殺しだけだったはずじゃ…）

美琴は手を休める事なく攻撃を続けた。仮面の男は攻撃を避け続けながらその場を去った。

シグナム「助かった御坂。お前を連れてきてよかった。」

美琴「別にただムカついただけだから。それよりもその子早く病院とか連れていかないと…」

シグナム「多分暫くしたらテストアロッサの仲間が来るはずだ。それ

まで待とう」

美琴「てか、あの仮面の野郎は何なのよ。あれも仲間なの？」

シグナム「いや、だが奴もまた闇の書を完成させようとしている。」

美琴「何かやり方が気に入らないのよね。」

しばらくして、クロノやアルフがシグナム達のところに来てきて、シグナムはフェイトを預けて、美琴共にその場を去った。

第26話 砂漠での戦い（後書き）

六甲水「次回はまた闇の書についてです」

**第27話 過去の事件、始まった侵食（前書き）**

六甲水「闇の書についてと当麻にある疑惑が」

当麻「なんだよ。その疑惑って」

## 第27話 過去の事件、始まった侵食

第27話 過去の事件、始まった侵食

時空管理局医務室

フェイトは静かに眠っていた。付き添いでなのはと当麻とクロノがいた。

当麻「それで、フェイトは大丈夫なんだな。」

クロノ「ああ、幸いリンカーコアを蒐集される瞬間にフェイトを助けられたみたいで、いきなりリンカーコアを抜き取られてしまったことによる症状だ。暫くしたら目覚めるらしい」

なのは「よかった。」

当麻「そういえば、御坂の奴がいたんだっけ？」

クロノ「ああ、あのショートカットの人だよな。あの守護騎士と一緒ににいたぞ。あと、上条さん。今から無限書庫に行くが付き合っか？」

当麻「ああ、ちょっとインデックスの様子みたいからな。悪いけどなのは、フェイトのこと頼めるか？」

なのは「うん、大丈夫だよ。」

無限書庫

ユーノとインデックスは闇の書について調べていた。するとそこに当麻とクロノがやってきた。

クロノ「ユーノ、調査は順調か？」

ユーノ「ああ、色々と分かったことがあったよ。まず、『闇の書』っていうのは本来の名前じゃない。古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集して研究するために作られた、主と共に旅する魔導書」

ユーノが報告をする。当麻とクロノは黙って話を聞いた。

ユーノ「破壊の力を振るうようになったのは、歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う」

アリア「ロストログシアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする人が今も昔もいるってことね」

アリアが呆れた口調で言った。

クロノ「転生と無限再生はその改変が原因か」

クロノが呟いた。

ユーノ「一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間蒐集がないと持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる。無差別破壊のために。だから、これまでの主はみんな完成してすぐに……」

クロノ「ああ。停止や封印方法についての資料は？」

クロノが尋ねる。

ユーノ「それは今調べてる……ただ……」

クロノ「ただ？どうした？」

ユーノの様子に、クロノは首を傾げた。するとインデックスが言った。

インデックス「実はね、闇の書は私や当麻がいた世界にも存在していたんだよ」

クロノ「何だって、どうしてそれを早く言わなかった」

クロノと当麻はただ驚いていた。

インデックス「闇の書って名前は私の記憶にはなかったんだよ。あったのは夜天の魔道書って名前だけ。」

当麻「なあ、夜天の魔道書が俺たちの世界にあったのは何年前だったんだ？」

インデックスは目をつぶりながら言った。

インデックス「ちょうど、私たちの世界で約五十年前にあったらしいんだよ。でも、残っていた記録には守護騎士達はいなかったらしいよ」



クロノ「どういう事だ？何故存在しなかったんだ？」

インデックス「記録によると夜天の魔道書の使い方は知らなかったらしいよ。でもそこから凄く気になる文があったの」

クロノ「何だ？」

インデックス「夜天の魔道書はただの魔道書ではあらず、決して破壊してはいけない。」

当麻「どういう事だ？それに昔の人は使い方知らなかったんじゃないのか？」

インデックス「……そこから何も書かれてないの。ただすごい嫌な予感がするんだよ。」

インデックスとユーノ以外はただ絶句していた。

当麻「……やっぱり完成する前にどうにかしなきゃいけないのか？」

クロノ「そうなるな。ただ十一年前には何も起きなかったらしい。」

当麻「十一年前？一体何があつたんだ？」

当麻の質問にクロノはただ黙っていた。

クロノ「十一年前、僕の父親が闇の書の封印に失敗したんだ。グレム提督も関わっていた。」

アリア「お父様は、その時のこと凄く気にしてたよ。」

アリアは淡々と喋った時、ふっと、当麻は考えた。

当麻（……過去にグラム提督が関わっていたのか？あれ？そういえば、なのはがいた世界からフェイトがいた世界までどんなに頑張っても時間はかかるって、エイミイが言ってたけど、もし、仮面の男が二人……まさか、）

クロノ「またなにか分かったら教えてくれ。上条さん行こう」

当麻「あ、ああ、」

こうして二人は立ち去った。

八神家

シャマルとシグナムは昨日の図書館での話をしていた。

シグナム「そうか、彼の力でも無理だったか。」

シャマル「ええ、彼凄く落ち込んでいたわ。私たちに期待させるだけさせて、結局ダメだったなんて……」

ヴィータ「あいつは、凄いな。誰かのためにアソコまでやるなんて……」

ザフィーラ「奴は、色んな場所で色んな事に関わってきたんだろうな。だからそこまで出来るんだと思う」

その時、はやての部屋からガシャンと何かが倒れる音がした。シグ

ナム達は、すぐにはやての部屋に駆け付けた。部屋の中ではやては、苦しそうに胸を押さえながら倒れていた。

「はやて!?!」

ヴィータがはやての名を叫ぶ。

御坂「シグナム、早く救急車。」

シグナムは電話で救急車を呼ぶ。

タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

病院。

石田先生「もう大丈夫みたいね。良かったわ」

はやての治療を担当している、石田先生は安心した。はやては病室のベッドにいて、今は落ち着いた様子をしている。美琴とシグナム達と一緒に病院に来ていた。ザフィーラとヴィータは、買い物に行ってる姫神を待っていた。

はやて「はい。ありがとうございます」

はやてが石田先生にお礼を言う。

美琴「まったく、いきなり倒れたからビックリしたわよ。」

はやて「せやから、ちょい目眩がして胸と手がツツただけって言うたやん。もう、皆して大事にするんやから」

と、はやてが言った。

美琴「いや、あの様子を見たら誰でも焦るわよ」

シグナム「はい。何かあってからでは遅いですから」

美琴とシグナムが言った。闇の書の侵食が進んでいる。どうやらあまり時間は無いようだ。

石田先生「まあ来てもらったついでに、ちょっと検査とかしたいから、もう少しゆっくりして行ってね」

はやて「はい」

石田先生の言葉に、はやては返事をした。

石田先生「さて、シグナムさん、シャマルさん。ちょっと……」

石田先生が二人を呼んだ。恐らく入院の話とかならう。三人は病室を出た。石田先生との話で、はやては入院することになった。

その夜、当麻の携帯に姫神から連絡があった。

当麻「何だって、はやてが入院だって」

まさか、呪いの侵食が進んでいるのか…

当麻「はやての奴は大丈夫なのか？」

姫神「うん、今のところは大丈夫。でも、シグナムさん達の話ではもう時間が無いって……」

当麻「くそ、明日ちょっとお見舞いに行く。」

翌日の夕方、当麻ははやての病室にいた。病室にははやて以外には姫神と美琴がいた。

当麻「よお、調子はどうだ？」

はやて「あ、当麻さん。大丈夫だよ。検査入院やし、もう皆心配しすぎなんや」

当麻「まあ、しょうがねえよ。みんなはやてのこと好きなんだから。」

当麻のその言葉にははやては少し嬉しそうにしていた。

はやて「じゃあ、当麻さんは私のこと好きなんやね。」

そのはやての言葉を聞いて、空気が凍りついた。

美琴「へえー、あんたって本当に見境なしね。」

姫神「ロリコン。」

当麻「まで、何でそうなるんだよ。俺はただはやての事が心配で……」

はやて「そうなん？当麻さんは私のこと嫌いなん？」

はやては悲しそうな顔をした。

当麻「いや、嫌いってわけじゃ……」

すると、はやてはまた笑顔になった。

はやて「じゃあ、好きなの？」

当麻「いや、だから、ああ、もう、好きだよ。」

その言葉を聞いて、はやては嬉しそうにしていた。他の二人は冷たい目で当麻を見ていた。

**第27話 過去の事件、始まった侵食（後書き）**

六甲水「当麻の口リ疑惑でした」

当麻「まじで、捕まるからやめてくれ」

第28話 クリスマスの夜（前書き）

六甲水「今回は、クリスマスのお話ですね」



## 第28話 クリスマスの夜

第28話 クリスマスの夜

12月23日。

すずかはメールを打っていた。

『明日の終業式の帰りの件。みんな大丈夫ですか？』

メール送信。

『はやくにプレゼントを渡しに行くんだよね』

と、フェイト。

『でも、内緒で行って大丈夫かな？』

と、なのは。

『まっ、もし都合が悪かったら、石田先生に渡してもらえばいいし』

と、アリサ。

『それじゃ、当麻さんも誘って、また明日ね。おやすみ』

最後にすずかが送信して、メールのやり取りは終わった。

12月24日。はやての病室。

シグナム、シャマル、ヴィータがお見舞いに来ていた。美琴と姫神も一緒だ。ザフィーラは家で留守番をしていた。

ヴィータ「はやて…ごめんね。あんまり会いに来れなくて」

はやて「ううん。元気やったか？」

ヴィータ「めっちゃめっちゃ元気！」

はやてがヴィータの頭を撫でて、ヴィータは元気に答えた。シグナムとシャマル、美琴と姫神も微笑みながら、その光景を見ていた。その時、ドアがノックされた。

すずか「こんにちは」

ドアの向こうから、すずかの声が聞こえた。シグナム達は焦った。連絡がなかったので、今日は見舞いに来ないのだと思っていた。

はやて「あれ？すずかちゃんや。はい、どうぞ」

はやてがすずかに返事をして、中に入るように促す。

すずか「こんにちは」

ドアが開かれて、すずか達が病室に入ってきた。

すずか「あ、今日は皆さんお揃いですか？」

アリサ「こんにちはは、はじめまして」

と、すずかとアリサが言う。

なのは&フェイト「あっ!?!」

なのはとフェイトは、シグナム達に気付いて思わず声を上げた。

シャマル「えっ!?!」

フェイト達の後ろにいた当麻も驚いた。

当麻（やば、スゲエ忘れてた。てか、お前らも頼むから睨まないでくれよ）

当麻は凄く焦っていた。美琴と姫神も焦っていた。

シグナムとヴィータは、敵意の目でフェイト達を睨んでる。気まぐしい雰囲気になる。

アリサ「あ、すみません。お邪魔でした?」

と、アリサが言った。

美琴「あ、いや、いきなり来たから驚いただけだよね。」

シグナム「あ…ああ…そっだ」

シャマル「本当に驚きました。いらっしやい」

美琴が何とか誤魔化した。それに合わせてシグナムとシャルも合  
わせた。

アリサ「なんだ。よかった」

すずか「驚かせてすみません」

すずかとアリサが安心する。

はやて「ところで、今日はみんななどないしたん？」

はやてがすずか達に尋ねた。すずかとアリサは、笑顔で互いに顔を  
見合わせ、

アリサ&すずか「せーの！」

二人は同時に、コートで隠していたプレゼントを出した。

アリサ&すずか「サプライズプレゼント！」

プレゼントをはやてに差し出した。はやては嬉しそうな笑顔になる。

すずか「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

はやて「わあ、ほんまか。ありがとうな」

お礼を言いながら、はやては二人からプレゼントを受け取った。

アリサ「みんなで選んできたんだよ。後で開けてみてね」

アリサ達は楽しそうに話をしている。ヴィータはまだなのはを睨んでいて、なのはは困った顔をしている。隣にいるフェイトも同じ表情をしている。

シャマル「ああ、みんなコートを預かるわ」

そう言っただけでシャマルは、さすが達からコートを預かる。小声で当麻がシグナムに話しかけた。

当麻「何で今日に限って、ザフィーラ以外全員集合してるんだよ。」

シグナム「すまない。主に心配掛けたくなかった……」

当麻はヴィータの方を見ると、ヴィータはなのはのことを睨んでいた。

当麻「やべえよ、ヴィータの奴スゲー睨んでるよ。」

なのは「えと…あの…そんなに睨まないで…」

ヴィータ「睨んでねーです。こっぴど目つきなんです」

睨みながらヴィータが言った。なのはは戸惑った。すると、はやてがヴィータを怒った。

当麻「マジでどうするんだよ。このまま一触即発だよ。」

さすが「さようなら」

さすがとアリサが手を振りながら挨拶した。シグナムとシャマルは

病院の玄関口で、すずか達を見送った。夜になって辺りは暗くなっていた。

シグナム達はなのは達にこのあと近くのビルの屋上に会う約束をした。当麻は思った。

当麻（長い夜になるな……）

## 第29話 ただ笑顔を守りたいために

第29話 ただ笑顔を守りたいために

近くの屋上で、当麻となのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シヤマルがいた。

なのは「はやてちゃんが、闇の書の主…」

シグナム達から、話を聞いたなのはが呟いた。フェイトも困惑の表情を浮かべている。

シグナム「悲願は後わずかで叶う」

シヤマル「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも」

シグナム達が敵意を放ちながら言う。

当麻「待ってくれ。」

当麻はシグナム達となのは達の前に出た。

当麻「これ以上、戦ってもだ…」

当麻が言いかけた瞬間、ヴィータが当麻の頭をグラーファイゼンで殴った。

当麻（やべえ、意識が飛びそうになった。）

当麻は膝をついて、頭を抑えた。

ヴィータ「悪いが、アタシたちはもう止まることが出来ないんだ」

ヴィータは下がって、シグナムの隣に立つ。シグナムも、レヴァンティンを出して右手に持つ。

当麻「シグナム…」

シグナム「シャルル。お前は離れて通信妨害に集中している」

シャルル「うん」

言われた通りに、シャルルは後ろに下がった。シグナムは両手でレヴァンティンを構える。

シグナム「すまない、上条、我らを許してくれとは言わない。だが…」

シグナムは悲痛な顔をする。前髪に隠れている目から、一筋の涙が零れる。

シグナム「我ら守護騎士は…主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた」

目から涙が溢れ出る。そして、シグナムはバリアジェットに着替えた。ヴィータは鉄球を出し、なのはに向かって放ったが、その攻撃はなのはに直撃しなかった。

なのは「上条さん…」



ヴィータ「上条……」

当麻は頭に血を流しながらも、右手で鉄球を防いだ。

当麻「ふざけんなよ。許すも何も俺は最初からお前らのことを許してる。それによお、何でお前らだけで背負うとするんだよ。なのはとかフェイトとかにも頼れよ。」

ヴィータ「上条、」

なのは「上条さん」

当麻「俺はお前らの敵じゃない。なのは達もだ。今からでも間に合う。止まる事だって出来る」

フェイト「当麻」

シグナム「上条……私たちは……」

シグナムとヴィータは武器をおろそうとした瞬間、当麻に青いバインドが掛かった。

仮面の男「まずは、一人。」

シグナムが仮面の男に立ち向かおうとするが、青いバインドに拘束されてしまう。フェイト達やヴィータ達も全員、バインドに捕まってしまった。

仮面の男「よくやった」

そこへ、もう一人仮面の男が現れた。

なのは「えっ！？二人！？」

仮面の男達を見て、なのはは驚きの声を上げた。

仮面の男「では、始めるとするか」

仮面の男が右手を上げた。すると闇の書が現れた。

シャル「いつの間に！？」

闇の書を見て、シャルが驚く。

当麻「いい加減、正体を現したらどうだ？リーゼロッテにリーゼアリア」

仮面の男「な、こいつ、気づいていたのか」

仮面の男「く…構うな。ソイツが何を知っていても、今の状態では我々の邪魔はできん」

仮面の男が、闇の書を持つてる仮面の男に言った。闇の書が開いて、紫色に光る。

シグナム「う…うああっ！！」

シグナム達から、それぞれ光の玉が現れる。

当麻「シグナム!!」

当麻が叫ぶ。

仮面の男「最後のページは、不要となった守護者自らが差し出す」

仮面の男の言葉の後に、闇の書が蒐集を始める。

シャマル「ああああ!!」

シャマルが闇の書に蒐集され、姿が消えた。次にシグナムの蒐集が始まる。

シグナム「ああああ!!」

シグナムの体が下から消えていく。

当麻「シグナム!!」

シグナム「上条、主を、頼んだぞ」

そう言い残し、シグナムは消えていった。当麻はただ呆然としていた

ヴィータ「シャマル!シグナム!」

ヴィータが叫ぶ。

ヴィータ「何なんだ?何なんだよテメーら!」

仮面の男達に向かってヴィータが怒鳴る。

仮面の男「プログラム風情が、知る必要はない」

仮面の男は静かに言った。その瞬間、仮面の男の顔に衝撃が走った。

仮面の男「な、」

当麻「こんなもん、俺の右手の前じゃ、無意味なんだよ。」

仮面の男「忘れていたよ。貴様のその右手の力を」

殴られた仮面の男の仮面は割れていた。割れた場所からだんだんとヒビが入り、ロツテの変身魔法が解けていった。

ロツテ「くう、マジで魔法関連はやぶっちまうんだね」

なのは「ロツテさん」

仮面の男「やはり、一番最初に処理をしておくか。」

仮面の男は当麻に向かって、体当たりをし、その衝撃で当麻はフェンスにぶつかった。

当麻「がは、」

仮面の男「魔法関連は効かないが、どうやら、普通の攻撃は効くらしいんだな。」

そして、もう一撃、当麻のハラを殴った衝撃でフェンスは壊れ、当麻は屋上に落ちた。

「フェイト」当麻、

### 第30話 目覚めた闇の書

#### 第30話 目覚めた闇の書

当麻は目を覚めました。まだ意識がはっきりしていなかったが、どうやらどこかのビルの中らしい。

当麻「はあ、ここは……なのは達は？」

当麻は起き上がると頭の傷が少し痛んだ。さらに体が激しい痛かった。

神崎「やっと目覚めたか。」

黒子「まったく、目が覚めないから死んでしまったかと思いましたわ。」

ビルの中には、神崎と黒子、姫神も一緒にいた。

当麻「神崎、俺は確か、屋上から落ちたはずじゃ……」

神崎「地面に激突するギリギリで、私が受け止めたからな。」

当麻「そうか、ありがとな。なのは達は？」

黒子「なのはさん達は……」

すると、いきなり上から爆発音がした。当麻は上でなのは達が戦っていることに気づいた。

当麻「くそ、戦いを止めねえと…痛」

神崎「無理はしない方がいい。今から私たちも上に行つて、高町なのは達の手伝いに行つてくる。」

黒子「あなたは、ここで休んでいなさい。」

そう言つて、黒子は神崎と一緒にテレポートをした。

当麻達がいるビルから少し離れた場所に仮面の男とロツテがいた。

仮面の男「ディランダルの準備は？」

ロツテ「大丈夫だよ。これでお父様の……」

その時、二人の体に青色のバインドが掛けられた。

仮面の男「くう、これは、」

クロノ「どうやら、上条さんの読み通りだな。」

ロツテ「クロノ、あんたも気づいてたの」

クロノ「上条さんに話を聞いてな。それからずっと調べていたんだよ。さあ、話してもらつよ。グレアム提督を含めて……」

なのは達は、姿を変えたはやと対峙していた。

なのは「はやてちゃん!」

フェイト「はやて!」

二人は、はやての名を呼んだ。

闇の書「また、全てが終わってしまった。決して終わらせる事が出来ない悲しみ…」

闇の書は涙を流しながら言った。闇の書は片手を上に掲げると、黒い球体を作り出した。

闇の書「デアボリック・エミッション」

闇の書の言葉の後に、黒い球体が大きくなっていく。

フェイト「空間攻撃!」

闇の書「闇に…染まれ……」

黒い球体はどんどん大きくなる。なのははフェイトの前に出て、障壁を展開した。何とか、防ぎきったなのはたちはビルの陰に隠れていた。

フェイト「なのは、ゴメン。ありがとう。大丈夫?」

お礼を言いながら、フェイトはなのはの事を心配した。

なのは「うん。大丈夫」



フェイトを安心させるように返事をした。

フェイト「あの子、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな。バル  
ディッシュ」

フェイトはバリアジャケットを変えた。レイジングハートをなのは  
に渡す。

なのは「……はやてちゃん」

闇の書を見ながら、なのはが呟いた。

ユーノ「なのは！」

アルフ「フェイト！」

ユーノとアルフが二人の所にやってきた。直後、突風が起こり、街  
を何かがスッポリと覆った。

アルフ「前と同じ、閉じ込める結界だ」

アルフがフェイト達に言った。

フェイト「やっぱり、私達を狙ってるんだ」

ユーノ「今、クロノが解決法を探してる。それにプレシアさんも」

フェイト「母さんも？」

フェイトはユーノに振り返った。

ユーノ「それまで、僕達で何とかするしかない」

なのは「うん」

フエイト達が話し合う。その時、闇の書の様子を見ていたなのはが声を上げた。

なのは「あれって、神崎さんと白井さん？」

ユーノ「まさか、魔法も無しに止める気なのか！」

フエイト「そんな無謀すぎるよ」

闇の書「あなた達は……」

神崎「どうやら、闇の書は予想以上に厄介なものみたいですね」

黒子「そうですね。」

闇の書「……あなた達も主を泣かせるのですか？」

黒子「多分そうですね。今からあなたを傷つけることになるんですから。」

そう言って、黒子は闇の書に向かって鉄の棒を放ち。鉄の棒を瞬間移動をさせ、闇の書の後ろに移動させたが、闇の書はその攻撃を弾いた。

黒子「あら、やりますわね。」

闇の書「魔法とは違いますね。これは…科学ですか？」

黒子「あら、色々と知ってるみたいですよ。」

神崎「なら、これならどうだ。唯閃」

神崎は闇の書の上空から攻撃を放ったが、闇の書は障壁を張って防御した。

神崎「どうやら、一筋縄では行かないみたいだな。」

時空管理局本部

とある一室に、クロノ、プレシア、グレアム提督とアリア、ロツテがいた。

クロノ「二人に指示を出したのはあなたなんですよ。グレアム提督」

目の前にいるグレアムを見つめながら、クロノは言った。

ロツテ「違うよ。クロノ」

アリア「これは私たちの独断だ」

二人は反論するが、

プレシア「あなた達は黙っていなさい」

大魔導師としてのプレッシャーを放ちながら、プレシアは二人を睨んだ。睨まれた二人は、たじろいだ。

グレアム「二人ともいいんだよ。二人はもうあらかた掴んでいる」

グレアム提督が言った。

クロノ「あなたは闇の書の転生先を調べていたんですね。そしてたどり着いたのは闇の書の現在の在処と今の主である八神はやてを」

グレアム「…両親に死なれ、体を悪くしたあの子を見て、心は痛んだが…運命だとも思った。孤独な子であれば、それだけ悲しむ人は少なくなる」

はやての映像を見ながら、グレアムは語った。プレシアは冷たい表情を保ちながら、内心怒っていた。悲しむ人は少なくなる？数でしか人を理解出来ない最低な人間の考えだわ。そんな事を思いながら、以前、自分がフェイトにした事を思い出した。

プレシア（…私も偉そうな事は言えないわね）

そう思いながら、プレシアはグレアムに向き直った。

プレシア「彼女の生活の援助をしていたのも貴方ね？」

グレアム「永遠の眠りにつく前くらい、せめて幸せにしてやりたかった…」

グレアムは目を閉じて、少し顔を下げた。

クロノ「偽善です」

プレシア「封印の方法は、闇の書を主ごと凍結させて、次元の狭間にでも閉じ込める。そんなところかしら？」

グレアム「ああ。それなら闇の書の転生機能は働かない」

プレシアの問いに、グレアムは答えた。答えを聞いたプレシアは顎に手を当てて考えた。すると、ロツテ達が言う。

ロツテ「これまでの闇の書の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ。それと何にも変わらない！」

アリア「プレシアさん。私達を解放して。凍結がかけられるのは、暴走が始まる数分だけなんだ」

クロノ「あなた達がやろうとした事は、単なる復讐です。八神はやはりあなた達の復讐の道具ではない」

グレアム「そうだな。自分たちがやろうとした事がただの復讐でしか無いと本当に気がついたのは、プレシア女史の事件を聞いてからだ」

プレシア「えっ、」

グレアム「君は娘であるフェイトくんを道具としか扱っていなかった。だが、その考えもある少年と出会ったことで変わった。」

プレシア「上条くんね。私も彼と出会っていなかったら、どんな道に進んでいたか分からなかったわ。きっと、フェイトの事を最後まで

で道具としてしか見ていなかったと思うわ。」

グレアム「もし、彼と出会うのがもっと早かったら、考えを変え、彼女を最高の形で救うことを考えたのかもしれない。クロノ、これを…」

グレアム提督はクロノにディランダルを渡した。

グレアム「これをどう使うかは、君次第だ。」

クロノ「はい」

そう言つて、クロノは部屋を後にした。プレシアはグレアム提督を見た。

プレシア「グレアム提督、私たちは信じるだけです。今あの場所で戦つてるフェイト達を、そして、あらゆる幻想を殺す、誰かもために戦う少年を」

闇の書「まだ続けますか？」

闇の書と対峙していた神崎達は疲労していた。次々と攻撃を仕掛けても、闇の書があつさり防いでしまう

神崎「どうやら、力押しでも無理みたいですね」

黒子「そうみたいですわね。さつきからこつちの攻撃を防いでしまつて、」

闇の書「どうして、手を抜くんですか？」

闇の書の言葉に、神崎達は驚いた。

神崎「気づいていたみたいですね。」

闇の書「何故、手加減を…」

闇の書の言葉に黒子は薄く笑った。

黒子「本気で攻撃してしまったら、あなたの主が傷ついてしまうからですね。」

闇の書「そうですね。ですがそれが命取りになります。ブラッティーダーガー」

闇の書は紅いナイフを黒子たちに放つ。だが、紅いナイフは白い閃光にかき消された。白い閃光が放たれた方を見ると、ドアのところに美琴がいた。

黒子「お姉さま」

美琴「大丈夫だった？黒子」

美琴は黒子たちの方に駆け寄った。

美琴「さてと、主を泣かせている馬鹿な子供を止めるとしますか」

そう言っつて、美琴はコインを持った。闇の書は分からなかった。どうしてここまで出来るのかを…

闇の書「どうして、あなた達はそこまで…」

当麻「決まってるだろ。皆誰かのために戦ってるんだ。」

闇の書が声をした方を見ると、そこには姫神に支えながらドアの前に立っている当麻がいた。



### 第31話 強き思い

第31話 強き思い

闇の書「あなたは、上条当麻」

闇の書は当麻の名前を呼んだ。

当麻「何だ。知ってるのか？」

闇の書「私の中に騎士たちの記憶や主の記憶がありますから」

当麻は顔を険しくした。もし、右手で闇の書を攻撃してしまうと騎士たちはやてまで一緒に消してしまう可能性がある。

当麻「なあ、あんたの目的は何だ？」

闇の書「主の願いを叶える事です」

当麻「はやての願い？」

闇の書「はい。愛する守護騎士達を奪った者達と、この世界を破壊し、主に穏やかな永遠の眠りを……」

目を閉じ、胸に手を当てながら闇の書は答えた。当麻は拳を強く握しめた。

当麻「ちげえよ。それははやての願いじゃない。それはお前の自己中な考えだ。」

闇の書「あなたに主の願いを知っていると云うのですか？」

当麻「ああ、あいつは、ただ、皆幸せに暮らしたい。悲しみも争いのないただ、平凡な日常を望んでるんだよ。お前の歪んだ考えをあいつの願いと勘違いしてんじゃねえ。」

闇の書「……だが、私は止まることが出来ない。私が止まれば私の中にあるアレが出てきてしまう。」

当麻「ならそれごとお前を止めてやるよ。」

当麻達がいる場所から少し離れた場所になのは達がいた。

なのは「あれ、上条さんじゃない？」

フェイト「うん、無事でよかった。」

なのは「私たちも行く。」

闇の書「ブラッティータガー」

闇の書が紅いナイフを出し、当麻に向かって放つ。当麻は右手でそれを消した。闇の書は魔力で強化した拳で当麻を殴ろうとしたが、当麻は左で闇の書を殴ったが、障壁で防御された。

当麻「くそ、」

闇の書「ハアアアアア」

闇の書は当麻のハラを殴り、追撃にブラッティータガールを放った。

当麻「ぐあ、」

美琴「何であいつは、右手使わないのよ」

神崎「右手を使えば、彼女の中にいる騎士たちも消えてしまうからだ。」

黒子「でも、攻撃しないと止めることなんて出来ませんわ」

闇の書「あなたは優しすぎます。」

闇の書がもう一度、攻撃をしようとしたが、ピンクの閃光と黄色の閃光に妨害された。

フェイト「当麻、大丈夫？」

なのは「ごめんなさい。遅くなって、」

当麻「フェイト、なのは。悪い、俺の右手じゃ、闇の書ことはやてを消しかねない。障壁とか魔法とかは俺が防ぐから、攻撃を頼めるか？」

フェイト「うん、私たちもあの子を助けたい。」

闇の書「……どんなに頑張っても主の悲しみは無くならない。咎人達に……滅びの光を」

ユーノ「まさか、あれは…」

なのは「私のスターライトブレイカー」

なのはも信じられないと言った顔をする。

フェイト「なのはは一度、闇の書に蒐集されてる。その時に魔法をコピーしたんだ！」

その時、エイミーから通信が来た。

エイミー「大変、結界の中に取り残された一般人が…」

フェイト「早く助けに行かないと」

当麻「アルフ、ユーノ、姫神達を安全な所に、なのはとフェイトは避難を…」

美琴「ちょっと、あんたは？」

当麻「最小限にスターライトブレイカーを防ぐ。」

フェイト「危険過ぎるよ。」

当麻「大丈夫だ。今は俺のことより、一般人の避難だろ」

なのは「フェイトちゃん行こう。」

フェイト「なのは」

なのは「上条さんの事信じよう。」

フェイト「…分かった。気をつけて」

屋上に当麻と闇の書を残して、なのは達は安全なところに避難することにした。

闇の書「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどどん溜まっていく。

なのはとフェイトは逃げ遅れた人がいる場所に来ていた。すると、建物の隅に何かが動いた。

なのは「あの、すみませーん、危ないですから、そこでジツとしてください！」

人影に向かって叫んだ。二人の人影は足を止めて、振り返った。

すずか「え？」

アリサ「今の声って…」

二人は、声の主を見た。

アリサ「なのは!?!」

すずか「なのはちゃん!?!」

なのはを見て、二人は驚いた。二人を見て、なのはとフェイトも驚く。

なのは「アリサちゃん！すずかちゃん！」

人影は、アリサとすずかだった。

すずか「なのはちゃん、それにフェイトちゃんも」

アリサ「ねえ、これってどうなってるの？」

アリサがなのはに聞く。なのはとフェイトはどう説明するか迷った。

闇の書「星よ集え…全てを撃ち抜く光となれ」

魔力がどんどん溜まっていく。

当麻「さてと、一か八かの賭けだ。来い」

闇の書「貫け…閃光、スターライトブレイカー」

闇の書はスターライトブレイカー放ち、当麻は至近距離でスターライトブレイカーを喰らうことになった。

遠くでスターライトブレイカーの閃光を見ていたなのはとフェイト、だがその光景は異様だった。スターライトブレイカーはなのはたちがいる場所に届かず、当麻がいる屋上で止められていた。

フェイト「当麻、」

アリサ「ねえ、一体何が起こってるの？」

なのは「えつと、後で絶対に説明するから、すぐに安全な場所に運んでもらうから」

なのはの言葉の後、アリサとすずかの足下に魔法陣が展開された。その直後、二人は転移された。

なのは「二人に見られちゃった…」

なのはは少し、沈んだ顔をした。

フェイト「なのは、大丈夫だよ。きっと、ちゃんと説明すれば二人とも分かってくれる。」

なのは「そうかな？」

フェイト「だって、二人とも。友達だもん」

フェイトの励ましになのはは笑顔になった。

なのは「そうだね。早く上条さんの所行こつ」

なのは達は元の屋上に戻ると辺りは煙が立ち込めていた。

フェイト「当麻は？」

煙が晴れるとそこには驚いた表情の闇の書がいた。闇の書が見ている場所をフェイトとなのはが見るとそこには服がボロボロになり、右手からは血が出ていた。

闇の書「な、何故、倒れない。至近距離で、右手の力があっても防ぎきれないはずだ」

当麻はボロボロな体を引きずりながらも、闇の書に近づいた。

当麻「おい、何泣いてるんだよ。」

当麻の言葉にフェイト達も闇の書を見ると確かに闇の書の眼から涙がこぼれていた。

闇の書「こ、これは、主の涙だ」

闇の書は必死に涙を拭った。

当麻「な、く、ぐらい、なら、…最初、からこんなことすんなよ。もう気づいてるんだろ。お前はもう、とま……」

そこで、当麻は地面に倒れた。

フェイト「当麻」

なのは「上条さん」

二人は当麻に駆け寄りとしたが、闇の書が当麻の前に立ち、黒い魔法陣を展開させた。



闇の書「もう、あなたは戦わなくてもいい。ゆっくり休んでくれ」  
当麻の体がだんだんと消えていった。

### 第32話 それは儂い幻想 祝福の風が吹くとき

第32話 それは儂い幻想 祝福の風が吹くとき

「……さ、……よ、……朝だよ起きて当麻」

当麻が目を覚ますと、インデックスの顔があった。

当麻「ここは……俺の部屋？」

インデックス「どうしたの？当たり前だよ。ここは当麻の部屋だよ。」

当麻「…俺は、確か闇の書と戦ってはなかったけど、」

インデックス「闇の書？なにそれ？」

当麻「ん、何だっけ？闇の書って？何で俺そんな事言ったんだ？」

インデックス「変な夢でも見ていたんじゃない？それより、当麻、お腹すいたよ」

当麻は部屋にある目覚まし時計を見ると、時間は8時を廻っていた。

当麻「今日、日曜日だっけ？しょうがない、たまにはどっか食いに行くか」

インデックス「やったあー」

当麻は急いでパジャマから私服に着替え、インデックスと共に部屋を後にした。

しばらく、歩いていると不意に当麻の目に黒髪の女性と金色の髪の少女が一緒に歩いている姿をアツた。そのごく溢れた光景を見て、当麻の頭にある映像が流れた。それは、黒髪の女性が、金色の髪の少女を虐待している映像だった。そして、違う映像が流れた。それは一人の少女が悲しんでいる姿だった。

インデックス「当麻？どうしたの行かないの？」

当麻はインデックスの頭をなでた。

当麻「悪い、用事思い出した。スゲー大切な友達が悲しんでるんだよ。そいつの所に……」

インデックスはため息を吐き、笑った。

インデックス「もう、しょうがないか。当麻は困ってる人を見たら助けないと気が済まないもんね。いいよ、行ってきても。でも、あとでご飯沢山食べさせてね」

当麻「ああ、約束だ」

当麻が幻想の学園都市から抜け出ると、そこは真っ暗な空間だった。そこには闇の書が一人佇んでいた。

闇の書「上条当麻。貴方どうして、折角この世界の出来事から開放

され、元の世界での幸せな日常があつたのに…」

闇の書の言葉に当麻は険しい表情をした。

当麻「あんなの幸せな日常じゃねえよ。こつちで誰かが苦しんでるのに、俺はただ平穏な日々を送るなんて嫌だね。そんなの幸せじゃない。どんな目にあつてもいい、ただ誰かが幸せになれるなら俺は戦い続ける。闇の書、いい加減始めようぜ。最初はただ不幸なプロローグかもしれない。だけど、そのプロローグを終わらせようぜ。まだお前たちは始まってすらいない。」

当麻の言葉を聞いて、闇の書はただ、泣いていた。

闇の書「上条当麻、今私の体には、主の呪いの原因を作っている物が眠っている。主が助けるとソレが復活してしまう。」

当麻「止めてやるよ。お前らが始まるうとする事を妨害する奴をぶん殴ってやる。はやての所に案内してくれ。」

闇の書「上条当麻、行くう。」

はやてが目を覚ますと真つ暗な空間にいた。目の前には当麻と闇の書がいた。

はやて「当麻さん。ここはどこなんや？それにその子は？」

闇の書「私は闇の書です。ここは私の中です。」

闇の書がはやてに答えた。

はやて「えっ？あなたが闇の書!？」

はやては驚いた。それから闇の書は、はやてに今までの事を全て話した。はやては真剣に闇の書の話聞いた。話を聞き終えたはやては頷いた。

はやて「わかった。ほんなら名前をあげる。闇の書なんて名前は、貴女には似合わへん。私は管理者や。私にはそれが出来る」

闇の書「主…」

はやて達の足下に白い魔法陣が展開される。

なのは、フェイト、アルフ、は空中で闇の書と対峙していた。何発か魔法攻撃を撃ったが、闇の書には通用しない。すると、突然闇の書の動きが鈍くなった。その時、

はやて（外の方！管理局の方!）

なのは達は念話を受けた。

はやて（そこにいる子の保護者、八神はやてです!）

なのは「はやてちゃん!？」

フェイト「はやて!？」

念話を受けた二人は驚いた。

はやて（えっ！？なのはちゃんとフェイトちゃん！？）

はやても驚いている。

なのは（うん！なのはだよ）

フェイト（いろいろあって、闇の書と戦ってるの）

二人ははやてに返事をした。はやての声を聞いて、二人は少し安心した。

はやて（ゴメンなのはちゃん、フェイトちゃん。何とかその子止めてあげてくれる？）

なのは「え？」

はやて（魔導書本体からはコントロールを切り離れたんやけど、その子が走ってる和管理者権限が使える。今そっちに出てるのは、自動行動の防御プログラムだけやから。管理者権限が使えるば、当麻さんも外に出せる）

はやてがなのは達に説明した。

フェイト「わかった。魔力ダメージを与えればいいんだね」

なのは「やろっ、フェイトちゃん！」

フェイト「うん！」

二人は、闇の書に向けてデバイスを構えた。デバイスの先に魔力を溜める。

闇の書の中。

はやて「夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る」

はやては両手を闇の書の顔に添える。

はやて「強く支えるもの、幸運の追い風、祝福のエール。リインフォース」

闇の書に新たな名を贈り、魔法陣は強く輝いた。

なのは「スターライト・ブレイカー!!!」

フェイト「プラズマ・スマッシュャー!!!」

桜色の閃光と金色の閃光が同時に放たれた。二つの閃光は闇の書を飲み込んだ。

リインフォース「新名称『リインフォース』認識。管理者権限の使用が可能になります」

はやて「うん」

リインフォース「ですが、防御プログラムは止まりません」

はやて「まあ何とかしよ」

はやての前に一冊の本『リインフォース』が現れた。

はやて「行こか。リインフォース」

はやてはリインフォースを抱いた。

リインフォース「はい。我が主」

はやては光に包まれた。

外にいるなのは達に、エイミーからの通信が入る。

エイミー「みんな気をつけて！闇の書の反応、まだ消えてないよ！」

海に黒い球体が現れた。闇の書の防御プログラムだ。すると、なのは達のすぐ近くに白い光が現れた。

はやて「おいで…私の騎士達…」

白い光を囲むように、守護騎士達が現れた。

シグナム「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

シグナム。

シャマル「主在る限り、我等の魂尽きる事無し」



シャマル。

ザフィーラ「この身に命在る限り、我等は御身のもとに在る」

ザフィーラ。

ヴィータ「我等が主、夜天の王、八神はやての名の下に」

ヴィータ。

はやてによつて、守護騎士達が復活した。

フェイト「シグナム！」

なのは「ヴィータちゃん！」

シグナム達を見て、フェイトとなのはは名前を呼んだ。光の中には、はやてとリインフォースがいた。

はやて「リインフォース。私の杖と甲冑を」

リインフォース「はい」

はやては黒いバリアジャケットを見につけ、杖を手にした。直後、光は消えて、中からはやてが姿を現した。

はやて「夜天の光よ、我が手に集え！祝福の風リインフォース。セーリットアップ！！」

髪の色が変わり、騎士甲冑をイメージしたようなバリアジャケット

を身に纏い、背中には翼のようなものが出た。

遠く離れた場所には、姫神達とアリサ、さすがが海上の光景を見ていた。

神崎「どうやら、騎士たちは復活したみたいだな」

インデックス「ねえ、当麻がいないんだけど…」

美琴「そういえば、いないわね。」

黒子「まさか、出てくるのに失敗したとか…」

姫神「…あの人ならありそう。」

五人がそう話していると、土御門が走ってやってきた。

黒子「あら、そういえば、最近見なかったけど、どうしたんですの？」

土御門は息を整えてしゃべった。

土御門「ちっと、あっちの世界に行ってたんだけど、厄介なことなりそうだけ」

### 第33話 暴走したプログラム

第33話 暴走したプログラム。

ヴィータ「はやて…」

ヴィータは目に涙を浮かべている。はやては優しく微笑んだ。

シグナム「すみません」

シャマル「はやてちゃん…あの…ごめんなさい」

シグナムとシャマルが、はやてに謝った。はやては首を横に振った。

はやて「ええよ。みんなわかってる。リインフォースが教えてくれた。そやけど細かい事は後や」

はやては嬉しそうに微笑んだ。

はやて「おかえり。みんな」

ヴィータ「う…うああああ…！」

はやての温かい言葉を聞いた後、ヴィータが泣きながら抱き付いた。

ヴィータ「はやて！はやて！はやてええええ…！」

涙を流しながら、ヴィータははやての名前を叫んだ。はやては優しくヴィータを抱いて、頭を撫でた。

そこへ、なのはとフェイトがやってきた。

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんもゴメンな。ウチの子達がいろいろ迷惑掛けてもって」

なのは「ううん」

フェイト「平気」

なのはとフェイトは笑顔で答えた。

リインフォース「主、申し訳ありません」

はやて「ん？」

いきなりリインフォースが、はやてに謝った。

リインフォース「実は、上条当麻の転送に失敗しました。彼の右手の影響もあってか、彼はあの暴走プログラムの内部にいます」

はやて「なんやて」

当麻は、暗闇の空間にいた。そこは光も刺さない場所

当麻「どうやら、転送に失敗したみたいだな。」

すると、目の前に黒い球体が現れた。それはリインフォースの姿と似ているが、全く別のものだった。

????「貴様が、幻想殺しか。」

当麻「ああ、上条当麻だ。お前は……」

「???」「名はない。今の私はただのプログラム。不思議思うことがある。」

当麻「何だ？」

「???」「貴様は本来私の中に入れるはずがない。全ての幻想を討ち消すはずだ。なのに……何故貴様がここにいる」

確かに、奴の言うとおり、幻想殺しの影響で転移魔法などはあまり効かないはずだ。なのに……

「???」「思えることは、この世界に来た時に貴様の幻想殺しに何らかの影響があるはずだ。」

当麻「そうかもしれない。俺はこの世界に来ることや、闇の書のプログラムに入ることとは出来ない。」

「???」「だが、それは貴様を殺してから考えよう。さあ、始めよう。幻想を打ち砕くものよ。最後の戦いだ」

なのはたちは外で、暴走仕掛けているプログラムを倒す算段を話し合っていた。だが、当麻のことも心配していた、

フェイト「当麻、大丈夫かな？」

クロノ「大丈夫だ。彼なら、この程度の困難すべて乗り越えてきた

はずだ。虚数空間に飛び込んで助かったほどにな」

なのは「そうだね。」

クロノは視線を黒い球体に向けた。

クロノ「あそこの黒い淀み。闇の書の防衛プログラムが後数分で暴走を開始する。僕らはそれを何らかの方法で止めないといけない。停止のプランは現在二つある」

クロノは待機状態のデュランダルを取り出した。

クロノ「まず一つは、極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ、軌道上に待機してあるアースラの魔導砲『アルカンシエル』で消滅させる」

クロノやアースラの皆では他に案が浮かばなかった。

クロノ「これ以外に他にいい手はないか？」

クロノが他に意見を求めた。シャマルが手を挙げた。

シャマル「えーと…最初のは多分難しいと思います。主のない防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

シグナム「凍結させてもコアがある限り、再生機能は止まらん」

シャマルとシグナムが渋い顔で言った。

ヴィータ「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所でアルカンシエル

撃つたら、はやての家までぶっ飛んじゃうじゃんか!！」

ヴィータがアルカンシエルに反対する。

なのは「そ…そんなに凄いの?」

なのはがユーノに尋ねた。

ユーノ「発動地点を中心に、百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅を起こさせる魔導砲。っていうと大体わかる?」

ユーノが説明した。

なのは「あの、私もそれ反対!」

フェイト「同じく!絶対反対!！」

アルカンシエルの説明を聞いた、なのはとフェイトも反対した。確かにそんなものを撃つたら、はやての家どころか街まで消滅してしまう。

クロノ「僕も艦長も使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら被害はそれより、遥に大きくなる」

エイミー「はい、みんな!あと十五分しかないよ」

エイミーが通信で伝えた。

クロノ「何かないか?」

守護騎士達に尋ねた。

シグナム「すまないが、無い。あまり役に立てそうも無い」

悔しそうにシグナムが言った。

ザフィーラ「暴走に立ち会った経験が、我等には殆どないのだ」

と、ザフィーラが言った。

アルフ「ああ！なんかゴチャゴチャ鬱陶しいなあ！みんなでズバツとぶっ飛ばしちゃうわけにはいかないの？」

焦れたアルフがそんな事を言った。

ユーノ「ア…アルフ。そんな単純な話じゃ…」

ユーノが言った。

クロノ「本当はもう一個あったんだが、」

なのは「もう一個って？」

クロノは黒い淀みの方を見た。

クロノ「上条さんの力なら何とか出来たはずだが、」

シグナム「確かに、上条の力なら何とか出来たはずだが、彼はあの  
中だ。」



はやて「私たちで思いつくことをしよう。例えば、ここでダメなら違うところでアルカンシエル撃つとか」

フエイト「え、はやて今なんて言った？」

はやて「え、だから違うところでアルカンシエルを……あつ、」

なのは「クロノくん。アルカンシエルってどこでも撃てるの？」

なのはが尋ねた。

クロノ「どこでもって…例えば？」

フエイト「今、アースラがある宇宙空間とか」

話を聞いていたエイミイは、得意げな笑みを浮かべた。

エイミイ「管理局のテクノロジー、ナメてもらっちゃ困りますなあ」

右手の親指を立てる。

エイミイ「撃てますよ。宇宙だろうが、どこだろうが！」

自信満々に答えた。

クロノ「オイ！ちょっと待て君ら！ま…まさか……！」

三人の意見にクロノは驚いた。三人は満面の笑みを浮かべた

遠く離れた海岸で神崎達は土御門の話を聞いていた。

神崎「そんなことが……」

土御門「ああ、それで今は、みんな何をしてるんだ？」

黒子「アソコの黒い空間から出てくるやつを倒そうとしてますわ。」

土御門「奴が復活しなければいいが……」

リンディ「まあ、発想があの子達らしいわね」

リンディは驚き半分呆れ半分の、複雑な笑みを浮かべた。

エイミィ「計算上では実現可能というのが、また恐いですね。クロノ君。こっちのスタンバイはオーケー。暴走臨界点まであと十分！」

エイミィはキーボードを操作しながら言った。

クロノ「個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……やってみる価値はある」

クロノが皆に言った。僅かでも可能性があるなら、それに賭けるしかない。

はやて「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の複合四層式。まずはソレを破る」

と、はやてが言った。

フェイト「バリアを抜いたら本体がむけて、私達の一斉攻撃でコアを露出」

と、フェイト。

なのは「そしたらユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送！」

空を見上げながら、なのはが言った。

リンディ「あとはアルカンシエルで蒸発」

リンディが言った。グラムは、現地の様子をモニターで見ている。

リンディ「アルカンシエル、チャージ開始！」

局員「はい！」

リンディの指示に局員が応える。アルカンシエルの発射準備をする。海上では、なのは達が防衛プログラムを止めるために、それぞれのデバイスを構える。防衛プログラムの周辺に、数本の禍々しい黒い柱が立つ。防衛プログラムが暴走を開始する。

はやて「夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム。闇の書の『闇』」

はやてが呟いた。黒い球体が消え、中から防衛プログラムが姿を現した。カニのような足があり、カラスのような黒い翼が生えていて、獣のような鋭い爪を持った前足、幾つかの動物を合わせたような機

械の怪物だった。頭部には、紫色の女性のようなモノがあった。

アルフ「チェーン・バインド!!」

ユーノ「ストラゲル・バインド!!」

アルフのオレンジ色のバインドと、ユーノの緑色のバインドが、防衛プログラムの周りにある尻尾のようなモノを捕らえる。

ザフィーラ「鋼のくびき!!」

ザフィーラから白い魔力の線が出る。白い線は複数の尻尾を斬った。

なのは「レイジングハート！エクセリオンモード!!」

レイジングハートの形が変形する。ヴィータがグラーフアイゼンを構えて近寄る。

ヴィータ「ちゃんと合わせろよ！高町なのは!!」

なのは「ヴィータちゃんもね!!」

ヴィータ「『鉄槌の騎士』ヴィータと、『鉄の伯爵』グラーフアイゼン!!」

撃鉄を起こし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。

ヴィータ「轟天爆砕!!」

叫びながら、巨大ハンマーを振り上げる。

ヴィータ「ギガント・シユリアアアク!!!」

巨大ハンマーを、防衛プログラム目掛けて振り下ろす。防衛プログラムはバリアを張って、巨大ハンマーとぶつかる。衝撃で波が荒れる。バリアは、ヴィータの巨大ハンマーによって砕かれた。

なのは「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きます  
」!

足下に桜色の魔法陣を展開する。カートリッジロードをする。レイジングハートから桜色の翼が出る。防衛プログラムに向けて構える。

なのは「エクセリオンバスター!!!」

先端に桜色の魔力が溜まる。

なのは「ブレイク・シュート!!!」

桜色の閃光を放ち、防衛プログラムのバリアに直撃した。桜色の閃光はバリアを破った。次はシグナムとフェイトの番だ。

シグナム「『剣の騎士』シグナムが魂、『炎の魔剣』レヴァンティン!  
」

レヴァンティンを上に掲げる。

シグナム「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

鞘とレヴァンティンを合わせる。撃鉄を起こして、レヴァンティン

と鞘は合わさって『弓』になった。  
魔力で矢を作り、防衛プログラムに向けて構える。

シグナム「翔けよ、隼！！！」

矢は紫色に輝き、防衛プログラムに向かって放たれた。バリアに当たった矢は爆発し、バリアを砕いた。

フェイト「バルディッシュ！ザンバーフォーム！！！」

バルディッシュの形が変形する。金色の刃が出て、剣の形になる。

フェイト「フェイト・テストロッサ、バルディッシュザンバー！行きます！！！」

足下に金色の魔法陣が展開される。バルディッシュを上に掲げ、撃鉄を起こす。

フェイト「撃ち抜け、雷神！！！」

バルディッシュを振り下ろし、金色の魔力刃が伸びる。伸びた金色の魔力刃は、バリアを破って防衛プログラムを斬った。防衛プログラムからミミズのようなモノが現れ、光線を放とうと魔力を溜める。

ザフィーラ「『盾の守護獣』ザフィーラ！攻撃など撃たせん！！！」

ザフィーラが白い魔法陣を展開する。白い魔力の柱が、ミミズのようなモノを貫いて動きを止めた。

はやて「彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け！

「！」

はやては白い魔法陣を展開する。防衛プログラムの上空に、七ツの白い光を出す。

はやて「石化の槍、ミストルティン！！！」

白い槍は防衛プログラムを貫き、防衛プログラムを石化させる。すると、石化した防衛プログラム内から、獣の顔をした機械やら尻尾やらが無茶苦茶に出てきた。

アルフ「うわ?!なんか凄い事になってるよ！」

アルフは若干引いた。

エイミィ「やっぱり並の攻撃じゃ通じない！」

クロノ「だが、攻撃は通っている。プラン変更はなしだ！」

クロノが氷結の杖・デュランダルを構えて、エイミィに応えた。

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ」

クロノがデュランダルを振った。直後、海が凍っていく。

クロノ「凍てつけ！！！」

そのまま防衛プログラムまで凍らせた。それでも、まだ防衛プログラムは止まらない。

プログラム内部では、当麻とプログラムの激しい戦いが始まっていた。

???「急激に外部の装甲が剥がされたか。そろそろ、決着をつけよう」

当麻「そうだな。」

当麻の体はすでにリインフォースとの戦いでボロボロで、プログラムとの戦いでも激しい切傷を付けられている。

???「行くぞ。ダークネス」

プログラムは両腕を上空に向けた。そこから黒い球体が現れた。それを見て当麻は右手を構えた。

???「この魔法は外にいる白き魔道士の最強の魔法を同じくらいの威力、耐え切れるか？」

当麻「来いよ。お前のその闇をぶち殺<sup>こわ</sup>す」

なのは「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

フェイト&はやて「うん！」

なのはの言葉に、二人は頷いた。最後は、三人による一斉攻撃だ。なのはの前に魔法陣が展開され、桜色の魔力が集束される。



なのは「全力全開！スターライト」

レイジングハートを振り上げる。

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー」

足下に金色の魔法陣を展開し、バルディッシュを構える。空から紫色の雷が落ちて、金色の魔力刃に当たる。はやては杖を空に掲げて魔力を溜める。

はやて「ごめんな…おやすみな…」

防衛プログラムを見つめ、はやては辛い顔をして呟いた。

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク」

三つの白い魔力の弾を作り出す。

三人「ブレイカー！！！！」

三人が同時に叫び、桜色と金色と白色、三つの閃光が防衛プログラムに向けて放たれた。閃光は直撃し、大爆発を起こした。防衛プログラムの中で鼓動が強くなった。そして鼓動は防衛プログラムから消えた。

????「ダークネスブレイク」

黒い球体を当麻に向けて放つ、だが、当麻は避けずに右手で黒い球体を消した。そして、

当麻「言つたる。お前のその闇はぶち殺<sup>ころ</sup>すつて、」

「???」「見事だ。幻想殺し」

「捕まえた！」

シャマルが防衛プログラムのコアを捕らえた。

ユーノ「長距離転送！」

アルフ「目標軌道上！」

ユーノとアルフが転送準備をする。

シャマル「転送!!!!」

シャマル、ユーノ、アルフの三人によってコアは転送された。

エイミィ「アルカンシエル、バレル展開！」

キーボードを操作しながらエイミィが言った。リンディの前に発射装置が現れた。

リンディ「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します。準備を

！」

局員「了解！」

局員が応える。そしてアースラの前に、防衛プログラムのコアが転送された。リンディは発射装置にキーを差し込む。

リンディ「アルカンシエル発射！」

キーを回す。アースラからアルカンシエルが発射された。光の中に飲み込まれ、コアは完全に消滅した。退避したアースラは、コアの消滅を確認した。

エイミー「現場のみんな、お疲れ様！無事に終了しました！」

エイミーが通信でみんなに知らせた。みんな安心し、喜びで笑顔になる。なのはとフェイトとはやては、ハイタッチした。そして、残骸の上に当麻が倒れているのをハヤテが見つけた。戦いは終わった。

## 第34話 闇が消える瞬間

### 第34話 闇が消える瞬間

石田先生「全く、急に病院から消えたと思ったら、何故かケガ人連れてくるし」

はやて「あはは、ごめんなさい」

当麻「うう、体中痛いんだが…」

当麻の言葉に、石田先生は呆れ、はやては苦笑いをした。当麻はあ  
の後、はやて達と一緒に病院に向かい治療を受けた。ちなみにな  
はとフェイトは学校に、シグナム達は管理局にいる。理由はリン  
フォースの魔力を回復させるため、プレシアに治療を受けているか  
らだ。そして、今病室にいるのは当麻とはやてと心配して病院に泊  
まっているインデックスだけだった。

インデックス「もう、あの中にいたって言われたときは凄くビツク  
リしたんだから、」

当麻「しょうがないだろ。大変だったんだから、」

はやて「でも、当麻さんが戦った奴は、私の呪いの原因を作ってい  
たんやって」

当麻「ああ、だからもう、心配しなくていいぞ。それにリンフォ  
ースもプレシアさんが何とかできるって言ってたし、」

はやて「当麻さん、ありがとうな。私たちの家族救ってくれて…」  
はやては笑顔でお礼を言った。当麻は何だか恥ずかしそうにしていた。

当麻「いや、別に俺は…」

はやて「足も動けるようになったし、これなら当麻さんと色んな所行けんやね」

当麻「まあ、そうだけど、」

そして、数日後、当麻とはやてが無事退院し、当麻達が元の世界に帰る事になった。

フェイト「もう、帰っちゃうんだ」

当麻「ああ、いくらあつちでは時間の流れが遅くても、学校休んで単位が足りなくなっちゃうかもしれないだよ。でも、ほら、装置も安定したし、今度は学園都市遊びに来いよ」

なのは「え、大丈夫なんですか？」

土御門「ああ、装置の方も安定したからな。大丈夫だぜ。時間も同じくらいに流れるようにしたし、遊びに来る時は連絡してくれ」

なのはとフェイトは学園都市に行けると分かって嬉しそうだったが、はやては少し寂しそうだった。  
当麻ははやての前で屈んだ。

当麻「はやて、別に永遠の別れじゃないんだから、そう寂しそうにするなよ。」

はやて「うん、だって、折角仲良くなったのに…少しの間でも会えなくなるのはちょっと嫌や」

はやては少し泣きそうになっていた。それを見て当麻ははやての頭を撫でた。

当麻「まあ、そうだけど、ほら、こっちからも会いに行くから、」

はやて「本当？」

当麻「ああ、本当だ」

はやて「じゃあ、約束の…」

当麻「何だ指切りか？」

そう思い、当麻は小指を出そうとした瞬間、

はやて「キスや」

はやてにキスをされた。その瞬間、当麻は周りから黒いオーラを感じた。

美琴「あんたそんな小さな子まで……」

黒子「最低ですわね。」

姫神「君は見境無さすぎだと思っ」

当麻「ちょ、待て、そんな目で俺を見るな。てか、シグナム、何でデバイス出してるんだよ」

シグナム「上条、一回切らせろ」

当麻「じよ、冗談だよな。いくら何でもそれはきつすぎるから」

土御門「ユーノ、よく見ておけ。あれが上条当麻のもう一つ的能力だ。」

ユーノ「え、あの、助けなくっていいんですか？」

土御門「まあ、大丈夫だろ」

その後、シグナム達に暴行を受け、当麻達は学園都市に帰ったのだった。

数日前、

闇の書のプログラムとの戦いが終わったあと、一人の男があるものを回収していた。

「これで、約束していたものは回収したよ。オルドレイク」

「そうか、これで、ついに私の計画が始まれる。」

「だが、どこで始める？」

「この世界の十年後だ。」

男たちが手に入れたのは、鈍く光る心臓だった。闇はまだ生きていた。



### 第35話 学園都市に現れた魔道師

第35話 学園都市に現れた魔道師

闇の書との決戦を終え、学園都市に戻ってから五日後、私こと上条当麻は無断欠席した分、土御門と補習を受けていた。

当麻「たく、何で休日にまで補習なんだよ。」

土御門「そりゃあ、無断欠席に俺たち二人は成績の方も悪いからにや〜」

当麻「一番納得いかないのは、御坂と白井の奴は補習が無いんだよ」

当麻達と一緒になのは達の世界に行っていた二人だったが、寮内の掃除だけで難を逃れたらしい。  
しばらくすると姫神がやってきた。

姫神「…おはよう。」

当麻「よ、姫神。何か巻き込んでしまって悪かったな」

姫神「…別に、無断欠席したのは事実だし、」

土御門「それにしても、あん時は大変だったな…」

海鳴市から学園都市に戻った次の日、学校に登校すると呼び出しを食らい、黄泉川先生には凄く怒られるわ。小萌先生には凄く泣かれたりして、えらく大変だった。

その頃、インデックスは当麻の家で留守番をしていた。

インデックス「当麻、いくら補習があるからって寂しいな、なのは達遊びに来ないかな」

インデックスは一人で暇そうにしていると呼び鈴がなった。

インデックス「あれ？誰だろう」

インデックスが扉まで行き、扉を開くとそこには、黒いフードを被った小さな人がいた。

???「…上条当麻はいらっしゃいませんか？」

インデックス「えっと、当麻ならいませんけど、あなたは？」

インデックスは警戒しながら聞いた。

???「そうですか、それとその警戒心は解いてください。」

インデックス「素顔を見せてくれない人に対して、警戒を解くわけには行かないんだけど…」

???「確かにそうですね。では、素顔を見せます」

黒いフードをとると、それはまさになのはそっくりな少女だった。

インデックス「えっ、なのは？」

なのは？「いえ、私はなのはであって、なのはではないです。まあ、細かい話は彼が帰ってきてから…」

それから数時間後、当麻が帰ってきて、なのはにそっくりな少女と対面した。

当麻「で、お前はなのはじゃないのか？」

なのは？「いえ、私は高町なのはの言わば影みたいなものです。」

当麻「その影が何でこの世界にいるんだ？」

なのは？「この世界にきたのは偶然です。あなたがプログラムを倒したとき、プログラムの消滅した反動で私という欠片がこの世界に来てしまったんです。」

当麻「欠片？待て、お前は人間じゃないのか？」

なのは？「私は、闇の書の防衛プログラムの欠片です。」

当麻「欠片って、まさか、リインフォースに何か合ったのか？」

当麻は少し険しい表情になった。またリインフォースに何か合ってはやてが悲しんでしまうことになるのかと…だが、なのは？は大人っぽく笑った。

なのは？「大丈夫です。彼女たちには何もありません。もう防衛プログラムとは別に存在になっていきますから、本当なら私はすぐに消えるはずなんですが…とある欠片が力を強め、防衛プログラムを

復活させようとしています」

当麻「待て、お前もその防衛プログラムを復活させようとしてるんじゃないのか？」

なのは？「違います。私は防衛プログラムの復活なんて望んでいません。私は……」

その時、急にベランダから何かが割れる音がした。当麻達はベランダの方を見るとそこにはシグナムに似た人物とヴィータに似た人物がいた。

シグナム？「見つけたぞ。星光の殲滅者」

ヴィータ？「おとなしく、闇を統べる王から奪った力を返せ。」

シグナム？とヴィータ？はグラーフアイゼンとレヴァンティンを構えた。

なのは？「嫌だと言ったら……」

シグナム？「カづくで奪う」

レヴァンティンのカートリッジをロードし、なのは？向かっていった。なのは？もレイジングハートを取り出そうとすると、当麻が前に現れた。

当麻「頼むから、人の家で暴れんじゃねえ、なのは？お前はインデックスを連れて逃げる。ここは……」

ヴィータ？「邪魔すんじゃないねえ、ラーケンティンハンマー」

当麻に向かってきたのはヴィータ？だった。当麻はヴィータの攻撃を避けた。

当麻「くそ、」

ヴィータ？「シグナム、奴を追え」

シグナム？「分かった。」

シグナム？は外に逃げたインデックスを追った。部屋には当麻とヴィータ？がいた。

ヴィータ？「てめえ、邪魔すんならぶつ殺す」

当麻「たく、血の気が多すぎるぜ。まるで最初の頃のヴィータだな」

その頃、インデックス達は裏路地の方を通って、逃げていた。

インデックス「何で、こんな人気のないところを逃げるの？」

なのは？「人通りが多いところでも、彼女たちは問答無用で襲ってきます。あまり、一般人には迷惑を掛けたくありません。」

インデックス「意外と優しいんだね。」

なのは？「オリジナルも優しいじゃないですか。」

シグナム？「見つけたぞ。」

走って逃げているとシグナム？が追いかけてきた。

インデックス「お、追いかけてきた。」

なのは？「このまま、逃げてもしょうがありません。ここは戦います。」

そう言って、レイジングハートとは少し色が違うデバイスを出した。

インデックス「戦えるの？」

なのは？「どうでしょう、私は欠片です。あまり戦うと体が消滅してしまいます。」

インデックス「じゃあ、消える覚悟で戦うの？そんなのダメだよ。きつと、当麻悲しむよ。」

なのは？「あの人が、そういえば、そうですね。あの人は初めてあった人でもそこまで出来る人でしたね。」

インデックス「当麻の事知ってるんだ。」

なのは？「まあ、多少記憶はありますから、ですが、命をかけてやらなければいけない時もあります。それが今です。デイバイン。」

なのは？「デイバイン・バスターを打つ瞬間、シグナム？が襲いかかった。」

シグナム「紫電一閃」

なのは？「くう、」

何とか、障壁を張って防いだが、あまりの威力に壁に激突した。

インデックス「なのは？」

なのは？「大丈夫ですが、さすがに今は効きました。」

シグナム？「さて、そろそろ、渡す気になったか？」

なのは？「残念ながら、渡す気にはなりません。」

シグナム？「なら、貴様を消して奪う。紫電一閃」

シグナム？の紫電一閃がなのは？に振り落とされたが、その攻撃はなのは？は当たらずに、横から一本の刀に止められていた。

シグナム？「貴様、誰だ」

神崎「どういう訳かは知らないが、この子の友に手をだすと言っなら容赦はしない」

そこには刀を持った神崎が立っていた。

### 第36話 剣対剣、雷対星

第36話 剣対剣、雷対星

インデックス「神崎、このシグナムは違うんだよ。何と云うかコピーみたいなものの」

神崎「コピー、その高町なのはもそのコピーなのですか？」

なのは？「私は、コピーの中では上のクラスですが、今は追われる身です。」

神崎「そうですね、それで、何故襲いかかるのだ。剣の騎士」

シグナム？「星光の殲滅者は、王の力を奪った。だからそれを取り戻す。」

神崎「その力を取り戻し、お前らの王は何をする。」

シグナム？「再び、世界を支配しようとして…邪魔をするなら誰であろうと斬る」

そう言つて、レヴァンティンを構えたシグナム。神崎も柄に手をやった。

神崎「さすがはコピーだな。いい具合に劣化している。これで心置きなくお前を斬れる」

シグナム？「紫電一閃」



神崎「七閃」

二人の必殺技がぶつかり合った。なのは？とインデックスは隅のほうでその戦いを見つめていた。

なのは？「ここは、彼女に任せましょう。」

インデックス「で、でも、」

なのは？「今の私たちでは力不足です。さあ、ここは、」

???「やっと、見つけた。」

逃げようとした瞬間、空からフェイトに似た少女が現れた。だが、違ったのは髪の毛の色が水色だった。

なのは？「雷刃の襲撃者、あなたまでこの世界に…」

雷刃「だって、あの闇を統べる王の命令だし、君も変な願いを持ったね。本当ならコッチ側なのに…」

インデックス「願いつて？」

インデックスがなのは？の方を見ると、なのは？は少し悲しそうな顔をしていた。

雷刃「あれ？君は知らないみたいだね。だったら、教えてあげるよ。」

なのは？「やめて下さい。これは私の願いです。」

雷刃「そいつは、人になりたいんだってさ。」

その言葉を来た瞬間、デイベインバスターが雷刃の襲撃者を掠めた。

なのは？「人になりたいと願って悪いんですか？わたしだって、一つの現象ではなく、一人の人として、生きていたんです。」

雷刃「あははは、本当につまらない願いだね。だから君は出来損ないになったんだね。」

雷刃の襲撃者はバルディッシュの魔刃を二発とばした。なのは？とインデックスに当たると思ったが、その攻撃は消されてしまった。

雷刃「何、」

なのは？達の前にいたのは右手を前に突き出した当麻だった。隣には土御門となのがいた。

当麻「大丈夫だったか？二人とも」

インデックス「当麻、それになのはまで、」

なのは「ケガありませんでしたか？インデックスさん、えっと、星光さん」

雷刃「くそ、邪魔をするな——」

雷刃はなのに向かっていったが、なのははそのまま動かず、デイ

バイン・バスターを放った。止まるのが間に合わず、直撃をくらってしまった雷刃の襲撃者、そのまま地面に落ち、当麻の右手で殴られ消えていった。

雷刃「いやだ、消えたくない。僕はまだ消えたくないよおおー」

なのは？「……大丈夫です。消えても待っているのは安らかな時間だけです。」

シグナム？「く、やりますね。」

決着が付いた二人、神崎は少し切り傷を負っていたが、シグナムに勝利をした。シグナムの体は少しずつ消えていった。

シグナム？「もう一度、戦うことができますか？」

神崎「ええ、きっと、いつでも会えますから」

シグナム？「そうか、それでは、また」

### 第37話 一時の命 生まれた命

#### 第39話 一時の命 生まれた命

当麻の部屋にはなのは、土御門、神崎、なのは？、インデックスがいた。なのはは防衛プログラムの欠片が暴走している事と何体かの欠片がこっちの世界に来て、当麻と土御門と合流した。

神崎「それで、君は人になりたいんだな」

神崎達はインデックスから彼女の願いについて聞き、本当のことを聞いた。

なのは？「はい、私は人に憧れています。欠片として生きていくのではなく、人として生き、そして、人として死にたいです。」

なのは「そうなんだ。優しい子なんだね。」

なのはは笑顔で答え、その笑顔を見て、なのは？は少し恥ずかしそうにしていた。

当麻「うんつと、その人になるのは一体どうすればなれるんだ？」

なのは？「夜天の魔道書を使えば何とか……ですが、そうしようと思いましたが、闇を統べる王が襲ってきたんです。」

土御門「そういえば、お前がその王とやらから奪った力ってなんなんだ？」

なのは？「力と言っても魔力ですけど、一度、王と戦いましたが攻撃を避けるだけで精一杯でした。ですが隙について、魔力の少し奪いました。」

なのは「それで、力って言ってたんだ。」

当麻「それで、これからどうするんだ？あつちの世界ではもう欠片は倒したんだよな。だったら、はやての所行って、こいつを人に行くか？」

その時であった。突然爆発音が聞こえた。外を見てみる謎の結界に包まれた学園都市、急いで外に出るとそこにははやてに似た少女が空の上に浮いていた。

闇を統べる王「ようやく見つけたぞ。我が力を奪った塵芥が」

なのは？「あれが闇を統べる王です。」

当麻「くそ、何でまたはやての姿してるんだよ。」

なのは？「防衛プログラムの記憶から作り出された存在ですから、私も同じです。」

闇を統べる王「さあ、闇に沈めディアボリック。」

当麻「やばい。みんな逃げろ。」

闇を統べる王「エディクション」

闇を統べる王のディアボリック・エディクションを当麻は右手で防

ごうとしたが、質量の大きな魔法に対して、当麻の右手は効かなかった。当麻はそのまま壁に激突してしまい気絶してしまった。

闇を統べる王「さすがの幻想殺しでも、この攻撃は防げなかったみたいだな。すぐに終わらそう永劫の闇に沈め、ラグナロク。」

土御門「くそ、強力な奴が来る。どうすれば……」

なのは「任せてください。全力全開スターライト」

闇を統べる王「ブレイカー」

なのは「ブレイカー」

同時に放たれた攻撃だが、なのはの方が押され気味だった。

闇を統べる王「王の前に何人たりとも適うものはいない。」

なのは「う、だめ、力が強すぎる。」

闇を統べる王「これで、終りだ。」

闇を統べる王はさらに魔法を強めた。その激突を見て、なのは？はゆっくりと立ち上がった。

インデックス「もしかして、戦うの？ダメだよ。戦ったら消えちゃうよ。」

なのは？「ですが、彼女を見捨てられません。もし、消えてしまったら彼に伝えといてください。ありがとうって。」

そう言い残し、飛び立った。

なのは？「集え、紅星よ。全てを焼き消す焔となれ、我が魔導、全てを掛ける。ルシフェリオン・ブレイカー」

闇を統べる王「な、私が押されるだと、ま、まけるか。負けるものか」

さらに魔力を強めるが二つの魔砲には適わず、そのまま二つの攻撃を喰らった。

闇を統べる王「ぐう、ぐあああああああああ」

戦いが終わり、治療のため当麻は病院に行った。病院の待合室でなのは？の体はだんだんと消えていった。

なのは？「どうやら、魔力を使い切ったみたいですね。」

インデックス「そんな、消えちゃダメだよ。」

インデックスは泣きながら言った。だがなのは？少し困った顔をしていた。

なのは？「私も…消えてしまうのは嫌です。ですが、友達を最後まで守れましたから……」

なのは「あの、私の魔力をあげられませんか？」

なのはも泣きそうな顔をしていた。

なのは？「その方法もありますが、消える時間が伸びるだけです。最後はこうやって消えて行くのも悪くはないですね。」

当麻「たく、勝手に消えようとするんじゃないやねえ。」

なのは？「当麻、ですが、私にはもう時間がありませんし、」

当麻「はやて」

当麻の隣には、はやてがいた。そして、夜天の魔道書がなのは？と共鳴を始めた。

なのは？「これは？」

はやて「夜天の魔道書が、あなたに命をあたえるんや。それもただの欠片としてではなく、たった一人の人間としてや」

なのは？「そんな事が」

当麻「いいじゃねえか。これでお前の夢はかなった。幻想が現実になっただよ」

なのは？「はただ嬉しそうに…」

なのは？「はい」



第38話 はじめてのおつかい(前書き)

六甲水「今回は、星光さんがメインです」

星光「私ですか」

### 第38話 はじめてのおつかい

#### 第38話 とある少女と事件

闇の欠片事件から数日後、当麻の家にもう一人居候が増えた。それは、同じ闇の欠片の星光の殲滅者だ。星光は本当なら消えるはずだったが、夜天の魔道書のおかげで人間として生まれ変わることが出来た。そんなある日のこと……

当麻「じゃあ、買い物頼めるか？」

星光「ええ、任せてください。」

インデックス「大丈夫？道分かる？」

星光「大丈夫です。」

当麻は星光に買い物を頼んでいた。星光は買い物リストを受け取り、すぐに出かけていった。そして…

当麻「行ったよな」

インデックス「うん、行ったよ。それじゃあ、始めよう」

当麻「ああ、」

星光「……迷いました。」

本当なら近くのスーパーに行くはずだったが、いつの間にか知らない地区に来てしまった。

星光「困りました。メモを見ながら歩いていたらせいか迷子に……ここは当麻さんに」

そう思い、買ってもらった携帯で電話をしようすると、少し躊躇した。

星光（行く時にあんなに大丈夫だと言っていたのに、迷子になるなんて知られたら……ここは自力で……）

そう思い、再び歩き出そうとすると、声をかけられた

佐天「あの、もしかして迷子？」

声をかけてきたのはどこかの制服を着た黒髪の女性だった。

星光「そ、そんな所です。」

佐天「どこに行こうとしてたの？」

私は彼女に説明をすると彼女は笑顔で言った

佐天「私も同じ所に行こうと思ってたんだあ、折角だから一緒に行こう」

星光「助かります。」

これがまさかあんな事件になるとは全然思っていなかった。

第38話 はじめてのおつかい（後書き）

六甲水「次回はある事件が起こります」

### 第39話 事件と名前

#### 第39話 事件と名前

私は佐天と名乗る少女と共に行くはずのスーパーまで来た。

佐天「ここからはもう大丈夫だね」

星光「はい、大丈夫です。ありがとうございます。涙子さん」

佐天「じゃあね、」

彼女と別れた私は、メモに書いてある物を買って終え、家に帰ろうとすると、ある人と出会った。それは……

土御門「おお、星光ちゃんじゃん。こんな所でどうしたんだ？」

アロハシャツを着て、サングラスを掛けた土御門がいた。さらに隣には白髪に少しばかり目付きが悪い男がいた。

星光「おや、土御門さんではないですか、隣の人は？」

土御門「ん、ああ、知り合いだ。」

星光「そうですか、こんな事を言うのもアレですが、もう少し付き合う友達を選んだほうがいいですよ」

一方通行「おい、土御門、この小さいのなんだ」

土御門「ん、まあ、ちよつとした知り合いだぜ。それより、星光ちゃん、気をつけたほうがいいぜ。ここ最近、不穏な輩がいるからな」

星光「ご忠告ありがとうございます。ですが、心配は無用です。」

土御門「そうだったな。じゃあ、気をつけて……」

その時だった。どこからとも無く炎の弾が襲ってきた。三人は難なく避けたが、星光が持っていた買い物袋が燃えてしまった。

男「ぎゃははは、もうこんな世界なんて、燃えちまえばいいんだ」

一方通行「なんだこいつ、暗部の奴じゃないのか？」

土御門「違う、ただの発狂した能力者だ。だが、こんな世界って……  
……とりあえず、ここは何とかして……って、星光ちゃん？」

星光「よくも、私の買い物物の邪魔を……」

男「な、なんだお前は……お前も燃えちまえ」

男が再び炎の弾を放つ、だが、星光は一般人に気づかれないくらいの速さで障壁を出し、炎の玉を防ぎ、男の後ろに回り込み、脇腹に手刀をぶちかました。

男「ぐお」

星光「これは罰です。」

土御門「や、やるな。あの子」

一方通行「何モンだあいつは」

土御門「んー、すごい強い少女かな」

一方通行「そうかよ。とりあえず、俺はこの馬鹿をどうにかしてやるわ。」

土御門「任せたぞ。」

一方通行は男を担ぎ、そのままどこかへと消えていった。

星光「はあ、買い物失敗です。」

星光は落ち込んでいた。その後、土御門と別れ、買いなおそうにもお金が足りなくなり、結局何も買えなかったのだ。

星光「これは、当麻さんに怒られますね。」

インデックス「あー、いたよ。当麻」

当麻「おーい」

前を見ると当麻とインデックスが出迎えていた。

当麻「土御門から聞いたんだけど、大丈夫か？」

星光「私は大丈夫でしたが、買い物が……」

インデックス「それなら、土御門が買い直してくれたんだよ。さっき届けてくれたんだよ。」

星光「あの人が……」

当麻「そうだ、これ」

そう言っつて、当麻が渡したのは一枚の紙だった。その紙の真ん中にはスターライトと書いてあった。

星光「これは？」

インデックス「貴方の名前だよ。さっき当麻と二人で考えてたんだ。」

当麻「何時までも星光の殲滅者じゃかわいそうだからな。これからはスターライトだ。どうかな」

スター「気に入りました。ありがとうございます。」

この後三人で夕暮れの道を帰っていった。

とある世界

「これで二つ目だね。」

「ああ、これで、ようやく時間を越えることができる。」



「本当に、楽しみだよ。世界が混沌に落ちるのが……」

二人の目の前には、壁に縫いつけられた男が死んでいた。そして、謎の男の手には刀を持っていた。

闇が動き出そうとしていた。

第40話 学園都市に遊びに来た少女たち（前書き）

六甲水「今回から、原作の十六巻の話を入れつつ、Striker  
S編の伏線などを入れたいと思います」

## 第40話 学園都市に遊びに来た少女たち

第40話 学園都市に遊びに来た少女たち

転送装置に入り、海鳴市から学園都市にやってきたのは、なのは、フェイト、はやて、ユーノ、プレシアの五人。今回はプレシアの病気の検査をするために、フェイトは付き添いできたが、他の三人は当麻達と遊ぶためにやってきたのだった。

なのは「ここが学園都市………すごいねユーノ君!？」

ユーノ「うん、かなり技術が進んでる。プレシアさんは何度も?」

プレシア「いえ、私はまだ二回ほどよ。一回目は偶然、二回目は助けを呼ぶためだったから、ゆっくりはしてないわ」

フェイト「そうなんだ。」

はやて「それにしても、当麻さん驚くだろうな。私達が来たこと」

なのは「なんせ、突然行くこと決めたからね」

なのはとはやてとフェイトは嬉しそうにはしゃいでいた。本当は、ヴォルケンリッターたちも行きたがっていたが、家のことや局のことで行けなくなった。クロノたちも仕事があつて無理だったのだ。

プレシア「とりあえず、私は病院に行くわ。あなた達はどうするの?上条くんは多分まだ学校よ。」

なのは「家にインデックスさんとスターちゃんがいるから家で待ってます」

フェイト「それじゃあ、私も母さんの付き添いだから、終わったらすぐに行くから、変なことしないでね。はやて」

はやて「分かってる。変なことはしいひんよ。」

昼休み、当麻たちはある計画を実行しようとしていた。それは……

当麻「いいか、これは重大な作戦だ。」

吹寄「分かってるわよ」

黒髪に制服をキチンとしている巨乳の少女、吹寄が当麻に向かっていった。

青髪「この作戦を失敗したら、偉いことになるからな」

当麻の悪友、青髪ピアスがいつもひょうきんそうにしている顔つきではなく、珍しく真面目な顔をしていた。

土御門「この作戦は速さが重要だにゃ」

姫神「私、ついていけるかしら」

土御門も真面目な顔をして、姫神は深刻そうな顔をしていた。

当麻「大丈夫だ。姫神の場合、小萌先生に何かを頼まれたといえば

なんとかなる。」

姫神「そ、そうね。」

彼ら、というよりクラスの半分以上は深刻そうな顔をしていた。その理由は……………

当麻「じゃあ、行くぞ。学校を抜けだして飯の調達だアアアアアアアアアア」

ただ昼飯を忘れて、近くのコンビニで昼飯を買いに行く作戦だった。

なのは達は当麻の家に辿りつき、呼び鈴を鳴らす。すると出てきたのはなのはと瓜二つの少女、スターライトだった。

スター「おや、なのは。どうしたんですか？」

なのは「遊びに来ちゃった。」

はやて「体の方は大丈夫か？」

スター「ええ、体の方は調子がいいです。これもあなた達のおかげです。」

スターはただ感謝をしている。すると、インデックスがやってきた。

インデックス「スター、お客さん誰？あれっ、なのはちゃんたちだ

「

なのはたちの姿を見て、嬉しそうに笑うインデックス。なのはたちも笑顔で返した。

なのは「お久しぶりです。インデックスさん。」

インデックス「うんうん、はやては足の方は？」

車椅子に座るはやてを見てインデックスは言う。はやては笑顔で答えた。

はやて「大丈夫だよ。リハビリも続けてるから、すぐに歩けるようになるって、当麻さんはまだ学校？」

スター「はい、今はまだお昼です。夕方には帰ってきます。なのは達はどれくらいまで」

ユイ「僕たちはプレシアの付き添いなんだよ。多分、検査でかなり時間がかかるって言ってたから、数日ぐらいはいられるよ」

インデックス「じゃあ、その間はウチに泊まっていてよ。」

プレシア「それじゃあ、しばらく会えないけど、ちゃんと上条くんのこと聞くのよ」

フェイト「大丈夫だよ。母さんも安静にね」

プレシア「ええ、」

病院で入院の手続きを済ませ、フェイトとプレシアは別れ、フェイトは当麻の家に向かった。

フェイト「えつと、あれ？迷ったかな？」

なのはにもらった地図を見ながら当麻の家を目指すフェイトだが、初めての学園都市だったのか、迷子になってしまった。

フェイト（本当なら魔法で飛んでいきたいけど、さすがに悪いよね。）

そう思いながら歩いていると、ある学校の前で当麻と同年くらいの薄紫色の髪をした少女とぶつかってしまった。

フェイト「ご、ごめんなさい」

五和「い、いえ、私こそ。」

フェイト「あの、この街の人ですか？」

五和「いえ、ついさっきここに来たばかりなの。ちょっと人を探してて」

フェイト「そうなんですか、私も人に会いに……」

五和「でも、あなたまだ小学生に見えるけど、学校は……」

フェイト「え、えっと、母が検査入院するみたいなのでその付添でここに」

五和「そうなの。あつ、自己紹介がまだだったわね。私は五和。あなたは？」

フェイト「私はフェイト・テストロッサです。」

二人はお互いに自己紹介をしていると、ある物に気がついたそれは、当麻が、洋ゲーに出てくるアクの強い男に追いかけられていた。

五和（あれは、アックア）

フェイト（あれは？もしかして当麻が言ってた魔術師。）

五和&フェイト（助けなきゃ）

その日、上条当麻の生徒指導の災誤先生は、ある少女たちに襲われ、学校を早退したのだった。



第40話 学園都市に遊びに来た少女たち（後書き）

六甲水「大体こんなものでしょ、」

当麻「何？アックアとなのはたちを戦わせるの？」

六甲水「まあ、そんな感じ。」

## 第41話 護衛と作戦

### 第41話 護衛と作戦

放課後、校門の前には、顔を真っ青にしている五和とフェイトの二人が佇んでいた。昼休み、何故か突然現れ、鬼の形相で生活指導の先生に強烈なタックル（やり付き&バルディッシュ付き）をぶちかました二人。

五和「あの顔で教師なんて……………」

フェイト「何かヒドイことしたよ。」

当麻「いや、早とちりは誰にだってあるから、それにしても、何で五和とフェイトがいるんだ？まあ、フェイトはこの前プレシアの検査入院でこっちに来るって聞いたけど、五和は？」

五和「その、後方のアックアって覚えてます？」

恐る恐るという感じで五和は聞いてきた。

当麻「確か、『神の右席』の一人だよな。9月30日に会ったことはあるけど、」

フェイト「当麻、神の右席って？」

当麻「そういえば、知んなかったよな。『神の右席』については……………」

当麻は簡単にフェイトに説明をして、フェイトは真面目に話を聞いている。

「フェイト「ローマ正教の影の上層部。今当麻達が戦ってる敵なんだ。」

当麻「ああ、今はなんとか二人くらい倒せたけど、」

五和「あの、気になってたんですが、その子は？」

当麻「そういえば、フェイトのこと知らなかったよな」

当麻達は歩きながら、フェイトの事を話した。話を聞き終わった五和は驚きを隠せなかった。

五和「別世界に、魔術師ではなく魔道士ですか。私達が知らない間にそんな事を……」

当麻「ああ、結構大変だったけどな。」

フェイト「今は何も事件とか起きないしね。所で、五和さんはどこまで付いてくるんですか？」

当麻「そういえば、」

フェイトはしばらく当麻のところに泊まるという話を聞いていたので、付いてくるのは分かるが、なぜか五和も付いて来ている。

五和「さっき話したとおり、アックアが上条さんのことを狙ってるって、」

当麻「うん、それは知ってる。それで、」

五和「その護衛で私が付いてるんです。付きつきりです」

天草式十字凄教教祖代理 建宮斎字は物陰に隠れたまま、双眼鏡から眼を離した

建宮「……………つまらんのよ」

その言葉に隣で雑誌を読んでいるふりをしている大男、牛深も頷いた。

牛深「五和の奴、さっきから業務連絡ばっかで、全然アタックしませんね」

建宮「折角、チャンスを与えたのによ。それに何だあの少女は、あれも危険だ」

香焼「あの小学生ぐらいの女の子がどうしたんです？上条当麻が口リコンという話は聞いたことはありませんが」

ポップコーンをもりもり食べている小柄な少年、香焼が尋ねた。

建宮「甘いな。ああいう子は今はただ可愛い女の子。いくらあんな女の子が上条当麻に恋愛感情を持っていたとしても、きつと相手にされない。だが、あれが、成長してみる。かなりの上玉になるに

決まってる。」

牛深「なら、今のうちにどうにかしなければいけないが、五和に何かあるんですか？」

建宮「ああ、ある。五和の武器が」

香焼「何ですか？五和の武器って」

香焼が尋ねると、建宮はバックを漁り、フリップボードを取り出し、何かを書き、見せた。

建宮「そう、それは、『五和隠れ巨乳説』」

建宮の宣言に牛深と香焼の他に、周りにいた初老の諫早や既婚者の野母崎などの男衆が建宮に食いついてきた。

「教祖代理、それは根拠があるんですか？」「競馬の予想みたいに適切なことを言ってますよね」

建宮「これは確実だ。この前、女性陣の入浴時間と知らずに脱衣所に間違っって入ってしまったんだ。さすがに焦って、直ぐに出ようとしたが、ある物を見てしまった。それは……………」

「それは……………」

建宮「五和のブラジャーだ。それもかなり大きかった。あれほどの大きさのブラ。それに下には五和の服。あれで確実に「五和隠れ巨乳説」が証明されたのだ」

建宮の宣言に男衆は盛大に盛り上がった。少し離れた場所に金髪の女性が馬鹿にしたような目で見ていた。

対馬「くだらない事をやってないで、護衛対象のマークに集中しなさい」

建宮「こらこら、対馬にもある説が上がってる。それは『対馬脚線美説』」

何得体の知らない事を説明しかけた教祖代理の股間を蹴り上げる対馬。他の男衆はあまり興味がなかったため、五和に注目した。

牛深「でも、このままだと、五和はずっとおしぼり作戦を続けるみたいですよ」

諫早「五和は奥手すぎる。これでは埒が明かな」

香焼「教祖代理何をしてるんですか？」

建宮はまたバックを漁り始めていた。そして

建宮「奥手すぎる五和の手助けだ。」

建宮が取り出したのはサッカーボール

建宮「これを使えばいい感じになるぜ」

## 第42話 御坂美琴の思い

### 第42話 御坂美琴の思い

御坂美琴の頭はモヤモヤしたもので一杯だった。上条当麻の『ある事柄』について考えていたからだ。

美琴（記憶喪失）

そう、それは、上条当麻の記憶喪失についてだった。ある日に突然知ってしまった、それ以来ずっと思い悩んでいた。

美琴（いつから？9月30日に携帯電話のペア契約したとき、違和感はなかった。大覇星祭のときにも、8月31日も、一方通行と妹たちのときも、まさか、別世界での時に……）

全然線引きができない。

美琴（私が悩んでもしょうがないか。でも、彼の事を知ってるのは一体誰がいるんだろう？フェイト達？いや、あのシスターは………）

しばらく考えているとあるものに気がついた。それは、街の片隅にある映画館の近くで、こそこそ動く男たち。黒髪の男がサッカーボールを地面に置き、蹴り上げ、そのボールは勢い良く歩いている上条当麻の側頭部に激突、そして、勢いに押され、当麻の頭は隣を歩いている少女の胸の谷間に突っ込んだ。

五和「え、え、」

フェイト「と、当麻？」

心配する二人。そして、隅のほうでは男たちが喜んでハイタッチしていた。

美琴「あんたらは、何をしてるのよー」

美琴は男たちに向かって、雷撃を浴びせようとしたが、男たちは一目散に逃げていった。

当麻「う、うん」

美琴「あんたもいつまで母性の塊に甘えているのよ。」

美琴は叫び、直接裁きを下すべく、当麻のもとに突っ走る



## 第43話 料理

### 第43話 料理

インデックス「……………で、どうして天草式のいつわがいるの？」  
学生寮の扉を開けると、出迎えてきたインデックスが放った言葉。  
ちなみに、なのは達は奥のほうでテレビを見ていて、こちらのほうを見ていた。

当麻「ええと、それは、なんと説明すれば……………」

五和「つまりですね。『神の右席』の……………」

当麻「でえあ」

当麻は突然大きな声を出すと、五和の首筋にチョップした。そして、五和を隅の方に連れていき、内緒話を始めた

当麻『いつわさーん。頼むからインデックスにはその話は内緒で』

五和「あわわわわわわわわ」

当麻『アックアは俺のことを狙ってるみたいだし、てか、聞いてますか五和さん？』

五和「はは、はい。ばっばはバッチリです。」

フェイト「……………当麻」

何故かフェイトとインデックスとはやてから黒いオーラが出ていた。なぜかは気がついた。それは、今の五和との状況はとりあえず、話していること聞かれないために五和を壁に押しこめ、後ろから見ると明らかにいちゃついている見たく見えてしまってるからだ。

当麻「あの、出来れば、魔法は勘弁してください。地域住民に迷惑がかかるので」

はやて「大丈夫や。ただ殴りつけるだけやから」

フェイト「安心して、バルディッシュで斬りつけるだけだから」

インデックス「一思いにイカセテアゲルヨ」

当麻「お前ら、目が怖いぞ。てか、本気ですみません。だから、やめ、ぎゃああああああああああ」

インデックス、フェイト、はやての三人による処刑が終わり、変死体のようにうつ伏せに倒れる当麻。五和はスフィックスに高級猫缶を上げ、台所で何かの準備をしていた。

スター「何をなさってるのですか？」

五和「あ、いえ、護衛のためとはいえ、しばらく居候となる身なので、家事くらいはしよう」と

なのは「それなら、私達も手伝います。ね、フェイトちゃん、はやてちゃん」

フェイト「うん、普段から当麻一人で家事をやってるから、せめてね」

はやて「そやね。スターちゃんも家事をやってるん？」

スター「ええ、恩返しのために」

五人の言葉を聞き、倒れていた当麻が復活し、インデックスの頭をつかんだ。

インデックス「と、とうま？なんでいきなり頭をつかんでるの？」

当麻「理由はあそこの五人の会話を思い出して、自分の胸に手をやって考えれば分かるわ。」

インデックス「今日の当麻はおかしいよ。それに何が言いたいの」

当麻「なら、あの光景を見て、分からないか？」

当麻とインデックスは再び、五人の方を向く。五和とはやてとなのはは楽しそうに料理を、フェイトとスターは洗濯を………

インデックス「あれがどうしたの？」

当麻「どりゃあああああああああああああ」

当麻はインデックスを巴投げみたく投げた。そして、倒れるインデ

ツクスにあるものを渡した。

当麻「お前はたまには風呂掃除でもしろ」

インデックス「何で、今日に限ってそんなに行動的なの？」

当麻「あれを見て、何も思わないか。あれが居候の正しいあり方だ。お前はいつも、食う寝るテレビを見る係。今日から働いてもらいます」

インデックス「ええー、今からカナミンのさいほーそうが……」

当麻「いいからさっさと仕事をしろおおおおおおおおおおおお  
おおおおお」

インデックス「なんでー」

インデックスはとぼとぼと当麻から受け取ったブラシと洗剤を持って、風呂場に向かった。そして、

ユーノ「あの、僕も何かやったほうがいいですか？」

当麻「ユーノ。お前は俺と一緒に大事な話をしながら掃除だ。」

ユーノ「はあ？」

五和達の料理ができるまで、当麻とユーノは居候のあり方と女の子を手料理について話をしていた。  
その時だった。

舞夏「この本格的な和食の匂いは何なのかー」

唐突に少女の叫び声が聞こえたと思ったら、突如、ベランダの方からメキヤメキヤーという破壊音が聞こえ、全員がびっくりしていた。そこにはメイド服を着た土御門舞夏だった。

当麻「おのれ、人が折角幸せな時間を満喫していたところを……」

舞夏「匂う、匂うぞ。その味噌汁には隠し味に、粉末状にした乾燥ホタテを入れてるな」

五和「な、何故それを、お母さんにも看破されなかったのに」

料理の基本はお母さんなんですね！と、隠れた家庭的ワードにちょっとホロリとした当麻をほっといて、舞夏は味噌汁を味見していた。ゆっくりとした動作で味見をして、小皿を置くとクワアアアと勢い良く両目を見開く。

舞夏「こ、この女出来る。」

五和「は、はい？」

舞夏「それに両隣にいる二人が作った魚の照り焼きとおひたしもこの味噌汁とマッチする。こ、こうしてはおれん」

舞夏はベランダから隣室に戻っていった。すると、開いた窓から兄妹の声が聞こえた

『あ、あれー、何で今日のホワイトシチューを下げちゃうニャー？』

それに今日の俺の晩飯は!？」

『黙れ外野。あれほどの逸品を見せられ、この程度で対抗できるか。見てろ。私が真の和食を見せてやる』

『えー、ホワイトシチューでいいじゃん』

と金髪サングラスのエージェントの嘆きが聞こえていた。

フエイト「今の声って土御門さんじゃ」

五和「今の男性の声って、アビニヨンで聞いたような……というかそもそもあの子どもどうしたんですか？」

それは俺が聞きたい。だが思えることは、この娘達はせめて変人になりませんように

第44話 現れた後方のアックア（前書き）

六甲水「やっと、アックア登場だよ。」

当麻「銭湯での話はやらないのか？」

六甲水「飛ばします。けど、少し入れます」

## 第44話 現れた後方のアックア

第44話 現れた後方のアックア

なのは達の提案で、みんなで銭湯に行こうという話になり、近くにある銭湯への帰り道だった。

当麻「なのは達遅いな」

五和「そうですね、まあ、めったに來れない場所ですから、学園都市は、」

当麻と五和の二人でなのは達の帰りを待っていた。インデックスはなのは達の付き添いでいない。

当麻「そういえば、建宮も來てるんだっけ？」

五和「はい、どこかの影で見ているはずですよ。今連絡してるんですが……………」

五和はさつきから連絡をとろうとしているが、一向に通じない様子すると当麻はあることに気がついた。それは……………まだ人がいてもいい時間帯なのに、この周辺にいるのは当麻と五和の二人だけだった。当麻はとっさに五和に知らせようとする。だが、

アックア「 宣告は与えた。」

前方からある男を象徴する青いライトアップ。そして、明らかに人間の出す足音ではない足音。現れたのは茶色い髪に、石を削りつつ



たような顔立ち、そして、屈強な体つきの男。当麻と五和はその男を知っていた。

当麻「後方のアックア」

五和「そんな、建宮さん達は？」

アックア「奴らか。奴らならどこかで伸びている。死んではいけないはずだ。」

当麻「やっぱり狙いは」

アックア「貴様の右手だ。」

五和「そんな事は……………」

当麻「え、」

一瞬の出来事だった。さっきまで前方にいたアックアが気づくと隣に、そして、さっきまで隣にいた五和は脇腹を苦しそうに抑えて倒れていた。

アックア「決して魔術ではないぞ」

当麻「な、」

アックア「さあ、差し出せ。右手を」

アックアはメイスを取り出し、当麻を殴りつけようとする。当麻は咄嗟に避けようとしたが、メイスが肩を掠めた。

当麻「何つうやつだよ。掠めただけでこれだけの痛み」

なのは「遅くなっちゃったね」

はやて「当麻さん達心配してるやろつか？」

フェイト「早く合流しよ」

スター「ユーノ、今日はフェレットにならないんですか？」

ユーノ「ならないよ。」

インデックス「またお腹すいてきた。」

さつきまでずっと銭湯にあった土産コーナーを見ていたなのは達。だが、なのはたちもあることに気がついた。

ユーノ「人がいない。」

スター「おかしいですね。この時間帯ならまだ人がいても……………」

インデックス「これは、人払いの結果か何かの魔術かも、ちょっと調べてくるからなのは達は当麻と合流して」

ユーノ「僕も行きます」

二人と別れ、四人で当麻達が待っている場所に向かうとそこは別世界だった。

アックア「むっ、まさかこの橋に侵入してくるとは、」

そこには屈強な体つきで、服は血にまみれた男。そして、泣きじゃくっている五和。五和の足元には血だらけで倒れている当麻。

フェイト「と、当麻？」

スター「貴方がやったんですか？」

アックア「そうだと言ったらどうする？小娘が立ち向かうにはあまりにも無謀だ。」

なのは「無謀かどうかはやってみなければ分かりません」

はやて「そや、行くよ。みんな」

アックア「むっ、その姿は」

なのは達は一斉にBJに着替え、戦闘態勢に入った。

アックア「どうやら、噂で聞いた魔術師とは違う存在。魔道士か。面白い相手をしてやる」

第45話 アックアvs異世界の魔法少女(前書き)

六甲水「だんだんとオリジナル展開に」

五和「いきなり決着を付けるんですか？」

六甲水「それはないですね」

## 第45話 アックアvs異世界の魔法少女

第45話 アックアvs異世界の魔法少女

なのは「アクセルシューター」

なのはは自分の周りに魔弾を出現させ、アックアに向かって放つ。

アックア「追尾弾か。だが、その程度の攻撃打ち消せるぞ」

アックアはメイスを振るとアクセルシューター全弾を打ち消し、なのはに近づくアックア。だが、アックアの横からフェイトが現れ、

フェイト「はああああああああ」

魔力刃で斬りかかる。だが、その攻撃をアックアが素手で受け止める。

フェイト「魔力で作ってある刃を素手で、」

アックア「確かに魔法というのは凄いな。だが、その程度の攻撃で倒せると思うな」

アックアはバルディッシュをつかみ、フェイトごと振り回し、投げ飛ばした。

なのは「フェイトちゃん」

スター「下がってください。なのは。ここは私とはやてが」

スターはアックアをバインドで縛り付ける。

アックア「捕縛の魔術ということか。だが、この程度の捕縛簡単に」

はやて「いくでえ、ディアボリックエディクション（最小範囲）」

バインドで動けなくしたアックアにディアボリックエディクションが直撃。

はやて「やったん？」

アックア「まだだ。」

はやて「はっ、」

後ろに回り込まれ、空に飛んでいたはやてをメイスで地面に叩き込むアックア。とっさに障壁を張るが、いとも簡単に破られる。

はやて「ぐ、うう、」

なのは「はやてちゃん」

スター「ここまでとは」

アックア「魔法。魔導士。噂に聞いていたのだが、この程度とは」

なのは「っ、強い。」

スター「なのは、ここは、同時に攻撃です」

なのは「う、うん。行くよ。ディバイン。」

スター「ディバイン。」

なのは&スター「バスター」

同時に放った魔砲。アックアは防御することを忘れるほど、巨大なものだった

アックア「これ程とは、だが、」

アックアはメイスで受け止める。それを見てなのはとスターは驚いた。

なのは「そんな、」

スター「これほどとは」

メイスの一振りで二人の魔砲が霧散してしまった。そして、アックアは当麻に近づく

スター「まさか、あなたは聖人」

アックア「ほう、知っているのか」

スター「ええ、」

アックアはただ笑みを浮かべ、倒れた当麻を河に投げ捨てた。

アックア「一日やろう。右手の代わりになる義手も必要だろう。それにその双子の魔道士よ。まだ本気を出しておらん」

なのは「!？」

スター「!？」

アックア「街の被害を考え、最小限の力で戦っているのでは、勝てない。そこに倒れる二人もそうだろう。噂に聞いた結界というのも張って、今度は本気で相手してやる」

アックアはそう言い残し、闇の中に消えた。だが、再び来るとい言葉聞き、なのは達は恐怖を覚えた。



## 第46話 敗北。勝利への切り札

第46話 敗北。勝利への切り札

五和達、天草式のメンバーとなのは達は病院の一室に集まっていた。

建宮「上条当麻は重傷。一緒にいた少女たちも戦ったが歯が立たないか」

建宮はなのはたちの方を見た。なのはたちも必死にアックアと戦ったが、敗北した。

なのは「あの人は私達の魔法を防ぎきってました。」

フェイト「それに、私達のこと知っていたみたいだった。」

建宮「そりゃ、俺達も話ぐらひは聞いてるぜ。別世界の住人と上条当麻がつるんでいたとな」

はやて「そうだったん？でも、魔法を使っても勝てない。」

牛深が少し疑問に思い質問をした

牛深「アックアの奴が言っていたのを聞いてたけど、魔法を加減してたって本当か？」

牛深の疑問になのはが答えた。

なのは「はい、はやてちゃんの魔法は広範囲魔法なんです。でも、

いくら人払いの結果が張ってあっても、ある程度加減をしないと」

建宮「じゃあ、おまえたちが使う結界を使えば、おまえたちは全力で魔法をぶちかませるんだな」

フェイト「はい、」

ユーノ「じゃあ、僕が結界の維持をやるよ。それぐらいしか出来ないけど、」

建宮「はん、俺達も動けるんだろっな」

ユーノ「はい、対象を選べるんで、」

はやて「次の戦いで私達の本気を見せよう。なのはちゃん、フェイトちゃん、スターちゃん」

はやての言葉に三人が頷く。建宮は次に、廊下の隅にいる五和に問いかけた。

建宮「こんな子どもが立ち直ってるのに……お前はいつまでそうしている」

五和「……………私、助けられなかった。」

五和は泣きながら言う。それは当麻を救えなかったことではなく、護ると決めたのに逆に守られていたことに対する後悔

五和「まも、るって決めたのに、真っ先にやられてあの人は体一つでアックアと戦ったんですよ。私は役立たずです。」

建宮は五和の泣き言を聞いて、掴みかかった。

建宮「誰だってな。そう思うことがある。俺らだって真つ先にやられた。けど、奴は来る。上条当麻をほつといて、俺達は逃げるのか。あんな子供まで戦って負けたのに、諦めてない。なら俺達はこいつらの手本にならなきゃいけないだろ。そうじゃないか？」

五和「た、建宮さん」

フェイト「それに、前はアックアの強さがどれくらい分からなかったんです。でも、次からは色んな対処法がありますよ。立ち上がってください」

五和「……はい」

アックアはある高層ビルの屋上に佇んでいた。

アックア（魔法。魔術とは違う別の力。フィアンマはそれについて知っていた。なぜだ。）

アックアはそのまま、高層ビルから消え、路地裏に姿を現す。

アックア（やつらはまた来る。向かってくるのなら排除するだけだ。）

アックアは歩きだした。向かった先は当麻がいる病院。だが、アックアの前にひとつの影が立ちはだかった。

アックア「貴様は……」

神裂「仲間たちが世話になった。」

アックア「教祖か。何か用か」

神裂「ああ、お前はここで倒させてもらおう」

アックア「出来るのか？」

神裂「できる？やるのだ。」

二人の聖人が向き合い、そして戦いが始まった。

**第47話 アックアVS天草式&魔道士(前書き)**

六甲水「結構、原作と違う展開になってます」

## 第47話 アックアvs天草式&魔道士

第47話 アックアvs天草式&魔道士

病院

病院の廊下で、建宮達は怯えていた。理由は五和が凄い形相で槍を研いでるからだ。それを見て男性メンバーは

香焼「教祖代理、五和が怖すぎです」

建宮「やばいな。焚きつけすぎて、石油化学コンビナートに引火させちまったか」

牛深「どうするんですか？あれじゃあ、恋する乙女がかなり脱線しちゃってますよ」

建宮「だって、元気づけよう」と

香焼「考えなしでやらないでください」

五和「あの、三人とも、私は大丈夫です。大丈夫ですから。……集中させてください」

のっぺりと平坦な声だった。

牛深「ど、ど、ど、ど、どうするんですか？切れた五和抑える自信ないですよ」

建宮「そ、そ、そ。そうだ。あの子供たちは………怯えてるよ」

なのはたちも五和の様子を見て、怯えている。

牛深「と、とりあえず、今はそっとしておきましょうよ」

建宮「そうだな。」

何度目かのアックアと神裂のぶつかり合い。最初は互角だったが、今は神裂の方が疲労している。それをみてアックアは鼻で笑う

アックア「どうした？同じ聖人でもここまで差が出るものか？」

神裂「くっ、強すぎる」

アックアは再び、メイスを振った。神裂は刀で防ぐが、耐えきれず吹き飛び、壁に衝突した。

神裂「ぐう、」

アックア「すでに終わりだな。次で終わらす。」

アックアは壁にもたれかかった神裂に近づく。そのとき、桜色のバインドがアックアを縛る。そして、上空から紫色の魔砲がアックアに命中した。

神裂「魔砲。高町たちか」

神裂の元に、駆け寄る天草式となのは達魔道士。

アックア「まだ諦めぬか。」

煙が晴れると無傷のアックアが立っていた。

なのは「ユーノ君。結界お願いね」

ユーノ（分かった。）

街の一部を結界で埋める。そして、全員が戦闘態勢に入った。

建宮「よお、アックア。うちの教祖様が世話になったな」

アックア「またお前らか。今度は加減を……………」

アックアが話し終わる前に五和が槍に付加させた術式を放つ。それを見て、また怯える建宮達

アックア「話が終わるのが待てないのか？」

五和「話なんて、終わった後でも出来ますよ。但し……………あなたの顎がぐちゃぐちゃになってなければ」

五和は笑顔で言う。だが、目が笑っていない。

建宮「えっと、五和さん？」

建宮はオドオドと話掛ける



五和「なにしてるんですか？早く始めましょう」

建宮「はい。」

## 第48話 アックアvs主を守りし騎士

第48話 アックアvs主を守りし騎士

アックアと対峙する天草式と神裂となのは達。建宮が先頭に立ち、アックアに向かう。

建宮「行くぜ。アックア」

建宮が持つフランベルジュでアックアに斬りかかる。だが、アックアはそれをメイスで防ぎ、掌底で建宮を吹き飛ばす。その瞬間、フェイトと神裂が後ろに回り込み、七閃とフォトンランサーを放つ。アックアに命中したが、アックアはまだ無傷だった。

アックア「ぐうう、人数を活かした攻撃かだが、」

アックアはメイスを大きく振り回す。周りにいた天草式のメンバーを吹き飛ばす。フェイトと建宮と神裂はなんとか避ける。

建宮「やっぱり、強いな」

フェイト「だけど、少しずつでも攻撃を当てていけば、」

神裂「おまえたちは何を狙ってる？」

建宮「とりあえず、奴の隙を作らないとな。全員まだ動けるか」

香焼「十分。」

牛深「一瞬でもいいから隙を」

アックア「何を狙っているかは知らないが、私に隙なぞ……………」

アックアが動こうとした瞬間、桜色の魔力弾と紫色の魔力弾がアックアの周りに動く。そして、アックアに直撃

アックア「ぐう、この魔法は……………双子の魔道士」

スター「双子ではないですが、それもいいですね」

なのは「あはは、そうだね。行くよ。スターちゃん」

スター「はい。」

二人は魔力を溜め、アックアに照準を合わせる。

なのは「デイバイン」

スター「バスター」

二人の魔砲がアックアを襲うが、アックアは上に飛んで避ける。だが、上空にははやてが待っていた。

アックア「何!?!」

はやて「行くで、ディアボリック・エミッション」

巨大な球体の魔法がアックアを包み込む。そして、爆発し、アックアの服に少しばかりか焦げ付いていた。

建宮「今だ」

建宮の号令になのはとスターとフェイトとはやてがアックアに向かってバインドを掛ける。そして、縛られたまま落ちるアックアに向かって、五和が槍を突き刺す

アックア「それが、切り札か。だが、ただの術式では…」

五和「ただの術式じゃないです。これは聖人に対する切り札です。」

アックア「何？」

五和「はあああああああああああああああああああああ」

アックアに刃が刺さった瞬間、光が現れた。五和が用意した対聖人用術式『聖人崩し』が発動した。例え無敵の力を持っていても、この術式の前ではどんな聖人でも効果はある。なのは達はその光景を見て、勝利を確信した。だが、

アックア「うおおおおおおおおおおおおお」

アックアは五和の槍をつかみ、五和ごと無理やり引き剥がし、そのまま地面に叩きつける

五和「かは、」

アックア「ナメるな。私は聖人である前に神の右席であるのだ。」

アックアの手から水の砲撃が放たれ、下にいる全員がそれに飲み込

まれた。さらには、地面に一度着地し、もう一度跳び、上空にいる  
なのはをメイスで叩きつける。

なのは「きゃあああああああああああああ

フェイト「なのは」

地面に激突する寸前でフェイトが受け止める。そして、アックアが  
再び地面に着地したと同時に、スターとはやてが落ちてきた。

はやて「くう、」

スター「ここまでとは、」

アックア「確かに、私は二重聖人だが、魔法を使用できることを忘  
れるな」

建宮「くそ、ここまでか」

アックア「終わりだ。」

アックアがトドメを刺そうとした瞬間、二つの衝撃が襲う

シグナム「紫電一閃」

ヴィータ「ラーケティンハンマー」

アックアは攻撃を防ごうとしたが、青色のバインドがアックアを縛  
り上げた。

ザフィーラ「防御はさせん」

アックアは防げず、二人の攻撃を受ける。そして、倒れた味方がだんだんと立ち上がった。

シャマル「応急処置程度だけど、十分ね」

はやての前に集うヴォルケンリッター達、

はやて「み、みんな」

フェイト「どうして」

ヴィータ「家でみんなでいたら、ユーノから連絡受けたんだ。ピンチだから来てくれって」

ユーノ『どうせならもっと人数いたほうがいいでしょ、』

シグナム「リインフォース。主とユニゾンを」

リインフォース「ええ、」

リインフォースとはやてがユニゾンし、はやて、フェイト、そして、回復してもらったなのはや天草式のメンバーが立ち上がった。

建宮「さあ、反撃だ」

病院の一室で、当麻は目覚めた。膝の上にはインデックスが眠っている。

当麻「このままじゃ、駄目だよな。俺も……………」

## 第49話 気づいた思い 始まる新たな戦い

第49話 気づいた思い 始まる新たな戦い

御坂美琴と白井黒子は急いで走っていた。理由は寮の窓からふっと見えた魔法の結界。美琴は同室の黒子を起こさないように出ようとしたが、結局起こしてしまい、一緒に結界の方を目指していた。

黒子「お姉さま、私は先に向かいますから、」

美琴「分かったけど、私も一緒に……………」

黒子「いえ、私はこの結界を張っている人と話てきますわ。お姉さまは先に結界の近くに」

美琴「分かった。気をつけて」

黒子「ええ、お姉さまも」

黒子と別れた美琴は、全速力で走る。だが、しばらく走ると前にある人物が歩いていてそれは……

美琴「あ、あんた」

当麻「み、御坂か」

当麻だった。だが、いつもの姿とは違った。体中に包帯が巻かれ、顔は青ざめている。それに足取りもおかしい。



美琴「あ、あんた。そんな体でアソコに向かうの？無理よ。いくらリンフォースと戦った時もボロボロだったけど、それ以上に今のアンタはボロボロじゃない」

美琴は必死に止める。だが、当麻は歩くのを止めない。

当麻「い、行かないと。」

今にも消えそうな声で当麻は言った。

当麻「あいつらが必死に戦ってるのに、俺だけ病院で休んでる？ふざけんな。そういうわけには行かねえんだよ。だから見逃してくれ」

美琴「見逃せ？ふざけんじやないわよ。私だって戦える。あの世界に言ったときにオカルトのような魔術とか魔法とかだって知ってたわ。でも、私は戦った。今回だって、」

当麻「けどな、」

美琴「それにあんたのことだって知ってるわ。」

当麻「？」

美琴「記憶喪失なんでしょ、あんた」

その瞬間、当麻の肩がビクンと大きく動いた。いつ、彼女は知ったのだろう？もしかして、左方のテッラとの戦いの時に……

美琴「あんたは記憶ないのに、どうしてそうまでして戦えるの？」

当麻「分からない。だけど、記憶を失う前の俺は、きっと今みたい  
に誰かのために戦っていたんだと思う。」

当麻はまだ歩む。美琴はそつと当麻の肩を背負う。

当麻「御坂お前」

美琴「私も、誰かのために戦ってるわ。友達が意識不明になった時  
だって、後悔はしたけど、必死になって、犯人を追い詰めたわ。だ  
けど、その犯人も大切な人の為に戦っていた。誰かのために戦うこ  
とに善悪もない。あんたはどう思う？」

当麻「どうって、お前の言うとおりだ。悪いけど、あそこまで連れ  
てって……」

美琴「当たり前よ」

シグナム「紫電一閃」

アックア「うおおおおおおお」

シグナム&神裂とアックアの何度目かのぶつかり合い、なのはたち  
も援護に回るがアックアはシグナムと神裂を相手にしながら、援護  
攻撃を防ぎきっている。

神裂「唯閃」

アックア「二人で私の隙を作ろうと思っているが、甘いぞ」

アックアは大きくメイスを振るい、周りにいる天草式となのはたちを攻撃する。

なのは「やっぱり、さっきみたいには……………」

ヴィータ「くそ、あいつは怪物かよ」

建宮「はん、怪物相手だったらまだ可愛いぜ」

フェイト「そうですね。だけど……………なのは。」

なのは「うん、スターライトで行きます。」

フェイト「あんまり無理しないでね。なのは。その体でスターライトはキツイから」

なのは「大丈夫だよ。私は、これぐらい当麻さんに比べたら、」

なのはは決死の表情で上空に飛び、魔力を溜める。アックアもそれに気づく

アックア「何をするつもりか知らないが、邪魔を……………」

スター「させません。ディバインバスター」

フェイト「バルディッシュザンバーフォーム」

スターをフェイトの二人の攻撃が、アックアの行動を妨害する。

ヴィータ「ギガントシュラーク」

ヴィータも最小限に縮めたギガントシュラークでアックアを攻撃するが、アックアはなお、メイスで攻撃を防ぎ、なのはの元に跳ぼうとしている。

ザフィーラ「攻撃なんぞ、うたせん。」

地面に白い刃を出現させ、アックアの足止めをする。だが、アックアは止まらない。

はやて「なのはちゃん、まだか？」

なのは「あと、もう少し、」

アックア「いくら妨害しようと、私を止めるのは無理だ。」

アックアは跳び、なのはがいる場所までだが、それは途中で阻まれた。

五和「その時を待ってました。」

五和が、アックアの背中に槍を突き刺し、再び聖人崩しを発動させたのだ。

アックア「まさか、彼女はおとり、」

なのは「違います。これが私と五和さんのダブルアタックです」

アックア「攻撃は撃たせるか」

アックアは背中に刺さった槍を引き抜き、五和を盾にした

神裂「貴様、それでも聖人か」

シグナム「落ちぶれたか」

アックア「この手は使いたくなかったが、こうするしか無いのだ。  
さあ、撃て。魔道士」

なのは「あ、ああ、」

なのはは一瞬戸惑う。その瞬間、アックアがメイスをなのはに目掛けて投げつける。ものすごい速さでなのはに接近し、なのはは障壁を貼るのが間に合わなかった。

フェイト「なのは!？」

だが、どこからともなく一閃の閃光がメイスを弾き飛ばした。それを見たアックアは驚く。フェイトがビルの屋上にいる人物を発見し、驚いた。

フェイト「御坂さん」

美琴「これでよかったですかしら？」

なのは「あ、はい」

さらには、掴んでいたはずの五和がいつの間にも別の場所にいた。近

くには黒子がいた。

はやて「白井さん」

黒子「これで、盾はなくなりましたわよ。」

アックア「ぐう、うおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおお」

アックアは咆吼し、美琴に向かって水の魔術を発動させようとする。  
だが、ぶつかる前に当麻が右手で攻撃を防ぐ、

五和「上条さん」

当麻「やれ、なのは」

なのは「はい、全力全開スターライトブレイカー」

アックア「がああああああああああああああああああ」

翌日、軽傷の天草式とシャマルとザフィーラがアックアの遺体を探すが、見つからなかった。五和達の話では、スターライトブレイカ

ーが直撃した瞬間、黒子がとつさに発動したままの槍をアックアに突き刺し、消滅したと考えが浮かんでいる。そして、当麻達はいとこと………

当麻「あの、普通、男女同室はまずいんじゃない………」

当麻のベットの周りに、五和、なのは、フェイト、スターと一緒にベットに寝ている。そして、インデックスはカエル面の医者とプレシアと一緒にいる。

冥土返し「君はすっかり常連だね」

プレシア「フェイト、まったく無茶して、」

フェイト「ごめんなさい」

インデックス「もう、当麻。心配掛けて、退院したら、ごちそうだよ」

当麻「分かってるって、」

白井黒子はおぞましい光景をみている。それは、

黒子「お、お姉さまが、何故お顔を赤らめていますの?」

美琴は昨晚からずっとボケーとしていて、たまに顔を赤らめている。

黒子（一体何が……………）

美琴（はあ、もしかして、私ってアイツのことが……………）

どこともいえない空間で赤髪の少年が立っていた。名はフィアンマ。神の右席の最後の一人

フィアンマ「アックアがやられたか。まあ、奴がいたら俺様の計画は台無しだ。」

????「ふふ、ようやく始められるのだな。」

フィアンマの後ろに黒髪の老人がいた。

フィアンマ「ああ、駒は揃った。あとは……………」

????「レリックじゃな。ようやく始められるぞ。このオルドレイク・ベルリッツの計画が、復讐が」

闇はついに動く。





第49話 気づいた思い 始まる新たな戦い（後書き）

六甲水「次回から、ストライカーズ編始まります」

当麻「アックア編やった理由は？」

六甲水「実は、アックアを……」

フェイト「それ、ネタバレ」

## 第50話 再び世界へ

第50話 再び世界へ

アックアとの決戦から一週間がたった。当麻たちも数日前に退院し、なのはたちも元の世界に戻った。そして、当麻たちというと……

当麻「暇だ。」

インデックス「暇だよー」

スター「暇ですね」

だれていた。アックアの決戦時、なのはが放ったスターライトブレイカーが境界ごと破壊してしまい、近くにあったビルが壊れてしまい、テロだのなんだのので、しばらく学校は休校となってしまう、当麻達は家で暇を持て余していた。

当麻「くそ、やることがない」

インデックス「なのは達来ないの？」

スター「しばらくは忙しいらしいですよ。」

当麻「だったら、こっちから行くか。」

当麻の提案で装置がある場所に向かう三人。装置の前には土御門、美琴、黒子、姫神と見知らぬ黒髪の女性がいた。

土御門「ん、なんだ。かみやんも行くのか？」

当麻「ああ、所でそつちの人は？」

黒髪の女性が当麻達に笑顔で挨拶してきた。

佐天「わたし、佐天涙子つています。今日は御坂さん達が前々から話していたのを聞いて、行こうと……」

当麻「へえー、で、何で御坂は顔が赤いんだ？」

美琴「へ、気のせいじゃない？」

黒子「お姉さまは最近この調子なんですわ」

白井とは別世界に行つてから少しだけ話すようになった。だが、未だに邪険に扱われている。

姫神「所で、あなた達も暇だからあつちの世界に？」

姫神は無表情で質問してきた。

当麻「まあ、そんな所だよ。」

土御門「よし、大人数だけど、早く行こうぜ。」

全員が装置の前に並ぶ。するとスターと佐天があるものを見つけた。

スター「このつまみはなんでしょう？」

土御門「ん、ああ、それは時間を安定させる奴だから、いじったりしたら……」

佐天「えい、」

佐天は土御門の話を聞かずに、つまみを思いっきり右にひねる。

土御門「装置が不安定になって偉いことになるからいじるなよ」

当麻「つて、佐天。何いじってるんだよ」

佐天「え、ごめんなさい。つい、」

美琴「ついじゃないわよ」

黒子「それより、装置がかなりえらいことになってますわ」

装置は激しく揺れ、今にも爆発しそうになっていた。そして、装置から緑色の光が現れ、当麻たちを包んだ。

当麻「不幸だアアアアア」

「

ミッドチルダ 訓練場

なのはside

栗色の髪をし、白いBJを着た女性がある異変に気がついた

「空がおかしい」

さっきまで蒼空だったのが、今は黒い雲に覆われている

彼女の周りには、オレンジ色の髪の少女と青色の髪の少女と赤髪の少年とピンク色の髪の少女と白龍がいた。

「なのはさん。あれは一体？」

オレンジ色の髪をした少女が尋ねる。そう、白いBJを着た少女こそ、19歳になった高町なのはだった。

なのは「わからない。でも、何かが来る。みんな気をつけて」

なのはが四人と一匹に注意を促す。だが、空から緑色の光の柱が現れ、光が止むと同時に空の様子が元に戻った。そして、光の中から現れたのは学生服を着た男女と修道服を着た少女と巫女服を着た少女だった。

当麻「つう、一体何が……」

インデックス「つう〜気持ち悪い」

スター「確かにひどい揺れでした。」

佐天「ごめんなさい。私に変なところをいじって」

土御門「いや何、これもかみやんの不幸が招いたものだと考えれば」

当麻「てめえ、人のせいにするな」

美琴「見たことのない場所ね」

黒子「そうですね。ここが海鳴市なのかしら？それにしてはかなり変わった様子ですけど、」

姫神「というより、原住民らしき人に見つかってる」

姫神の言葉を聞き、全員がなのは達の方を向く。

当麻「やべえ、一人銃持ってるぞ」

土御門「こりゃ、どっかの施設の中に入っちゃったか」

「あの、一体？」

なのは「もしかして、当麻さん？」

当麻「へ？」

当麻 side

なのは「当麻さんに、御坂さん、インデックスさん、白井さん、姫神さん、スターちゃんともう一人ははじめましてだよね」

栗色の髪をした少女が俺達の名前を言う。一体誰だ？

インデックス「あれ？どっかで見たことが……」

土御門「その顔つき、それに持つてる杖は……」

当麻「レイジングハート？じゃあ、もしかして、なのはか？」

なのは「はい。久しぶりです皆さん」



## 第51話 再会

### 第51話 再会

装置の暴走に巻き込まれた当麻達一行、そこにいたのは十年後のなのはだった。

当麻「ど、どどういうことだよ。土御門」

土御門「んー、多分時間を安定させてた部分をいじったせいで、十年後に来ちゃったみたいだよ」

当麻「まじかよ。てか、俺ら帰れるのか？」

土御門「さあな、」

当麻「さあなってお前」

なのは「あの一体何を喧嘩してるんですか？」

黒子「気にしないでくださいまし、それにしても、あんなに小さかったなのはが…いえ、なのはさんと呼んだほうがいいかしら」

美琴「そうね、何か年上になっちゃったし、」

黒子と美琴がなのはを見て言う。だが、なのははいまいち状況を理解していない

なのは「えっと、あの、どうして、当麻さんたちが十年前の姿なん

ですか？」

インデックス「えっとね、何と云うか、スター、説明して」

スター「何故、私なんですか？インデックスが説明してください」

インデックス「うんと、何と云うか………装置が暴走しちゃって、本当ならいつもみたい在海鳴市に行くはずだったんだけど、何故かこっちの世界に……」

なのは「それじゃあ、私から見たら十年前の皆さんなんですね」

スター「そうなります。」

佐天「あの、」

なのは「あつ、はじめまして、高町なのはっていいいます。えっと」

佐天「あつ、私佐天涙子つていいいます。えっと、御坂さんの友達です」

なのは「そうなんだ。ごめんね。事情も分からないでこんな事に……」

佐天「いえ、まあ、原因は私みたいですし、」

なのは「？」

なのはと佐天が話していると、フォワードメンバーがなのはに話しかけてきた。

スバル「あの、なのはさん？この人達は？」

ティアナ「地球の出身みたいですけど、」

エリオ「お知り合いなんですか？」

キャロ「それにあのスターっていう人、なのはさんにどことなく似てる感じが……」

なのは「あつ、そうだね。とりあえず、食堂の方で話すよ。」

食堂でなのはは当麻たちのことを話した。フォワードのメンバーは驚きを隠せていなかった。

ティアナ「過去になのはさん達と戦った人たちだったんだ。」

スバル「それに、あのシグナム副隊長とヴィータ副隊長を圧倒して、

」

エリオ「かなり有名ですよ。幻想殺しの上条当麻さんと超電磁砲の御坂美琴さんって」

キャロ「それに、スターさんはリインフォースさんと同じ存在で、今は人間なんて」

スター「ええ、わたしとなのはは、同じ人間で、そうではないのですが」

当麻「それにしても、」

美琴「私達ってそんな有名な人に……………」

二人はただ溜息をつく、まさか十年後の世界でこんなにも有名な人になっているとは

なのは「にゃはは、」

なのははただ笑っただけだった。ふっと当麻はある人物を思い浮かべた

当麻「そっぴや、フェイトとかは？」

なのは「フェイトちゃんとはやてちゃんは本部の方に行ってるよ。多分、夜ぐらいには帰ってくるけど、あっ、ヴィータちゃん。シグナムさん」

食堂の入口の方には、ヴィータとシグナムが二人していた。なのはの呼びかけに気づくと、驚いた表情をしていた。

シグナム「上条当麻。お前来ていたのか」

ヴィータ「それに、御坂に土御門、姫神にインデックス、スター、白井まで、えっと、そっちは」

佐天「佐天っていいます」

ヴィータ「おお、よろしくな。それにしても、何だどうしたんだ」

当麻「まあ、色々と合っとな」

## 第52話 十年の月日、新たな任務

第52話 十年の月日、新たな任務

当麻達はこの日、とりあえず、六課の宿舎で泊まることとなり、そして、次の日、当麻、土御門、インデックス、姫神の四人は室長室に着ていた。中にいたのは……十年後のはやてとフェイト、そしてリインフォースだった。

はやて「当麻さん久しぶりやね」

フェイト「うん、久しぶり」

当麻「おう、てか、変わりすぎだろ」

土御門「まさかの逸材だったな。くそ、」

インデックス「逸材？秋沙、つちみかどは何言ってるの？」

姫神「あなたはまだ早い。」

四人はやっぱり驚きを隠せていなかった。やはり突然行った世界が十年後なんて……

インデックス「それにしても、ヴィータたちもそうだったけど、リインフォースは全然変わってないね」

リインフォース「私達はプログラムみたいなものですから、」

当麻「そうだったな。それにしても、昨日なのはから聞いたけど、この機動六課を設立したのはやてなんだな」

はやて「そやよ。私が部隊長、それに、なのはちゃん、フェイトちゃんはそのそれぞれの部隊の隊長さん。それにヴィータとシグナムが副隊長。シャマルは医療関係に、ザフィーラは基本的に、誰かと一緒にいるし、結構すごいやろ」

当麻「ああ、凄いな。」

フェイト「そうだ。はやて、」

フェイトは突然、何かを思いついたみたいだった。フェイトがはやてに耳打ちをするとはやては……

はやて「そりゃ、いいね。当麻さん。明日ある任務につき合ってほしんやけど、」

当麻「任務？俺が」

はやて「いや、当麻さん全員に付き合ってほしんや」

当麻「まあ、いいけど、」

土御門「任務か。いいぜ。」

姫神「私も、何が出来るか分からないけど、」

インデックス「私もいいよ」

四人の了承を得ると、はやては笑顔で言った。

はやて「じゃあ、明日お願いな。それで、当麻さんこれからの予定は？」

何故か顔を赤らめるはやて。一体何があったんだ？

当麻「ん、特には」

はやて「じゃあ、私と……」

はやてが何かを言いかけた瞬間、リインフォースが山のような書類をはやてに渡した。

リインフォース「マスター。お仕事が残ってます」

はやて「え、でも、」

リインフォース「マ・ス・ター」

はやて「やります。」

フェイト「じゃあ、私は当麻達を案内するね。」

はやて「ちょ、フェイトちゃん。抜け駆けは」

フェイト「それに私はこれからみんなの訓練に付き合っつから、ね、」

はやて「ず、ずるい。」



室長室をあとにすると、フェイトは嬉しそうに当麻の腕を組んできた。

当麻「ど、どうしたんだ？フェイト」

フェイト「ん、何か都合悪い？」

当麻「い、いや、特には」

ただ、胸が当たって、は、恥ずかしい。くそ、十年前はあんなに無邪気だったのに、今はなんだこう、大人の色気が……

インデックス「じ〜」

姫神「じ〜」

土御門「かみやん死ね」

なぜか、後ろから嫉妬の視線と、土御門の暴言が聞こえてくる。

当麻「あ、あのさ、歩きにくいから」

当麻は必死にフェイトの腕組から抜け出す。

フェイト「えー、」

当麻「えーってお前もう19歳だろ。頼むから大人の対応をしてく

れ

土御門「かみちゃん、」

当麻「何だよ。」

土御門「とりあえず、殴らせる」

当麻「はん、掛かって来いよ」

その後、当麻と土御門は二人して、乱闘を始めたのだった。

### 別空間 白い戦艦

その戦艦の一室に二人の男がいた。

オールドレイク「どうやら、幻想殺したちが来たみたいだな」

フィアンマ「ふふ、君の能力のおかげだよ。僕がいた世界の時間とこの世界の時間をくつつけるなんて、さすがは最強の魔術師」

オールドレイク「くかかか、貴様こそ、私とコンタクトをとって、何

を起こす?」

フィアンマ「それは、まだ秘密だよ。所で、あいつは?」

オールドレイク「やつなら、既にある場所に向かわせた。私の機動兵器と共に、宣戦布告だ」

## 第53話 ホテル・アグスタ

### 第53話 ホテル・アグスタ

当麻達はヘリに乗って、ホテル・アグスタに向かっていた。そこで行われる骨董オークションに出る、取引出品許可されているロストロギアをレリックと間違えてガジェットが現れる可能性があるので、機動六課が警備に呼ばれたのだ。現場には昨夜から、シグナムとヴィータが既に警備している。なのは、フェイト、はやて、ついでに当麻達は、建物の中の警備をする

当麻「ヘリでの移動とか、いいよな。インデックス」

インデックス「そうだね、音速越えるようなこと無いし、」

スバル「音速を超えるなんて乗り物あるんですか？」

当麻「あれで、何度吐いたことか」

ティアナ「学園都市って」

すると、佐天がなのは達に小声で質問をしてきた。

佐天「あの、私も付いて来てよかったですか？」

なのは「何で？」

佐天「いえ、その、私警備とかなんて……それに無能力者だし」

佐天がそう言うと、フェイトは笑顔で答えた。

フェイト「大丈夫だよ。姫神さんやインデックスさんも同じようなもんだから、出来ればその、魔法とかに付いて知ってもらえれば、」

佐天「は、はあ、」

はやて「そやね、それにいてくれるだけで大丈夫だから。」

佐天「へ、」

はやて「佐天さんは守られている対象にされるのは嫌やと思うけど、わたしたちにとって、任務終わって出迎えてくれる人がいるだけでもええんや」

佐天「そうですか。じゃあ、任務終わったら精一杯、皆のこと労います」

ホテルアグスタ

到着したスバル達は警備を始めた。オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。

受付「あっ！」

身分証を見た受付の男は驚いた。

はやて「こんにちは。機動六課です」

はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレス姿で受付前に立っている。その三人の後ろには、

当麻「何で俺まで、こんな恰好なんだ？」

スーツ姿の当麻が愚痴った。いつもの学生服でなく、普通の黒いス  
ーツだった。

はやて「いや、さすがに学生服だと目立っちゃうから」

インデックス「でも、当麻のスーツ姿って、何か七五三みたいだね」

当麻「うるせ、お前だって、何でいつもの服なんだよ」

インデックス「そりゃ、シスターだから、これもいわゆる正装だよ」

当麻「うう、そう言えばそうだな。てか、土御門の格好も何かチン  
ピラからヤクザになったな」

土御門「にやはは、よく言われるぜ。佐天とひめやんは何か着慣れ  
ていない様子だにや」

土御門が二人の方を見ると、佐天は水色のドレスに、姫神は赤いド  
レスを着ている。確かにあまり着慣れていない様子だった。

佐天「あはは、着る機会ないですから」

姫神「私も、」

土御門「いやー、所でかみやん。この五人のドレス姿を見て、どう思う?」

当麻「ん、ああ、五人ともドレス似合ってるぜ。」

なのは「にやはは、ありがとうー」

佐天「えへへ、ありがとうございます。上条さん」

なのはは普通にお礼を言ったが、他の三人は…

フェイト「あ、ありがとう」

はやて「…ありがとう」

姫神「あ、ありがとう」

何故か凄く照れていた。

ティアナは、ホテルの周辺を警備していた。すると、ホテル内にいるスバルから念話があった。

スバル（今日は、八神部隊長と守護騎士団全員集合かあ）

ティアナ（そうね。あんたは結構詳しいわよね?八神部隊長とか副隊長の事…）

周辺を確認しながら、スバルに聞いた。

スバル（うん。お父さんやギン姉から聞いたことぐらいだけど……。八神部隊長が使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が夜天の書。副隊長達とシヤマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力。で、それにリインフォース部隊長補佐とリインさんを合わせて七人揃えば、無敵の戦力って事。まあこんな所かな）

スバルが説明を終えた。

スバル（ティア、何か気になるの？）

ティアナ（別に）

スバル（そ。じゃ、また後でね）

スバルとの念話は終わった。ティアナは一人考え込んだ。六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。隊長格全員がオーバース、副隊長でもニアSランク。他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。あの年で、もうBランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキャロ。危なっかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップのあるスバル。そして、シグナム副隊長達と戦った学園都市の上条当麻、御坂美琴、土御門元春、そして、あらゆる魔術書の知識を持つインデックス。

やっぱり……うちの部隊で凡人は私だけか……。ティアナは静かに目を閉じる。でも、そんなの関係ない。しばらくして、ゆっくりと目を開けた。私は、立ち止まるワケにはいけないんだ。ティアナが改めて決意した時、



美琴「隣いいかな？」

ドレス姿の美琴がやってきた。

ティアナ「御坂さん。どうしたんですか？」

美琴「いや、何かこういうの慣れなくて、抜けだしてきちゃった」

ティアナ「抜けだしてきちゃったて、御坂さんはこういうの慣れていると思っただんですが？」

美琴「逆よ。あんまりこういうお淑やかな格好とかするのは嫌なの」

ティアナ「そうだったんですか？でも白井さんがドレス姿でバイオリンを演奏したとか聴きましたけど、」

美琴「うっ、黒子の奴。てか、さん付けとかいいから、私年下だし」

ティアナ「そうでしたね。じゃあ、美琴でいいですか」

美琴「うん、じゃあ私はティアナで」

二人が話していると、そこにドレス姿の黒子が突然現れた。

黒子「お姉さま、何をしてるんですか。勝手に抜けだして、なのはたちが探していますよ」

美琴「うう、あんまり慣れないし、それに……」

黒子「はっ、まさかあの上条当麻に見せるのが恥ずかしいとか、ダ

メですわ。あの方は野獣です」

ティアナ「あ、あははは」

ホテルを囲む森。森の中を走る集団があった。ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェットの集団だった。屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

シャマル「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

シャーリー「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが返事をした。管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

ティアナ「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニターももらえませんか？」

シャマル「了解。クロスミラージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。モニターをもらったティアナは、美琴と黒子の所に戻った。しばらくしてスバルがやってきた。

美琴「あれが、ガジェットって奴か。なら、これで一撃よ。」

美琴は現れたガジェットの群れに向かって、雷撃を放つと、ガジェットは一瞬にしてショートした。

スバル「凄い。」

美琴「相手が機械で、こっちは超能力、どんなに魔法とかを無効化しようが、無意味よ」

黒子「そうですね。機械なんてどこを破壊すればいいか分かりませんもの」

黒子の周りには、鉄の棒が突き刺さったガジェットが転がっていた。

シグナム「私が大型を潰す。お前は細かいのを叩いてくれ」

ヴィータ「おおよ！」

シグナムは地上に降りて、大型と対峙する。

ヴィータ「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

ヴィータ「まとめて、ぶち抜けエエエ！」

グラーファイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

シグナム「レヴァンティン！」

カートリッジロードをし、炎が刀身を包む。

シグナム「紫電一閃！！」

レヴァンティンを上段から振り下ろし、大型ガジェットを破壊した。

ザフィーラ「ここは通さん！！」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫いた。

ティアナ「凄い、隊長」

ティアナはヴィータ達の戦いを見て、少し、焦る気持ちが強くなった

当麻「何か、外が騒がしいけど、大丈夫か？まあ、ヴィータ達がいるから大丈夫だろう」

ふっと、後ろから誰かに抱きつかれた。

アルフ「とーま」

当麻「うお、何だ？アルフか？」

アルフ「おう、久しぶりだな」

当麻「何かちっこくなくてないか？」

アルフ「うん、フェイトにあまり負担がかからないようにしていたら、こうなったんだ？」

当麻「それで、なんでお前がいるんだ？」

アルフ「ユーノの手伝いだよ。」

シャーリー「な…これは！？」

管制室にいるシャーリーが、異変を察知した。

シャーリー「別の方向から、複数の魔力反応がホテルへ接近しています！」

シャーリーがシャマル達に伝えた。

シグナム「ヴィータ。お前は新人達の所へ向かえ。」

ヴィータ「わ、わかった！」

シグナムに言われ、ヴィータはホテルへ向かった。ホテルの前では、スバル達がデバイスを構えて待機していた。

スバル「来る」

魔力を感じたスバル達は構える。そして、五人の前にソレは現れた。複数の銀色の体の人型の何かが動いていた。

スバル「何あれ？」

スバルが呟いた。銀色の人型は、両腕を変形させ、刀や銃火器と姿を変えた

スバル「まさか…新型!？」

キャロ「いえ、違います!」

スバルの言葉をキャロが否定した。

ティアナ「何でもいいわ。迎撃いくわよ!」

スバル「おお!」

ティアナの言葉にスバル達が応えた。ティアナは、怪物達にクロスミラージユを向ける。今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやってきた。

「ギャゴオオオオオ!」

叫びながら、怪物達がティアナ達に襲い掛かった。クロスミラージユを構え、怪物に向かって撃つ。怪物は魔力弾をかわし、銃で反撃をしてきた。

ティアナ「ちっ!」

ティアナは舌打ちしながら、後ろに跳んで弾丸をかわした。弾丸は地面に打ち込まれた瞬間、爆発した

ティアナ「接触弾!？」

ティアナは再びクロスミラージユを構え、魔力弾を撃った。怪物は腕で急所を防御する。美琴も電撃などで攻撃をするが、あまり効いていなかった。

美琴「硬すぎるわよ」

シヤマル（防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！）

シヤマルが念話で、スバル達に伝えた。ティアナの表情が険しくなる。

ティアナ「守ってばっかじゃ息詰まります！ちゃんと全部倒します！」

シヤマル（ちょっと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！）

ティアナ「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージユを構える。ティアナは、エリオとキヤロに顔を向けた。

ティアナ「エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップでいく！」

エリオ「は、はい！」

言われた通り、エリオ達は下がった。

ティアナ「スバル！クロスシフトA、いくわよ！」

スバル「おお！」

スバルはウイングロードを使って、怪物達の注意を引き付ける。その際にティアナは、カートリッジを四発もロードした。証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくなつて…どんなに危険な戦いだつて。ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

ティアナ「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだつて！」

クロスミラージユを構える。

ティアナ「クロスファイヤー」

スバルは、怪物達の攻撃を避け続ける。

ティアナ「シユート!!!」

オレンジ色の魔力弾が、一斉に怪物達に迫る。次々と怪物達に魔力弾が当たり、倒していく。だが、魔力弾が一発反れて、スバルに迫る。

ヴィータ「やばい、間に合え」

スバルたちのもとにたどり着いたヴィータも、急いで魔力弾を弾き返そうとしたが、間に合わない。だが、魔力弾はスバルに当たらなかった。何故なら、当たる直前でスバルの姿が消えたからだ。



ヴィータ「な、」

ティアナ「え、」

黒子「全く、危なっかしいですわ」

美琴「黒子、」

黒子「あつちでガジェットを片付けていたら、こんなことになって  
いましたとは」

ヴィータ「白井、ありがとう。」

黒子「いえ、別に気にしなくていいですわ。それより、そのあな  
た」

ティアナ「あ、はい」

黒子「今の攻撃は何ですの、味方に当たりそうでしたわ。」

スバル「あの…今のも、その…コンビネーションの中で……」

黒子「直撃するのを覚悟で、走るのがコンビネーションですの？聞  
いたことありませんわ」

ヴィータ「白井、もういいから、おまえら二人はあとは下がってろ。  
残りは私が……」

その時、ヴィータの背中から血が吹き出した。全員がヴィータの後

ろを見るとそこには黒髪に額には眼の模様が描かれ、体には真っ赤な血のような鎧を身にまとい、右手には真っ黒の刀が握る男がいた。

「????」我が名は、鬼神殺しのティス。貴様らに宣戦布告しに来た」

ヴィータ「せ、宣戦布告だと、お前、スカリエッティの」

ティス「あのような小物と同じにするな。私はヴァイクランの一人。覚えておけ。」

ヴィータ「ヴあ、ヴァイクラン？」

ティス「さあ、死合おう。」

## 第54話 鬼神殺し

### 第54話 鬼神殺し

突如現れた何故の戦士、ティスに切られたヴィータ。そして、それと対峙するスバルたち

ヴィータ「ぐう、くそ、」

ティス「あまり動くな。我の一太刀を受けたんだ。無事ではないはずだ」

ティスの言うとおり、切られた場所から絶えず血が流れている。だが、ヴィータはそれでも立ち上がった。

ヴィータ「お、お前ら、逃げろ。こいつはお前らには荷が重すぎる」

ティアナ「で、ですが、」

ヴィータ「いいから逃げろ。副隊長命令だ。」

スバル「でも、」

ヴィータ「白井、頼む」

黒子「残念ですが、私はこの方たちを止める力はありませんわ。」

ヴィータ「何、」

黒子はまっすぐな瞳で、スバルやティアナ達を見る。そして、

黒子「それに、私的にこの方をぶちのめしたいんですが」

美琴「そうね、私も限界よ。」

ティス「ふむ、屍の山ができるな。ならば来い。打ち倒そう」

ティスは刀を構え、美琴達に向かってくる。美琴と黒子は距離を保ちつつ、テレポルトと電撃で攻撃するが、すべて弾かれる。

美琴「めちゃくちゃすぎよ」

ティス「瞬転に、雷か。だが、我の前では無効だ。」

ティスは刃を地面に突き刺す。何事かと思った二人。その瞬間、二人の地面から数百本の刃が襲いかかった。

美琴「きゃあああああ」

黒子「くううううううう、」

スバル「地面から刃が出てくるなんて、」

ティス「我が刀、『四極八刀』はどんな場所でも刃を生み出せる。そして、刀身は自由自在に伸びる」

ティスが、上空に刀を上げると同時に刃がホテルの高さまで伸びる。

ティス「赤火繚乱」

そのまま振り落とすと同時に、刀身は炎を纏い、美琴達に襲いかかる。

当麻「それにしても、マジで騒がしいな」

アルフ「かなり苦戦してるのかな？」

当麻とアルフが二人で話していると、どこからか声が聞こえてきた。

「上条さん、上条さん」

当麻「何だ？どこから声が？」

リイン「こっちです。」

当麻は上を見ると、そこには小さなリインフォースがいた。

当麻「うお、小さいリインフォース」

リイン「小さいは余計です。私はリインフォース？。リインフォースの妹です。」

当麻「うわー、はやてのやつ。家族増やしたのかよ」

リイン「はい、リインフォースが寂しいと思って、成り行きで作ったとか。そんなことよりも大変です。ヴィータちゃんたちが」

当麻「ヴィータたちがどうしたんだ？」

リン「ピンチです。急いで向かってください。」

当麻「わ、分かった。」

アルフ「私も行くよ」

当麻「おう、」

三人はヴィータたちがいる外に向かって走りだした。

ティス「むっ、手応えがおかしい」

美琴「え、やられてない」

黒子「まさか、」

ティスの攻撃を避けることが出来なかった二人の目の前に、刀身を抑えるスバルとエリオがいた。

ヴィータ「お前ら、」

ヴィータのそばには、キャロが回復魔法をかけ続けている。そして、ティアナは後方に下がり、クロスファイヤーを放つ

ティス「むっ、」

刀身を戻し、魔力弾をすべて弾き飛ばすティス。

スバル「だ、大丈夫ですか二人とも」

エリオ「ケガは？」

美琴「だ、大丈夫だけど、二人とも怪我してるじゃない」

スバルは額から血を流し、エリオは手から血を流していた。

エリオ「これぐらい平気です」

スバル「はい、」

ティス「小物が増えたか。あまり相手をしたくないものだ。これから強くなるものに対して」

ティアナ「ずいぶん余裕があるわね。」

ティス「ああ、余裕だ。我が手をぬていることも知らずに、よく言える」

ヴィータ「手を抜くだって、本気になったらどうなるんだよ」

ティス「教えてやろう。今の状態はまだ2割程度しか力を出していない。今から3割の力をだそう。『鬼神鎧装』」

ティスの右腕が真っ赤に染まり、手は異形の形となり、爪は鋭く伸びる。

ティス「鬼神の力を見せよう。『鬼神斬』」

ティスは刀を一振りする。なんとか避けた。全員だが、キヤロとヴィータ以外は全員、攻撃を受けた。さらに近くの地面や壁にも傷が

ヴィータ「みんな、お前、今は鎌鼬か」

キヤロ「鎌鼬って、風を振動させて斬りつけるあれですか？」

ティス「残念ながら、違う。今は真正正銘、飛ぶ斬撃。さあ、次で終わらそう。『鬼神奏……』」

ティスが何かを言いかけた瞬間、ヴィータ達の前に巨大な大剣が現れ、地面に突き刺さる。そして、

「???」弱き者をいたぶる姿は、自分でやっているとは分らないが、他人が遣っているのを見ると確かに腹立たしいな」

上から声が聞こえたと思うと同時に、誰かが降ってきた。その姿は、茶色い髪に、石を削りとったような顔立ち、そして、屈強な体つきの男。ヴィータはその男を知っていた。

ヴィータ「ば、馬鹿な、お前は、」

「???」……………」

ヴィータ「アックア」

突如現れたの、以前戦った男。神の右席の一人、後方のアックアだ



った。アックアは大剣を抜き、ティスに刃を向ける

アックア「覚悟しろ。異世界の武士」

ティス「いいだろう。勝負だ。異世界の騎士よ」

二つの力がぶつかり合った。

## 第55話 終わる任務。そして…

第55話 終わる任務。そして…

突如現れたのは、アックアだった。そして、アックアはティスとぶつかり合う

ティス「喰らえ、」

アックア「うおおおおおおお」

刀と大剣がぶつかり合う中、ティアナとスバルが目覚めます。

スバル「くう、ヴィータ副隊長、あの人は？」

ティアナ「あの赤い鎧の人と戦っていますけど、味方ですか？」

二人の質問に、ヴィータは険しい表情をする。

ヴィータ「今はな。あいつとは十年前に戦ったことがある。いくら幼かったとはいえ、あのなのは達や私達を圧倒した奴だ。」

ティアナ「そんなひとが何で……」

ヴィータ「とりあえず、今は味方だ。」

アックア「くおおおおおおお」

ティス「くっ、できる。」

ティスとアックアは一度距離をおく。ティスは少し焦る。まだ力を三割程度しか出していないのに、この男とは、今のままでは勝てない、と、

ティス（半分の力を出せば、互角以上に戦えるが、今はその時期ではないか。ここは…）

ティスは刀を鞘にしまい、体も元の状態に戻した。

アックア「逃げるのか？」

ティス「逃げる？今、戦って勝つてもつまらない。それに、まだ戦う時期ではない。私とお前の決着はふさわしき場所で付けよう」

アックア「そうか、だが、逃がすと思うか？」

ティス「逃がしてくれるのだろ。貴様はそれを分かっているはずだ」

アックア「そうだな。いずれ付けようか」

ティス「ああ、」

ティスの周りに赤い炎が現れ、ティスはそのまま、消えていった。

ティアナ「ど、どうして逃がしたんですか？」

ティアナはアックアの胸ぐらを掴む。だが、アックアはただ無表情で答える。

アックア「これは奴と私の戦いだ。決着を付けるのはいつでもいいだろう。」

ヴィータ「それに、けが人が多い。これ以上戦っても、私等を巻き込むことになるからな。そうだろ」

ヴィータはグラーフアイゼンを杖がわりにして立ち上がる。アックアはヴィータを見据える

アックア「分かるか。騎士よ。」

ヴィータ「まあな。」

ティアナ（分からない。どうしてなのかが、）

その後、遅れて当麻とリインとアルフとシグナムがやってきて、アックアの姿に驚いたが、とりあえず、傷だらけのみんなを休ませるため、応急処置をすることになった。そして……

## 機動六課

夕方、へりに乗り、機動六課に戻った。フォワード四人の前に、なのはとフェイトが立っている。

なのは「今日の午後の訓練はお休みね」

フェイト「ゆつくり休んで、明日に備えてね」

スバル「はい！」

なのはとフェイトの言葉に、スバル達は声を揃えて応えた。なのは達と別れ、スバル達は隊舎に向かった。当麻達は、一足先に隊舎に戻っている。隊舎の入口の前で、ティアナが足を止めた。

ティアナ「スバル。私これから、ちょっと一人で練習してくるから……」

スバル「自主練？私も付き合おうよ」

エリオ「じゃあ僕も」

キャロ「私も」

みんな、ティアナの練習に付き合おうとした。ティアナはエリオとキャロに振り返った。

ティアナ「ゆっくりしてねって言われたでしょ？アンタ達はゆっくりしてなさい」

二人の付き合いを断った。

ティアナ「それにスバルも…悪いけど一人でやりたいから」

スバル「…うん…うん…」

スバルは、少し表情を暗くして頷いた。

ティアナは一旦部屋に戻って準備をした。引きだしを開けて、写真を見る。写真には、小さな女の子と若い男が写ってる。女の子はティアナ。男はティード・ランスター。ティアナの兄である。写真を眺めた後、ティアナは決意を胸に部屋を出た。

隊舎の庭に出たティアナは、準備体操を始めた。準備体操を終え、両手にクロスミラージユを構え、周囲に的となる光の玉を複数出した。光の玉にクロスミラージユを向けて、一人訓練を始めた。訓練開始から4時間。ティアナは訓練を続けていた。辺りはすっかり暗くなり、夜空には綺麗な星が輝いている。途中でティアナは息が荒くなり、地面に膝をついた。汗を拭いて呼吸を整え、立ち上がった時、

当麻「よ、精が出るな。」

佐天「がんばってますね」

当麻と佐天がコップを持ってやってきた。さっきまで二人はアックアのことや美琴達の傷のことに付いて聞いていた帰りに、たまたまティアナの姿が見えたため、やってきたのだ

ティアナ「上条さん。佐天さん。何か」

当麻「どれぐらい練習してるんだ？」

ティアナ「……四時間ぐらい」

佐天「四時間って、休まなくっていいんですか？」

ティアナ「まだ大丈夫。それに、これぐらいやらなければ、私は……」

当麻「あのさ、特訓はいいけど、そのまえに体を壊れちまうぞ。」

佐天「そうだよ。失敗して、強くなるのはいいけど、その前に考えなきゃいけないことがあるよ。」

ティアナ「あなた達には関係ありません。ほつといてください」

ティアナは怒声をあげる。当麻と佐天は黙った。そして、ティアナは続ける。

ティアナ「……………私には……………スバル達みたいな才能もないし……キャラみたいなレアスキルもない……」

クロスミラージユを握る手に力が入る。佐天は黙ってティアナの話聞いていた。

ティアナ「だから私は……少しぐらい無理をしないと、強くなれないんです!!」

佐天「そう、じゃあ、勝手にやっててください。」

当麻「あ、佐天。たく、無理するのもいいけど、まずは何か考えなきゃいけないことがあるぞ」

ティアナ「何ですか？それは」

当麻「……………自分で考えろ」

当麻と佐天は食堂に向かうと、そこには、土御門とスターとインデックスとスバルがいた。

スバル「あの、ティアは？」

佐天「ダメ。あれは言っても聞かないタイプだわ」

当麻「あいつ、何であんなに頑張るんだ？」

スバル「ティアナは…お兄さんのために」

インデックス「お兄さん？」

首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが10歳の時に殉職している。享年21。  
スバルは彼の経歴を話し、彼が違法魔導師に手傷を負わせけど逃がしてそして殉職した事を話し顔を更に辛そうにする。

スバル「その時ね、心無い上司が死んでも捕まえるべきだった・・最後に役たたずで無意味って言ったんだ」

土御門「確かに、そういう考えを持つ奴がいるが、最低だな」

インデックス「ひどい」

スバル「あの、この話したのはティアに内緒で」



佐天「とりあえず、問題は保留だね」

## 第56話 伝わらない思い

第56話 伝わらない思い

翌日、当麻と土御門の二人はある場所にいた。その場所は六課の宿舎の一室だった。そこにはアックアがただ静かに坐禅を組んでいる。アックア「何か用か」

土御門「とりあえず、お前はどうかやってこの世界に来た？」

そう、アックアに用事とは、アックアがこの世界に来た経緯についてだった。アックアはただ静かに語る。

アックア「あの戦いの後、目覚めるとこの世界に飛んでいた。隣にはこのアヴァロンがあり、そして、しばらくあの場所にいたのだ。」

当麻「もしかして、スターライトブレイカーと聖人殺しの影響で、」

土御門「次元に歪みが出来たんだ。それで、これからどうする？ただかみやんを狙うか？」

アックア「いや、私の戦いはもう終わった。今はただの傭兵だ。いや、捕虜だな。」

当麻「じゃあ、一緒に、」

アックア「ああ、信用されぬが、誠意を尽くそう」

土御門「分かったぜ。なのは達に伝えておく。」

さらに数日がたったある日、事件が起きた。

訓練場、訓練場の高台には、フェイト、ヴィータ、エリオ、キャロ、スター、美琴が着ていた。

当麻「やっぱり、何かアイツ無茶してるな。」

フェイト「あ、当麻。当麻達も来てたんだ。」

今、スバル&ティアナVSなのはの模擬戦を見学している

フェイト「それにしても、なのはったら」

スター「どうしました？フェイト」

フェイト「本当はスターズは私がやるうと思ってたのに・・・」

ヴィータ「あいつ最近無理しすぎだ。少し休ませねえと」

当麻「そんなにか？まあ確かに、訓練にデスクワークってハードメニユーだからな」

フェイト（本当はそれだけじゃないんだけどね）

クロスシフトにまったくキレが無いのは事実だ。更に、先程からスバルはなのはに突っ込んでばかりだ。しかもティアナの幻術ではなく、スバル本人だ

なのは「スバル駄目だよ！そんな危ない軌道！」

スバル「すみません！でもちゃんと避けますから！」

スバルが別のウイングロードでなのはから離れる。ティアナの姿が見当たらないので探すと、ビルの向こうで砲撃を放とうとしていた

フエイト「ティアナが・・・砲撃！？」

スター「作戦としたら間違っています、またスバルに怪我をさせてしまう可能性があります」

スター達の心配を余所にスバルはなのはのアクセルシューターを避けながら突っ込む

スバル「でりやああああ！」

スバルが攻撃するがなのはの防御魔法に阻まれる。その瞬間ティアナの姿が消えた

キャロ「あれは幻術！？」

エリオ「じゃあ本物は！？」

ティアナはウイングロードを走り、カートリッジを消費しながら魔力刃を出したのはに突っ込んでいった

ティアナ「一撃必殺！でええええええい！」

煙が晴れ、なのははRHを待機状態に戻し、魔力刃を白刃取りしている状態だった。

なのは「おかしいなあ・・・二人共どうしちゃたのかな？頑張っているのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

スバル「あっ！？・・・なのは・・・さ・・・ん？」

二人の声も震え、ライトニングも驚いてる

なのは「練習の時だけ言うこと聞くフリして、本番でこんな危険な動きしたら、練習の意味・・・ないじゃない・・・」

なのはが顔を伏せながら言うのに二人は違和感を感じた。それだけではなく、なのはから微弱だが殺気を感じ取っていた

なのは「ねえ、ちゃんと言われた通りにやろうよ？私の言ってること、私の教導、そんなに間違ってるかな？」

瞬間、ティアナがなのはから離れ、カートリッジをロードした

ティアナ「私は！傷つけたくないから！もう無くしたくないから！」

ティアナが泣き叫ぶ

ティアナ「だから強くなりたいんです！」

なのはが目を瞑った。

そして今度ははつきりと認識できるほどの殺気を込めたような単色となった黒い瞳でティアナを見た

なのは「少し・・・頭・・・冷やそうか・・・」

なのはの足下に魔方陣が展開された。そしてティアナに人差し指を向けた

なのは「クロスファイアー・・・」

右手に魔力弾が生成される

ティアナ「うわああああ！！ファントムブレイ！」

なのは「シュート」

しかしなのはの攻撃がティアナに直撃した

スバル「ティア！」

スバルが行こうとするがバインドで止められた

スバル「バインド！？」

なのは「スバル、じつとしてよく見ておきなさい」

言った瞬間、ティアナに向かって追撃のクロスファイアーが発射された

スバル「ティアアアアア！！」

ズガアアアアーン！！

魔力弾が激突した。

スバル（そんな・・・ティア・・・）

しかし、煙が晴れるとそこには、当麻とスターがなのはの攻撃を防いでいた。

インデックス「とうま、いつの間に、」

エリオ「それも、なのはさんの攻撃を防いだ」

キャロ「あれが、幻想殺しですか」

なのは「当麻さん。」

なのはも急に飛び込んできた。当麻に驚いていた。

当麻「やりすぎだぜ。なのは、」

スター「ええ、これは教導という名の、暴力です」

スターはなのはを見据える。なのはは少しうつむいていた。

当麻「なあ、なのは、ティアナもやりすぎだ。けどお前も反省すべきだぜ。」

なのは「当麻さん、十年いなかったあなたに何が分かるんです。」

なのははレイジングハートを取り出し、当麻に向かって構える。ス

ターと当麻も構えた。

当麻「スター、カづくで止めるぞ」

スター「ええ、」



## 第57話 星光vs星光&幻想殺し

第57話 星光vs星光&幻想殺し

なのは「デイベインバスター」

スター「デイベインバスター」

二つの魔砲が同時に放たれ、同時にぶつかり合った。当麻はスバルが出したウイングロードを駆けながら、なのはに接近した。

当麻「うおおおお」

なのは「甘いよ。アクセルシューター」

殴りかかろうとした当麻の腹部にアクセルシューターを放つ、当麻は避けられず、直撃した。

スター「当麻、」

なのは「よそ見しちゃだめだよ。」

スター「はっ、」

隙をつかれ、スターはなのはのバインドを掛けられる。

スター「強いですね。」

なのは「あの頃とは違うもの。」

当麻「あの頃と違うか、どこがだ。」

なのは「えっ、」

当麻は腹を抑えながら立ち上がる。そして、なのはの頬を右手で叩いた。

当麻「確かに、十年前とは違うさ。けど、お前の優しさは残ってるはずだぜ。なのは」

なのは「優しさ。」

当麻はある事を思い出していた。それは数日前のことだった。

たまたま医務室によるとなのはとシャルルが二人で何かを話しているのを聞いてしまった。それは、

シャルル「なのはちゃん。無理し過ぎじゃない？」

なのは「そんなことないですよ。これでも」

シャルル「そうだけど、あんまり無理しちゃうと再発しちゃうからね。ただでさえ、なのはちゃんの体は……」

なのは「シャルルさん。心配すぎです。私の体のことはよく分か

ってますから、」

当麻（あいつ、体どこか悪いのか？）

当麻「そうだ。今のなのは結構厳しいところがあるかもしれないけど、昔みたいに無理はさせない。いつか自分みたいになってしま  
うからだろ」

なのは「当麻さん。もしかして、」

当麻「怪我してるんだろ。お前、」

なのは「知ってたんですか？」

当麻「たまたまな。いい加減、やめようぜ。なのは」

なのは「当麻さん。」

その時だった。なのはのBJが見る見るうちに解除され、なのはが  
あられもない姿になった。

なのは「え、」

当麻「あつ、」

なのはは見る見るうちに顔を真赤にさせ、当麻にスターライトブレ  
イカーを放った。

高台でその様子を見ていたフェイト達は

エリオ「あの、何が」

美琴「エリオにはまだ早い。」

キャロ「あれが、上条さんの幻想殺しなんですな」

フェイト「当麻、脱がしちゃだめだよ」

## 第58話 過去と今と恋

### 第58話 過去と今と恋

当麻は目覚めるとそこは医務室だった。

当麻「そうか、俺、なのはの」

なのはのBJを強制解除させてしまい、裸にさせてしまったおしおきとしてなのはのスターライトブレイカーを直撃してしまった。

シャマル「やっと起きた。もう無茶しすぎよ。」

当麻が起きたことに気がついたシャマル。よく見ると周りにはシャマル以外に、インデックス、姫神、佐天、なのは、フェイトがいた。なのはは少し恥ずかしそうにしていた。

インデックス「もう、なのはのBJを強制解除させて、裸にさせるなんて、」

土御門「さすがは、幻想殺しだにや」

姫神「見境なさすぎ」

佐天「あはは、」

インデックスと姫神は少し距離をおき、土御門と佐天は苦笑いをしている。

なのは「あの、当麻さん。」

当麻「ん、」

なのは「ご、ごめんなさい。いきなり魔砲で攻撃して、」

当麻「いや、俺も悪かったし、」

フェイト「当麻は過去にも同じようなことやったしね」

フェイトのセリフを聞いた瞬間、インデックスと土御門は当麻を制裁する。その時、六課の中にアラームが響いた。

ガジェットの反応が出た。学園都市メンバーと六課前線部隊はヘリポートまで来ていた

なのは「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長お願いします」

フェイト「FW陣のみんなはロビーで待機ね」

ヴィータ「そっちの指揮はシグナムだ。まかせたぞ」

スバル／エリオ／キャロ「はい!!」

ティアナ「・・・はい」

他の三人の返事から一拍遅れて返事をするティアナ

それを見たなのは思い出したように

なのは「それから・・・ティアナ」

ティアナ「・・・え？」

なのは「ティアナは出勤待機から外れとこっか・・・」

ティアナ「!？」

衝撃で目を大きく見開くティアナと三人。スバルは心配する目でティアナを見る

ヴィータ「その方がいいな・・・そうしとけ」

なのは「今夜は体調も魔力もベストじゃないだろうし・・・」

ティアナ「言う事を聞かない奴は・・・使えないってことですか？」

小さな声で呟くティアナ。なのはは「はぁ・・・」とため息をついた

なのは「自分で言ってる分からない？当たり前のことだよ、それ」

ティアナ「・・・現場での指示や命令はちゃんと聞いてます・・・  
教導だって毎日サボらずやってます！それ以外の場所での努力まで  
言われた通りでない駄目なんですか!？」

叫ぶティアナにカチンときたヴィータが詰め寄ろうとするがなのは  
が制した。

ティアナ「私はなのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能も！キャロみたいなレアスキルも！！当麻さんや御坂さんみたいな特殊な力もない。なにもない・・・なにもないから・・・少しくらい死ぬ気でやらないと強くなてなれないじゃないですか！！当麻さんも同じくらい無茶を……」

言い終わった瞬間、シグナムの拳がティアナの頬を捕らえなかった。代わりにインデックスがティアナの頬を叩いた。

インデックス「……当麻は無茶したくて、無茶してるんじゃないんだよ」

当麻「ちょ、い、インデックス」

インデックス「当麻は誰かのために無茶してるんだよ。ティアナの無茶はただの自殺行為だよ」

ティアナ「あつ、」

インデックスは泣きながら、走り去った。そして、当麻が口を開いた。

当麻「たくつ、スター頼めるか？」

スター「はい、」

スターはインデックスを追いかける。そして、当麻はティアナ見るそして、言った。

当麻「アイツの言うとおり、おれだって、無茶したくって無茶して



るんじゃない。けど、お前、俺が前に言ったこと覚えてるか？」

ティアナ「……無理をするまえに、考えること。」

当麻「お前が無理をして、任務中に大怪我をする。そんなことがあるかもしれない」

ティアナ「あつ、」

なのは「当麻さん。」

なのはは自分の過去を思い出した。自分も無茶をして、当麻が言ったようなことが起きた。それをしないためにこの教導を教えた。

当麻「それに、まずは自分の周りを見てみる。スバルや、キャロ、エリオがお前のことを心配してるんだ。そんな無茶とかすんな。」

ティアナ「は、はい。」

当麻「とりあえず、インデックス探してくる。」

当麻はティアナに大切なことを教え、そのままヘリポートを出て行く。そして、ティアナの頬に涙が伝った。

ティアナ「ごめんなさい。私、」

スバル「いいんだよ。ティア」

その夜、ティアナとスバルが佐天と美琴に呼ばれた。

佐天「私もね。似たようなことやったことがあったの」

ティアナ「え、」

佐天「私、御坂さんや白井さんに守られてるだけで、自分も何かしたい。力になりたいって、でも、何も力がない。そう思って、ある物に手を伸ばした。」

スバル「ある物って」

美琴「レベルアップ、簡単にいうと能力を上げる装置みたいなものなんだけど、それを使うとこん睡状態になっちゃうの」

ティアナ「それじゃあ、佐天さんは……」

佐天「うん、それは御坂さんたちが何とかしてくれたんだけど、その時にね。親友に泣かれるわ。怒られるわで大変だったんだ。だから、強くなるうって気持ちは分かるけど、その前に自分の周りに誰がいるか考えなきゃだめなんだよ」

ティアナ「……うん。」

当麻は夜風にあたりに宿舎の屋上にいた。すると、なのはがやって

きた。

当麻「どうしたんだ？」

なのは「私も夜風にあたりに、」

二人は並んで夜風を当たる。するとなのはが口を開く。

なのは「当麻さんに言おうとしたこと全部言わちゃった。」

当麻「悪いな。」

当麻となのはは夜空を眺める。空は星で輝いてる。

なのは「当麻さんは、私の過去知ってたの？」

当麻「いや、知らなかったけど、でも、お前はティアナに、皆に伝えたかったことってこれだろ。」

なのは「うん、そうだよ。」

当麻「それに、なのはの教導って、担任の先生に似てるんだよ。」

なのは「当麻さんの？」

当麻「ああ、結構厳しいけど、どこか優しさがあって、それに学生時代に自分がいやだっと思って思ったことは生徒にやらせないとか、生徒のことを大切に思ってたりとかが、何か似てるんだよ。」

なのは「そうなんだ。」

当麻「ああ、だから、お前もガンバレよ。」

そう言っつて、当麻はなのはの頭をなでる。

なのは（当麻さん。やっぱりすごいな。あれ？私、もしかして、当麻さんのこと……）

## 第59話 波乱の恋愛模様

### 第59話 波乱の恋愛模様

ティアナは朝目覚めるとあることを思った。それは、当麻のことだった。

ティアナ（上条さんか。あんなにスゴイ人がいるなんて……それに  
かっこいいし、あれ？もしかして、私、上条さんに……）

すると、スバルが起きだした。スバルはティアナの様子を見てある  
事に気がついた。

スバル「どうしたの？顔赤いよ」

ティアナ「き、気のせいよ。ほら、早く起きなさい」

スバル「え、ちょ、ていあ」

なのはもまた、当麻に対する気持ちに気がついていていた。

なのは（ど、どうしよう。当麻さんのこと好きになっちゃった。で  
も、フェイトちゃんやはやてちゃんに悪いけど、諦めないよ。ど、  
どうしよう）

そして、ある事件が食堂で起きた。それは、全員で朝食を取っているとなのはが言い出した。

なのは「当麻さん。好きです。」

なのはの発言に一同が食事の手を止める。その瞬間、動き出した人がいた。

フェイト「な、なのは、じよ、じよ、冗談だよね」

はやて「そや、い、いきなり、冗談言つなんて、なのはちゃんらしくないよ。」

ティアナ「そ、そうですね。上条さんが固まっていますよ」

インデックス「もう、びっくりして、むせちゃったよ。」

姫神「食事中に騒がないで」

美琴「そ、そうよ。行儀が悪いわ。」

スター「はい、わ、悪すぎです。」

七人が騒ぎ出すと、なのはは当麻の隣りに座り、頬にキスをした。そして、

なのは「私の方が皆の前でこんなことをしたよ。告白もしたし、みんなより進んでるよね」

なのはの発言で、七人が戦闘態勢に入った。

フェイト「なのは、いくら親友でも容赦しないよ」

はやて「そやね、今なら諦めたほうがいいよ。」

ティアナ「な、なのはさん。私の方が上条さんのことが」

インデックス「ティアナ？昨日謝って許したけど、今回は許さないよ」

姫神「そうね、これ以上騒がしくしない方がいいわ」

美琴「あんたら、レールガン当てるわよ」

スター「私の方が当麻のこと好きです。」

魔道士全員がデバイスを取り出し、美琴はコインを構え、姫神はスタンロッド、インデックスは噛み付く体制に入った。その光景を、ほかのみんなは、シャマルが張った障壁の中で見守っていた。

佐天「あの、止めなくっていいんですか？」

黒子「いいじゃないのかしら？暴れさせとけば」

ヴィータ「あんなぶちきれたはやて見たこと無いよ」

エリオ「フェイトさんも、」

スバル「なのはさんとか、ティアもだよ。」

キャロ「止めないんですか？」

フリード「きゅ〜」

心配する六人と一匹、残りは何故か落ち着いて食事続けている

リインフォース「すみません。リイン。お醤油を」

リイン「はいです。」

シグナム「騒がしいな。」

シャマル「いつも通りね。」

アックア「ザフィーラ、ソースを」

ザフィーラ「わかった。」

土御門「やっぱり朝は和食だにゃ」

佐天「みなさん。落ち着きすぎです。ところで、上条さんは？」

土御門「おお、巻き込まれてる。巻き込まれてる。エリオ、見とけ、あれがフラグマスターのかみゃんや。エリオはああなるなよ」

エリオ「え、あ、はい。というか、止めないと、食堂が壊れます」

スバル「食堂の問題なの？六課自体壊れるよ」

キャロ「副隊長、止めてください」



シグナム「わるいが、止める自信がない」

ヴィータ「私もだ。勝てるはずがないぞ」

アックア「やらせておけ」

その朝、八人の戦いの結果、全員が倒れて引き分けに終わった。そして、当麻は、死にかけていた。

第60話 六課の休日（前書き）

六甲水「上条さんのフラグが増えまくりだね」

キヤロ「そ、そうですね。処理できるんですか？」

六甲水「さあ、」

## 第60話 六課の休日

### 第60話 六課の休日

今日はフォワードメンバーの休日、なので、フォワードメンバーは楽しみでしようがなかったが…

フェイト「ダメだよ。はやて、はやては仕事で忙しいでしょ、」

はやて「あはは、大丈夫だよ。仕事は昨日のうちに片付けたんやから」

なのは「二人共、まだ今日の分があるよ。ちゃんとやらないと」

ティアナ「なのはさん達、今日は私達フォワードの休日です。仕事してください」

スター「そうです。」

美琴「ちゃんと仕事しないとだめだよね」

インデックス「今日は当麻と一緒に過ごすの、」

姫神「それは、私が、」

当麻「あの、俺は部屋でのんびりと……」

八人「……………却下……………」

当麻は周りにいる全員に助けを求めた。

当麻（たのむ、助けてくれ）

シグナム（悪い、今から、アックアと模擬戦を）

アックア（自分で巻いた種だ。耐えろ）

ヴィータ（何とかしたいけど、この八人を止めるのは無理だ）

シャマル（同じく）

ザフィーラ（右に同じく）

リインフォース（しょうがありません。何とかします）

リインフォースはある書類の山を持ってくる。そして、八人の前に置く。

リインフォース「これだけの量があるなか、サボるんですか？」

はやて「リインフォース。これは、」

フェイト「邪魔を」

リインフォース「まずは仕事です」

なのは「でも、」

リインフォース「しょうがありません。では、くじ引きを」

そう言っつてリインフォースはポケットから紙で出来たくじをだした。

リインフォース「あたりがありますから、あたりを引いた人は上条と出かけられます。ちなみに、ティアナ、御坂、姫神、インデックス、スターは外しても、普通に出かけることが出来ますが、残りの三人は、仕事してください。」

はやて「わかった。うらみっこなしゃ。」

なのは「みんな行くよ」

八人同時に引くと、当たったのは……………

姫神「当たった」

スター「あたりましたね。」

姫神とスターの二人だった。残りはハズレだった。

リインフォース「では、仕事してください。三人とも」

フェイト「と、とうま」

はやて「うう、ひどい。」

なのは「当麻さん」

姫神「…どういくの？」

スター「どこでもいいですよ。」

当麻「あ、ああ、あれ？リイン？」

前から歩いてくるリインは何故かおめかしをして、いつも妖精サイズの姿がスターと同じくらいになっていた。

リイン「上条さん。私も当たりひきましたー」

美琴「あれ？当たりは二枚じゃ……」

リインフォース「妹にはたくさん働いてもらってますから、それで……お願いできますか？」

姫神「…構わない」

スター「はい、」

リインフォース「では、三人とも、お仕事を」

なのは「ず、ずるいよ〜」

フェイト「うらやましい」

はやて「リイン、覚えてけやあ〜」

グラナガン

リイン「わぁー、広いです。」

当麻「まあ広いつちゃ広いけど、何かあんまり学園都市変わらないな」

姫神「そうね。」

スター「まあ、科学が特化していますから、こちらの世界は魔法ですからね」

リイン「どこ行くんですか？」

当麻「あんまり、どこになにがあるか分からないからな。リインは？」

リイン「私も、あまり、」

姫神「どうしようもない」

スター「困りましたね。」

三人がどうするか悩んでいると、そこにティアナとスバルとばったり会った。

スバル「どうしたんですか？」

ティアナ「もしかして、どこいくか悩んでるとか」

当麻「そんな所、悪いけど、案内してくれないか？」

スバル「私はいいですけど、三人は？」

ティアナ「まあ、結局こうなるんだったら、皆でいけばよかったですね」

スター「そうですね。不毛な争いを……」

姫神「……抜け駆けはだめですよ」

リン「わーい、」

こうして、六人で休日を満たすはずだったが……

グラナガン 地下道路

そこに一人の女性がいた。だが、姿がおかしかった。左手と右目が不気味に光、左手はまるで悪魔のような腕をしていた。

????「どこだ、ここは、まあいいや。浜面たちがいるはずだ。見付け出して、殺してやる」

波乱は起きつつあった。





## 第61話 地下での戦い

### 第61話 地下での戦い

巨大な地下空間である少女が走っていた。服はボロボロに、体も生傷だらけだった。後ろを振り向くとそこには、巨大な生物が………

???「だ、だれか、」

???「それをわたせ。小娘」

休日を楽しんでいた当麻達。だが、エリオとキャロからある連絡を受けた。それは、レリックが入ったケースをもった少女が発見したという内容だった。

スター「休日は終わりですね。」

スバル「そうだね。」

ティアナ「リイン曹長、姫神さんを」

リイン「分かりました。姫神さんを安全なところに避難させた後、合流します」

姫神「それはいいけど、彼は？」

スター「あつ、」

五人が気がつくと、当麻はどこにもいなかった。

ティアナ「まさか、迷子？」

リイン「あまり無茶をさせないように私達でなんとかしましょう。  
とりあえず、私探してきます」

エリオ達と合流し、さらに一緒にいた美琴たちと一緒にフォワード  
メンバー＋学園都市メンバーは地下に入った。しばらく進んでいく  
と、広い空間に出た。

エリオ「ここは、」

キャロ「見てください。あそこに、誰かが」

キャロが指さした方を見ると、一人の少女がボロボロの姿で倒れて  
いた。

ティアナ「ひどい」

スバル「こんなになってまで」

黒子（おかしい。この傷痕、まるでどこかの獣にでもやられたよう  
な……）

さらに、美琴はある事に気がついた。それは、壁や地面に付けられ  
た風穴だった。

美琴（この破壊痕。どこかで……）

スター「だれかいますね」

スターがある柱を見ていうと、そこから、二つの影が現れた。一つ  
は、左腕が禍々しい物となった姿の女性と体中が真っ黒で、見た目  
は2メートルは軽く超え、その姿はまるで悪魔のようだった。

???「ちつ、ねずみが入ってきたわね」

???「遊びすぎたか」

ティアナ「だれ？あなたたちは」

???「我が名は終焉のアーク。ヴァイクランの一人」

???「私は知ってるよな。レールガン。私は麦野沈利。」

美琴「まさか、あんたがこんな所に……」

スバル「知ってるんですか？」

美琴「うん、一度戦ったことがある。私と同じレベル5の第4位よ。」

アーク「その小娘を渡せ。そいつはレリックを持っている。」

ティアナ「レリックを……じゃあ、なおさら渡せないわね」

アーク「ちつ、身の程知らずが、メルトダウン！。手をだすなよ」

麦野「分かってる。私の殺したい相手はただ一人だ。」

スター「気をつけてください。こいつはあのティスと同じくらいの強さです」

アーク「たっぷり殺してやるよ」

その頃当麻は……

当麻「くそ、みんなどこにいるんだ？」

リイン「この地下道を歩いてたので、すぐに追いつくはずですよ。」

当麻「よし、行くぞ。」

リイン「はい。」

## 第62話 終焉の悪魔

### 第62話 終焉の悪魔

アーク「ぐおおおおおおおおおお」

アークは巨大な爪でティアナたちを攻撃し始めた。ティアナ達はそれをよけるが、攻撃の衝撃で、全員が壁に激突した。

ティアナ「ぐう、強い。」

スバル「やばいよ。どうするの?」

美琴「私に考えがあるわ。エリオ、協力いい?」

エリオ「あ、はい。」

ティアナ「私たちは?」

美琴「とりあえず、キツイかもしれないけど、あいつの気を引いて、」

スバル「分かった。行くよ。ティア」

ティア「ええ、」

エリオ「あの、どうするんですか?」

美琴「ちよっとしたレールガンの応用よ。」

ティアナ「クロスファイヤーシュート」

スバル「デイベインバスター」

二人がアークに向かって、遠距離と中距離での攻撃を続ける。だが、アークに対してダメージが少ない。

アーク「そんなひ弱な攻撃では、俺には傷をつけられんぞ。ダークバスター」

アークは左手から黒い魔砲を放つ。それをスターが魔砲で相殺しようとしたが、威力が違いすぎて、魔砲ごと飲み込まれた。

スター「くうっうっ、」

スバル「スターさん。」

アーク「この程度で終わるなよ。ダークスレイヴ」

アークの右腕が槍に変わり、スバルとティアナを吹き飛ばす。だが、その瞬間、黒子が近くにあった鉄骨をアークの両腕、両足に埋め込み、動きを封じる。さらには、キャロのバインドでさらに拘束した。

アーク「この程度で動きを封じたか。ナメるなよ」

アークは無理やり、拘束を抜けようとした。キャロも少し焦り始める

キャロ「はやく、なんとかしてください。このままだと長くは……」

美琴「行くわよ。エリオ」

エリオ「はい、」

エリオはストラダを構え、美琴はエリオの後ろに並んだ。そして、美琴は全力でストラダの柄を殴ると同時に、エリオはアークに向かって突撃した。その瞬間、エリオの突撃と美琴のレールガンの応用で、巨大な閃光と変わった。

エリオ「超電磁槍」

アーク「やばい、よけれん」

アークに直撃し、爆発が起きた。

スバル「やったの？」

麦野「いや、まだだ」

煙が晴れると、エリオがアークに捕まっていた。

美琴「そんな、」

アーク「今の危なかったが、もう少し威力があればな」

アークはそのまま、エリオを地面に叩きつける。エリオは額から血を流した。その光景を見て、スバルたちは動けずにいた。



スバル「か、かてない。」

アーク「さあ、その小娘を渡せ」

アークは倒れた少女の前に近づく。全員が諦めかけた瞬間、

神裂「七閃」

アークの右腕が切り裂かれた。全員がその声の方をみるとそこには、当麻とリインとそして、黒髪のポニーテールの女性がいた。

スター「あなたは、神裂」

神裂「……悪魔が、これ以上好きにさせん」

アーク「ちっ、幻想殺しまでいやがる。こりゃ、やってられん。帰るか」

麦野「さすがに戦力が違うな。」

二人は黒い風に包まれて、消えていった。

別の場所では、なのは、シャマル、ヴァイス、土御門、インデック  
スがエリオとキャラコが見つけた少女を保護していた。

なのは「この娘だね。」

土御門「レリック運んでたってか。こりゃ、何かあるな」

シヤマル「早く、治療を……」

なのは「そのまえに、そこに隠れてる人出てきたら？」

突然なのはが路地裏の向こうに話しかけると、現れたのは、金髪に手には拳銃を持った青年とピンクのジャージを着た少女が苦しそうにしている。青年はなのはに向かって銃口を向ける

???「た、頼む。この娘を病院に……」

なのは「……いいよ。事情はあとで聞くから、早く乗って」

## 第63話 謎の少女と男女

### 第63話 謎の少女と男女

アークとの戦いから、数日。なのは、当麻、スバルの三人は聖王教会の病院に来ていた。理由は、保護した四人についてだった。

当麻「それにしても、何でこの三人なんだ？」

なのは「あの男女と女の子は私が保護したし、地下で倒れてた子はスバルが保護したからね。当麻さんに来てもらったのは、多分学園都市の関係者だと思うから」

当麻「それにしたって、他のみんなは？」

スバル「えっと、御坂さんと白井さんはエリオとキャロの訓練に付き合ってるよ。スターちゃんとティアは特訓。土御門さんとあの神裂さんとアックアさんは調べごとだって、インデックスさんは姫神さんと佐天さんは一緒に無限書庫に、あのティスとアークに付いて調べてる。フェイトさん達はお仕事だって、」

なのは「謎の敵、ヴァイクラン。それについて私たちは何も知らないからね」

当麻「そっくだよな。俺もあのアークって奴を遠くからしか見てないし、」

三人は病室の前に行くと、何故か騒がしかった。不思議に思いつつ扉を開けると、そこでは……

浜面「おい、頼むから落ち着いてくれ」

ヴィヴィオ「ママー、」

滝壺「はまづら、こっちの子も」

ルーテシア「ガリユー、どこ？」

当麻「何か、偉いことになってるな。」

スバル「あはは、そうだね。」

なのは「と、とりあえず、何とかしなきゃ」

泣きじゃくる二人の少女を泣き止ませ、とりあえず、落ち着いた。

なのは「えっと、私は高町なのは」

当麻「上条当麻」

スバル「スバル・ナカジマです。」

浜面「えっと、俺は浜面仕上。んで、こっちは滝壺で、」

ルーテシア「……ルーテシア」

ヴィヴィオ「……ヴィヴィオ」

なのは「んと、ヴィヴィオは何であんな所に？」

ヴィヴィオ「わからない」

スバル「ルーテシアは？」

ルーテシア「ドクターに言われて、レリックを回収しようとしたんだけど、あの化物に……」

当麻「んで、浜面と滝壺は？」

浜面「なんつつか、敵から逃げてたらいきなり変な光に巻き込まれて、気づいたらあそこにいたんだよ。一体ここはどこなんだ？ 学園都市か？」

とりあえず、なのは達三人は情報をまとめた。ヴィヴィオについてはまだ分からないが、ルーテシアは多分、スカリエッティの関係者。浜面達は学園都市の関係者。それぐらいだった

なのは「とりあえず、四人はこっちで保護する形になるね。」

スバル「でも、ルーテシアは？ スカリエッティの関係者じゃ……」

当麻「まあ、無理にアジトとか聞き出すの悪いし、キャラ達に任せれば……」

当麻が言いかけた瞬間、ルーテシアが当麻の服の裾を掴む。

ルーテシア「一緒にいて」

当麻「え、おい、」

なのは「んー、本人もこう言ってるから当麻さん。お願いね。」

スバル「頑張ってください」

当麻「こら、保護したのおまえだろスバル。」

スカリエツティアジト

スカリエツティがあることについて悩んでいた。

スカリエツティ「ルーテシアが戻ってこずに、聖王教会か。チンク」

チンク「呼びましたか？」

スカリエツティ「とりあえず、様子を見てきてくれ。」

チンク「分かりました。」

スカリエツティ（幻想殺し、興味深い。だが、今来ているあの二人も興味深い。ふふ、これは楽しめそうだ）

さらに数日後、ヴィヴィオはなのはとフェイトの部屋で、浜面と滝壺はエリオとキャロの部屋で、ルーテシアは当麻が二人つきりだといろいろとまづいからという理由で、スター、インデックス、当麻の三人部屋となり、一緒に住むことになったのだった。

## 第64話 聖王教会

### 第64話 聖王教会

当麻、インデックス、アックア、土御門、なのは、フェイト、はやての七人は聖王教会に来ていた。理由は重大な話があるからだ

当麻「でも、何でアックアも」

アックア「八神部隊長の話では、魔術がらみらしい。」

ここ数週間でアックアは六課のメンバーと馴染んでいた。よくシグナムや神裂と模擬戦を繰り返している。

土御門「まだ、つかねえのか？」

インデックス「おなかすいたー」

はやて「ここや。」

当麻たちはある一室の扉の前に来てきた。はやてがノックして、部屋の中に入ると、中には金髪の女性とピンク髪のシスターとどこかで見たことがある青年がいた。

カリム「いらっしやい。はやて。」

はやて「ひさしぶりやな。カリム」

カリム「そちらが、別世界から来た人たちね。私は聖王教会の騎士



カリム・グラシアと言います」

当麻「あ、どうも、上条当麻です」

インデックス「インデックスです」

土御門「土御門元春だぜ」

アックア「アックアだ。」

カリム「そっちの人は知ってるわよね」

カリムが男の方を見て、言った。

当麻「……………誰？」

クロノ「貴様、ワザとか」

当麻「いや、マジで誰だ？土御門分かるか？」

土御門「悪いな。かみゃん。俺も分からないにゃ」

フェイト「えっと、クロノだよ。」

当麻「クロノって、うわー、相変わらずいけ好かない顔してるな」

クロノ「君こそ、相変わらず不抜けた顔をしているな」

なのは「まあまあ、落ち着いて、」

インデックス「そうだよ。いくらクロノがカッコ良くなったからって、」

はやて「ちなみに、クロノくんはエイミイさんと結婚してるんやで  
はやての発言を聞き、当麻と土御門が同時に切れだした。

当麻「てめえだけ、幸せになってるな。」

土御門「アックア、大剣貸せ。こいつは斬り殺す」

クロノ「貴様らいいかげんにしろ」

三人が乱闘を始め、それを見てアックアはただ一言

アックア「騒がしい」

三十分後

カリム「えっといいのかしら?」

アックア「かまわん」

カリム「今回、上条さん達、特に魔術関係に詳しい人達を呼んだのは私の予言についてです」

当麻「予言?」

クロノ「彼女のレアスキル『預言者の著書』は、最短で半年、最長

で数年先の未来の出来事を散文形式で書き出した預言書になっているんだ」

カリムに代わって、クロノが説明した。

土御門「それで、どんな予言が出たんだ？」

カリム「はい、『魔術と科学が混じり合った世界から最古の魔術師が、終焉の悪魔、鬼神殺し、神の椅子に座る紅き手を率いて、彼者古き結晶を用いて、世界を滅ぼさんとする。』

なおかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を守る法の船も砕け落ちる。』」

当麻「どういう意味だ？」

クロノ「世界を滅ぼそうとするものが現れ、地上本部と管理局を崩壊させてしまうということだ」

はやて「ここまでなら私は聞いてたんや。でも、」

カリム「つい最近、続きが現れました。『幻想を殺すものと黒き羽を持つもの倒れし時、最古の魔術師は、全てを打ち消す力を手に入れる』」

インデックス「幻想を殺すものって、当麻のこと？」

当麻「多分な。」

フェイト「気をつけてね。当麻。」

当麻「ああ、」

なのは「残りの文面は、終焉の悪魔はアーク、鬼神殺しはティス。残りの『最古の魔術師』『神の椅子に座る紅き手』『黒き羽を持つもの』だね」

インデックス「最古の魔術師は分からないけど、神の椅子に座る紅き手は分かるかも」

はやて「だれや？」

アックア「フィアンマ。神の右席のリーダーだ。」

アックアが淡々としゃべりだす。部屋にいる全員も黙って聞く。

アックア「私は奴からこの別世界に付いて聞いた。どういった経緯か知らないが、奴は確実にこの世界にいるはずだ。」

土御門「そうだな。」

クロノ「黒き羽を持つものは一体何を指しているんだ？」

土御門（まさか、あいつがこっちにいる訳……いや、ありそうだな）

インデックス「とりあえず、無限書庫に行こうと思うんだけど、」

当麻「無限書庫？」

なのは「この前、アークとティスについて調べてもらった結果があ

るの？」

インデックス「うん、ユーノが調べてくれたんだって」

その瞬間、当麻はユーノの名前を聞いて、悪寒走る。

当麻（やばい。あいつ、なのはのこと好きだったんだっけ。こ、殺される。）

フェイト「ど、どつするの？ユーノのこと」

はやて「まあ、なのはちゃんは当麻さん一筋や。ユーノくんのこと友達くらいにしか」

当麻「おれ、殺されるのかな？」

カリム「あらあら、はやてが聞いてたけど、モテモテね」

当麻「カリムさん。頼むから笑顔で言わないでください。こっちも大変なんですよ」

クロノ「まったく、君は」

当麻「お前が言つとムカつく。」

クロノ「またやる気か？」

再び乱闘が始まったのであった。



## 第65話 思い

### 第65話 思い

当麻達は聖王教会からそのまま、無限書庫へと向かった。すると当麻は無限書庫の入口の前で止まった。不思議に思ったはやては

はやて「どうしたん？当麻さんそんな所で立ち止まって」

当麻「いや、うっかり幻想殺しで無限書庫をめちゃくちやにしちまうかもしれないから、ここにいるよ。」

インデックス「ん？ここでは本から書き写した資料をもらっただけだから別に入っても大丈夫だよ」

当麻「い、いや、それが……」

土御門「いい加減諦めて、殺されてこい」

当麻「おま、人事だと思って」

土御門「何言ってるんだ。人事だ」

当麻「お前、殴るぞ」

土御門「はん、掛かって来い」

二人は再び殴り合いを始めた。その時、後ろから声をかけられた。

ユーノ「あの、なにしてるんですか？」

ユーノは、十年前よりかなり成長しており、髪も伸ばして後ろで縛っており、メガネをかけていてかなりイケメンになっていた。

フェイト「あ、ユーノ久しぶり。」

インデックス「資料の方受け取りに来たんだよ」

ユーノ「うん、もうできてるよ。あの、当麻さん。何でそんなに怯えてるんですか？」

当麻はユーノの姿を見るなり、少し怯えていた。

当麻「いや、ちょっと、」

なのは「どうしたんだろ？」

フェイト（気づいてないんだ）

はやて（気づいてないんやね）

当麻達は資料を受け取り、そのまま六課に帰ろうとしたとき、ユーノに呼び止められた

ユーノ「あの、当麻さん」

当麻「何だ？」



ユーノ「なのはのことなんですけど、」

ユーノ口からなのはのことが聞かれた瞬間、当麻は全力で土下座をする

当麻「すみません。まじですんません。」

ユーノ「いや、土下座しなくてもいいですよ。僕はただ、なのはのことをお願いしたくって」

当麻「へっ、」

ユーノ「なのはのケガのことか気づいてくれたし、なのはは当麻さんの好きな理由もわかります。なので、あまり無茶しないでください。なのはだけじゃなくって、フェイトはやても、インデックスさんも悲しみますから」

当麻「……出来るだけな。でも、俺の性格知ってるだろ。」

ユーノ「そうですね。でも、頑張ってください。」

当麻「あ、その前に、お前なのはのことがどう思ってるんだ？」

ユーノ「え、友達として好きですよ」

当麻「ああ、そう」

## 第66話 六課に来た少女たち

### 第66話 六課に来た少女たち

六課の前に二人の少女がいた。一人は右目に眼帯をした銀髪の少女、もう一人は栗色のショートヘアの少女だった。

チンク「それにしても、何故私が様子を見に行かされるんだ？こういうときはセインとかの方が合っているだろ」

眼帯の少女の名前はチンク。スカリエッツィの仲間の一人。もう一人は絹旗最愛。学園都市の闇グループ『アイテム』の元メンバーの一人だ。

絹旗「そりゃ、セインとかノーヴェとかにやらされたら、超バレそうですからね。隠密行動に向いてそうな私達が行くんですよ。」

チンク「分かってる。だからといって、この格好はいいのか？」

二人が着ているのは局の制服。スカリエッツィが用意したものをらしいが、あんまり着慣れていない様子だった。

チンク「これも、ルーお嬢様のため。」

絹旗「まあ、私達のことを誰かに超バレたりしたりはないですから」

チンク「そうだな。行くぞ」

## 訓練場

訓練場では朝練が始まっていた。その様子を当麻、ルーテシア、浜面、滝壺、インデックスが見ていた。

浜面「魔法っていうのは凄いな。いつみても」

当麻「まあ、そうだよな。所で、お前らの友達は見つかったのか？」

浜面「いや、まだだ」

浜面はなのは達に、滝壺の治療と、もう一つこの世界に一緒にいた友達を探して欲しいと頼んでいた。だが、これといって情報が無かった。

ルーテシア「私も、ガリユールが」

ルーテシアもまた、一緒にいた召喚獣のガリユールが行方不明らしく、キャロとフリードの姿を見るといつも辛そうにしている。

インデックス「だ、大丈夫だよ。きっと見つかるよ」

ルーテシア「そう？」

ルーテシアは少し寂しそうにしていた。基本的に、当麻とインデックスと一緒にいることがある。なので少しづつだが前よりは心を開

いていた。

なのは「はい、終了。皆おつかれ」

話していると朝練が終わっていた。すると、ヴィヴィオがなのはのもとに駆け寄ってきた。

ヴィヴィオ「ママー」

ヴィヴィオはなのはとフェイトの元で預かることとなり、よくよくは娘になるらしい。

なのはに駆け寄ろうとしたヴィヴィオだが、途中で転んでしまい、泣きそうになっていた。

フェイト「ヴィヴィオ」

ヴィヴィオに駆け寄ろうとしたフェイトを静止させるのは。そして、なのははヴィヴィオに向かっていう。

なのは「待って、ヴィヴィオ、自分で頑張って立ち上がってみて」

ヴィヴィオ「うっ、」

フェイト「や、やっぱりだめだよ。」

我慢できず、ヴィヴィオを抱き上げるフェイト。それを見てなのはは

なのは「もうフェイトママは甘すぎるよ」

フェイト「なのはママは厳しすぎです。」

ほのぼのとした光景を見て、当麻と浜面は……

当麻「何つうか、教育ママだな」

浜面「いやいや、子供に甘いお母さんとか、絶対に凄い子に成長しそつだな」

インデックス「二人とも、何かおかしくなった？」

滝壺「ふたりは、ああいうお母さん系が好きなの？ だったら、私浜面の好みじゃないね」

浜面「いや、違うからね。てか、思いっきり勘違いするな」

当麻「そつだ、ただ感想を述べただけだ。」

二人は必死に言い訳をする。すると、ヴィヴィオが当麻に抱きついてきた。

ヴィヴィオ「当麻ー」

当麻「何だ？ ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「パパー」

ヴィヴィオをパパ発言を聞いて、当麻がなのはとフェイトを睨む。

当麻「こら、二人とも何小さい子に何言わせてるんだ」

フェイト「え、何のこと」

なのは「当麻さんは将来的にはヴィヴィオのお父さんに……」

当麻「お前ら、その幻想をぶち殺す」

チンクと絹旗は六課の中を歩き回っていた。

チンク「まず、どこにいるか探さないと」

絹旗「そうですねー、とりあえず、食堂あたりをさがしましょう」

チンク「おなかすいたんですか？」

絹旗「超お腹すきました。早く行きましょう」

二人が食堂に向かうと食堂のある一角がおぞましいオーラが出ているのに気がついていた。

チンク「一体、なにが」

絹旗「超不気味ですね」

なのは達八人は、ある重大な戦いをしていた。それは……当麻の隣は誰が座るかだ。左隣はすでにルーテシアが座っており、正面は佐天が座っていた。

なのは「うらみっこなしだよ」

はやて「せや、絶対に勝つ」

フェイト「負けないよ」

ティアナ「負けないです。」

インデックス「私に勝てるの？」

美琴「あんたらに渡すか」

姫神「これに勝てば私も……」

スター「させませんよ。」

八人「ジャンケンポン」

当麻「お前ら、ジャンケンで禍々しいオーラを出すな」

ギンガ「あの、隣座っていいですか？」

当麻「ん、お前は、スバルの」

ギンガ「はい、ギンガ・ナカジマです。今日から六課と合流しまし

た。よろしく願いします」

当麻「ああ、じゃあ、隣座っていいぜ」

ギンガが当麻の隣に座ると八人が一斉にジャンケンをやめた。

はやて「そんな、ジャンケンもせずに」

フェイト「ずるいよ。ギンガ」

ティアナ「ずるいです。ギンガさん」

ギンガ「え、え、」

ギンガは何が何だか分からなかった。スバルと佐天は苦笑いをして

スバル「と、とりあえず、ギン姉、座ってていいよ。」

佐天「不毛な争いにならなくってすみませうから」

ギンガ「は、はあ、」

こうして、不毛な争いは終わっていった。だが、浜面があることに気がついた。

浜面「あれ？あの女の人」

浜面は近くに座っている二人の女性局員の一人を見ていると、土御門が



土御門「なんだ。お前はたつきーつう可愛い彼女がいるのに他の女性に見とれてるのか？」

滝壺「そうなの？はまつらはああいう小さい子が好きなの？」

浜面「違っつて、あの人誰かにそっくりだなって」

滝壺「本当だ。まるで、きぬはたにそっくりだね」

土御門「あははは、本人だったりして」

三人が笑っていたが、明らかに似すぎていておかしいと思い、その女性に近づく

浜面「おい、絹旗」

絹旗「だ、誰のことを言ってるのですか？超ナンパですか」

浜面「その口癖、やっぱり絹旗だろ。」

絹旗「くっ、このバニー好きが」

土御門「バニー好きなのか」

浜面「普通にバラすな。てか、やっぱり絹旗じゃん。」

チンク「バレましたね。」

ルーテシア「あっ、チンク」

チンク「すみませんが、しばらくお時間をもらっていいですか？」

## 第67話 スカリエッツィの招待

### 第67話 スカリエッツィの招待

チンクと名乗る少女と浜面の友達の絹旗を六課の別室に入らせ、当麻、なのは、インデックス、浜面の四人で話しを聞くことになった。

チンク「私はチンク。ルーテシアお嬢様の関係者です」

絹旗「私はその関係者の絹旗です。」

二人は自己紹介すると、なのはが険しい表情をしていた。

なのは「あなた達の目的は何？スカリエッツィの仲間だっていうことは知ってるけど、」

チンク「目的というか、ルーお嬢様がどうされているか様子を見に」

絹旗「ドクターは超心配性ですからね」

当麻「何か、本当らしいからなのは、その顔やめとけ」

なのは「分かったけど、でも、」

インデックス「全然敵意はないみたいだから大丈夫みたいだよ。」

二人が諭すとなのははため息を付き、表情を柔らかくした。

浜面「でも、絹旗がここにいてよかったよ。」

絹旗「この世界については大体聞きました。別世界に、魔法、本当に凄いとこですな」

当麻「それで、ルーテシアを連れ戻したりは？」

チンク「お嬢様はそれを望んでいませんから、それと出来ればお礼ということと一緒に来てもらいたいです。ガリユーもいますから、出来ればお嬢様も」

インデックス「どうするの？」

なのは「アジトに誘いこんで、罠にはめるとかは？」

チンク「ありません。」

当麻「とりあえず、信じようぜ。俺は行ってみたいし、」

なのは「当麻さんがそういうなら、じゃあ、こっちで行くメンバー決めるけど、何人ぐらいなら大丈夫ですか？」

チンク「上条さんとお嬢様をいれて、あと、一人ですね。」

チンクの案内で、当麻、ルーテシア、スターの三人はアジトに向かっていた。絹旗はとりあえず、次の日迎えに行く時の案内役として

残っている

チンク「もうすぐ付きます」

当麻「それにしても、ずいぶん遠いんだな」

ルーテシア「それは、当麻さんの力のせい」

スター「本当なら直ぐに行けたはずです」

当麻「悪かったな。」

チンク「むっ、アジトの様子が……」

チンクが見た方向からは、確かに黒い煙が登っていた。

当麻「なんだ？山火事か？」

スター「いえ、微細ですが魔力が感じます。まさか、ヴァイクランが」

チンク「そんな、早く行かなければ、」

四人が急いでアジトに向かうと、アジトの中は無茶苦茶になっていた。奥に進むにつれてひどくなり、そして、奥には、スカリエツテイらしき人物が、一人の老人に首を掴まれていた。

オルドレイク「レリックを渡せ」

スカリエツティ「わ、渡すから、彼女には手を……」

チンク「ドクター、みんな」

周りには、戦い傷だらけの少女たちが倒れていた。チンクは駆け寄るが、全員気絶していた。

オルドレイク「おや、幻想殺しか」

当麻「お前、ヴァイクランの」

オルドレイク「ちょうどいい。少し遊ぶとしようか」

今、巨大な闇が戦いを始めたのだった。

## 第68話 最古の魔術師

### 第68話 最古の魔術師

オールドレイク「まずは自己紹介をしよう。私はヴァイクランの主、オールドレイク・ベルリッツ。最古の魔術師と言えば分かるな」

当麻「最古の魔術師！。予言にあつた奴か。何が目的だ。」

オールドレイク「レリックの回収じゃよ。この小物には必要ないからな。」

そう言つて、オールドレイクはスカリエツティを壁に投げ飛ばした。

当麻はチンクとスターを下がらせた。

スター「当麻、ここは私達も」

当麻「悪いけど、出来れば、周りにいるみんなを別の場所に運んでくれ。ここは俺が何とかするから」

スター「ですが、」

当麻「いいから、早くしろ」

当麻はスターに怒声を上げると、スターは黙つたまま、倒れている少女たちをチンクとルーテシアと共に避難させる。

オールドレイク「くく、さすがに私と戦わせたくないらしいな。」

当麻「うるせえ、黙ってるジジイ。てめえを倒す。」

オルドレイク「ふむ、理由が分からない。何故、貴様達の敵であるあの小物を倒してやったのに、感謝をしない。」

当麻「するか。無抵抗の奴をいたぶってるだけじゃないか。行くぞ」

当麻はオルドレイクに向かって、駆けだす。オルドレイクは左手から真つ黒な魔力球を放つ。

オルドレイク「マグネットボール」

当麻はその魔力球を右手でかき消す。

当麻「どんな魔術か知らないけど、そんな攻撃は効かない」

オルドレイク「ふむ、マグネットボールは相手に直撃するまで追いつける魔術。なら、魔界の神が使う魔法を見せよう。それは絶対なる威力。そして、優雅な姿をした。カイザーフェニックス」

右手から、真つ赤に燃える火の鳥が現れ、当麻に向かって放つ。だが、当麻はまた右手で防ぐ。

当麻「いくらやっても、無駄だ。」

オルドレイク「ずいぶんと幻想殺しを過信しているな。確かに魔法などの異能の力のまえでは絶対的な力だ。魔界の神が使う魔法すら打ち消すとは、では、異能という物をねじ曲げよう。」

再び、カイザーフェニックスを放つ。当麻は右手で防ごうとしたが、



打ち消せなかった。

当麻「な、がああああああ」

オールドレイク「今のはただの現象。霧や雪と同じ自然界に存在するものに変えた。」

当麻の服はボロボロに焦げ付いていた。だが、何とか立ち上がった。

当麻「そ、それも術式か何かだろ。なら、消せるはずだ」

オールドレイク「残念ながら、放った瞬間から一つの現象だ。幻想殺しは無効だ。」

当麻（くそ、強すぎる。けど、何とかしなきゃ、あの腕輪が光った瞬間、カイザーフェニックスは変わったんだ。なら、あれを破壊する。）

当麻はまた駆けだす。オールドレイクも再びカイザーフェニックスを放つ。だが、当麻はそのまま、突っ込み、オールドレイクの腕輪を右手で破壊し、オールドレイクの顔を殴る。

当麻「これで、幻想殺し封じはなくなった。」

オールドレイク「ふむ、確かに素晴らしい。思ったとおり破壊してきたか。さすがにこの姿では体がキツイ。レリックもあることだ。全盛期に戻るか」

当麻「なに、」

オールドレイク「うおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおお」

レリックを取り込むオールドレイク。姿は見る見るうちに変わっていき、黒い髪が白い髪にかわり、衰えていた体が若返っていった。顔立ちもかなり変わった。

当麻「若くなった。」

オールドレイク「ふむ、久しぶりに若き頃の姿に戻った。どれ、上条当麻。続けよう。」

スター「これで全員ですか？」

チンク「ああ、早く上条の所に、」

ルーテシア「だんだん揺れがすごくなってる。早く行かないと。ガリューは？」

チンク「呼び出せばきます。」

スター「その前に早く、なのは達に……」

三人が焦っていると、そこに白い髪の少年が現れた。

????「なんだー、見ないうちに、アジトが変わってるジァねえか」

チンク「お前は……」

## 第69話 破滅の魔術師

### 第69話 破滅の魔術師

オールドレイク「では、まずは準備運動だ。」

オールドレイクがジャンプした瞬間、姿が消え、当麻の後ろに周り掌底を放った。

当麻「がは、」

オールドレイク「虚無。」

さらにオールドレイクは、右手から白い閃光を放つが、当麻はそれをギリギリで避けた。その閃光は地面に直撃すると、直撃した部分がえぐられていた。

当麻「なんだよ。この魔術は」

オールドレイク「ふむ、まだ本調子ではないな。本調子なら、このアジトごと貴様もなくなっただけだが、まあいい。次は……………」

オールドレイクが新たな魔術を繰りだそうとした瞬間、頭に小石がぶつけられた。なにかと思いいてみると、スターとチンクとルーテシアの他に、人型の龍と白い髪の少年がいた。

当麻「お、お前は……………」

一方通行「はん、お前か、アジトをメチャクチャにしたのは、殺す

ぞ」

オールドレイク「ふむ、何ものだ？」

一方通行「くそつたれの悪人だ。」

一方通行は首のチョーカーのスイッチを入れ、オールドレイクに向かっていった。オールドレイクは再び、虚無を放った。だが、一方通行に当たったと瞬間、反射され、オールドレイクに向かってきた。

オールドレイク「ふむ、反射か。これでは、自分の技で死んでしまう。だが、虚無」

虚無と虚無をぶつけ、相殺した。

一方通行「糞が、チートかよ」

オールドレイク「ふむ、反射は厄介だが………関係ないな」

一方通行「何、がは、」

突然、一方通行が口から血を吐いた。よくみるとオールドレイクの腕から剣が生えていた。

オールドレイク「衝撃の剣。この剣の前では、すべてが無効だ。貴様はこれで終わりだ。そして……」

オールドレイクが、スターたちに向かって虚無を放った。当麻は必死に走り、虚無を右手で防いだ。だが、

オールドレイク「貴様の行動は読める。幻想殺し」

当麻の体を斜めに切りつけられた。オールドレイクは当麻が庇うと読み。虚無を防いだ瞬間、斬りつけたのだった。

オールドレイク「さて、これで、幻想殺しは終わりだ。」

オールドレイクは倒れた当麻を踏みつける。それを一回だけではなく、十回、二十回、三十回と繰り返す。

スター「……めて、やめて、やめてー……」

一方通行「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

一方通行の背中から黒い羽が生え、オールドレイクに向かって攻撃を仕掛けた。だが、オールドレイクはその羽根をつかみ、引きちぎった。

一方通行「がああああああああああ」

残っている羽で攻撃を続けるが、オールドレイクは全てを防ぎ、一方通行に魔力弾を放ち、反射を無効化し、一方通行に直撃した。

オールドレイク「予言通り。次は、本部を破壊するか。さらばだ。弱者よ」

オールドレイクが去った。だが、スカリエツティのアジトは崩壊し、一方通行は何とか立ち上がるが、当麻は動かなかった。

## 第70話 倒れた幻想殺し

第70話 倒れた幻想殺し

聖王教会 病院

その手術室の前で、六課メンバーと学園都市メンバー、そして、チンクヤルーテシアが集まっていた。オルドレイクが去った後、なのはたちが救援に来たが、倒れた当麻の姿を見て急いで病院に運んだ。

なのは「当麻さん。」

フェイト「なのは……」

土御門「くそが、あんなにボロボロにしゃがって、」

悲しむもの、怒るものがいたが、アックアやシグナムはただ冷静でいた。

滝壺「心配はしないんですか？」

アックア「……………私も奴をボロボロに打ちのめした。だが、ここまですごいことをされたのだ。」

シグナム「誰かが冷静でいなければ、今後の任務に支障をきたす」

ヴィータ「お前ら、すごいな。私は今にも奴のところに行って、ぶちのめしたいよ」

全員がしゃべっていると、主治医が出てきた。全員が詰め寄る。

はやて「当麻さんは？」

主治医「……………切傷に、打撲、数々の暴行を受けている。」

美琴「そんなの分かってるわよ。それで、あいつは大丈夫なの？」

主治医「……………危険な状態だ。こちらの治療魔術も受け付けられない。このままだと……………彼は死ぬ」

主治医の言葉を聞いた瞬間、浜面は主治医に掴みかかった。

浜面「お前、それでも医者かよ。絶対助けろよ。医者なんだから。助けてやれよ」

主治医「私達だって、全力は尽している。だが、それ以上に彼の傷はひどい」

主治医の体が震えていた。滝壺はそれに気が付き、浜面を諭す

滝壺「だめだよ。この人だって助けたいんだよ。だから、」

インデックス「……………そうだよ。」

全員がインデックスの方を向くと、インデックスはただ無表情でしゃべっていた。

インデックス「とうまは、いつだって無茶をして傷だらけで帰ってくる。腕が切り落とされたりしても……………いつも、笑顔で帰ってくる。」



だから……」

インデックスの眼から涙が流れる。インデックスは必死に堪えるが涙は止まらなかった。

インデックス「ひつく、だから、だから、」

エリオ「インデックスさん。」

スター「彼は私を救ってくれました。彼はまだ何もしていない。なのにここで終わるはずがないです」

フェイト「そうだね。母さんを助けた時みたいに、必ず助かる。」

はやて「そや、当麻さんはきつと、」

全員が諦めかけた瞬間、三人の男女が現れた。その姿になのは達は見覚えがあった。

建宮「おい、担当が変わるぜ。」

五和「すみませんが、彼に手術を」

主治医「き、君たちは一体」

冥土帰し「すまないが、彼は僕の患者だ。」

フェイト「あなた達は」

なのは「建宮さん。五和さん。それにその人は……」

はやて「フェイトちゃんのお母さんを助けた医者や。」

冥土歸し「君たちはするべきことがあるはずだ。ここからは僕の戦いだ。」

冥土歸しは主治医と一緒に手術室に入った。

スバル「あの人は？」

土御門「俺らの世界の最高の名医だ。あの人なら助けられる。」

フェイト「や、やった。やったね。はやて、なの……は？」

なのは「よかった。本当によかった。」

インデックス「うん、うん、」

なのはとインデックスは二人して泣きじゃくっていた。フェイト達は何人か手術室の前に残り、別室に入った。

神裂「それで、おまえたちが」

建宮「ああ、たまたまな。装置の方を修理したら、あの戦いの映像が流れたんだ。それを見て、五和が急いであの人を連れてきたんだ」

五和「それで、あの、魔術師のことなんですが」

土御門「何か分かったのか？」

五和「はい、」

## 第71話 変わるもの

### 第71話 変わるもの

五和と建宮は話した。当麻達の世界から約100年前のことを……そして、オールドレイクの過去を……

100年前のローマ政教の魔術師であったオールドレイク・ベルリッツは、最強の魔術師と言われていた。だが、ある事件が起きた。

オールドレイク「ここが奴らの実験場。」

オールドレイクは人体実験が行われた施設を潰す任務を行った。だが、そこは地獄のようなものだった。部屋中は血が飛び散り、人の内臓などが部屋中に飛び散っていた。オールドレイクはここまでの所業を行った研究者を殺し、言った。

オールドレイク「神よ。私は間違えた。何故、このことが許される。

何故だ。何故お前は裁かない。ぐおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおお」

オルドレイクの叫びは大地に響いた。そして、決意をした。

オルドレイク「許さん。私は貴様らが作ったこの世界を、いや、次元を破壊する。」

建宮「それが、奴の過去の一部だ。」

フェイト「過去の一部？じゃあ、ちゃんとした理由とかは？」

五和「まだ明かされていません。でも、これがきっかけでオルドレイクが次元を破壊するという目的を考えただと思います。」

黒子「ですが、アークとティスは一体どういう理由で彼と一緒にいるんですの？」

建宮「奴の魔術は、人造体作成だ。多分奴らはその副産物だ。」

土御門（腑に落ちないのは、何故フィアンマが関わっているかだ。それに、オルドレイクがその研究所で見た物って一体。こりゃ、一度、あっちの世界に行く必要があるな）

アックア（おかしい。何故私はこの話を聞いたことがある。いつだ。

いつ聞いたのだ。」

ヴァイクラン

白き戦艦の廊下で、アークとティスが話していた。

ティス「アークよ。我らの主は変わったと思わないか？」

アーク「あーん、まあ俺らは封印されてたからな。俺は夜天の書に、お前はどっかのアステカの魔術師に、」

ティス「そうだったな。それより、誰か一人いたはずだ。我らの中に」

アーク「んー、だれだっけかな。全然覚えていないぜ。まあ、お前の勘違いだろ」

ティス（アークは確実に忘れている。だが、何故だ。何故我の頭の中に誰とも知らない女がいる。）

玉座の間

オールドレイク「一週間後、破滅の狼煙をあげよう」

フィアンマ「ようやくだね。楽しみだよ。本当に……」

交差する中、何かが起ころうとしていた。そして、当麻は……

## 第72話 破滅の狼煙

### 第72話 破滅の狼煙

一週間後、公開意見陳述会。地上本部、本局、各世界の代表が意見交換する会。それが今日、地上本部で行われる。はやて率いる機動六課は、地上本部の警備に行く事になり、そして、怪我が軽傷なナンバーズのメンバーも一緒に行くことになった。

なのは「それじゃあ、みんな大丈夫かな？」

なのはが入り口で集まるメンバーに話しかける。だが、何故か空気がおかしい。

ノーヴェ「それにしても、何で私達が、」

スバル「いいじゃん。みんなで仲良くやろうよ」

セイン「つつても、前は敵同士だったのに、今度は協力していくのは難しいと思うよ。隊長さん」

なのは「まあ、そうだね。せっかくだからいい機会だと思ったんだけど、」

チンク「そうだぞ。多めに見てもらったんだ。少しぐらいは我慢しろ」

チンクがナンバーズをまとめる。すると、近くにいたティアナがあ



ることに気がついた。

ティアナ「所で、あんたら戦闘機人なのよね」

セイン「ん、そうだよ。」

スバル「じゃあ、私達の姉妹になるね。ギン姉」

ギンガ「そうね、家族が増えたわね。」

ノーヴェ「何であんたらはこんな時にそんな事を考えられるかが不思議だよ。」

キャロ「あの、なのはさん。上条さんは？」

なのは「ん、治療は上手く行ったみたいだけど、まだ眠ったままだつて、これ以上、当麻さんに無茶はさせたくないからね。みんな頑張る」

そう、当麻はまだ眠ったままだった。土御門、五和、建宮はまだ調べることがあるらしく元の世界に戻った。美琴や黒子はすでに配置についており、ここにはいない。インデックスや姫神、佐天は病院で待機している。スターはこの前の戦いで、心にひどくダメージを受けて治療をうけていた。

なのは「それじゃあ、皆お願いね。」

病室

病室では、佐天と姫神とインデックスとヴィヴィオと一緒に当麻の様子を見ていた。

インデックス「それにしても、よかったね。とうまが治って」

佐天「そうですね。一時はどうなることだか」

姫神「ええ、」

ヴィヴィオ「当麻お兄ちゃんはまだ起きないの？」

姫神「まだ起きるのに時間が掛かるって、言ってたから、起きるのを待ちましよう」

ヴィヴィオ「うん、」

地上本部から遠く離れた場所に四つの影があった。それは、右からアーク、ティス、オールドレイク、フィアンマだった。

オールドレイク「さて、始めようか。破滅の狼煙を」

アーク「ぎゃははははは、壊しがいがあるぜ」

フィアンマ「さて、始めようか。」

ティス「切り捨てる。」

夕刻を過ぎ、月が輝く夜。

地上本部で行われてる公開意見陳述会も、そろそろ終わろうとしていた。フェイトとなのはは、地上本部周辺を飛んで見回っていた。それぞれ見回りを終えて、二人は合流した。

なのは「こっちは異常なし。フェイトちゃんの方は？」

フェイト「こっちも異常なし」

互いに報告を済ませる。

なのは「もうすぐ会も終わるし、今日は何も起こらないのかな？」

怪訝な顔でなのはが言う。フェイトは胸騒ぎがしていた。今のところ何も起きていないが、何だか嵐の前の静けさのようで怖い。

なのは「フェイトちゃん」

フェイトが不安に思っていると、なのはが声をかけた。なのはは、地上本部から少し離れたビルの屋上を指差している。フェイトは指差している先を見た。ビルの屋上に誰かがいる。

二人がビルの屋上に向かうとそこには赤いスーツに赤い髪の男が不

気味に笑っていた。

フィアンマ「はじめましてだ。」

なのは「あ、あなたは？」

フィアンマ「ようこそ、ここは最高の観客席だぜ。高町なのは、フ  
エイト・テストロッサ」

フェイト「まさか、ヴァイクランの一人？」

フィアンマ「ヴァイクラン？違うぜ。俺は神の右席が一人、右方の  
フィアンマだ。さあ、見物してこうぜ。破滅へのプロローグを」

## 第73話 絶対なる力

### 第73話 絶対なる力

なのはとフェイトはフィアンマと対峙していた。なのはとフェイトはデバイスを構えるが、フィアンマはただ笑うだけだった。

フィアンマ「そんな物騒なものは観客席に必要ないぜ。」

フィアンマの後方から不気味な波動を受け、なのは達は身動きが取れなくなった。

なのは（何？この感じは）

フェイト（この不気味な感じ。当麻の右手と……）

フィアンマ「ちなみに、このビルの屋上は俺の術式の一つだ。俺に敵意を向けると動けなくなるぜ」

なのは「そ、そんな。」

フィアンマ「さあ、プロローグの始まりだ」

地上本部の会議室。

公開意見陳述会が終わろうとした時、事件が起こった。地上本部の全ての明かりが消え、機能が停止したのだ。会議室は真っ暗闇にな

り、会に集まった群衆はパニックになる。

レジアス「どうした？何事だ？」

レジアスが大声で叫んだ。一人の局員がレジアスに近寄った。

局員「何者かが、地上本部の中枢システムを破壊したみたいです」

レジアス「何だと？一体誰が！？」

報告を聞いて、レジアスは声を荒げた。混乱の中、はやてとシグナムは、カリムとシャツハと合流した。

カリム「はやて」

はやて「どうやら、始まったみたいや」

はやては険しい表情をした。会議室を出ようと、何人かで扉を押すが開く気配はない。はやて達は、完全に会議室に閉じ込められてしまった。すると、会議室の天井が白い閃光に飲み込まれ、見事に無くなった。そして、上から白い髪の青年が降りてくる。

オールドレイク「さあ、始めようか。狼煙を」

レジアス「き、貴様、何ものだ。」

レジアスがオールドレイクに向かって怒声を上げた瞬間、レジアスの姿が一瞬にして消された。

はやて「な、何が……」

オールドレイク「うるさい。狼煙の邪魔をするな。」

アックアと神裂は一緒に警備をしていた。だが、突然現れたティスと戦っていた。

ティス「さあ、この間の続きだ」

アックア「貴様、まさか、我らの足止めを」

アックアと神裂は地上本部の爆発を見逃していなかった。ティスは素早く刀を振る。

ティス「そのとおりだ。しばらく楽しんでもらうぞ。私との舞芸」

アーク「かつは、レリックの回収とかめんどくせえな。なあ、麦野」

麦野「はん、たまたまあっただけのに何でお前らの手伝いを」

アーク「いいじゃねえか。派手にやろうぜ。」

アークと麦野の砲撃が六課の宿舎を破壊し始めた。

地上本部の周辺では、局員と怪物が戦っていた。

スバル「うおおおおお！！」

スバルとノーヴェが、同時に拳を怪物に放った。肉が潰れ、骨が碎ける音と共に、怪物は吹き飛んだ

ティアナ「クロスファイヤー」

美琴「はああああああああ」

ティアナと美琴が同時に、砲撃を放つ。すると、怪物は見事に吹き飛んだ。

黒子「数が多すぎますわ。」

セイン「さ、すぐに、きついね。」

チンク「あ、諦めるな。」

エリオ「そうですね。ここを止めないと」

キャラは『竜魂召喚』によって、フリードを本来の姿に戻した。フリードは巨大な竜となり、火炎砲で怪物達を焼き払う。

キャラ「でも、何か本部に入ろうとしてるのではなくって、足止めを……」



リイン「まさか、大変です。六課が」

突然リインが驚きの声を上げた。

スバル「どうしたんですか？」

スバルが尋ねた。

リイン「今、連絡があつて、機動六課にアークが現れたです！」

スバル「えっ!？」

スバル達は驚愕した。

美琴「やられた。こいつらは私達の足止めを」

黒子「早くなんとかしないと」

エリオ「とりあえず、僕とキャロで先に行きます。」

ティアナ「任せたわよ」

フィアンマ「あっははははは、これはいい。どうだ。お前らが守ろうとしたものが壊れていくのは」

なのは「くっ、」

フェイト「な、なにもできないなんて」

フィアンマが上機嫌に笑い、なのは達はただくやしがることしか出来なかった。

フィアンマ「さあ、プロローグは終焉だ。よく見ておけ。世界が壊される瞬間を」

はやては気を失っていた、目覚めるとそこは会議室の跡がなく、ただの廃墟に変わりつつあった。

はやて「これは……」

シグナム「気がつかれましたか。主」

シグナムが右肩を抑えながら、はやてのそばに寄った。

はやて「一体、なにが？カリムは？シャツハ？」

シグナム「無事ですが、まだおきません。」

はやてが上を見ると、そこには、オールドレイクが魔法陣を展開していた。

はやて「何、するつもりや」

オールドレイク「プロローグは終わり、破滅のシナリオは今始まる。来い。ヴァイクラン」



エリオは怒鳴りながら、アークに向かって走り出した。

キャロ「エリオ君!!」

キャロが叫ぶが、エリオは止まらない。

エリオ「ストラーダ!!」

ストラーダの出力を全力全開に、アークに向かって突進する。

アーク「馬鹿が」

小さくアークは呟いた。するとエリオの視界から、アークが消えた。

エリオ「!?!」

アークの姿が消えて、エリオは動揺する。次の瞬間、頭に強い衝撃を受けた。気付いた時には、顔は地面にめり込み、ストラーダは手から離れていた。

アーク「自分の力量を考えて挑め。」

上からアークの声が聞こえた。アークはエリオの頭上に移動し、拳をエリオの頭目掛けて振り下ろしたのだ。エリオは意識を失った。アークは拳を頭から離し、エリオから離れた。

キャロ「……どうして……?」

アーク「ん?」

小さな声が聞こえ、アークは振り返った。キャラは顔を俯き、固く拳を握っている。

キャラ「…どうして…こんな事するんですか…？」

手に付けているグローブ型デバイス『ケリユケイオン』が光る。

アーク「悪いな。アイツが望んだことだ。俺のしたくねえ。けど、俺は悪者だ。」

キャラ「…貴方の事は…よく知りませんが…でも…貴方が心の底からの悪人には思えません！」

「ふざけんな。てめえは節穴か。俺は悪だ。悪魔だ。だから、全てを破壊する…！」

アークが声を荒げて叫んだ。キャラはビクリと体を震わせた。だが一歩も引き下がらない。

キャラ「…お願いします」

瞳から涙が流れる。ケリユケイオンの輝きが強くなる。

キャラ「私達の居場所を…壊さないでエエエエ…！」

キャラの叫び声と共に、足元と背後にピンク色の魔法陣が展開された。

キャラ「『竜騎召喚・ヴォルテール…！』」

背後の巨大魔法陣から、巨体の竜が召喚された。姿は人型で”竜”  
と言うより”竜人”である。紅い炎を纏い、空に向かって雄叫びを  
上げる。

アーク「バカヤロウが、ここで……終わるか」

アークの体は見る見るうちに変わっていき、禍々しい姿に代わり、  
ヴァルテールを吹き飛ばした。そして、キャロの首をつかんだ。

キャロ「がは、」

アーク「もういい。死ねよ。お前を見てるとアイツを……」

アークがキャロの首を折ろうとした瞬間、右目に激痛が走った。見  
るとそこには、浜面、滝壺、絹旗、そして何故か麦野が一緒にいた。

アーク「おいおい、何だよ。あっさりそっちに行くのか？」

麦野「悪いね。この馬鹿が色々とうるさいから、殺す気もなくなっ  
ちまったんだよ」

アーク「かははは、やっぱりいい女だ。いいぜ。次は決着をつけよ  
うぜ。あと、このお嬢さんに言っといてくれ。悪かったって」



## 第74話 悪夢が終わり、目覚めた少年

第74話 悪夢が終わり、目覚めた少年

当麻は目覚めると、そこはどこかの病室だった。

当麻（そうか、俺は、負けたんだ。あれからどれくらいだ？）

当麻は学生服に着替えると、カエル面の医者が入ってきた。

冥土帰し「おや、目覚めたかね」

当麻「あれ？何であんたが……」

冥土帰し「君はどこでも病院にやっかいになるんだね。僕は出張だよ。どれ、彼女たちを呼んでくるよ」

冥土帰しが一旦部屋を出て、しばらくしてからインデックス、佐天、ヴィヴィオ、姫神が入ってきた。

インデックス「当麻、起きたんだ」

当麻「よお、悪かったな。」

佐天「いえ、私たちは大丈夫ですけど、ちょっと色々と合って」

当麻「色々？俺ってどれくらい寝てたんだ？」

姫神「……一週間」



当麻「まじかよ。くそ、寝過ぎた。」

ヴィヴィオ「そんな事よりも、皆が……」

当麻は四人に連れられ、六課に向かった。六課は見事に廃墟と化していた。すると、浜面が当麻に気がついた。

浜面「お前、起きたんだ。」

当麻「おう、まだ体が痛いけどな。てか、一体何が、なんか滝壺の近くに禍々しい女の人か」

麦野「ふーん、あんたが噂の幻想殺しか。へー、殺していいか？」

当麻「何、人を見るや殺す発言？浜面、どういう関係だ」

浜面「なんつつか、仲間だよ。」

絹旗「まあ、超苦労しましたけど、それよりも、事態はひどいことになってますよ」

当麻は絹旗から状況を聞かされた。オルドレイクたちが地上本部と六課を破壊し、白い船に乗って、ある次元の世界に飛んだと

当麻「くそ、寝ている間に勝手に進めやがって、なのは達は？」

滝壺「自己処理とか、色々とやってる。でも、結構つらそうだった」

当麻「そうか、」

エリオ「う、うう、」

キャロ「エリオ君」

スバル「ここまでひどい傷を……」

ティアナ「やっぱり強すぎる。」

フォワードメンバーはエリオのお見舞いに着ていた。エリオの傷はかなりひどく、さっき治療を終えたばかりだった。

キャロ「私、守れなかった。皆の居場所を……」

当麻「だけど、お前はまだ諦めてないんだろ」

病室に当麻とインデックスが入ってきた。三人は目覚めた当麻を見て驚いていた。

スバル「だ、大丈夫なんですか？」

当麻「まあな。今は皆の様子を見に来ただけど、やっぱりな。」

ティアナ「私とスバルは足止めくらって、エリオとキャロはアークにやられたんです」

当麻「だけど、まだ諦めてないんだろ」

キャロ「え、はい。」

当麻「なら大丈夫だな。泣く前にまずはやるべきことがあるだろ」

キャロ「はい」

次に当麻が向かった場所は、はやての場所だった。

はやて「とうまさん、大丈夫なん？」

当麻「ああ、何とかな。」

はやての腕を見ると包帯が巻かれていた。

はやて「私、負けちゃったんやね。でも、まだやれることがある。」

当麻「やれること？」

はやて「今、シャーリーがああ戦艦の行方を探してるんや。あれも魔力でうごくんや、ならそれをたどれば、」

当麻「奴らの場所にたどり着くか。」

はやて「せや、」

最後に当麻が向かったのは、フェイトとなのは場所だったが、見つからなかった。しばらく探しているうちに、夜になり、帰ろうとしたとき、病院の裏に二人がいた。

当麻「二人とも、」

当麻が声をかけると、二人は涙を流していた。

なのは「と、当麻さん。起きたんだ」

フェイト「ケガは？」

当麻「大丈夫だ。お前らは……………」

なのは「私達、何も出来なかった。街がみんなが傷つくのを見ていただけだった」

フェイト「当麻に迷惑を掛けたくないって思ってたんだけど、駄目だった」

当麻「そうか、何も出来なかったから悔しかったんだな。だったら、」

当麻は二人の頭を右手でなでる。そして、笑顔で言う

当麻「お前ら二人の悲しと悔しさという幻想は、ブツ殺した」

当麻がそう言うと、二人はつい、笑ってしまった。

フェイト「当麻、何か似合わないよ」

なのは「うん、でも、もう大丈夫だよ。ありがとうね」

二人が笑っている中、当麻は思った。

当麻（休み過ぎた。人が眠っている間に色々とやってくれたみたいだけだな。この借りはきっちり返してやるよ。オールドレイク』

## 第75話 あるお伽話

第75話 あるお伽話

イギリス

オルソラとシェリーの二人が書庫整理をしていた。すると、シェリーがある絵本を見つけた

シェリー「なんだこれ？絵本？」

オルソラ「あら、懐かしい。」

オルソラがシェリーが見つけた絵本を見て、懐かしさに浸る。

シェリー「ローマの絵本か。」

オルソラ「ええ、子供の頃よく読みました。どんな話が聞かせますね」

シェリー「いや、いいから、早く書庫の整理を……」

オルソラ「これは、昔の話」

シェリー「聞いちゃいねえよ」

シェリーの言葉を無視して話し出すオルソラ。

昔、ある所に一人の魔術師がいました。その魔術師は大変強く、街から英雄と呼ばれるほどでした。けど、魔術師の悪い人が悪者にさらわれてしまい、魔術師は探し、その悪者を見つけ倒そうとしましたが、返り討ちに合ってしまった。彼は、強くなるために自らが編み出したいくつもの世界を渡り歩く魔術を使い、天界の神からは全てを無にする魔法を、魔界の神から絶大な魔法を授かり、悪者を倒して、悪い人と結ばれました。

オルソラ「という話です」

シエリー「なんというか、お決まりだな。」

アニエーゼ「何してやがるのですか？てか、それは？」

赤い髪に三網の少女、アニエーゼが書庫に入ってくると、オルソラが持っていた絵本を見た。

アニエーゼ「こんな無理矢理ハッピーエンドにした物語私は嫌いです」

シエリー「無理やり？何だ元の話があるのか？」

アニエーゼ「ええ、これはローマ正教に実在した魔術師の話です。確かに、神から魔法を受け取ったけど、その悪い人は悪者に肉塊にされちまつたんです」

シエリー「そんな話がな。」

アニメーゼ「それにその魔術師はまだ生きているらしいっすけどね」

シエリー「へー、名前は？」

オルソラ「オルドレイク・ベルリッツ」

アニメーゼ（ただ、私が言った話にはまだ続きがあるらしいっすけどね）



## 第76話 決戦に向けて

### 第76話 決戦に向けて

六課メンバーはヴァイクランとの決戦に向けて、それぞれ特訓をしていた。

エリオは模擬戦をしている神裂とアックアとシグナムのところに来ていた。

アックア「小僧、何の用だ？」

アックアは闘いながら、エリオに話しかける。すると、エリオは土下座をした。

エリオ「お願いします。僕を鍛えてください。」

シグナム「エリオ、私達三人に頼むということは、死ぬ覚悟をしているのか？」

エリオ「はい、あの時、僕は何も出来なかった。護るものを守れずに、」

神裂「エリオ、お前に守るべき者は何だ？」

エリオ「六課のみんな、いや、仲間です。それにキヨロのことだっ

て守ってあげたかった。それなのに……」

エリオは悔しさで涙が出る。すると、アックアはエリオの頭を撫でた。

アックア「……騎士か。いいだろう。小僧、いや、エリオ。お前に全てを叩き込む。覚悟をしろ。俺達の訓練はきついぞ」

エリオ「はい、」

美琴「はあ、能力弾？なによそれ」

美琴とティアナはなのはに呼び出され、ある一室にいた。そこには、ナンバーズの一人のクアットロがいた。

クアットロ「ええ、貴方が使うその超能力っていうのが興味深いのよ。それに何度か戦いの様子を見てたけど、その能力を戦いに生かせる方法があるの、それが、能力弾魔法。」

なのは「私も、最初聞いたときは驚いたけど、結構いけるかもしれない。それに今回の戦いはすごい戦いになるかもしれないからね。やれることはやろうと思ってるの」

ティアナ「で、でも、そんな凄い魔法を私に……」

クアットロ「あら、射撃の腕は、家のディエッチちゃんに並ぶと思っけど、」

美琴「私も、賛成。ティアが使うならいいわ。」

ティアナ「……わかりました。」

なのは「それで、能力弾魔法は美琴さんの電撃だけなの？」

クアットロ「いいえ、麦野さんの力もありますし、絹旗さんのやつもありますわ。」

なのは「じゃあ、とりあえず、試射して治すところは直そう。ティア」

ティアナ「はい」

スバル「はあああああああ」

ギンガ「はあああああああ」

ノーヴェ「うおおおおおお」

スバル、ギンガ、ノーヴェの三人は一緒に特訓していた。その様子を一方通行、チンク、当麻、フェイトが見ていた。

当麻「精が出るな。」

フェイト「そうだね。みんな決戦まで頑張ってるから、当麻もやる？」

当麻「せっかく、治ったばっかりなのにまた怪我するからな」

チンク「そうだな。所で一方通行はやらないのか？」

一方通行「ちっ、やるわけねえよ。電池の無駄使いだ」

チンク「だが、ドクターの話では、チョーカーの充電はかなり伸びたらしいが」

一方通行「それでもやらねえよ。」

その時、スバルのデイバインバスターが一方通行に直撃し、反射した。反射したのをスバルは避ける

スバル「凄い、本当に反射した」

一方通行「おまえ、いい度胸だ。遊んでやる」

ウイングロードにのり、戦い始める一方通行。それをみて、当麻は一言

当麻「ノリノリだな」

キャロ「ルーちゃん行くよ」

ルーテシア「ええ、」

キャロとルーテシアの二人ははやて、シャマルに魔法を教えるもら

っていた

シヤマル「バックアップはチームの支えになるから、二人とも、ガリユーとフリードの動きをよく見てね」

フリードは元の姿に戻り、ガリユーとともにはやてと戦っている。

はやて「そや、相手が広範囲の魔法を使うときに気をつけるときはなんや、キャロ」

キャロ「はい、範囲を予想してみんなに知らせるですか？」

はやて「そんなところや、キャロとルーちゃんはみんなの支えになつてあげないかんよ」

リインフォース「無茶しすぎです。スター」

リイン「そうですよ。体がもちません。」

スター「わかっています。けど、私も彼に大きな力がありますから」

三人はスカリエツティのアジト跡で特訓をしていた。スターの場合、当麻がやられてからずっとだ。さすがの二人も心配していた。

スター「急いであれを完成させなければ……」



## 第77話 始まる最後の戦い

六課が破壊され、はやて達は新たな拠点をアースラに移した。アースラは数多くの戦いで既に限界が近く、壊される予定だったが、クロノがはやて達のためにわざわざ取り寄せたのだ。そして、ナンバーズ・学園都市組・六課メンバーがある部屋に集まっていた。

はやて「みんな、ケガも十分に完治したみたいやな。」

はやてが全員の様子を見ていう。この前の戦いでの傷は全員完治している。だが、この場にはスターがいない。まだスターは特訓を続けていた。その様子を浜面・滝壺・ヴィヴィオ・佐天・姫神はその様子を見ていた。

アックア「それで、ヴァイクランの拠点は発見できたのか？」

アックアが質問するとはやては首を振った。

はやて「シャーリーたちが必死に探してるんやけど、まだ発見できてないんや。」

一方通行「チツ、奴らの場所が分からないんならまだ動けねえな」

ティアナ「確かに、あれほどの巨大な戦艦に乗っているなら直ぐに見つかりそうですけど、」

全員が悩む。するとインデックスがあることに気がついた。

インデックス「ねえ、ヴァイクランの狙いって、わたしたちの世界

の破壊。というよりすべての次元の破壊だよね。なら、もうこの世界にいないんじゃないか……」

フェイト「確かに、奴らはシャーリーの索敵から見つからないのはおかしい。もしかして、奴らは……」

チンク「すでに上条達の世界にいつてる可能性が……」

はやて「なら、今すぐに、向かうぞ」

一方通行「どーやってだ。装置でいくのは無理があるぞ」

シャーリー「部隊長。月に空間歪曲が」

当麻「あれがそうかもな。」

はやて「じゃあ、突撃や」

## 学園都市

突然空が真っ二つに割れ始めた。その様子を土御門は見ていた。

土御門「まさか、奴らがここに来るとは、」

土御門の隣には、海原と結標がいた。二人も今の状況に驚いていた。



結標「何よ。あれ？」

海原「魔術？いやそれと別の力がありますね。」

土御門「そうだ。ありゃ、危険すぎる。何とかしないと……………」

その時、白い戦艦のすぐとなり別な戦艦が現れた。それはアースラだった。

アルト「次元転移成功です。」

はやて「よし、私たちは直ぐにあの戦艦に乗り込む。みんな準備ええか？」

アースラはヴァイクランに突撃し、むりやり内部に乗り込んだ。

オールドレイク「来たか。」

フィアンマ「まだ諦めてないんだね。」

ティス「主、我ら二人の力の開放の許可を」

オールドレイク「いいだろう。全力受けようか。」

今、戦いが始まった。

## 第78話 四つの戦い

ヴァイクラン内部

当麻達は長い廊下を駆けていく。内部に入ってから敵や罠とは出会っていない。

チンク「妙ですね。普通なら敵が出てきそうですが、」

ウエンディ「あいつらケチツたかツスカね。」

トーレ「いや、何か考えがあるんだと思うぞ」

なのは「そうだね。そろそろ出てきてもいいかもね。」

当麻「所で、インデックス。お前、待っててもいいのに、何で付いて来たんだよ」

インデックス「私も全部見てみたいんだもん。それに……」

その時、銀色のオーロラが現れ、当麻たちを包んだ。

シグナム・アックア・神裂・セツテ・トーレ・黒子・ティアナ・リン・ウエンディは和風な感じの部屋に飛ばされた。

シグナム「ここは、」

神裂「どうやら、分断されたみたいですね」

アックア「オルドレイクの罠か」

セツテ「……………」

トーレ「どうやら、敵がいるな。」

ティス「来たか。決着をつけようか。」

エリオ・キャロ・ルーテシア・ガリユー・フリード・美琴・麦野・  
一方通行・オットー・デイド・ヴィータは巨大な空間に移動され  
ていた。そして、目の前にはアークがいた。

アーク「さて、始めようぜ。殺し合いを」

なのは・フェイト・はやて・セイン・ノーヴェ・絹旗・スバル・ギ  
ンガ・シャマル・ザフィーラ・リインフォース・チンクは協会のよ  
うな空間に飛ばされていた。そして、片手に不思議な形をした杖を  
持つファイアンマがいた。

ファイアンマ「今度はちゃんと相手してやるよ。魔道士」

なのは「フィアンマ」

そして、当麻とインデックスは気がついたときには、ヴァイクランのエンジンルームにいた。そして、その玉座に座るのはオルドレイク

当麻「オルドレイク。みんなをどこに行かせた。」

オルドレイク「私の仲間が相手している。さあ、始めようか。殺し合いを」

インデックス「とうま」

当麻「下がってる。インデックス。こいつは俺がやる」

オルドレイク「来い。幻想殺し」

## 第79話 ティス 前編

ティス「行くぞ。鬼神斬」

ティスが刀を振り上げる。その瞬間、ティアナとウエンデイが後方からティスを攻撃し、攻撃を邪魔する。

ティス「ちっ、」

そして、黒子が鉄棒でティスの動きを封じ、トーレとセツテが接近しティスに攻撃しようとした。だが、ティスが右手で受け止める

ティス「この程度で勝てると思って……」

アックア「いない。だが、うおおおおおおおおお」

神裂「七閃」

シグナム「飛竜一閃」

三人の攻撃がティスを襲う。ティスは動きを封じられ、避けることが出来ず、さらに腕を抑えられ防御も出来なかった。だが、背中から二本の腕が生え攻撃を封じた。

シグナム「何!!」

ティス「私の腕が貴様らと同じ二本だと思うな。これが5割の力だ。  
鬼神剣奥義 『鬼神四連斬』」

四つの斬撃が飛ばされ、8人が吹き飛ばされた。

ティアナ「強い。」

アックア「さすがは、鬼神殺し。だが、」

神裂「私達も負けん。」

シグナム「リイン。行くぞ」

リイン「はい。」

シグナムとリインがユニゾンし、さらに強さを増す。そして、ティアナたちも準備をした。

ティアナ「一撃で決めるわよ。まずアイツの動きを……………」

黒子「簡単ですわ。」

黒子が瞬間移動し、ティスに近づく。だが、ティスは黒子が転移した瞬間、黒子の肩を斬りつけた。

黒子「ぐう」

ティス「甘い。お前のはただの移動。その程度読める。」

トーレ「白井を守れ。」

ウエンディ「了解っす」

ティス「奥義、『血縛陣』」

ティスが刀を突き刺すとそこから血のような沼が現れ、黒子以外のメンバーの動きを封じた。

神裂「これは……」

ティス「血の海に沈め。」

ティスはさらに体の中から三本の刀を取り出す。そして、黒子に向けた。

ティス「貴様を封じれば、あとは容易い。真つ向勝負では我に勝てない。」

黒子「……………私の能力は、テレポート。」

ティス「それがどうした？」

ティスは黒子を見つめる。黒子はただ淡々に喋る。

黒子「私の場合。遠くにあるものは飛ばせませんの。」

ティス「もういい。死ね。」

ティスは四本の刀を振り落とす。黒子は……………

黒子「直接、触れなければ飛ばせない。それが理解できました？」

黒子は四本の刀をそのまま、体で受ける。だが、体を貫いた刀を引



き抜こうとした瞬間、黒子は四本の刀を、地面の中に移動させた。

ティス「何!!」

黒子「こ、これで、あなたの……攻撃は……ふせぎましたの……  
あとは……」

ティアナ「行くわよ。能力弾セット。クロスサンダー」

六つの雷撃の魔力弾がティスを襲う。魔力弾の威力は美琴のレールガンと同じ威力。防ぐすべを失ったティスは避けようとしたが、刀を地面に埋め込まれた瞬間、黒子に足を地面に埋め込まれていた。

ティス「き、貴様……」

ティスはそのまま直撃を受ける。そして、

アックア「うおおおおおおおおおおおおおお」

神裂「唯閃」

シグナム「紫電一閃」

三人の斬撃を受ける。

## 第80話 テイス 後編

神裂・アツクア・シグナムの三人の斬撃を受けたテイスは、血を吹き出し、黒子が足を埋めたせいで、倒れることも出来なかった。

テイス（ここ、までか。まさ、か……………だが、まだ、勝つ可能性はある。）

テイスは残された力を解放しようとしたが……………脳裏にある言葉が思い浮かんだ。それは……………

（だめだよ。その力使っちゃ、）

テイス「あ、あなたは……………アリス。」

約60年前

テイス「ぐは」

オルドレイク「鬼神の魂が扱えてないか。」

日本のある場所でテイスとオルドレイクは戦っていた。だが、オルドレイクの前では、テイスはただやられるだけだった。

テイス「殺せ。俺みたいな奴は死んだほうがいい。」

ティスは血だらけになりながら、オールドレイクに向かっていこうとした。だが、少し離れた場所から一人の少女がいた。それは、髪が真っ白で、服も真っ白の、穢れを知らない天使のような少女だった。

アリス「やり過ぎですよ。オールドレイク。」

オールドレイク「アリス。後は任せる。」

アリス「もう、えっと、ティスでしたっけ。今からあなたの中にある鬼神の力を少しばかり封じます。ついでに傷も」

ティス「お前、怖くないのか？それに敵である私を助けるのか？」

アリス「だって、困ってるじゃないですか。もう鬼神の力は使ってはダメよ。」

634

シグナム「目覚めたか。」

ティスが目覚めると、体の痛みも消えていた。そして目の前にはさつきまで戦っていたメンバーがいた。

ティス「……………誰が体を……………」

リイン「私です。応急処置ですが、死ぬことはないですよ。」

黒子「さすがに、まだ体が痛いですけど、」

ティス「ふっ、私の負けだ。殺せ。」

アックア「……死ぬ必要はない。」

ティス「どういう事だ。」

トーレ「お前の命をどうにかするのを決めるのは、私達だ。だから、お前は生きて罪を償え」

そう言い残し、戦ったメンバーは先に進んだ。ティスの眼からは涙がこぼれていた。

ティス（私は、やり直せる。なら、最初にすべき償いは………）」

635

アーク「ぎゃははははは、楽しもうぜ。戦いを」

アークは巨大な爪で、美琴達に襲いかかる。何とか避け、ヴィータとエリオが反撃に出る。

ヴィータ「ちっ、固いな」

エリオ「並の攻撃では太刀打ちが出来ません。」

麦野「なら、これでどうだ。」

麦野がアークに向けて、原子の光線を放つ。だが、アークは片手でそれを受けきる。

ルーテシア「… 強い。」

アーク「もっと楽しもうぜ。なあ、魔道士」

## 第81話 アーク 前編

アークと戦っているエリオ・キャロ・ルーテシア・ガリユー・フリード・美琴・麦野・一方通行・オットー・デイド・ヴィータは、いくら攻撃しても傷ひとつ付かないアークに苦戦していた。

オットー「……これは、まずいですね」

デイド「……硬いにも程があります。」

アーク「もっと、楽しもうぜ。アークブレイク。」

アークは左手から強力な魔砲を放った。だが、その魔砲を一方通行が反射した。

一方通行「こっちの攻撃が効かネエなら、テメエの攻撃はどうだ？」

反射した魔砲を食らったアークだが、見事に無傷だった。

アーク「くだらねえ、自分の魔法でくたばる奴がどこにいる。」

一方通行（チツ、残り時間は1分。急いでこいつを仕留めねえと、動けなくなっちまう。）

エリオ「どうすれば、」

一方通行「どいてる。こいつは、俺が殺す」

一方通行が前に出て、アークと対峙しようとした。だが、その前に

美琴と麦野が出た。

麦野「調子にのってんじゃねえよ。第1位様。」

美琴「こんな奴、私だけで、十分よ。」

麦野「はあ、第3位が減らず口を、こんなやつ、私だけで」

一方通行「テメエら、いいかげんにしろ。こんな奴、一瞬で終わらせる。黙って見てろ」

三人の喧嘩を見て、混乱するエリオ達。

エリオ「あの、ケンカするより、アークのほうが……」

キャロ「そうですよ。ここはみんなで力を合わせたほうが……」

三人「「「お前らは黙ってる」「」」

キャロ「は、はい。」

ルーテシア「こ、怖い。」

アーク「はん、誰が相手でも俺の足元に及ばねえよ。」

アークの発言を聞いて、三人が一斉に襲いかかった。

美琴「誰が誰の足元に及ばないですって、巫山戯んな」

美琴は高圧の電気をアークに食らわす。だが、アークはただ防ぐだ

けだった。

アーク「こんなの静電気……」

麦野「なら、原子はどうだ。」

麦野は粒機波形高速砲を連続して放つ。だが、アークは防ぐだけだった。

アーク「いくらやっても、この体を傷付けるのは………ん、あの白髪がいねえ。」

一方通行「テメエは間抜けか。」

アークの真正面に立つ一方通行、そして、跳び上がりアークの口に手をつっ込んだ。

アーク「て、てみえ、にやにするちゅもりだあ」

一方通行「俺の能力はベクトル変化、どんなものだってベクトルの向きを変えることが出来んだよ。ちの流れだってな。」

アーク「そ、そりえがどうした。………まさか、」

アークは一方通行の狙いに気が付き、一方通行の腕を噛み砕こうとした。だが、

一方通行「おせえんだよ。」

一方通行はアークの血の流れを変えた。同時にアークは狂い悶えた。



アーク「ぎゃあああああああああああああああ」

ヴィータ「まさか、お前らこれを……」

美琴「まあね、」

麦野「ただあの第1位様が乗るか分からなかったけどな。だが、これで、」

一方通行「そうだ、これで……」

一方通行は勝利を確信した。だが、突然体の力が抜け始めた。

一方通行（こ、これは、時間切れ）

力が弱まったのに気が付き、アークは一方通行を引き剥がし、魔砲を当てた。

一方通行「が、がは、」

アーク「アブねえ所だったぜ。だが、もう終わりだ。」

アークが一方通行を踏み潰そうと足をあげる。だが、キャロとルーテシアがヴァルテールと白天王を召喚し、助けに入った。

キャロ「ヴァルテール」

ルーテシア「白天王、あの人を」

アーク「デケエよ。だが、」

アークは口から巨大な光線を放ち、二体の龍を倒す。

エリオ「させるか、はあああああああ」

エリオがさらに突撃した。だが、アークに捕まった。

アーク「うぜえよ。潰すぞ。」

エリオ「うあああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああああ」

掴む手を強めるとエリオの叫び声が空間内に響いた。

キャロ「え、エリオくん」

ヴィータ「てめえら、はやくエリオを……」

必死の止めるが、アークは微動だにしない。

一方通行（な、なにがおこってる。さ、さけび、うるせえよ。つー  
か、こんなバケモンに負けるのかよ………ふざけんな）

アーク「潰れちまえ、」

アークがエリオを本気で潰そうと力を込めようとした瞬間、突然、  
エリオの姿が消えた。それを見て、全員が驚く。

キャロ「な、なにが」

オットー「これは、白井さんの能力？」

美琴「ちがう。黒子は直接掴まないと、それにこの能力は……………」

????「あら、取り込み中かしら」

????「いえ、丁度良かったみたいですね。」

????「そうだな。一方通行が丁度良く寝てるしな」

奥のほうにいたのは、倒れているエリオと、真っ赤な髪をした少女と優しい顔つきをして、手には黒いナイフを持った青年と土御門がいた。

麦野「あんたら、まさか、」

土御門「グループ全員集合だぜ」

## 第82話アーク 後編

突然現れた三人、少女はアークに向かっていく。

アーク「無謀だぜ。お嬢ちゃん」

結標「あんたみたいな化物にお嬢さんって言われても嬉しくないわよ。」

アーク「そうかい」

アークが魔砲を放つ。だが、なぜか、放った場所から、結標がいる前にいきなり移動されて、自分の魔砲を自分で喰らってしまう

アーク「がは、お前何しやがった。」

結標「別に、あんたを移動させただけよ。」

アーク「調子にのるなよ」

アークが結標を殴ろうとしたが、突然腕の皮膚が剥がされた。

海原「おや、本当なら腕を破壊するはずでしたが、失敗しましたね」

アーク「ぐ、ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお、死に、」

アークが咆哮し、両手で巨大な魔力球を貯め始めた。だが、一方通行が立ち上がり、その背中に真っ黒な翼が二枚生え始めた。



アークが目覚めると、キャロが必死に回復魔法をかけつつづけていた。周りにはエリオとフリードしかいない。どうやら、他の奴らは先に進んだみたいだ。

アーク「お前、何で」

キャロ「え、」

アーク「俺はお前の敵だ。治す必要はないぞ」

キャロ「死ぬのはダメですから、とりあえず、応急処置は終わりましたから、エリオくん」

エリオ「うん、」

アークは立ち去る二人と一匹を見送る。しばらくして、ティスが現れた。ティスの鎧がボロボロだった

アーク「よお、負けたのか？」

ティス「まあな、アリスのことを思い出した」

アーク「へえ、奇遇だな。おれもだ。あいつら見てると何か思い出す」

ティス「そうだな、俺はあの人を止める。アリスが望んだ世界はこれではない。」

アーク「しばらく待ってくれ。俺も回復する。」

なのは「はあ、はあ、」

フィアンマ「やっぱり仲間を行かせたのは間違いだったね。エースオブエース」

なのは「くう、ディバインバスター」

フィアンマ「マジックドレイン」

なのはのディバインバスターを放つが、フィアンマが持つ杖によって吸い込まれてしまった。

フィアンマ「同じことを何度繰り返すのさ、」

なのは「いつまでもよ。」

数分前

フィアンマと対峙するなのは・フェイト・はやて・セイン・ノーヴェ・絹旗・スバル・ギンガ・シャマル・ザフィーラ・リインフォース・チンク。だが、フィアンマの後ろに黒い空間が現れた。

フィアンマ「この空間は出口だ。別に俺様はお前らを止める必要もないからな。」

はやて「どろいっことや、あんたはオルドレイクの仲間じゃ、」

フィアンマ「別に、但し、一人だけ、残ってもらおうよ。さすがに全  
員行かせるのは悪いから」

絹旗「超ふざけてますね。ここは、私が」

なのは「ううん、私が残る。みんなは残って、」

フェイト「で、でも、」

なのは「大丈夫。私は大丈夫だよ。フェイトちゃん」

フィアンマ「決まりだね。じゃあ、始めよう。高町なのは。いや、  
エースオブエース」

こうして、なのはは一人フィアンマと戦っている。だが、「こちらの  
攻撃はすべてフィアンマに吸収されてしまう。

なのは（どうすれば……………危険な賭けだけど、やってみる価値は  
あるよね。だって……………）



### 第83話 プラスターモード

数日前

なのは・当麻・リインは一緒に話していた。

当麻「プラスターモード？なんだそりゃ、」

リイン「はいです。レイジングハートのエクシードモードを超えたモードです。」

なのは「あんまり使用は控えるようにしてるんだけど、今回はそうは行かないからね。」

なのははレイジングハートを握り締めながら言う。当麻はなのはの肩に触れた。

当麻「あんまり無茶するなよ。」

なのは「当麻さんだって、」

当麻「いや、俺の無茶は今に始まったことじゃないし、それにお前にはヴィヴィオがいるんだからな。」

なのは「あはは、そうだね。ねえ、当麻さん。この戦い終わったら……」

当麻「パツとパーティーでもするか。」

なのは（本当はデートが良かったのに、）

なのは「プラスターモード」

レイジングハートの形とともになのはのバリアジャケットが代った。

フィアンマ「ほう、まだ諦めてないか。」

なのは「スターライトブレイカー」

三方向からのスターライトブレイカーがフィアンマに襲いかかる。  
だが、フィアンマは

フィアンマ「甘いんだよ。マジックドレイン」

スターライトブレイカーさえ吸収してしまう。だが、なのはは諦めてなかった。

なのは「プラスター2」

さらに威力を強める。だが、マジックドレインは止まらない。なのはさらに、

なのは「プラスター3」

なのはの周りにビットが展開し、そこから魔砲が発射される。

フィアンマ「ぐぐぐぐぐぐぐ、この程度強めても、マジックドレインは……………」

フィアンマの杖にひびが入り、マジックドレインが止まりかけた。

なのは「これで……………終わりです。」

フィアンマの杖が破壊され、フィアンマはスターライトブレイカーに飲み込まれた。

なのは「はあ、はあ、さすがに疲れた。早く、皆のところ……………」

なのはが歩き出そうとした瞬間、後ろから衝撃波が襲った。

なのは「きゃあああああ」

後ろを振り向くと、そこには、無傷のフィアンマがいた。フィアンマの背中には赤い右手が生えていた。

フィアンマ「さすがに、オルドレイクが作った杖を破壊されたのは驚いたけど、まだ切り札は残しているんだよ。さあ、死んでもらおう」

フィアンマが赤い右手から攻撃しようとする。

なのは（や、やばい、体が……………みんなごめん）

赤い右手がなのはを襲おうとした瞬間、突然壁が壊され、青い戦艦

が突然現れ、そこから、ひとつの影が現れ、フィアンマを殴った。

フィアンマ「ぐうぐう」

なのは「だ、だれ？」

ヴィヴィオ「なのはママ、おまたせ。」

## 第84話 聖王

ピンチのなのはの前に現れたのは、成長したヴィヴィオだった。

ヴィヴィオ「大丈夫。ママ」

なのは「ヴい、ヴィヴィオ。どうして、それに、その姿は……」

戦艦から浜面・滝壺・姫神・佐天が降りてきた。さらに、スカリエツティ・クアットロ・ウーノまでもが降りてきた。

スカリエツティ「どうだい？ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオ「うん、だいぶいいよ」

なのは「スカリエツティ、これは……まさか、ヴィヴィオを無理やり」

ヴィヴィオ「違うよ。私が頼んだんだよ」

数時間前

ヴィヴィオは滝壺と一緒にスカリエツティの所へ尋ねた。

スカリエツティ「聖王の力を……」

ヴィヴィオ「はい、チンクから聞いたんですけど、私にはその聖王

のクローンだって、それに聖王の力も使えるって、今、なのはママや当麻お兄ちゃんが戦ってるのに私も戦いたいんです。」

スカリエッティ「だが、レリックもない。短期間でその力を使うのは……………」

滝壺「だったら、私がこの世界に来たときに拾ったこれじゃあ、ダメですか？」

そう言つて、滝壺が渡してきたのはレリックだった。

スカリエッティ「これは、奪われなかったのか？」

滝壺「うん、なんとかまもりきつた。」

スカリエッティ「……………激しい痛みがあるがそれを覚悟してるんだね」

ヴィヴィオ「はい、」

なのは「そうだったんだ。でも、」

ヴィヴィオ「なのはママ、あとでたくさん怒られるから、今は……………」

ヴィヴィオが構えると、フィアンマが起き上がった。

フィアンマ「聖王か。ふふ、面白い。だが、俺様の出番はもう終わりだな。」

フィアンマがそういつた瞬間、ヴァイクランが激しく揺れた。

なのは「これは……………」

フィアンマ「戦いは終局だ。又会うことがあったら会おうか」

オールドレイク「虚無。」

オールドレイクが虚無を放つが、当麻は右手で防ぎ、オールドレイクを殴った。

オールドレイク「ぐうっつ」

当麻「はあ、はあ、いくら魔術を撃とうが、右手の前では無効化だ。」

オールドレイク「くはははははははははは、やはり手加減は無理だな。次で終わらそう。来い神槍グングニル。全てを穿て」

インデックス「あ、あれは、神槍。何であんな物をあなたが、」

オールドレイク「神から授かった最強の槍。死ね。幻想殺し」

オールドレイクはグングニルを振ると、そこから光の光弾が放たれ、当麻を襲う。

当麻「ぐう、数が多すぎて防ぎきれない。」

当麻を光弾が包みこんでいく。

オールドレイク「これで終わりだ。」

オールドレイクはグングニルを当麻に向けて投げ、当麻の左肩に突き刺さった。

当麻「ぐあああああああ」

だが、当麻はグングニルを右手で触れ、体がボロボロになりながらもオールドレイクを殴りかかった。

オールドレイク「がは、なぜ、死なない」

当麻「死ぬかよ。人が寝てる間に勝手なことをしやがって、覚悟しろよ。」

今、最終決戦が始まる。



## 第85話 オルドレイクの最後

オルドレイクはさらに武器を取り出した。エクスカリバー・雷鎚ミ  
ヨルニル・ゲイボルグなどの伝説の武器で当麻を攻撃するが、すべ  
て当麻の右手に防がれる。

当麻「いくらやっても、無駄だ。」

オルドレイク「き、貴様、私は、世界を、全てを破壊する。デモン  
ズランス」

黒い槍がいくつも上空に現れ、当麻に襲いかかる。だが、当麻の後  
ろから紫色の魔砲が放たれ、デモンズランスを砕いていく。

オルドレイク「だれだ。」

そこにいたのは、なのはそっくりの少女だった。体も今のなのはそ  
っくりだった。当麻はその少女をみて、気がついた

当麻「す、スター」

スター「お待たせしました。今から反撃です。集え、紅星よ。全て  
を焼き消す焰となれ、我が魔導、全てを掛ける。エクセリオン・ブ  
レイカー」

オルドレイク「させるかあああああ、集え、闇の力よ。全ての命  
を奪う光となれ。今、闇が支配せん。ダークネス・インフィニティ・  
ブレイカー」

真っ黒な魔砲と紫色の魔砲がぶつかり合う。だが、スターのほうも若干押されている。

当麻「くそつたれ、」

当麻は今までの攻撃で体が思うように動かない。だが、何とか前に進んでいく。

スター「魔力が違いすぎる。このままでは」

オールドレイク「消え失せる。世界、奴が愛した世界はもういらなんだよ」

オールドレイクはさらに魔力を強める。だが、

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー」

はやて「響け終焉の笛、ラグナロク」

「「ブレイカーーーーーー」」

二つの魔砲がスターの魔砲を押し。

インデックス「みんな、」

フェイト「ごめん、遅くなった。」

はやて「みんな、全力で抑えるんや。」

セイン・ノーヴェ・絹旗・スバル・ギンガ・シャマル・ザフィーラ・  
リンフォース・チンクが出せる限りの力でオールドレイクの魔砲に  
迎え撃つ。

オールドレイク「屑がああああああああ、」

オールドレイクの叫びと同時に、オールドレイクの姿が変わっていった。  
背中には悪魔のような羽と天使のような羽がそれぞれ三枚ずつ生え、  
右腕は真っ白な腕に変わり、左腕は真っ赤な悪魔のような腕に変わ  
った。顔も悪魔のような、天使のような二つが織り交ざった姿に変  
わった。

オールドレイク「クイトメロ。ワガブンシン」

オールドレイクの体から、銀色の怪物が無数生まれた。その怪物は当  
麻以外の全員に襲いかかる。

スバル「この数じゃ、」

インデックス「きゃあああああああああ」

怪物がインデックスに襲いかかろうとした瞬間、炎の巨人が怪物を  
なぎ払った。振り向くとそこには赤髪の神父、ステイルがいた。

ステイル「どうやら、間に合ったみたいだね。」

インデックス「あなたは、」

ステイル「本当なら、様子見で手を貸そうと思ったけど、大切な人

を傷つけられるのは嫌だからね。」

イノケンティウスが怪物に襲いかかる。さらに、シグナム・アックア・神裂・セツテ・トーレ・黒子・ティアナ・リイン・ウエンディが現れ、怪物を倒していく。

神裂「はやて、フェイト、周りは任せろ。スターに力を……………」

はやて「まかせたで、」

フェイト「いくよ」

三人はさらに力を強める。だが、オールドレイクの腹部から二本の腕が生えてきた。

オールドレイク「寄せ集めの力でどうにか出来るか。集え、抹消の光よ。全てを包み込み光となれ、シャイニング・イレイザー」

今度は光の魔砲を放ち、さらに力を強める。そして、怪物が当麻にも襲いかかった。

「ガアアアアアアアアアア」

だが、後方から超電磁砲・原子・黒い翼が怪物を倒す。そこにはエリオ・キャロ・ルーテシア・ガリユール・フリード・美琴・麦野・一方通行・オットー・デイド・ヴィータ・土御門・結標・海原がいた。

キャロ「ヴァルテール」

ルーテシア「白天王」

二体の龍の力がオルドレイクの魔砲とぶつかり合う。さらには、

なのは「スターライトブレイカー」

ヴィヴィオ「デイバインバスター」

なのはたちも到着し、力を増す。だが、オルドレイクは

オルドレイク「光と闇。重なりし時、混沌が全てを支配する。混沌の世界に絶望しろ。カオス・エンド」

闇の魔砲と光の魔砲が混ざり、巨大な魔砲となり、スター達の魔砲を押ししていく。

スター「このままじゃ、」

全員が諦めていたとき、アークがオルドレイクの魔砲を喰い止める

キャロ「アークさん」

アーク「恩返しだ。直してくれてありがとうよ。お嬢ちゃん。オルドレイク、忘れちゃったのか」

オルドレイク「裏切るか、ならば死ね」

アークの体が見る見るうちにひび割れていく。

アーク「やっぱ、これ以上は………あとは任せたぞ。ティス」

ティス「鬼神鎧装。」

ティスの体は見る見るうちに真っ赤な鎧から、巨大な戦鬼に変わって行く。

ティス「鬼神剣・至極」

真っ赤な斬撃がオルドレイクの腕を斬りつける

オルドレイク「邪魔だアアアアアアアアアアアア」

オルドレイクの翼から無数の羽が襲いかかり、ティスは地面に落ちる

オルドレイク「世界よ。壊れる。我が支配する世界に変わっていけ。」

当麻「させるかよ。お前の目的が何か知らないが、まずはその幻想をぶち殺す」

オルドレイク「なに、」

当麻はオルドレイクのそばに近づき、オルドレイクの胸を右手で力のかぎり殴る。それと同時にオルドレイクの体が碎け散った。



## 第86話 崩れ落ちる戦艦

オールドレイクを殴り抜けると、当麻はそのまま倒れそうになった。だが、スターが当麻を支えた。

当麻「スター、何か姿変わってない？」

スター「一度限りの大魔法です。魔力を極限まで高め、敵に放つ魔法。そのせいか姿がこんなふうになります。直ぐに戻りますよ。ずっとこの魔法を会得するために頑張っていたんです。」

当麻「何だ、もったいねえ、」

スター「え、ま、まあ、この魔法のせいで成長速度は上がるので、直ぐに今の姿に………当麻は大人っぽい姿のほうがいいですか？」

当麻「ん、ま、まあな。」

スターは赤面しながら、顔を近づけようとする。だが、

なのは「ずるいよ。スターちゃん。」

フェイト「そうだよ。自分ばかり」

はやて「せや、キスするのは私や」

当麻「お前ら、何企んでるんだよ。くそ、こっちは動けないのに」

ヴィヴィオ「あはは、」



アックア「騒がしい。」

キャロ「だ、大丈夫ですか。アークさん」

アーク「あー、まあ、再生できるから何とかな。」

シグナム「テイス、お前は」

テイス「久しぶりに力を使った。しばらくは反動で動けないさ。」

美琴「黒子、あんたボロボロじゃない」

黒子「んー、お姉さまにくっついてれば治りますわ。」

全員が騒がしくしていると、突然戦艦が揺れ始めた。

はやて「これは」

土御門「こりゃ、戦艦が崩壊してきたにや」

当麻「とりあえず、はやく逃げようぜ」

オールドレイクは腕や体の一部がボロボロになりながら、立ち上がる  
オールドレイク「このままでは、終われん。直ぐに………」

オールドレイクが最後の魔力で魔法を放とうとした瞬間、真っ赤な閃光がオールドレイクの体を貫く、振り向くと、そこにはフィアンマがいた。

オールドレイク「ふい、フィアンマ」

フィアンマ「お前も終わりだな。まあ、色々と楽しめたし、最後まで  
らいは俺が止めさせてやる」

オールドレイク「貴様、まさか、あれの事を聞き出すために、」

フィアンマ「もう死人には用がないよ。じゃあな。老いぼれの魔術  
師。」

オールドレイク「きさまああああああああああああああああああ  
ああああああああああ」

フィアンマ「さてと、俺様も脱出するか。もうそして、あの船を復  
活でもさせるか。ふはははは、これからが楽しみだよ。上条当麻。  
今度はしっかりと決着を付ける。」

オールドレイクは薄れる意識の中二人の姿を浮かべた。

オールドレイク「あ……り……す。そ……が。」



第87話 終わった決戦。そして……

オルドレイクの戦いから数日後、オルドレイクが使っていた戦艦は消滅し、オルドレイクの亡骸を確認することは出来なかった。そして、全員して、入院し、今は六課の再建を手伝っていた。そんな中、当麻「はあ、キャラの召喚獣になりたいだつて」

アーク「ああ、まだ恩返しは終わってないしな。テイスはルー譲ちやんに頼み込んでるし、」

土御門「ぎゃはははは、お前みたいな強面のやつがいたら、キャラもないちまつからな」

アーク「ふざけんな。」

アークとテイスは罪を償うために、何かをしようとしていた。それにアークとテイスからはオルドレイクの事は聞き出せなかった。理由は自分たちにも分からないらしい。

三人で話していると、キャラが呼びに来た。

キャラ「あの、もうお昼にしようって、呼んでますけど、」

土御門「ほら、アーク」

アーク「嬢ちゃん。頼みがあんだ」

キャラ「何ですか？」

アーク「俺をお前の召喚獣にしてくれ。」

アークの頼みを聞くとキャラは………絶句していた

当麻「嫌われたか？」

キャラ「え、いや、その、アークさんみたいな凄い人を召喚獣に………」

土御門「一応人扱いなんだ。」

アーク「だ、大丈夫だ。俺はお前の居場所を守るからな。」

キャラ「じゃ、じゃあ、その、お願いしますね」

当麻「すげえ、アークを召喚獣に」

土御門「やったな。アーク」

アーク「ああ、ん、エリオ」

アークが木の後ろに隠れるエリオを発見した。エリオはそそくさと出てきて、キャラの手を掴み

エリオ「キャラ、僕と付き合ってください」

告白した。

キャラ「え、え、そ、そのいいの？」

エリオ「僕はキャラのことが好きなんだ。」

とりあえず、三人は邪魔をしないように二人から離れた。

弁当を食べていると土御門に聞かれた。

土御門「なあ、かみちゃん」

当麻「なんだよ。」

土御門「結局誰に決めただ？」

当麻「何を？」

土御門「ん、恋人を、ごは、」

土御門が言った瞬間、当麻は殴る。ある程度殴り終え、当麻は考えこんだ。

当麻（いい加減決めないと、俺の命が危ないからな。つっても、決まってるし、）



**最終話** これからもよろしく(前書き)

六甲水「ついに最終回です。長かった」

当麻「そうだな。全88話とか長すぎだろ」

六甲水「果たして当麻が選んだ人とは、」



## 最終話 これからもよろしく

当麻は夜、六課の近くにある公園にある人を呼び出した。それは…

……

なのは「当麻さん。どうしたの？呼び出して」

当麻「ん、いや、その、」

なのはいつもの軍服姿だった。当麻は少し恥ずかしそうにしていた。

なのは「それにしても、長い戦いだっただね」

当麻「ん、ああ、そうだな。結構長かったな。ヴィヴィオは？」

なのは「ん、ヴィヴィオはもう寝かしたよ。もう、いきなり呼び出すから、一体何の用事？」

当麻は意を決してなのはに告白した。

当麻「俺は、なのはのことが好きだ。」

なのは「え、ええええええ、フェイトちゃんたちじゃなくて、わ、私？」

当麻「ああ、何つうか、お前見てないと危なっかしいし、それに…

……」

なのは「うん、うん、」

当麻「好きになっちまったんだ。ダメか？」

当麻が言い終わると、なのははそっと抱きついてきた。

なのは「私も当麻さんのこと好きだよ。」

当麻「ああ、俺もだ。」

二人が顔を近づけ、キスをしようとした時、どこからかくしゃみが聞こえた。

土御門「こら、キャラ、気づかれたらどうするんだ」

キャラ「ごめんなさい」

佐天「キスですよ。キス。わあ〜」

ヴィヴィオ「この場合私は、高町になるの？それとも上条？」

フェイト「どっちだろうね。でも、当麻らしいね。」

はやて「もっと凄い告白とかしそっただけど、」

スター「というか、こっち睨んでいますよ」

インデックス「気づかれたよ」

当麻「お前ら、何のぞき見してるんだよ。」

土御門「やばい、逃げろ。」

のぞき見をしていたメンバーを追いかけようとする当麻、だが、なのはが当麻の手を掴んだ。

当麻「なのは？」

なのは「当麻さん」

なのはは軽くキスをして、笑顔で……………

なのは「これからもよろしくね」

最終話 これからもよろしく(後書き)

六甲水「以上が最終回でした。マジで長かった」

当麻「長すぎだろ。無印からStrikersまでやりやがって、」

なのは「でも、いい終わりだよね」

インデックス「でも、でも、オールドレイクの過去とかは？」

六甲水「ああ、それは、来年辺りに来月辺りに始めようと思ってる。VividとFORCEでやるから」

なのは「まだやるんだ」

六甲水「まだやりますよ。Vividはなるべく短めで、合宿編が終わるまでで、FORCEは連載次第。FORCEでオールドレイクの過去をやるから、」

当麻「まだやるのかよ。まあいいや。みなさん、今までありがとう  
ございます。」

なのは「付き合ってくれたありがとうございます。まだVividとFORCEがあるらしいのでそちらも見てください」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9244n/>

---

とある魔術のなのは

2011年4月3日13時37分発行